



SQL Anywhere 10 コンテキスト別ヘルプ

改訂 2007 年 3 月

著作権と商標

Copyright (c) 2007 iAnywhere Solutions, Inc. Portions copyright (c) 2007 Sybase, Inc. All rights reserved.

iAnywhere Solutions, Inc. は Sybase, Inc. の関連会社です。

iAnywhere は、(1) すべてのコピーにこの情報またはマニュアル内のその他の著作権と商標の表示を含める、(2) マニュアルの偽装表示をしない、(3) マニュアルに変更を加えないことが遵守されるかぎり、このマニュアルをご自身の情報収集、教育、その他の非営利の目的で使用することを許可します。このマニュアルまたはその一部を、iAnywhere の書面による事前の許可なく発行または配布することは禁じられています。

このマニュアルは、iAnywhere が何らかの行動を行う、または行わない責任を表明するものではありません。このマニュアルは、iAnywhere の判断で予告なく内容が変更される場合があります。iAnywhere との間に書面による合意がないかぎり、このマニュアルは「現状のまま」提供されるものであり、その使用または記載内容の誤りに対して iAnywhere は一切の責任を負いません。

iAnywhere (R)、Sybase (R)、<http://www.iAnywhere.com/trademarks> に示す商標は Sybase, Inc. またはその関連会社の商標です。(R) は米国での登録商標を示します。

Java および Java 関連のすべての商標は、米国またはその他の国での Sun Microsystems, Inc. の商標または登録商標です。

このマニュアルに記載されているその他の会社名と製品名は各社の商標である場合があります。

目次

はじめに	vii
SQL Anywhere のマニュアル	viii
表記の規則	xi
詳細情報の検索／フィードバックの提供	xv
[接続] ダイアログのヘルプ	1
[接続] ダイアログの概要	2
[接続] ダイアログ : [ID] タブ (SQL Anywhere の場合)	3
[接続] ダイアログ : [ID] タブ (Mobile Link と QAnywhere の場合)	6
[接続] ダイアログ : [ID] タブ (Ultra Light の場合)	8
[接続] ダイアログ : [データベース] タブ (SQL Anywhere の場合)	9
[接続] ダイアログ : [詳細] タブ (SQL Anywhere の場合)	12
[接続] ダイアログ : [詳細] タブ (Mobile Link と QAnywhere の場合)	13
[接続] ダイアログ : [詳細] タブ (Ultra Light の場合)	14
[ODBC 設定] ダイアログのヘルプ	15
SQL Anywhere の ODBC ドライバ	16
[Oracle 用 iAnywhere ドライバの設定] ダイアログ	27
SQL Anywhere プラグインのヘルプ	29
SQL Anywhere プロパティ・シートの概要	30
ダイアログ・ボックスの概要	118
デバッグのヘルプ	149
インデックス・コンサルタント	152
Ultra Light プロジェクト	153
Ultra Light 文	154
パブリケーション	155
アーティクル	156
サブスクリプション	157
[接続] ダイアログのツール	158

[インデックス] フォルダ	159
テーブルの編集の取り消し	160
データベース検索	161
Mobile Link プラグインの管理モードのヘルプ	163
Mobile Link プラグインの管理モード・ヘルプの概要	164
Mobile Link のプロパティ・シート	165
Mobile Link サーバ・ログ・ファイル・ビューワ：[メッセージ] タブ	178
Mobile Link サーバ・ログ・ファイル・ビューワ：[概要] タブ	180
Mobile Link サーバ・ログ・ファイル・ビューワ：[同期] タブ	181
Mobile Link プラグインのモデル・モードのヘルプ	183
Mobile Link モデル・モードのウィザード	184
[リモート・テーブルの新規作成] ダイアログ	228
Mobile Link モデル・モード	229
QAnywhere プラグインのヘルプ	239
QAnywhere プラグインのプロパティ・シート	240
QAnywhere のダイアログ・ボックス	252
Ultra Light プラグインのヘルプ	261
Ultra Light プラグインのプロパティ・シートの概要	262
ダイアログ・ボックスの概要	272
Interactive SQL のヘルプ	275
Interactive SQL の概要	276
Interactive SQL のダイアログの概要	278
Mobile Link モニタのヘルプ	293
[Mobile Link サーバへの接続] ダイアログ	294
[ウォッチの編集] ダイアログ	297

[移動] ダイアログ	298
[新しいウォッチ] ダイアログ	299
[データベースへのエクスポート] ダイアログ	300
[オプション] ダイアログ : [一般] タブ	301
[オプション] ダイアログ : [テーブル] タブ	303
[オプション] ダイアログ : [グラフ] タブ	304
[オプション] ダイアログ : [チャート・レイアウト] タブ	306
[オプション] ダイアログ : [チャートの色] タブ	307
[オプション] ダイアログ : [概要] タブ	308
[サンプル] プロパティ・シート : [サンプル] タブ	309
[サンプル] プロパティ・シート : [範囲] タブ	310
[セッション] プロパティ・シート : [一般] タブ	311
[セッション] プロパティ・シート : [統計情報] タブ	312
[同期] プロパティ・シート : [一般] タブ	313
[同期] プロパティ・シート : [アップロード] タブ	314
[同期] プロパティ・シート : [ダウンロード] タブ	315
[同期] プロパティ・シート : [同期] タブ	316
[ウォッチ・マネージャ] ダイアログ	317
クエリ・エディタのヘルプ	319
クエリ・エディタの概要	320
[テーブル] タブ	323
[ジョイン] タブ	325
[カラム] タブ	327
[INTO] タブ	328
[WHERE] タブ	329
[GROUP BY] タブ	330
[HAVING] タブ	332
[ORDER BY] タブ	333
式エディタ	334
[クエリ結果] ウィンドウ枠	336
[結果 SQL] ウィンドウ枠	337
SQL Anywhere コンソール・ユーティリティのヘルプ	339

SQL Anywhere コンソール・ユーティリティの使用	340
[コンソール] のオプション	341
[接続ビューワ]	342
[メッセージ・ビューワ]	343
[プロパティ・ビューワ]	344
[更新のチェック]	345
SQL 言語のリンク	347
SQL 構文のヘルプ	348
索引	357

はじめに

このマニュアルの内容

このマニュアルには、[接続] ダイアログ、クエリ・エディタ、Mobile Link モニタ、SQL Anywhere コンソール・ユーティリティ、インデックス・コンサルタント、Interactive SQL のコンテキスト別のヘルプが収録されています。

また、Sybase Central の SQL Anywhere、Mobile Link、Ultra Light、QAnywhere の各プラグインで使用できるプロパティ・シートとダイアログ・ボックスのコンテキスト別のヘルプも含まれます。

対象読者

このマニュアルは、SQL Anywhere のすべてのユーザを対象としています。

SQL Anywhere のマニュアル

このマニュアルは、SQL Anywhere のマニュアル・セットの一部です。この項では、マニュアル・セットに含まれる各マニュアルと使用法について説明します。

SQL Anywhere のマニュアル

SQL Anywhere の完全なマニュアルは、各マニュアルをまとめたオンライン形式とマニュアル別の PDF ファイルで提供されます。いずれの形式のマニュアルも、同じ情報が含まれ、次のマニュアルから構成されます。

- ◆ 『SQL Anywhere 10 - 紹介』 このマニュアルでは、データの管理および交換機能を提供する包括的なパッケージである SQL Anywhere 10 について説明します。SQL Anywhere を使用すると、サーバ環境、デスクトップ環境、モバイル環境、リモート・オフィス環境に適したデータベース・ベースのアプリケーションを迅速に開発できるようになります。
- ◆ 『SQL Anywhere 10 - 変更点とアップグレード』 このマニュアルでは、SQL Anywhere 10 とそれ以前のバージョンに含まれる新機能について説明します。
- ◆ 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』 このマニュアルでは、SQL Anywhere データベースの実行、管理、設定について説明します。管理ユーティリティとオプションのほか、データベース接続、データベース・サーバ、データベース・ファイル、バックアップ・プロシージャ、セキュリティ、高可用性、Replication Server を使用したレプリケーションについて説明します。
- ◆ 『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』 このマニュアルでは、データベースの設計と作成の方法、データのインポート・エクスポート・変更の方法、データの検索方法、ストアド・プロシージャとトリガの構築方法について説明します。
- ◆ 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』 このマニュアルは、SQL Anywhere で使用する SQL 言語の完全なリファレンスです。また、SQL Anywhere のシステム・ビューとシステム・プロシージャについても説明しています。
- ◆ 『SQL Anywhere サーバ - プログラミング』 このマニュアルでは、C、C++、Java プログラミング言語、Visual Studio .NET を使用してデータベース・アプリケーションを構築、配備する方法について説明します。Visual Basic や PowerBuilder などのツールのユーザは、それらのツールのプログラミング・インタフェースを使用できます。
- ◆ 『SQL Anywhere 10 - エラー・メッセージ』 このマニュアルでは、SQL Anywhere エラー・メッセージの完全なリストを、その診断情報とともに説明します。
- ◆ 『Mobile Link - クイック・スタート』 このマニュアルでは、セッションベースのリレーショナル・データベース同期システムである Mobile Link について説明します。Mobile Link テクノロジーは、双方向レプリケーションを可能にし、モバイル・コンピューティング環境に非常に適しています。
- ◆ 『Mobile Link - サーバ管理』 このマニュアルでは、Mobile Link アプリケーションを設定して管理する方法について説明します。

- ◆ 『**Mobile Link - クライアント管理**』 このマニュアルでは、Mobile Link クライアントを設定、構成、同期する方法について説明します。Mobile Link クライアントには、SQL Anywhere または Ultra Light のいずれかのデータベースを使用できます。
- ◆ 『**Mobile Link - サーバ起動同期**』 このマニュアルでは、Mobile Link のサーバによって開始される同期について説明します。サーバによって開始される同期とは、統合データベースから同期またはその他のリモート・アクションの開始を可能にする Mobile Link の機能です。
- ◆ 『**QAnywhere**』 このマニュアルでは QAnywhere について説明します。QAnywhere は、従来のデスクトップ・クライアントやラップトップ・クライアント用のメッセージング・プラットフォームであるほか、モバイル・クライアントや無線クライアント用のメッセージング・プラットフォームでもあります。
- ◆ 『**SQL Remote**』 このマニュアルでは、モバイル・コンピューティング用の SQL Remote データ・レプリケーション・システムについて説明します。このシステムによって、SQL Anywhere の統合データベースと複数の SQL Anywhere リモート・データベースの間で、電子メールやファイル転送などの間接的リンクを使用したデータ共有が可能になります。
- ◆ 『**SQL Anywhere 10 - コンテキスト別ヘルプ**』 このマニュアルには、[接続] ダイアログ、クエリ・エディタ、Mobile Link モニタ、SQL Anywhere コンソール・ユーティリティ、インデックス・コンサルタント、Interactive SQL のコンテキスト別のヘルプが収録されています。
- ◆ 『**Ultra Light - データベース管理とリファレンス**』 このマニュアルでは、小型デバイス用 Ultra Light データベース・システムの概要を説明します。
- ◆ 『**Ultra Light - AppForge プログラミング**』 このマニュアルでは、Ultra Light for AppForge について説明します。Ultra Light for AppForge を使用すると、Palm OS、Symbian OS、または Windows CE を搭載しているハンドヘルド、モバイル、または埋め込みデバイスに対してデータベース・アプリケーションを開発、配備できます。
- ◆ 『**Ultra Light - .NET プログラミング**』 このマニュアルでは、Ultra Light.NET について説明します。Ultra Light.NET を使用すると、PC、ハンドヘルド、モバイル、埋め込みデバイスのデータベース・アプリケーションを開発し、これらのデバイスに配備できます。
- ◆ 『**Ultra Light - M-Business Anywhere プログラミング**』 このマニュアルは、Ultra Light for M-Business Anywhere について説明します。Ultra Light for M-Business Anywhere を使用すると、Palm OS、Windows CE、または Windows XP を搭載しているハンドヘルド、モバイル、または埋め込みデバイスに対して Web ベースのデータベース・アプリケーションを開発、配備できます。
- ◆ 『**Ultra Light - C/C++ プログラミング**』 このマニュアルでは、Ultra Light C および Ultra Light C++ のプログラミング・インタフェースについて説明します。Ultra Light を使用すると、ハンドヘルド、モバイル、埋め込みデバイスに対してデータベース・アプリケーションを開発、配備できます。

マニュアルの形式

SQL Anywhere のマニュアルは、次の形式で提供されています。

- ◆ **オンライン・マニュアル** オンライン・マニュアルには、SQL Anywhere の完全なマニュアルがあり、SQL Anywhere ツールに関する印刷マニュアルとコンテキスト別のヘルプの両方が含

まれています。オンライン・マニュアルは、製品のメンテナンス・リリースごとに更新されます。これは、最新の情報を含む最も完全なマニュアルです。

Windows オペレーティング・システムでオンライン・マニュアルにアクセスするには、[スタート]-[プログラム]-[SQL Anywhere 10]-[オンライン・マニュアル]を選択します。オンライン・マニュアルをナビゲートするには、左ウィンドウ枠で HTML ヘルプの目次、索引、検索機能を使用し、右ウィンドウ枠でリンク情報とメニューを使用します。

UNIX オペレーティング・システムでオンライン・マニュアルにアクセスするには、SQL Anywhere のインストール・ディレクトリまたはインストール CD に保存されている HTML マニュアルを参照してください。

- ◆ **PDF ファイル** SQL Anywhere の完全なマニュアル・セットは、Adobe Reader で表示できる Adobe Portable Document Format (pdf) 形式のファイルとして提供されています。

Windows では、PDF 形式のマニュアルはオンライン・マニュアルの各ページ上部にある PDF のリンクから、または Windows の [スタート] メニュー ([スタート]-[プログラム]-[SQL Anywhere 10]-[オンライン・マニュアル - PDF フォーマット]) からアクセスできます。

UNIX では、PDF 形式のマニュアルはインストール CD にあります。

表記の規則

この項では、このマニュアルで使用されている書体およびグラフィック表現の規則について説明します。

SQL 構文の表記規則

SQL 構文の表記には、次の規則が適用されます。

- ◆ **キーワード** SQL キーワードはすべて次の例に示す ALTER TABLE のように大文字で表記します。

ALTER TABLE [*owner*.]*table-name*

- ◆ **プレースホルダ** 適切な識別子または式で置き換えられる項目は、次の例に示す *owner* や *table-name* のように表記します。

ALTER TABLE [*owner*.]*table-name*

- ◆ **繰り返し項目** 繰り返し項目のリストは、次の例に示す *column-constraint* のように、リストの要素の後ろに省略記号 (ピリオド 3 つ …) を付けて表します。

ADD column-definition [*column-constraint*, …]

複数の要素を指定できます。複数の要素を指定する場合は、各要素間をカンマで区切る必要があります。

- ◆ **オプション部分** 文のオプション部分は角カッコで囲みます。

RELEASE SAVEPOINT [*savepoint-name*]

この例では、角カッコで囲まれた *savepoint-name* がオプション部分です。角カッコは入力しないでください。

- ◆ **オプション** 項目リストから 1 つだけ選択する場合や、何も選択しなくてもよい場合は、項目間を縦線で区切り、リスト全体を角カッコで囲みます。

[**ASC | DESC**]

この例では、ASC と DESC のどちらか 1 つを選択しても、選択しなくてもかまいません。角カッコは入力しないでください。

- ◆ **選択肢** オプションの中の 1 つを必ず選択しなければならない場合は、選択肢を中カッコで囲み、縦棒で区切ります。

[**QUOTES** { **ON | OFF** }]

QUOTES オプションを使用する場合は、ON または OFF のどちらかを選択する必要があります。角カッコと中カッコは入力しないでください。

オペレーティング・システムの表記規則

- ◆ **Windows** デスクトップおよびラップトップ・コンピュータ用の Microsoft Windows オペレーティング・システムのファミリのことです。Windows ファミリには Windows Vista や Windows XP も含まれます。
- ◆ **Windows CE** Microsoft Windows CE モジュラ・オペレーティング・システムに基づいて構築されたプラットフォームです。Windows Mobile や Windows Embedded CE などのプラットフォームが含まれます。

Windows Mobile は Windows CE 上に構築されています。これにより、Windows のユーザ・インタフェースや、Word や Excel といったアプリケーションの小規模バージョンなどの追加機能が実現されています。Windows Mobile は、モバイル・デバイスで最も広く使用されています。

SQL Anywhere の制限事項や相違点は、基盤となっているオペレーティング・システム (Windows CE) に由来しており、使用しているプラットフォーム (Windows Mobile など) に依存していることはほとんどありません。

- ◆ **UNIX** 特に記述がないかぎり、UNIX は Linux プラットフォームと UNIX プラットフォームの両方のことです。

ファイルの命名規則

マニュアルでは、パス名やファイル名などのオペレーティング・システムに依存するタスクと機能を表すときは、通常 Windows の表記規則が使用されます。ほとんどの場合、他のオペレーティング・システムで使用される構文に簡単に変換できます。

- ◆ **ディレクトリ名とパス名** マニュアルでは、ドライブを示すコロンや、ディレクトリの区切り文字として使用する円記号など、Windows の表記規則を使用して、ディレクトリ・パスのリストを示します。次に例を示します。

MobiLink¥**redirector**

UNIX、Linux、Mac OS X では、代わりにスラッシュを使用してください。次に例を示します。

MobiLink/redirector

SQL Anywhere がマルチプラットフォーム環境で使用されている場合、プラットフォーム間でのパス名の違いに注意する必要があります。

- ◆ **実行ファイル** マニュアルでは、実行ファイルの名前は、Windows の表記規則が使用され、拡張子 `.exe` が付きます。UNIX、Linux、Mac OS X では、実行ファイルの名前には拡張子は付きません。NetWare では、実行ファイルの名前には、拡張子 `.nlm` が付きます。

たとえば、Windows では、ネットワーク・データベース・サーバは `dbsrv10.exe` です。UNIX、Linux、Mac OS X では、`dbsrv10` になります。NetWare では、`dbsrv10.nlm` になります。

- ◆ **install-dir** インストール・プロセスでは、SQL Anywhere をインストールするロケーションを選択できます。マニュアルでは、このロケーションは `install-dir` という表記で示されます。

インストールが完了すると、環境変数 SQLANY10 によって SQL Anywhere コンポーネントがあるインストール・ディレクトリのロケーション (*install-dir*) が指定されます。SQLANYSH10 は、SQL Anywhere が他の Sybase アプリケーションと共有しているコンポーネントがあるディレクトリのロケーションを指定します。

オペレーティング・システム別の *install-dir* のデフォルト・ロケーションの詳細については、「SQLANY10 環境変数」『SQL Anywhere サーバ-データベース管理』を参照してください。

- ◆ **samples-dir** インストール・プロセスでは、SQL Anywhere に含まれるサンプルをインストールするロケーションを選択できます。マニュアルでは、このロケーションは *samples-dir* という表記で示されます。

インストールが完了すると、環境変数 SQLANYSAMP10 によってサンプルがあるディレクトリのロケーション (*samples-dir*) が指定されます。Windows の [スタート] メニューから、[プログラム]-[SQL Anywhere 10]-[サンプル・アプリケーションおよびプロジェクト] を選択すると、このディレクトリで [Windows エクスプローラ] ウィンドウが表示されます。

オペレーティング・システム別の *samples-dir* のデフォルト・ロケーションの詳細については、「サンプル・ディレクトリ」『SQL Anywhere サーバ-データベース管理』を参照してください。

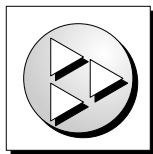
- ◆ **環境変数** マニュアルでは、環境変数設定が引用されます。Windows では、環境変数を参照するのに、構文 *%envvar%* が使用されます。UNIX、Linux、Mac OS X では、環境変数を参照するのに、構文 *\$envvar* または *\${envvar}* が使用されます。

UNIX、Linux、Mac OS X 環境変数は、*.cshrc* や *.tcshrc* などのシェルとログイン・スタートアップ・ファイルに格納されます。

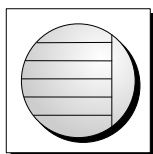
グラフィック・アイコン

このマニュアルでは、次のアイコンを使用します。

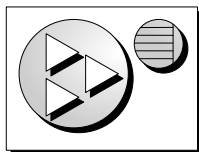
- ◆ クライアント・アプリケーション



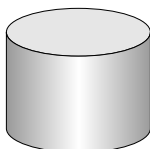
- ◆ SQL Anywhere などのデータベース・サーバ



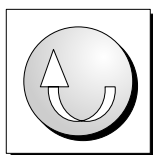
- ◆ Ultra Light アプリケーション



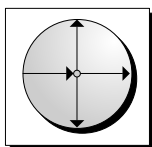
- ◆ データベース。高度な図では、データベースとデータベースを管理するデータ・サーバの両方をこのアイコンで表します。



- ◆ レプリケーションまたは同期のミドルウェア。ソフトウェアのこれらの部分は、データベース間のデータ共有を支援します。たとえば、Mobile Link サーバ、SQL Remote Message Agent などが挙げられます。



- ◆ Sybase Replication Server



- ◆ プログラミング・インタフェース



詳細情報の検索／フィードバックの提供

詳細情報の検索

詳しい情報やリソース (コード交換など) については、iAnywhere Developer Network (<http://www.ianywhere.com/developer/>) を参照してください。

ご質問がある場合や支援が必要な場合は、次に示す Sybase iAnywhere ニュースグループのいずれかにメッセージをお寄せください。

ニュースグループにメッセージをお送りいただく際には、ご使用の SQL Anywhere バージョンのビルド番号を明記し、現在発生している問題について詳しくお知らせくださいますようお願いいたします。バージョン情報は、コマンド・プロンプトで **dbeng10 -v** と入力して確認できます。

ニュースグループは、ニュース・サーバ forums.sybase.com にあります (ニュースグループにおけるサービスは英語でのみの提供となります)。以下のニュースグループがあります。

- ◆ [sybase.public.sqlanywhere.general](#)
- ◆ [sybase.public.sqlanywhere.linux](#)
- ◆ [sybase.public.sqlanywhere.mobilink](#)
- ◆ [sybase.public.sqlanywhere.product_futures_discussion](#)
- ◆ [sybase.public.sqlanywhere.replication](#)
- ◆ [sybase.public.sqlanywhere.ultralite](#)
- ◆ [ianywhere.public.sqlanywhere.qanywhere](#)

ニュースグループに関するお断り

iAnywhere Solutions は、ニュースグループ上に解決策、情報、または意見を提供する義務を負うものではありません。また、システム・オペレータ以外のスタッフにこのサービスを監視させて、操作状況や可用性を保証する義務もありません。

iAnywhere のテクニカル・アドバイザーとその他のスタッフは、時間のある場合にかぎりニュースグループでの支援を行います。こうした支援は基本的にボランティアで行われるため、解決策や情報を定期的に提供できるとはかぎりません。支援できるかどうかは、スタッフの仕事量に左右されます。

フィードバック

このマニュアルに関するご意見、ご提案、フィードバックをお寄せください。

マニュアルに関するご意見、ご提案は、SQL Anywhere ドキュメンテーション・チームの iasdoc@ianywhere.com 宛てに電子メールでお寄せください。このアドレスに送信された電子メールに返信はいたしません。お寄せいただいたご意見、ご提案は必ず読ませていただきます。

マニュアルまたはソフトウェアについてのフィードバックは、上記のニュースグループを通してお寄せいただいてもかまいません。

第 1 章

[接続] ダイアログのヘルプ

目次

[接続] ダイアログの概要	2
[接続] ダイアログ : [ID] タブ (SQL Anywhere の場合)	3
[接続] ダイアログ : [ID] タブ (Mobile Link と QAnywhere の場合)	6
[接続] ダイアログ : [ID] タブ (Ultra Light の場合)	8
[接続] ダイアログ : [データベース] タブ (SQL Anywhere の場合)	9
[接続] ダイアログ : [詳細] タブ (SQL Anywhere の場合)	12
[接続] ダイアログ : [詳細] タブ (Mobile Link と QAnywhere の場合)	13
[接続] ダイアログ : [詳細] タブ (Ultra Light の場合)	14

[接続] ダイアログの概要

[接続] ダイアログは、Sybase Central、Interactive SQL、SQL Anywhere コンソール・ユーティリティ (dbconsole) で使用します。

このダイアログ内の設定は、Sybase Central、Interactive SQL、または SQL Anywhere コンソールの現在のセッションの間だけ保存されます。Sybase Central の接続設定は [接続プロファイル] を使って保存できます。「[接続プロファイルの使用](#)」 『[SQL Anywhere サーバ - データベース管理](#)』を参照してください。

[接続] ダイアログ : [ID] タブ (SQL Anywhere の場合)

[接続] ダイアログの [ID] タブには、次の項目があります。

[ユーザ ID とパスワードの指定] このオプションを選択すると、接続のユーザ ID とパスワードを指定できます。

- ◆ **[ユーザ ID]** 接続のユーザ ID を入力します。SQL Anywhere データベースのデフォルトのユーザ ID は、**DBA** です。データベースに接続するためのパーミッションを持つユーザ ID を指定してください。

「[Userid 接続パラメータ \[UID\]](#)」 『[SQL Anywhere サーバ - データベース管理](#)』を参照してください。

- ◆ **[パスワード]** 接続時のパスワードを入力します。デフォルトのユーザ、**DBA** を使って接続する場合の SQL Anywhere データベースのデフォルトのパスワードは、**sql** です。指定したユーザ ID に対する正しいパスワードを入力してください。パスワードでは大文字と小文字が区別されます。

「[Password 接続パラメータ \[PWD\]](#)」 『[SQL Anywhere サーバ - データベース管理](#)』を参照してください。

[統合化ログインの使用] Windows で統合化ログインを使用してデータベースに接続するには、このオプションを選択します。

このオプションを選択した場合は、データベースのユーザ ID とパスワードを指定する必要がありません。Windows のユーザ ID とパスワードが SQL Anywhere の統合化ログインのメカニズムに渡されます。

統合化ログインを使用するには、ユーザに統合化ログインのパーミッションを付与するとともに、統合化ログインを受け入れるようにデータベースサーバを設定する必要があります。

次の項を参照してください。

- ◆ 「[統合化ログインの使用方法](#)」 『[SQL Anywhere サーバ - データベース管理](#)』
- ◆ 「[Integrated 接続パラメータ \[INT\]](#)」 『[SQL Anywhere サーバ - データベース管理](#)』

[なし] ODBC データ・ソースを使用しない場合は、このオプションを選択して接続します。

[ODBC データ・ソース名] このオプションを選択して、データベースに接続するためのデータ・ソース (格納されている一連の接続パラメータ) を選択します。このフィールドは **DSN 接続パラメータ** に相当し、レジストリ内のデータ・ソースを参照しています。データ・ソースのリストを表示するには、**[参照]** をクリックします。

最近使用した ODBC データ・ソースをドロップダウン・リストから選択することもできます。

次の項を参照してください。

- ◆ 「[DataSourceName 接続パラメータ \[DSN\]](#)」 『[SQL Anywhere サーバ - データベース管理](#)』
- ◆ 「[ODBC データ・ソースの使用](#)」 『[SQL Anywhere サーバ - データベース管理](#)』

- ◆ **[ODBC データ ソース アドミニストレータを開く] ボタン** [ODBC データ ソース アドミニストレータを開く] ボタンをクリックすると、[ODBC アドミニストレータ] ダイアログが表示されます。このダイアログでは、利用できるデータ・ソースのリストから特定の ODBC データ・ソースを選択できます。特定のデータ・ソースを選択するには、そのデータ・ソースをリストから選択してから [OK] をクリックします。

また、新しいデータ・ソースを作成したり、既存のデータ・ソースをこの接続用に設定したりすることもできます。

[ODBC アドミニストレータ] ダイアログの使用法については、「[ODBC データ・ソースの使用](#)」『[SQL Anywhere サーバ-データベース管理](#)』を参照してください。

ヒント

ODBC データ・ソースを使用すると接続情報を格納できます。接続情報を ODBC データ・ソースに格納しておくで、[接続] ダイアログで同じ情報を繰り返して指定する必要がありません。たとえば、ODBC データ・ソースにユーザ ID がすでに含まれている場合は、[接続] ダイアログの [ユーザ ID] フィールドにユーザ ID を入力しないでください。

注意

ユーザ ID またはデータベース名など、[接続] ダイアログで入力したすべての情報は、ODBC データ・ソースまたは ODBC データ・ソース・ファイルに格納されているパラメータよりも優先されます。

[ODBC データ・ソース・ファイル] このオプションを選択して、接続で使用するデータ・ソース・ファイルを選択します。ファイルを検索するには、[参照] をクリックします。ODBC データ・ソース・ファイルは、UNIX システムでよく使用されます。

最近使用した ODBC データ・ソース・ファイルは、ドロップダウン・リストで選択することもできます。

ファイル・データ・ソースは、レジストリに保管される ODBC データ・ソースと同じ情報を持ちます。

「[FileDataSourceName 接続パラメータ \[FILEDSN\]](#)」『[SQL Anywhere サーバ-データベース管理](#)』を参照してください。

[ツール] [ツール] ボタンをクリックすると、次のユーティリティを使用できます。

- ◆ **[テスト接続]** このツールは、SQL Anywhere データベースに接続する場合にのみ使用できます。指定した情報で正しく接続できるかどうかをテストします。

[詳細の表示] をクリックすると、データベース・サーバの検索に接続パラメータが使用される方法に関するデバッグ情報が表示されます。

- ◆ **[Windows CE プロキシ・ポートの設定]** このツールは、ActiveSync がインストールされ、SQL Anywhere または Ultra Light のデータベースに接続している場合にのみ使用できます。Windows CE データベースに接続するための TCP/IP ポート・リダイレクタを設定できます (Windows CE サービスがインストールされている場合)。

「ODBC データ・ソースの使用」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』 を参照してください。

参照

- ◆ 「簡単な接続の例」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』
- ◆ 「接続のトラブルシューティング」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』
- ◆ 「サーバ起動時のトラブルシューティング」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』
- ◆ 「ネットワーク通信のトラブルシューティング」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』

[接続] ダイアログ : [ID] タブ (Mobile Link と QAnywhere の場合)

Sybase Central の Mobile Link と QAnywhere の各プラグインに接続するための [接続] ダイアログの [ID] タブには、次の項目があります。

[ユーザ ID] データベース接続用のユーザ ID を入力します。データベースに接続するためのパーミッションを持つユーザ ID を指定してください。

「Userid 接続パラメータ [UID]」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』を参照してください。

[パスワード] 接続時のパスワードを入力します。指定したユーザ ID に対する正しいパスワードを入力してください。パスワードでは大文字と小文字が区別されます。

「Password 接続パラメータ [PWD]」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』を参照してください。

[ODBC データ・ソース名] このオプションを選択して、データベースに接続するためのデータ・ソース (格納されている一連の接続パラメータ) を選択します。このフィールドは DSN 接続パラメータに相当し、レジストリ内のデータ・ソースを参照しています。データ・ソースのリストを表示するには、[参照] をクリックします。

最近使用した ODBC データ・ソースをドロップダウン・リストから選択することもできます。

「DataSourceName 接続パラメータ [DSN]」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』を参照してください。

◆ **[ODBC データ ソース アドミニストレータを開く] ボタン** [ODBC データ ソース アドミニストレータを開く] ボタンをクリックすると、[ODBC アドミニストレータ] ダイアログが表示されます。このダイアログでは、利用できるデータ・ソースのリストから特定の ODBC データ・ソースを選択できます。特定のデータ・ソースを選択するには、そのデータ・ソースをリストから選択してから [OK] をクリックします。

また、新しいデータ・ソースを作成したり、既存のデータ・ソースをこの接続用に設定したりすることもできます。

[ODBC アドミニストレータ] ダイアログの使用法については、「ODBC データ・ソースの使用」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』を参照してください。

ヒント

ODBC データ・ソースを使用すると接続情報を格納できます。接続情報を ODBC データ・ソースに格納しておくと、[接続] ダイアログで同じ情報を繰り返して指定する必要がありません。たとえば、ODBC データ・ソースにユーザ ID がすでに含まれている場合は、[接続] ダイアログの [ユーザ ID] フィールドにユーザ ID を入力しないでください。

注意

ユーザ ID またはデータベース名など、[接続] ダイアログで入力したすべての情報は、ODBC データ・ソースまたは ODBC データ・ソース・ファイルに格納されているパラメータよりも優先されます。

[ODBC データ・ソース・ファイル] このオプションを選択して、接続で使用するデータ・ソース・ファイルを選択します。ファイルを検索するには、[参照] をクリックします。ODBC データ・ソース・ファイルは、UNIX システムでよく使用されます。

最近使用した ODBC データ・ソース・ファイルをドロップダウン・リストから選択することもできます。

ファイル・データ・ソースは、レジストリに保管される ODBC データ・ソースと同じ情報を持ちます。

ファイルの DSN 接続パラメータの詳細については、「[FileDataSourceName 接続パラメータ \[FILEDSN\]](#)」 『[SQL Anywhere サーバ - データベース管理](#)』を参照してください。

[ツール] [ツール] ボタンをクリックすると、次のユーティリティを使用できます。

- ◆ **[テスト接続]** このツールは、SQL Anywhere データベースに接続する場合にのみ使用できません。指定した情報で正しく接続できるかどうかをテストします。

[詳細の表示] をクリックすると、データベース・サーバの検索に接続パラメータが使用される方法に関するデバッグ情報が表示されます。

- ◆ **[Windows CE プロキシ・ポートの設定]** このツールは、ActiveSync がインストールされ、SQL Anywhere または Ultra Light のデータベースに接続している場合にのみ使用できます。Windows CE データベースに接続するための TCP/IP ポート・リダイレクタを設定できます (Windows CE サービスがインストールされている場合)。

「[ODBC データ・ソースの使用](#)」 『[SQL Anywhere サーバ - データベース管理](#)』を参照してください。

[接続タイプ] ドロップダウン・リスト SQL Anywhere または Ultra Light 以外のデータベース (Microsoft SQL Server、DB2、Oracle など) に接続する場合は、リストから [汎用 ODBC データベース] を選択します。

[接続] ダイアログ : [ID] タブ (Ultra Light の場合)

Ultra Light データベースに接続するための [接続] ダイアログの [ID] タブには、次の項目があります。

[ユーザ ID] データベース接続用のユーザ ID を入力します。データベースに接続するためのパーミッションを持つユーザ ID を指定してください。

「Ultra Light UID 接続パラメータ」 『Ultra Light - データベース管理とリファレンス』を参照してください。

[パスワード] 接続時のパスワードを入力します。指定したユーザ ID に対する正しいパスワードを入力してください。パスワードでは大文字と小文字が区別されます。

「Ultra Light PWD 接続パラメータ」 『Ultra Light - データベース管理とリファレンス』を参照してください。

[データベース・ファイル] データベース・ファイルを指定します。C:\myuldb.db のように、データベース・ファイルのフル・パスと名前を入力します。

また、最近使用したデータベース・ファイルをドロップダウン・リストから選択したり、[参照] をクリックしてデータベース・ファイルを検索したりすることもできます。

データベース・ファイル接続パラメータの詳細については、次の項を参照してください。

- ◆ 「Ultra Light DBF 接続パラメータ」 『Ultra Light - データベース管理とリファレンス』
- ◆ 「Ultra Light CE_FILE 接続パラメータ」 『Ultra Light - データベース管理とリファレンス』
- ◆ 「Ultra Light PALM_FILE 接続パラメータ」 『Ultra Light - データベース管理とリファレンス』
- ◆ 「Ultra Light NT_FILE 接続パラメータ」 『Ultra Light - データベース管理とリファレンス』
- ◆ 「Ultra Light SYMBIAN_FILE 接続パラメータ」 『Ultra Light - データベース管理とリファレンス』

- ◆ **[暗号化キー]** データベース・ファイルが暗号化されている場合は、Ultra Light によってデータベースが起動されるたびに Ultra Light にキーを指定する必要があります。

暗号化キーの詳細については、「Ultra Light DBKEY 接続パラメータ」 『Ultra Light - データベース管理とリファレンス』を参照してください。

[暗号化キー] フィールドが有効になるのは、[データベース・ファイル] フィールドを指定した場合のみです。

[ツール] [ツール] ボタンは、Ultra Light プラグインでは使用できません。

[接続] ダイアログ : [データベース] タブ (SQL Anywhere の場合)

[接続] ダイアログの [データベース] タブには、次の項目があります。

[サーバ名] SQL Anywhere のパーソナル・サーバまたはネットワーク・サーバの名前を入力します。たとえば、「**demo**」と入力します。ネットワーク・サーバに接続する場合には、サーバ名を指定する必要があります。デフォルトのパーソナル・サーバに接続する場合は、サーバ名を省略できます。

最近使用したサーバ名をドロップダウン・リストで選択するか、[検索] をクリックしてサーバを検索できます。[検索] をクリックすると、実行中のローカル・パーソナル・サーバとネットワーク・サーバをリストするダイアログが表示されます。このダイアログからサーバを選択するには、リストからサーバを選択して [OK] をクリックします。そのサーバ名が [データベース] タブの [サーバ名] フィールドに表示されます。

「サーバとデータベースの命名」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』を参照してください。

サーバ名接続パラメータは、EngineName (ENG) 接続パラメータと同じです。「EngineName 接続パラメータ [ENG]」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』を参照してください。

[開始行] 開始行はパーソナル・データベース・サーバまたはネットワーク・サーバをユーザのコンピュータから起動するためのコマンドです。現在実行していないローカル・データベース・サーバに接続するか、独自の起動パラメータを設定する場合にのみ、開始行を入力します。たとえば、パーソナル・データベース・サーバを起動するには、**c:\Program Files\SQL Anywhere 10\win32\dbeng10.exe** のようにサーバのフル・パスを入力してください。または、最近使用した開始行をドロップダウン・リストから選択できます。

「StartLine 接続パラメータ [START]」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』を参照してください。

[開始行] フィールドには、オプションも同時に入力できます。開始行とオプションは次の場合に使用します。

- ◆ 高度なサーバ機能を配備する場合。
- ◆ プロトコルのオプションを制御する場合。
- ◆ 診断メッセージまたはトラブルシューティング・メッセージを生成する場合。
- ◆ パーミッションを設定する場合。
- ◆ データベース・パラメータを設定する場合 (暗号化を含む)。

[開始行] フィールドで指定できるオプションの詳細については、次の項を参照してください。

- ◆ 「一般的なオプション」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』
- ◆ 「SQL Anywhere データベース・サーバ」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』

[ネットワーク上でデータベース・サーバを検索] ローカル・コンピュータ以外のコンピュータで稼働しているサーバに接続するときに選択します。ローカル・コンピュータのデータベース・サーバに接続する場合は、このオプションをクリアしてください。このオプションを選択すると、接続文字列に LINKS=ALL 接続パラメータが追加されます。

[データベース名] サーバで実行している各データベースは、データベース名によって識別されます。接続するデータベースの名前を入力します。

データベース名が必要になるのは、サーバで複数のデータベースを実行している場合のみです。データベースがまだサーバ上で実行されていない場合は、代わりにデータベース・ファイルを指定する必要があります。

また、最近使用したデータベース名をドロップダウン・リストから選択したり、[参照] をクリックしてデータベース・ファイルを検索したりすることもできます。

データベース名の詳細については、次の項を参照してください。

- ◆ 「[サーバとデータベースの命名](#)」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』
- ◆ 「[DatabaseName 接続パラメータ \[DBN\]](#)」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』

[データベース・ファイル] 接続先のデータベースがサーバ上で現在実行されていない場合に、データベース・ファイルを指定します。C:¥sample.db のように、フル・パスとデータベース・ファイルの名前を入力することをおすすめします。それ以外の場合、ファイルのパスは、データベース・サーバの作業ディレクトリの相対パスです。

また、最近使用したデータベース・ファイルをドロップダウン・リストから選択したり、[参照] をクリックしてデータベース・ファイルを検索したりすることもできます。

注意

すでに実行されているデータベースへの接続時にデータベース名とデータベース・ファイルの両方を指定した場合、データベース・ファイルは無視されます。

「[DatabaseFile 接続パラメータ \[DBF\]](#)」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』を参照してください。

- ◆ **[暗号化キー]** データベース・ファイルが暗号化されている場合は、データベース・サーバがデータベースを起動するたびにデータベース・サーバのキーを指定してください。

暗号化キーの詳細については、「[DatabaseKey 接続パラメータ \[DBKEY\]](#)」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』を参照してください。

[暗号化キー] フィールドが有効になるのは、[データベース・ファイル] フィールドを指定した場合のみです。[開始行] フィールドには、暗号化オプションも入力できます。

[自動的にデータベースを起動] このオプションを選択して、[データベース・ファイル] フィールドに指定したデータベースを起動してから接続します。

実行しているデータベースにのみ接続する場合は、[自動的にデータベースを起動] オプションをクリアしてください。

「AutoStart 接続パラメータ [ASTART]」 『SQL Anywhere サーバ-データベース管理』を参照してください。

[最終切断後にデータベースを停止] このオプションを選択すると、最後のユーザが切断した後で自動的にデータベースをシャットダウンします。

「AutoStop 接続パラメータ [ASTOP]」 『SQL Anywhere サーバ-データベース管理』を参照してください。

参照

- ◆ 「簡単な接続の例」 『SQL Anywhere サーバ-データベース管理』
- ◆ 「接続のトラブルシューティング」 『SQL Anywhere サーバ-データベース管理』
- ◆ 「サーバ起動時のトラブルシューティング」 『SQL Anywhere サーバ-データベース管理』
- ◆ 「ネットワーク通信のトラブルシューティング」 『SQL Anywhere サーバ-データベース管理』

[接続] ダイアログ : [詳細] タブ (SQL Anywhere の場合)

[接続] ダイアログの [詳細] タブには、次の項目があります。

[接続名] このフィールドは、Interactive SQL から [接続] ダイアログを開き、SQL Anywhere データベースに接続している場合にのみ表示されます。この接続の識別名を入力します。接続名を指定すると、Interactive SQL のタイトル・バーに名前が表示されます。

["name=value" の形式で、1 行に 1 つの接続パラメータを入力] このフィールドにはその他の接続パラメータを入力します。1 行に 1 つの接続パラメータを指定します。次の接続パラメータを指定すると、接続に関するデバッグ情報がログに記録されます。

LOG=connection.log

1 行に 1 つの接続パラメータを入力するとき、パラメータ間にセミコロンを入力する必要はありません。

このダイアログの他の部分で設定したパラメータが、このフィールドに設定したパラメータよりも優先されます。たとえば、[ID] タブでユーザ ID として DBA を入力し、このフィールドに接続パラメータ "UID=bsmith" を設定すると、ユーザ ID DBA を使用した接続が試行されます。

接続パラメータの詳細については、次の項を参照してください。

- ◆ 「接続パラメータ」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』
- ◆ 「接続パラメータの働き」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』

参照

- ◆ 「簡単な接続の例」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』
- ◆ 「接続のトラブルシューティング」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』
- ◆ 「サーバ起動時のトラブルシューティング」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』
- ◆ 「ネットワーク通信のトラブルシューティング」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』

[接続] ダイアログ : [詳細] タブ (Mobile Link と QAnywhere の場合)

["name=value" の形式で、1 行に 1 つの接続パラメータを入力] このフィールドにはその他の接続パラメータを入力します。1 行に 1 つの接続パラメータを指定します。次の接続パラメータを指定すると、接続に関するデバッグ情報がログに記録されます。

LOG=connection.log

1 行に 1 つの接続パラメータを入力するとき、パラメータ間にセミコロンを入力する必要はありません。

このフィールドに設定したパラメータは、このダイアログの他の部分で設定したパラメータよりも優先されます。たとえば、[ID] タブでユーザ ID として DBA を入力し、このフィールドに接続パラメータ "UID=bsmith" を設定すると、ユーザ ID bsmith を使用した接続が試行されます。

接続パラメータの詳細については、次の項を参照してください。

- ◆ 「接続パラメータ」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』
- ◆ 「接続パラメータの働き」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』

参照

- ◆ 「簡単な接続の例」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』
- ◆ 「接続のトラブルシューティング」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』
- ◆ 「サーバ起動時のトラブルシューティング」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』
- ◆ 「ネットワーク通信のトラブルシューティング」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』

[接続タイプ] ドロップダウン・リスト SQL Anywhere または Ultra Light 以外のデータベース (Microsoft SQL Server、DB2、Oracle など) に接続する場合は、リストから [汎用 ODBC データベース] を選択します。

[接続] ダイアログ : [詳細] タブ (Ultra Light の場合)

[接続] ダイアログの [詳細] タブには、次の項目があります。

["name=value" の形式で、1 行に 1 つの接続パラメータを入力] このフィールドにはその他の接続パラメータを入力します。1 行に 1 つの接続パラメータを指定します。1 行に 1 つの接続パラメータを入力するとき、パラメータ間にセミコロンを入力する必要はありません。次の例では、データベース名を設定しています。

DBN=the test version

このフィールドに設定したパラメータは、このダイアログの他の部分で設定したパラメータよりも優先されます。たとえば、[ID] タブでユーザ ID として DBA を入力し、このフィールドに接続パラメータ "UID=bsmith" を設定すると、ユーザ ID bsmith を使用した接続が試行されます。

接続パラメータの詳細については、次の項を参照してください。

- ◆ 「Ultra Light 接続パラメータの指定」 『Ultra Light - データベース管理とリファレンス』
- ◆ 「Ultra Light データベースへの接続」 『Ultra Light - データベース管理とリファレンス』

参照

- ◆ 「ULSQLCONNECT 環境変数を使用した Ultra Light パラメータの保管」 『Ultra Light - データベース管理とリファレンス』
- ◆ 「パラメータの Ultra Light 接続文字列へのアセンブル」 『Ultra Light - データベース管理とリファレンス』
- ◆ 「接続パラメータのヒント」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』

第 2 章

[ODBC 設定] ダイアログのヘルプ

目次

SQL Anywhere の ODBC ドライバ	16
[Oracle 用 iAnywhere ドライバの設定] ダイアログ	27

SQL Anywhere の ODBC ドライバ

この後の各項では、SQL Anywhere の ODBC ドライバの設定と TLS 暗号化オプションに関連するダイアログについて説明します。

[ODBC 設定] ダイアログの使用

ODBC を使用してデータベースに接続するには、ODBC データ・ソースを使用します。[ODBC 設定] ダイアログを使用すると、一連の SQL Anywhere 接続パラメータを ODBC データ・ソースとして保存できます。データ・ソースがあれば、接続文字列では使用するデータ・ソースを次のように指定するだけで済みます。

DSN=my data source

SQL Anywhere では、ODBC インタフェースを使用する Windows アプリケーション以外でも ODBC データ・ソースを使用できます。

- ◆ UNIX 上の SQL Anywhere クライアント・アプリケーションは、Windows オペレーティング・システム上のものと同じように、ODBC データ・ソースを使用できます。
- ◆ OLE DB、ADO.NET、または Embedded SQL インタフェースを使用している SQL Anywhere クライアント・アプリケーションは、ODBC データ・ソースも、ODBC アプリケーションも使用できます。
- ◆ Interactive SQL と Sybase Central は、ODBC データ・ソースを使用できます。

[ODBC 設定] ダイアログ : [ODBC] タブ

このタブは、ODBC データ・ソースを作成または変更するときのみ表示されます。

[ODBC 設定] ダイアログの [ODBC] タブには、次の項目があります。

[データ・ソース名] この ODBC データ・ソースを識別する名前を入力します。データ・ソースに対して任意の記述名を使用できますが (スペースも可)、接続文字列に入力しなければならない場合があるので、短い名前にしておくことをおすすめします。

「DataSourceName 接続パラメータ [DSN]」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』を参照してください。

[説明] データ・ソースの説明を入力できます。この説明は、ユーザ本人またはエンド・ユーザが、使用可能なデータ・ソース・リストからこのデータ・ソースを識別するのに便利です。このフィールドはオプションです。

[独立性レベル] 数値を入力して、このデータ・ソースの初期独立性レベルを指定します。

- ◆ **0** これはコミットされない読み込み独立性レベルとも呼ばれます。これはデフォルトの独立性レベルです。これは最大レベルの同時実行性を提供しますが、結果セットにダーティ・リード、繰り返し不可能読み出し、幻ローが見受けられる場合があります。

- ◆ **1** これはコミットされた読み込みレベルとも呼ばれます。レベル 0 よりも低い同時実行性を提供しますが、レベル 0 の結果セットに見られる不整合性が一部解消されます。繰り返し不可能読み出しや幻ローが発生することはありませんが、ダーティ・リードは発生しません。
- ◆ **2** これは繰り返し読み出しレベルとも呼ばれます。幻ローが発生することがあります。ダーティ・リードと繰り返し不可能ローは発生しません。
- ◆ **3** これは、直列化可能レベルとも呼ばれます。これは最低レベルの同時実行性を提供する、もっとも厳しい独立性レベルです。ダーティ・リード、繰り返し不可能読み出し、幻ローは発生しません。
- ◆ **[snapshot]** この独立性レベルは、トランザクションが最初のローの読み込み、挿入、更新、または削除を行った時点から、コミットされたデータのスナップショットを使用します。
- ◆ **[statement-snapshot]** この独立性レベルは、文で最初のローが読み込まれた時点から、コミットされたデータのスナップショットを使用します。トランザクション内の各文で参照されるデータのスナップショットはそれぞれ異なる時点のものになります。
- ◆ **[readonly-statement-snapshot]** 読み込み専用の文についてのみ、この独立性レベルは、最初のローが読み込まれた時点から、コミットされたデータのスナップショットを使用します。トランザクション内の各文で参照されるデータのスナップショットはそれぞれ異なる時点のものになります。INSERT 文、UPDATE 文、DELETE 文については、`updatable_statement_isolation` オプションに指定された独立性レベル (0 (デフォルト)、1、2、3 のいずれか) を使用します。

「独立性レベルの選択」 『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』を参照してください。

[Microsoft アプリケーション (SQLStatistics のキー)] SQLStatistics 関数によって外部キーが戻されるようにするには、このオプションを選択します。ODBC 仕様では、SQLStatistics によってプライマリ・キーと外部キーが戻されないように指定しています。しかし、一部の Microsoft アプリケーション (Visual Basic や Access など) では、SQLStatistics によってプライマリ・キーと外部キーが戻されることを前提にしています。

[Delphi アプリケーション] データ・ソースを生成するアプリケーションの作成に Borland Delphi アプリケーション開発ツールを使用する場合は、このオプションを選択します。

このオプションが選択されると、ブックマーク値が各ローに 1 つずつ割り当てられます。オフのときは、2 つずつ割り当てられます。この場合、1 つは前方をフェッチし、もう 1 つは後方をフェッチします。

Delphi では、1 ローにつき複数のブックマーク値を処理できません。このオプションが解除されると、スクロール可能なカーソルのパフォーマンスに影響を及ぼします。カーソルは常に、先頭から正しいブックマーク値を得るために要求したローまでスクロールできなければなりません。

[フェッチ警告を表示しない] フェッチ時にデータベース・サーバから返される警告メッセージを表示しない場合は、このオプションを選択します。

バージョン 8.0 以降のデータベース・サーバでは、それよりも前のバージョンのソフトウェアに比べて多様なフェッチ警告が返されます。以前のバージョンのソフトウェアを使用して配備されたアプリケーションに対して、フェッチの警告を適切に処理するためにこのオプションを選択できます。

[ドライバに起因するエラーを回避] SQL Anywhere ODBC ドライバは、修飾子をサポートしていないため「**ドライバが動作しません。**」というエラーを返します。ODBC アプリケーションの中には、このエラーを適切に処理しないものもあります。このようなアプリケーションでも作業できるように、このエラー・コードが返されないようにするには、このオプションを選択します。

[文が完結するまでオートコミットしない] 文が完了するまでコミット・オペレーションを遅延させるには、このオプションを選択します。

[カーソル動作の記述] プロシージャが実行されたときにカーソルを再記述する頻度を選択します。デフォルト設定は [要求に応じて] です。

- ◆ **[しない]** カーソルの再記述が不要であることがわかっている場合は、このオプションを選択します。カーソルの再記述は負荷が高く、パフォーマンスを低下させる可能性があります。
- ◆ **[要求に応じて]** このオプションを選択すると、カーソルを再記述する必要があるかどうかを ODBC ドライバが決定します。プロシージャに RESULT 句があると、ODBC アプリケーションは、カーソルを開いた後結果セットを再記述できません。これはデフォルトです。
- ◆ **[常に]** カーソルを開くたびに再記述します。Transact-SQL プロシージャや、複数の結果セットを返すプロシージャを使用する場合は、カーソルを開くたびに再記述する必要があります。

[トランスレータ] トランスレータは、ANSI コード・ページと OEM コード・ページ間で文字を変換します。ODBC ドライバ・マネージャがクライアントの文字セットとデータベースの文字セットを自動的に変換してしまうため、ほとんどのデータベースではトランスレータが不要です。データベースで ANSI コード・ページ (デフォルト) を使用している場合は、[トランスレータ] を選択しないでください。

トランスレータが必要な場合は、[トランスレータを選択] ボタンをクリックし、インストールされているトランスレータのリストから必要なトランスレータを選択します。

- ◆ **[トランスレータを選択]** [トランスレータを選択] をクリックして、インストールされているトランスレータのリストから必要な ODBC トランスレータを選択します。

[テスト接続] 指定した情報で正しく接続できるかどうかをテストします。テストを実行するには、ユーザ ID とパスワードを [ログイン] タブで指定しておく必要があります。

[ODBC 設定] ダイアログ : [ログイン] タブ

[ODBC 設定] ダイアログの [ログイン] タブには、次の項目があります。

[統合化ログインの使用] 統合化ログインを使用して接続するには、このオプションを選択します。

このオプションを選択した場合は、ユーザ ID とパスワードを指定する必要がありません。オペレーティング・システムのユーザ ID とパスワードが SQL Anywhere の統合化ログインのメカニズムに渡されます。

統合化ログインを使用するには、ユーザに統合化ログイン・パーミッションが付与され、接続しようとしているデータベースも統合化ログインを受け入れるように設定されている必要があります。DBA アクセス権を持つユーザのみが統合化ログインのパーミッションを管理できます。

詳細については、「[統合化ログインの使用法](#)」『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』を参照してください。

[ユーザ ID とパスワードの指定] 接続のユーザ ID とパスワードを指定する場合は、このオプションを選択します。

- ◆ **[ユーザ ID]** 接続のユーザ ID を入力します。データベースに接続するためのパーミッションを持つユーザ ID を指定してください。
- ◆ **[パスワード]** 接続時のパスワードを入力します。指定したユーザ ID に対する正しいパスワードを入力してください。パスワードでは大文字と小文字が区別されます。
- ◆ **[パスワードの暗号化]** パスワードを暗号化形式でプロファイルに保存するには、このオプションを選択します。

このオプションは、ODBC データ・ソースを作成するときだけに表示されます。dbmsync ユーティリティを使ってこのダイアログにアクセスするときには表示されません。

詳細については、「[EncryptedPassword 接続パラメータ \[ENP\]](#)」『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』を参照してください。

重大なセキュリティのリスクがあるため、データ・ソースにパスワードを含めないようにしてください。

[データ・ソース名] このオプションは、dbmsync ユーティリティを使ってこのダイアログを開いた場合にだけ表示されます。このオプションを選択して、データベースに接続するためのデータ・ソース (格納されている一連の接続パラメータ) を選択します。このフィールドは DSN 接続パラメータに相当し、レジストリ内のデータ・ソースを参照しています。データ・ソースのリストを表示するには、[\[参照\]](#) をクリックします。

[データ・ソース・ファイル] このオプションは、dbmsync ユーティリティを使ってこのダイアログを開いた場合にだけ表示されます。このオプションを選択して、接続で使用するデータ・ソース・ファイルを選択します。ファイルを検索するには、[\[参照\]](#) をクリックします。ODBC データ・ソース・ファイルは、UNIX システムでよく使用されます。ODBC データ・ソースを見つけるには、[\[参照\]](#) ボタンをクリックします。

[ODBC 設定] ダイアログ : [データベース] タブ

[ODBC 設定] ダイアログの [データベース] タブには、次の項目があります。

[サーバ名] SQL Anywhere のパーソナル・サーバまたはネットワーク・サーバの名前を入力します。たとえば、「demo」と入力します。ネットワーク・サーバに接続する場合には、サーバ名を指定する必要があります。

デフォルトのローカル・パーソナル・サーバに接続する場合や、ローカル・コンピュータのデータベース・ファイルからデータベース・サーバを起動する場合は、サーバ名を入力しないでください。デフォルトのパーソナル・サーバが存在しない場合、サーバ名を省略すると接続が失敗します。

サーバ名の詳細については、「サーバとデータベースの命名」『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』を参照してください。

詳細については、「EngineName 接続パラメータ [ENG]」『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』を参照してください。

[開始行] 開始行はパーソナル・データベース・サーバまたはネットワーク・サーバをユーザのコンピュータから起動するためのコマンドです。現在実行していないローカル・データベース・サーバに接続するか、独自の起動パラメータを設定する場合にのみ、開始行を入力します。たとえば、パーソナル・データベース・サーバを起動するには、**c:¥Program Files¥SQL Anywhere 10 ¥win32¥dbeng10.exe** のようにサーバのフル・パスを入力してください。

[開始行] フィールドには、オプションも同時に入力できます。開始行とオプションは次の場合に使用します。

- ◆ 高度なサーバ機能を配備する場合。
- ◆ プロトコルのオプションを制御する場合。
- ◆ 診断メッセージまたはトラブルシューティング・メッセージを生成する場合。
- ◆ パーミッションを設定する場合。
- ◆ データベース・パラメータを設定する場合 (暗号化を含む)。

[開始行] フィールドで指定できるオプションの詳細については、「一般的なオプション」『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』と「SQL Anywhere データベース・サーバ」『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』を参照してください。

詳細については、「StartLine 接続パラメータ [START]」『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』を参照してください。

[データベース名] サーバで実行している各データベースは、データベース名によって識別されます。接続するデータベースの名前を入力します。

データベース名の詳細については、「サーバとデータベースの命名」『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』と「DatabaseName 接続パラメータ [DBN]」『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』を参照してください。

[データベース・ファイル] 接続先のデータベースがサーバ上で現在実行されていない場合に、データベース・ファイルを指定します。**C:¥sample.db** のように、フル・パスとデータベース・ファイルの名前を入力することをおすすめします。それ以外の場合、ファイルのパスは、データベース・サーバの作業ディレクトリの相対パスです。このオプションは、まだ実行していないデータベースを起動する場合にだけ必要です。ファイル・ディレクトリからデータベース・ファイルを選択するには、[参照] ボタンをクリックします。

詳細については、「DatabaseFile 接続パラメータ [DBF]」『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』を参照してください。

[暗号化キー] データベース・ファイルが暗号化されている場合は、データベース・サーバがデータベースを起動するたびにデータベース・サーバのキーを指定してください。

暗号化キーの詳細については、「[DatabaseKey 接続パラメータ \[DBKEY\]](#)」 『SQL Anywhere サーバ-データベース管理』を参照してください。

[自動的にデータベースを起動] このオプションを選択して、[データベース・ファイル]フィールドに指定したデータベースを起動してから接続します。

実行しているデータベースにのみ接続する場合は、[自動的にデータベースを起動] オプションをクリアしてください。

[最終切断後にデータベースを停止] このオプションを選択すると、最後のユーザが切断した後で自動的にデータベースをシャットダウンします。

詳細については、「[AutoStop 接続パラメータ \[ASTOP\]](#)」 『SQL Anywhere サーバ-データベース管理』を参照してください。

[ODBC 設定] ダイアログ : [ネットワーク] タブ

[ODBC 設定] ダイアログの [ネットワーク] タブには、次の項目があります。

[TCP/IP] ネットワーク・パケットに ECC_TLS (旧称 Certicom) または RSA_TLS の強力な暗号化を使用するには、TCP/IP プロトコルを選択してネットワーク・データベース・サーバにアクセスする必要があります。隣接するフィールドに通信パラメータを入力する場合があります。この通信パラメータで、クライアント・アプリケーションからデータベースへの接続を確立しチューニングします。

たとえば、ポートが 4436、コンピュータが名が server1 のデータベース・サーバを検索するには、「**HOST=server1;PORT=4436**」と入力します。

使用すべきプロトコルが不明な場合は、ネットワーク管理者に問い合わせてください。

[SPX] Novell NetWare ネットワークでは、SPX プロトコルを選択してデータベースに接続できます。NetWare では TCP/IP プロトコルもサポートされています。隣接するフィールドに通信パラメータを入力する場合があります。この通信パラメータで、クライアント・アプリケーションからデータベースへの接続を確立しチューニングします。

たとえば、通信パラメータを「**HOST=0:0:0:0:1/4:236:121:215;PORT=2369**」と入力して、SPX 接続を確立します。

使用すべきプロトコルが不明な場合は、ネットワーク管理者に問い合わせてください。

[共有メモリ] 共有メモリ・プロトコルは、同一コンピュータ上で同一のオペレーティング・システムを使用して実行されているクライアントとサーバの間で通信するために使用されます。

使用すべきプロトコルが不明な場合は、ネットワーク管理者に問い合わせてください。

詳細については、「[CommLinks 接続パラメータ \[LINKS\]](#)」 『SQL Anywhere サーバ-データベース管理』と「[ネットワーク・プロトコル・オプション](#)」 『SQL Anywhere サーバ-データベース管理』を参照してください。

[活性タイムアウト] 活性パケットは、接続が続いていることを確認するために、クライアント／サーバ間で送信されます。活性パケットを検出することなく、指定した活性タイムアウト時間

にわたってクライアントが実行されていると、通信は切断されます。このパラメータは、ネットワーク・サーバで TCP/IP または IPX 通信プロトコルを使用するときのみ有効です。

デフォルトの活性タイムアウトは 120 秒です。

詳細については、「[LivenessTimeout 接続パラメータ \[LTO\]](#)」『[SQL Anywhere サーバ - データベース管理](#)』を参照してください。

[アイドル・タイムアウト] 接続を終了する前のクライアントのアイドル時間を設定します。クライアントが要求を送信しないままアイドル・タイムアウト時間が経過すると、接続は切断されません。

デフォルトのクライアントのアイドル時間は、240 分です。

詳細については、「[Idle 接続パラメータ](#)」『[SQL Anywhere サーバ - データベース管理](#)』を参照してください。

[バッファ・サイズ] 通信パケットの最大サイズをバイト単位で設定します。ネットワーク・ソフトウェアは、ネットワーク経由で送信する前に各バッファに情報を追加することがあるため、バッファ・サイズをネットワークで許可されているサイズより小さく設定してください。

デフォルトのバッファ・サイズは 1460 バイトです。

詳細については、「[CommBufferSize 接続パラメータ \[CBSIZE\]](#)」『[SQL Anywhere サーバ - データベース管理](#)』を参照してください。

[ネットワーク・パケットを圧縮] 接続の圧縮を有効にするには、このオプションを選択します。接続で圧縮を行うと、環境によっては SQL Anywhere のパフォーマンスを大幅に向上させることができます。

詳細については、「[Compress 接続パラメータ \[COMP\]](#)」『[SQL Anywhere サーバ - データベース管理](#)』を参照してください。

[ネットワーク・パケットの暗号化に使用する方法を選択します。] ネットワークを介してクライアント・コンピュータから送信されるパケットを暗号化できます。

別途ライセンスが必要な必須コンポーネント

ECC 暗号化と FIPS 承認の暗号化には、別途ライセンスが必要です。強力な暗号化テクノロジーはすべて、輸出規制対象品目です。

「[別途ライセンスが必要なコンポーネント](#)」『[SQL Anywhere 10 - 紹介](#)』を参照してください。

- ◆ **[なし]** クライアントから送信される通信パケットは暗号化されません。これはデフォルト設定です。
- ◆ **[単純]** クライアントから送信される通信パケットは、単純な暗号化を使用して暗号化されません。単純暗号化は、以前のバージョンの SQL Anywhere も含め、すべてのプラットフォームでサポートされます。単純な暗号化は ECC_TLS 暗号化や RSA_TLS 暗号化ほど強力ではありません。
- ◆ **[TLS]** ECC_TLS (以前の Certicom) または RSA_TLS 暗号化を使用するには、このオプションを選択します。ECC_TLS と RSA_TLS 暗号化は、クライアントとサーバ間で送信されるネット

トワーク・パケットの機密性と整合性を保持します。これらは TCP/IP プロトコルでのみ使用できます。

フィールドには、信頼できる証明書の値を入力してください。[編集] ボタンをクリックしてもこの値を入力できます。

- ◆ **[編集]** [編集] ボタンをクリックして、「[TLS 暗号化オプション] ダイアログ」 24 ページで、信頼できる証明書の暗号化の値、証明書に記載される会社、証明書に記載される部署、証明書に記載される名前を入力します。

詳細については、「Encryption 接続パラメータ [ENC]」 『SQL Anywhere サーバ-データベース管理』と「FIPS 承認の暗号化テクノロジー」 『SQL Anywhere サーバ-データベース管理』を参照してください。

参照

- ◆ 「[TLS 暗号化オプション] ダイアログ」 24 ページ

[ODBC 設定] ダイアログ : [詳細] タブ

[ODBC 設定] ダイアログの [詳細] タブには、次の項目があります。

[接続名] 接続を識別する名前を入力します。このフィールドはオプションです。

文字セット 文字セット名を入力します。デフォルトでは、クライアントの ANSI 文字セットが使用されます。たとえば、英語システムでは cp1252 が使用されます。ANSI 文字セットの代わりに OEM 文字セットを入力することもできます。

[複数のレコード・フェッチを許可] 複数のレコードを個別ではなくまとめて取り出してパフォーマンスを改善するには、このオプションを選択します。

[1 ログ・ファイルにデバッグ情報を表示] 通信リンクに関する診断情報をログ・ファイルに記録するには、このオプションを選択します。

- ◆ **[ログ・ファイル]** デバッグ情報を保存するログ・ファイルの名前を入力します。

[追加接続パラメータ] このフィールドには追加接続パラメータを入力します。パラメータ間はセミコロンで区切ります。次に例を示します。

LOG=connection.log

このダイアログの他の部分で設定したパラメータが、このフィールドに設定したパラメータよりも優先されます。たとえば、[ID] タブでユーザ ID として DBA を入力し、このフィールドに接続パラメータ "UID=bsmith" を設定すると、ユーザ ID DBA を使用した接続が試行されます。

接続パラメータの詳細については、「接続パラメータ」 『SQL Anywhere サーバ-データベース管理』と「接続パラメータの働き」 『SQL Anywhere サーバ-データベース管理』を参照してください。

[TLS 暗号化オプション] ダイアログ

このダイアログには、クライアントの Certicom 暗号化設定のフィールドが表示されます。

[TLS 暗号化オプション] ダイアログには、次の項目があります。

[信頼できる証明書] クライアントがサーバを認証するために使用する証明書ファイルの名前を入力します。[参照] をクリックして信頼できる証明書をファイル・ディレクトリから選択することもできます。このフィールドは必須です。

[証明書に記載される会社] 証明書を発行した認証局の名前を入力します。サーバ側とクライアント側の値を一致させる必要があります。このフィールドはオプションです。

[証明書に記載される部門] 証明書に記載される部門を入力します。これは組織単位とも呼ばれます。サーバ側とクライアント側の値を一致させる必要があります。このフィールドはオプションです。

[証明書に記載される名前] 証明書の通称を入力します。サーバ側とクライアント側の値を一致させる必要があります。このフィールドはオプションです。

[TLS タイプ] トランスポート・レイヤのセキュリティのタイプとして RSA または ECC を選択します。

[FIPS 準拠] FIPS 認定の RSA 暗号化を使用するかどうかを選択します。

[ODBC 設定] ダイアログ : [DBMLSync] タブ

このタブには、dbmlsync SQL Anywhere クライアント同期ユーティリティに関するオプションがあります。

[ODBC 設定] ダイアログの [DBMLSync] タブには、次の項目があります。

[パブリケーション] 同期対象のパブリケーションの名前を入力します。

データベースにパブリケーションが 1 つしかない場合は、このフィールドに何も入力する必要はありません。

[ML パスワード] ユーザ認証用の Mobile Link パスワードを入力します。まだパスワードを入力していない場合は、ここで入力する必要があります。パスワードの入力を要求されている場合は、他のフィールドの入力が不要な場合がほとんどです。パスワードでは大文字と小文字が区別されます。

[パスワードの変更] 同期時の Mobile Link パスワードを変更するには、このオプションを選択します。Mobile Link パスワードを変更しない場合は、チェック・ボックスを空白のままにします。

- ◆ **[新規]** Mobile Link パスワードを変更する場合は、新しいパスワードを入力します。Mobile Link パスワードを変更しない場合は、このフィールドを空白のままにします。
- ◆ **[検証]** Mobile Link パスワードを変更する場合は、確認のために新しいパスワードをもう一度入力します。Mobile Link パスワードを変更しない場合は、このフィールドを空白のままにします。

拡張オプション 拡張オプションを入力して、同期をカスタマイズできます。スケジュール指定などの拡張オプションを入力できます。利用できる拡張オプションのリストを確認するには、[拡張オプションのヘルプ] ボタンをクリックしてください。このフィールドはオプションです。

[サイト・スクリプト] 同期後に実行されるスクリプトの名前を入力してください。このフィールドはオプションです。サイト・スクリプトを見つけるには、[参照] ボタンをクリックします。

[リモート・プログレスに対してリトライする] 統合データベースとクライアント・データベースで最後の同期に関する情報が異なる場合、このオプションを選択してアップロード操作をリトライできます。

デフォルトでは、アップロードは統合データベースによって記録されたオフセットから継続されます。[リモート・プログレスに対してリトライする] を選択すると、統合データベースに記録されたオフセットがクライアント・データベースに記録されたオフセットよりも前の場合、アップロードはクライアント・データベースに記録されたオフセットから継続されます。

また、[リモートのオフセットが前] を選択すると、クライアント・データベースに記録されたオフセットが統合データベースに記録されたオフセットより前であっても、アップロードはクライアント・データベースに記録されたオフセットからリトライされます。このオプションの使用には十分注意してください。統合データベースを復元した結果、オフセットが一致しなければ、記録された2つのオフセットの間にクライアント・データベース内で発生した変更が失われます。最後に成功した同期の後にクライアント・データベースのトランザクション・ログがトランケートされている場合は、[リモートのオフセットが前] が役立つことがあります。

◆ **[リモートのオフセットが後]** 統合データベースのオフセットがクライアント・データベースのオフセットよりも前の場合に、統合データベースのオフセットからアップロードをリトライするには、[リモートのオフセットが後] を選択します。このオプションを使用できるのは、[リモート・プログレスに対してリトライする] を選択した場合のみです。これはデフォルト設定です。

◆ **[リモートのオフセットが前]** クライアント・データベースのオフセットが統合データベースに記録されたオフセットより前であっても、クライアント・データベースに記録されたオフセットからアップロードをリトライするには、[リモートのオフセットが前] を選択します。このオプションを使用できるのは、[リモート・プログレスに対してリトライする] を選択した場合のみです。このオプションの使用には十分注意してください。

このオプションは、最後に成功した同期と再作成間の変更をアップロードしたくない場合に役立つことがあります。

[冗長オペレーション] デバッグやその他の診断情報をログ・ファイルに記録するには、このオプションを選択します。このフィールドはオプションです。

[競合する接続の削除] 同期を実行するには、同期対象のテーブル上のすべてのローにアクセスする必要があります。これらのテーブルをロックしている接続を強制的に削除するには、このオプションを選択します。このフィールドはオプションです。

[コマンドライン・ヘルプ] [DBMLSync] タブの各オプションには、対応するコマンド・ライン・オプションがあります。[コマンドライン・ヘルプ] ボタンをクリックすると、オプションのリストとその説明が表示されます。

[拡張オプションのヘルプ] [拡張オプションのヘルプ] ボタンをクリックすると、使用可能な拡張オプションの名前、デフォルト値、説明のリストが表示されます。これらのオプションを [拡張オプション] フィールドに入力して同期をカスタマイズできます。

[Oracle 用 iAnywhere ドライバの設定] ダイアログ

このダイアログでは、iAnywhere Solutions 10 - Oracle と呼ばれる Oracle 用の ODBC ドライバの設定を行うことができます。

[Oracle 用 iAnywhere ドライバの設定] ダイアログには、次の項目があります。

[データ・ソース名] データ・ソースを識別するための名前を入力します。

[ユーザ ID] アプリケーションが Oracle データベースへの接続に使用するデフォルトのログオン ID。ログオン ID が必要なのは、データベースでセキュリティが有効の場合のみです。この場合、システム管理者からログオン ID を取得してください。

[パスワード] アプリケーションが Oracle データベースへの接続に使用するパスワード。

[SID] サーバで稼働する Oracle のインスタンスを参照する Oracle システム識別子。この項目は、Oracle データベースの複数のインスタンスをサポートするサーバに接続するときに必須です。SID は、Oracle インストール・ディレクトリの *network/admin/tnsnames.ora* に保存されます。

[プロシージャは結果を返す] プロシージャが結果を返すことができる場合は、このフィールドを選択してください。デフォルトでは、プロシージャは結果を返しません (選択されていません)。download_cursor スクリプトまたは download_delete_cursor スクリプトがストアド・プロシージャ呼び出しの場合は、このオプションを yes に設定してください。

[配列サイズ] ローのプリフェッチに使用するバイト配列のサイズ (バイト単位)。文ごとに指定します。デフォルトは 60000 です。この値を大きくすると、使用するメモリが増えますが、フェッチのパフォーマンス (Mobile Link サーバのダウンロードなど) は大幅に向上します。

[テスト接続] 指定した情報で正しく接続できるかどうかをテストします。テストを実行するには、ユーザ ID とパスワードを指定しておく必要があります。

Oracle ドライバの最新の情報については、http://www.ianywhere.jp/developers/technotes/odbc_mobilink.html を参照してください。

第 3 章

SQL Anywhere プラグインのヘルプ

目次

SQL Anywhere プロパティ・シートの概要	30
ダイアログ・ボックスの概要	118
デバッグのヘルプ	149
インデックス・コンサルタント	152
Ultra Light プロジェクト	153
Ultra Light 文	154
パブリケーション	155
アーティクル	156
サブスクリプション	157
[接続] ダイアログのツール	158
[インデックス] フォルダ	159
テーブルの編集の取り消し	160
データベース検索	161

SQL Anywhere プロパティ・シートの概要

SQL Anywhere プラグインには、オブジェクトのプロパティを設定するためのプロパティ・シートが各種用意されています。

各プロパティ・シートは、オブジェクトを選択すると [ファイル] メニューに用意されます。また、オブジェクトを右クリックして表示されるポップアップ・メニューにも用意されます。次の項からは、SQL Anywhere プラグインの各プロパティ・シートについて詳しく説明します。

[アークティクル] プロパティ・シート : [一般] タブ

[アークティクル] プロパティ・シートの [一般] タブには、次の項目があります。

[名前] アークティクルに使用されているテーブルの名前と所有者が表示されます。

[タイプ] オブジェクトのタイプが表示されます。

[パブリケーション] アークティクルが含まれるパブリケーションが表示されます。カッコ内にパブリケーションの所有者の名前が表示されます。

参照

- ◆ 「[テーブル] プロパティ・シート : [一般] タブ」 105 ページ
- ◆ 「パブリケーションの設計」 『SQL Remote』
- ◆ 「CREATE PUBLICATION 文 [Mobile Link] [SQL Remote]」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

[アークティクル] プロパティ・シート : [カラム] タブ

[アークティクル] プロパティ・シートの [カラム] タブには、次の項目があります。

[すべてのカラム] このオプションを選択すると、テーブルのすべてのカラムがアークティクルに入ります。

[選択したカラム] このオプションを選択すると、テーブルの一部のカラムのみがアークティクルに入ります。このオプションを選択すると、[選択したカラム] リストのカラム名の横にあるチェックボックスが使用可能になります。このリストには、アークティクルの基になるテーブルのすべてのカラムが含まれています。

このオプションを選択するときは、少なくとも 1 つのカラムをアークティクルに入れてください。カラムをアークティクルに含めるには、カラム名の横にあるチェックボックスを選択します。すると、チェック・マークが表示されます。[すべて選択] をクリックすると、リスト内のすべてのカラムをアークティクルに含めることができます。

- ◆ **[すべて選択]** このオプションを選択すると、テーブルのすべてのカラムがアークティクルに入ります。
- ◆ **[すべてをクリア]** このオプションを選択すると、[選択したカラム] リストのすべてのチェックボックスがクリアされます。

参照

- ◆ 「パブリケーションの設計」 『SQL Remote』
- ◆ 「CREATE PUBLICATION 文 [Mobile Link] [SQL Remote]」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

[アークティクル] プロパティ・シート : [WHERE 句] タブ

Mobile Link と SQL Remote のパブリケーション用に定義されたアークティクルでは、WHERE 句を使うことによって、アークティクル内にテーブルのローのサブセットが含まれるように定義できます。Ultra Light アプリケーションでは、WHERE 句を指定することでロー・サブセットを使用できます。ただし、HotSync 同期を管理する Ultra Light パブリケーション内のアークティクルでは、WHERE 句を使用できません。

[WHERE 句] タブは、アークティクルが含まれるパブリケーションのタイプがログ・スキャンの場合にのみ表示されます。

[アークティクル] プロパティ・シートの [WHERE 句] タブには、次の項目があります。

[このアークティクルには次の WHERE 句があります。] ウィンドウで WHERE 句を編集して、アークティクルに含まれるテーブル・ローを制限できます。

たとえば、次のように入力すると、給与が \$50000 を上回るローのみが含まれます。

```
WHERE Salary > 50000
```

参照

- ◆ 「CREATE PUBLICATION 文 [Mobile Link] [SQL Remote]」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- ◆ 「パブリケーションの設計」 『SQL Remote』
- ◆ 「WHERE 句 : ローの指定」 『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』

[アークティクル] プロパティ・シート : [SUBSCRIBE BY 制限] タブ

このタブは、SQL Remote にだけ適用されます。

[アークティクル] プロパティ・シートの [SUBSCRIBE BY 制限] タブには、次の項目があります。

[なし] SUBSCRIBE BY カラムまたは SUBSCRIBE BY 句を使用してローを分割することのないように、アークティクルを設定します。

[カラム] カラム (SUBSCRIBE BY カラム) に基づいてテーブルのローを分割するように、アークティクルを設定します。このオプションを選択した場合は、ドロップダウン・リストからカラムを選択してください。

[式] 下のフィールドに入力した式に基づいてテーブルのローを分割するように、アークティクルを設定します。

参照

- ◆ 「パブリケーションの設計」 『SQL Remote』

- ◆ 「CREATE PUBLICATION 文 [Mobile Link] [SQL Remote]」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

[検査制約] プロパティ・シート : [一般] タブ

[検査制約] プロパティ・シートの [一般] タブには、次の項目があります。

[名前] 選択されている検査制約の名前が表示されます。このフィールドで検査制約の名前を編集できます。

[タイプ] オブジェクトのタイプが表示されます。

[テーブル] この検査制約が属するテーブルが表示されます。

[カラム] この検査制約が適用されるカラムが表示されます。この情報が表示されるのはカラム検査制約の場合だけです。テーブル検査制約の場合は表示されません。

参照

- ◆ 「制約の選択」 『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』
- ◆ 「テーブルに対する検査制約の使い方」 『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』
- ◆ 「カラムに対する検査制約の使い方」 『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』

[検査制約] プロパティ・シート : [定義] タブ

[検査制約] プロパティ・シートの [定義] タブには、次の項目があります。

[この検査制約には次の定義が含まれています。] ここで検査制約を入力できます。カラム検査制約では、指定された型を持つすべてのカラムの入力値が適切であることが保証されるのに対し、テーブル検査制約では、特定のテーブル内のローが制約に違反していないことが保証されます。

カラムの検査制約の例

データのフォーマットを規定します。たとえば、テーブルに電話番号のカラムがあるとして、その電話番号カラムが同じフォーマットで入力されるようにします。北米地域の電話番号に対する制約の例を次に示します。

```
ALTER TABLE Customers
ALTER Phone
CHECK ( Phone LIKE '(____) ____-____');
```

この CHECK 条件を指定すると、Phone の値をたとえば 9835 に設定しようとしたときに変更が許可されません。

テーブルの検査制約の例

たとえば、次のように Employees テーブルに制約を追加して、TerminationDate が常に StartDate 以降になるようにできます。

```
ALTER TABLE Employees
ADD CONSTRAINT valid_term_date
CHECK(TerminationDate >= StartDate);
```


参照

- ◆ 「[制約の選択](#)」 『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』
- ◆ 「[カラムに対する検査制約の使い方](#)」 『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』
- ◆ 「[テーブルに対する検査制約の使い方](#)」 『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』

[カラム] プロパティ・シート : [一般] タブ

この [カラム] プロパティ・シートには、特定のテーブルに属するカラムに関する情報が表示されます。

[カラム] プロパティ・シートの [一般] タブには、次の項目があります。

名前 カラムの名前が表示されます。このフィールドでカラム名を編集できます。

[タイプ] オブジェクトのタイプが表示されます。

[テーブル] カラムが含まれるテーブルの名前の他に、テーブルの所有者が表示されます。

[コメント] カラムの説明を入力します。たとえば、システムにおけるそのカラムの目的を、この領域に記述できます。

参照

- ◆ 「[テーブルの編集](#)」 『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』

[カラム] プロパティ・シート : [データ型] タブ

[カラム] プロパティ・シートの [データ型] タブには、次の項目があります。

[組み込みタイプ] このオプションを選択すると、カラムの組み込みデータ型をドロップダウン・リストから選択できます。組み込みデータ型の例には、整数、文字列、日付などがあります。これらのデータ型の中には、サイズか位取りまたはその両方を指定できるものもあります。

- ◆ **[サイズ]** 文字列カラムの場合は長さ、または数値カラムの場合は 10 進法計算の結果における小数点の左右の合計桁数を指定します。数値カラムのサイズは `precision` 値とも呼ばれます。

「[precision オプション \[データベース\]](#)」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』を参照してください。

- ◆ **[位取り]** 計算結果が最大 `precision` 値にトランケートされる場合の、小数点以下の最小桁数を指定します。

「[SQL データ型](#)」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』を参照してください。

[ドメイン] このオプションを選択すると、ドロップダウン・リストからドメインを選択できます。ドメインとは、組み込みデータ型、デフォルト値、CHECK 条件、NULL 値の許容を組み合わせさせて名前を付けたものです。

[Java クラス] このオプションを選択すると、カラムの Java クラスをドロップダウン・リストから選択できます。このオプションは、バージョン 8.0.x のデータベースにのみ表示されます。

[値を圧縮] このオプションを選択すると、カラムの値が圧縮されます。カラムを圧縮すると、インデックス、データの比較、統計の生成などのデータベース・サーバのアクティビティの処理速度が、圧縮したカラムを対象とする場合に、遅くなる可能性があります。これは、値を書き込むときに圧縮し、読み込むときに解凍する必要があるからです。

「カラムを圧縮するかどうかの選択」 『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』を参照してください。

[大きな値の BLOB インデックスを維持] このオプションを選択すると、大きな値の BLOB インデックスを維持できます。このオプションは、文字型、バイナリ型、ビット型だけに使用できません。

「CREATE TABLE 文」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』を参照してください。

参照

- ◆ 「カラムのデータ型の選択」 『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』
- ◆ 「ドメインの使い方」 『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』
- ◆ 「データ整合性の確保」 『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』
- ◆ 「チュートリアル：データベースにおける Java の使用」 『SQL Anywhere サーバ - プログラミング』
- ◆ 「テーブルの編集」 『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』

[カラム] プロパティ・シート：[値] タブ

[カラム] プロパティ・シートの [値] タブには、次の項目があります。

[デフォルト値または計算値なし] カラムにデフォルト値または計算値を設定しない場合は、このオプションを選択します。

[デフォルト値] カラムにデフォルト値を設定する場合は、このオプションを選択します。カラムがドメインに基づいている場合、この設定はドメインのデフォルト値 (存在する場合) を継承しますが、カラム用の値を優先させることもできます。[デフォルト値] オプションを選択すると、[ユーザ定義] オプションと [システム定義] オプションが有効になります。

- ◆ **[ユーザ定義]** デフォルト値にユーザ定義の値 (文字列、数字、またはその他の式) を入力します。カラムがドメインに基づいている場合、ドメインのデフォルト値 (存在する場合) を維持するか、またはカラムの値を優先させることができます。
- ◆ **[リテラル文字列]** カラムのデフォルト値をリテラル文字列として扱うかどうかを指定します。このオプションは、文字カラムと文字ベース・タイプのドメインの場合はデフォルトで選択されています。このオプションを選択すると、デフォルトのテキストを一重引用符で囲んだり、文字列に埋め込んだ引用符や円記号をエスケープする必要はありません。

このオプションをクリアすると、引用符やエスケープの自動処理がオフになり、指定したデフォルト値のテキストがそのままサーバに渡されます。

- ◆ **[システム定義]** デフォルト値に定義済みの値 (現在の日付など) を選択します。値はドロップダウン・リストから選択します。カラムがドメインに基づいている場合、ドメインのデフォルト値 (存在する場合) を維持するか、またはカラムの値を優先させることができます。
- ◆ **[分割サイズ]** システム定義値として [グローバル・オートインクリメント] を選択した場合は、分割サイズも指定できます。

グローバル・オートインクリメントでは、新しく作成されたローに、それまでのカラムの最大値に 1 を加えた値を割り当てます。分割サイズを指定すると、グローバル・オートインクリメントで使用できる最大値が制限されます。分割サイズには任意の正の整数を入力できます。一般には、増分が十分に行えるような値を選択してください。

次の項を参照してください。

- ◆ 「オートインクリメント・デフォルト」 『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』
- ◆ 「CREATE TABLE 文」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

[計算値] このオプションは、カラムの計算値を定義するときに選択します。計算カラムの値は、他のカラムの値から計算して得ることができます。テキスト・ボックスに式を入力し、その式で他のカラムとの関係と計算カラムに表示される値を記述してください。

計算値の詳細については、次の項を参照してください。

- ◆ 「ALTER TABLE 文」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- ◆ 「式内のサブクエリ」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

参照

- ◆ 「SQL 関数」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- ◆ 「カラム・デフォルトの使い方」 『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』
- ◆ 「計算カラムの使用」 『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』

[カラム] プロパティ・シート : [制約] タブ

[カラム] プロパティ・シートの [制約] タブには、次の項目があります。

[NULL 値を許可] カラムの値に NULL 値を許可する場合は、このオプションを選択します。カラムがドメインに基づいている場合は、ドメインの NULL 値の許容を維持するか、またはカラムの値を優先させることができます。

[NULL 値を禁止] このカラムで重複値を許容し、NULL 値を許容しないときは、このオプションを選択します。

[NULL 値を禁止し、ユニークな値であること] NULL 値を許容せず、カラムの値を必ずユニークにする場合は、このオプションを選択します。

参照

- ◆ 「制約の選択」 『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』
- ◆ 「データ整合性の確保」 『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』

[カラム] プロパティ・シート (ビュー) : [一般] タブ

この [カラム] プロパティ・シートには、特定のビューに属するカラムに関する情報が表示されます。

[カラム] プロパティ・シートの [一般] タブには、次の項目があります。

[名前] 選択されているカラムの名前が表示されます。

[タイプ] オブジェクトのタイプが表示されます。

[ビュー] カラムが属するビューの名前が表示されます。また、カッコ内にそのビューの所有者の名前が表示されます。

[データ型] 選択されているカラムのデータ型が表示されます。

[NULL 入力可] 選択されたカラムで NULL 値を許可するかどうかが表示されます。

[コメント] カラムの説明を入力します。

参照

- ◆ 「SQL データ型」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- ◆ 「制約の選択」 『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』

[接続されたユーザ] プロパティ・シート : [一般] タブ

[接続されたユーザ] プロパティ・シートの [一般] タブには、次の項目があります。

[接続 ID] ユーザの接続 ID が表示されます。

ユーザがデータベースに接続すると、その接続にユニークな接続 ID が割り当てられます。以降、データベースに接続するたびに、接続 ID の値が 1 ずつ増えます。

[タイプ] オブジェクトのタイプが表示されます。

[ユーザ] データベース・ユーザ ID が表示されます。

[接続名] ユーザが接続しているデータベースの接続名が表示されます。接続に名前を付けると、同じデータベースへの複数の接続や、同じまたは異なるデータベース・サーバへの複数の接続を簡単に識別できるようになります。

[通信リンク] ユーザの接続に使用する通信リンクのタイプが表示されます。SQL Anywhere クライアントとネットワーク・データベース・サーバを接続する場合、リンク・タイプは、使用するネットワーク・プロトコルを表します。

[ノード・アドレス] ユーザの接続に使用する通信ポート ID が表示されます。

[最終要求タイプ] 最終要求のタイプが表示されます。

[最終要求時刻] この接続に対する最終要求の開始時刻が表示されます。

[接続のブロック] 接続をブロックするかどうかが表示されます。現在の接続がブロックされていない場合は、このフィールドは空白です。ブロックされている場合は、ロック競合によってブロックされた接続の接続番号が表示されます。

参照

- ◆ 「接続されたユーザの管理」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』
- ◆ 「接続レベルのプロパティ」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』

[接続されたユーザ] プロパティ・シート : [詳細情報] タブ

[接続されたユーザ] プロパティ・シートの [詳細情報] タブには、次の項目があります。

[接続されたユーザのプロパティ] リスト 接続されたユーザのプロパティの名前と値がリストされます。[再表示] をクリックすると値が更新されます。[F5] キーを押しても、値を再表示できません。

- ◆ **[再表示]** クリックすると、[接続されたユーザのプロパティ] リストの値が更新されます。

説明 選択されているプロパティに関する説明です。

参照

- ◆ 「接続されたユーザの管理」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』
- ◆ 「接続レベルのプロパティ」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』

[統合ユーザ] プロパティ・シート : [一般] タブ

[統合ユーザ] プロパティ・シートの [一般] タブには、次の項目があります。

[名前] 統合ユーザの名前が表示されます。

[タイプ] オブジェクトのタイプが表示されます。

[接続可] このオプションを選択すると、統合ユーザがデータベースに接続できます。統合ユーザが接続を許可されないと、パスワード (指定されている場合) はアカウントから削除されます。統合ユーザの接続を許可するように後で変更する場合は、新しいパスワードを指定する必要があります。このオプションをクリアすると、[パスワード] オプションと [パスワードの確認] オプションが無効になります。

ユーザは、ほとんどの場合、データベースへの接続を許可されます。

- ◆ **[パスワード]** 統合ユーザのパスワードを入力します。パスワードでは大文字と小文字が区別されます。
- ◆ **[パスワードの確認]** [パスワード] テキスト・ボックスに入力したパスワードをもう一度入力して確認します。2つのフィールドの内容は、完全に一致している必要があります。パスワードでは大文字と小文字が区別されます。

[コメント] 統合ユーザの説明を入力します。たとえば、システムにおけるその統合ユーザの目的を、この領域に記述できます。

参照

- ◆ 「GRANT CONSOLIDATE 文 [SQL Remote]」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- ◆ 「REMOTE パーミッションの付与と取り消し」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』
- ◆ 「ユーザ ID とパーミッションの管理」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』

[統合ユーザ] プロパティ・シート : [権限] タブ

[統合ユーザ] プロパティ・シートの [権限] タブには、次の項目があります。

[DBA] このオプションを選択すると、統合ユーザに DBA 権限が付与されます。DBA 権限を持つユーザは、データベースを完全に管理できます。

[リソース] このオプションを選択すると、統合ユーザに RESOURCE 権限が付与されます。RESOURCE 権限を持つユーザは、データベース・オブジェクトを作成できます。

[リモート DBA] このオプションを選択すると、統合ユーザに REMOTE DBA 権限が付与されます。Mobile Link クライアント・ユーティリティの dbmlsync には REMOTE DBA 権限が必要です。SQL Remote Message Agent も、REMOTE DBA 権限を持つユーザ ID を使用して、セキュリティ・ホールを作らずにアクションを確実に実行する必要があります。

[バックアップ] このオプションを選択すると、統合ユーザに BACKUP 権限が付与されます。

[検証] このオプションを選択すると、統合ユーザに VALIDATE 権限が付与されます。VALIDATE 権限を持つユーザは、データベース、テーブル、インデックス、チェックサムを検証など、さまざまな VALIDATE 文を使用した操作を実行できます。

参照

- ◆ 「DBA 権限の概要」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』
- ◆ 「RESOURCE 権限の概要」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』
- ◆ 「GRANT REMOTE DBA 文 [Mobile Link] [SQL Remote]」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- ◆ 「BACKUP 権限の概要」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』
- ◆ 「VALIDATE 権限の概要」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』

[統合ユーザ] プロパティ・シート : [パーミッション] タブ

[統合ユーザ] プロパティ・シートの [パーミッション] タブには、次の項目があります。

[パーミッション] リスト 統合ユーザがパーミッションを持っているすべてのテーブルの他に、各テーブルを所有するユーザが表示されます。各ユーザの横に表示されるフィールドをクリックすると、パーミッションの付与または取り消しができます。フィールドをダブルクリックすると (チェック・マークと 2 つの + 記号が表示される)、ユーザにパーミッションの付与オプションを与えることができます。

[表示] [パーミッション] リストに表示するオブジェクトのタイプを選択します。

- ◆ **[テーブル]** 統合ユーザがパーミッションを持っているすべてのテーブルが表示されます。
- ◆ **[ビュー]** 統合ユーザがパーミッションを持っているすべてのビューが表示されます。
- ◆ **[プロシージャとファンクション]** 統合ユーザがパーミッションを持っているプロシージャとファンクションがすべて表示されます。プロシージャとファンクションに対して付与できるのは EXECUTE パーミッションだけです。

参照

- ◆ 「[ユーザ ID とパーミッションの管理](#)」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』
- ◆ 「[テーブルに対するパーミッションの付与](#)」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』
- ◆ 「[ビューに対するパーミッションの付与](#)」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』
- ◆ 「[プロシージャに対するパーミッションの付与](#)」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』

[統合ユーザ] プロパティ・シート : [SQL Remote] タブ

[統合ユーザ] プロパティ・シートの [SQL Remote] タブには、次の項目があります。

[メッセージ・タイプ] パブリッシャと通信するためのメッセージ・タイプを選択できます。

[アドレス] 統合ユーザのリモート・アドレスを入力できます。このアドレスは、ユーザに対してレプリケーション・メッセージを送信するときの宛先です。指定したメッセージ・タイプに応じた文字列を入力します。

特定のメッセージ・タイプに使用するアドレスの詳細については、「[メッセージ・タイプの使用](#)」 『SQL Remote』を参照してください。

[送信頻度] 次のいずれかのオプションを選択して、メッセージを送信する頻度を設定します。

- ◆ **[送信して閉じる]** パブリッシャのエージェントが 1 回の実行で保留中のすべてのメッセージを統合ユーザに送信した後で停止するように、レプリケーションの頻度が設定されます。つまり、パブリッシャがメッセージを送信する前に毎回エージェントを再起動する必要があります。

ほとんどのレプリケーション設定では、統合パブリッシャから統合ユーザにパブリケーションを送信する場合、このオプションは使用されません。

- ◆ **[次の間隔で送信]** パブリッシャのエージェントの実行を継続し、統合ユーザに指定の間隔でメッセージが送信されるようにレプリケーションの頻度が設定されます。
- ◆ **[毎日次の時刻に送信]** パブリッシャのエージェントの実行を継続し、統合ユーザに毎日指定時刻にメッセージが送信されるようにレプリケーションの頻度が設定されます。

参照

- ◆ 「[送信頻度の選択](#)」 『SQL Remote』
- ◆ 「[GRANT REMOTE 文 \[SQL Remote\]](#)」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- ◆ 「[GRANT CONSOLIDATE 文 \[SQL Remote\]](#)」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

[データベース] プロパティ・シート : [一般] タブ

このタブにリストされるデータベースのプロパティは、データベースを再構築しないかぎり変更できません。

「データベースの再構築」 『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』を参照してください。

[データベース] プロパティ・シートの [一般] タブには、次の項目があります。

[名前] このデータベースの名前が表示されます。

[タイプ] オブジェクトのタイプが表示されます。

[ID] データベース・サーバで起動されたデータベースごとに割り当てられているユニークな番号が表示されます。この番号により、同じサーバ上で実行している複数のデータベースを識別できます。

[機能 ID] データベースに対して有効な機能ビットが表示されます。

[Java のロケーション] データベースで使用される外部 Java VM の *java.exe* ファイルのロケーションが表示されます。

「Java VM の選択」 『SQL Anywhere サーバ - プログラミング』を参照してください。

[Java メイン・ユーザ ID] メインの Java 接続に使用するデータベース・ユーザ ID が表示されます。

[Java JDK バージョン] インストール時のデータベースでサポートされる JDK のバージョンが表示されます。データベースで Java がサポートされていない場合は、[なし] が表示されます。これは 9.0.2 以前のデータベースだけに適用されます。

[ページ・サイズ] データベースのページ・サイズがバイト単位で表示されます。

[データベース・ファイル] データベースのルート・データベース・ファイルが表示されます。

[ログ・ファイル] データベースのトランザクション・ログ・ファイルの名前とロケーションが表示されます。

[ミラー・ログ・ファイル] データベースのトランザクション・ログ・ミラー・ファイルの名前とロケーションが表示されます。

[ユーザ] このデータベースに接続しているユーザのユーザ ID が表示されます。

[接続 ID] Sybase Central からのデータベース接続の接続 ID が表示されます。

[接続名] このデータベースに接続しているユーザの接続名が表示されます。接続に名前を付けると、同じデータベースへの複数の接続や、同じまたは異なるデータベース・サーバへの複数の接続を簡単に識別できるようになります。

[通信リンク] ユーザの接続に使用する通信リンクのタイプが表示されます。SQL Anywhere クライアントとネットワーク・データベース・サーバを接続する場合、リンク・タイプは、使用するネットワーク・プロトコルを表します。

[総接続数] Sybase Central の接続も含めて、すべてのユーザについて、データベースへの現在の接続の合計数が表示されます。

参照

- ◆ 「データベース・レベルのプロパティ」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』
- ◆ 「データベースの編集」 『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』

[データベース] プロパティ・シート : [設定] タブ

このタブにリストされるデータベースのプロパティは、データベースを再構築しないかぎり変更できません。

「データベースの再構築」 『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』を参照してください。

[データベース] プロパティ・シートの [設定] タブには、次の項目があります。

[暗号化タイプ] データベースが暗号化されているかどうかと、暗号化されている場合はそのタイプ ([単純]、[AES]、[AES_FIPS] のいずれか) が表示されます。データベースで暗号化がサポートされていない場合は、[なし] が表示されます。

SQL Anywhere でサポートされている暗号化タイプの詳細については、「データベースの暗号化」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』を参照してください。

[暗号化スコープ] 指定されている暗号化のレベルが表示されます。値は [なし]、[テーブル]、[データベース] のいずれかです。設定が [テーブル] の場合、暗号化するように特定のテーブルをマーク付けできます。設定が [データベース] の場合、データベース全体が暗号化されます。

[大文字と小文字を区別] 大文字と小文字の区別のステータスが表示されます。データベースで大文字と小文字が区別される場合は、On を返します。それ以外の場合は、Off を返します。大文字と小文字が区別されるデータベースでは、データの比較において大文字と小文字が異なるものとして扱われます。この設定は識別子における大文字と小文字の区別には影響しません。パスワードについては、常に大文字と小文字が区別されます。このプロパティは、バージョン 10 以前のデータベースに適用されます。「大文字と小文字の区別」 『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』を参照してください。

[後続ブランクを無視する] データベースで比較を行うとき、文字データの後続ブランクを無視するかどうかを示します。

[照合順] データベースの照合アルゴリズムを示します。SQL Anywhere では、照合アルゴリズムとして、SQL Anywhere 照合アルゴリズム (SACA) とユニコード照合アルゴリズム (UCA) の 2 つをサポートしています。SACA を使用すると、ソートが高速、簡潔、実用的になりますが、言語的な正確さが低下します。UCA を使用すると、言語的な処理は正確になりますが、記憶領域の要件と実行時間が多少増加します。このプロパティは、バージョン 10 以前のデータベースに適用されます。「照合の知識」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』を参照してください。

[文字セット・エンコード] データベースに使用される文字セットです。このプロパティは、バージョン 10 以前のデータベースに適用されます。

[CHAR 照合順] CHAR データに使用される照合です。

「SQL Anywhere データベースでの照合」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』を参照してください。

[CHAR 文字セット・エンコード] CHAR データに使用される文字セットです。

[CHAR の大文字と小文字の区別] CHAR 照合の大文字と小文字の区別に関する設定を表示します。値は、[無視]、[考慮]、[大文字が先 (Aa)]、および [小文字が先 (aA)] です。これらの値の詳細については、「照合の適合化オプション」『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』を参照してください。

[NCHAR 照合順] NCHAR データに使用される照合です。この値は UCA または UTF8BIN のいずれかです。

[NCHAR 文字セット・エンコード] NCHAR データに使用される文字セットです。常に UTF-8 です。

[NCHAR の大文字と小文字の区別] NCHAR 照合の大文字と小文字の区別に関する設定を表示します。値は、[無視]、[考慮]、[大文字が先 (Aa)]、および [小文字が先 (aA)] です。これらの値の詳細については、「照合の適合化オプション」『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』を参照してください。

[チェックポイントの緊急度] 最後に行ったチェックポイントから経過した時間が、データベースのチェックポイント時間の設定に対するパーセンテージで表されます。[再表示] をクリックするか [F5] キーを押すと、[チェックポイントの緊急度] の値が更新されます。

[リカバリの緊急度] データベースをリカバリするために必要な時間の見積もりが表示されます。[再表示] をクリックするか [F5] キーを押すと、[リカバリの緊急度] の値が更新されます。

◆ **[再表示]** クリックすると、チェックポイントの緊急度とリカバリの緊急度の値が更新されません。

[このデータベースで発生したデッドロックの情報を収集する] このオプションを選択すると、このデータベースで発生するデッドロックに関する情報が記録されます。左ウィンドウ枠のツリー表示でデータベースを選択し、右ウィンドウ枠で [デッドロック] タブを選択すると、収集されたデッドロック情報が表示されます。「Sybase Central からデッドロックの表示」『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』を参照してください。

◆ **[デッドロックが発生した接続の SQL 文情報を含める]** このオプションを選択すると、このデータベースで発生するデッドロックの SQL 文に関する情報が記録されます。このオプションを使用できるのは、[このデータベースで発生したデッドロックの情報を収集する] が選択されている場合だけです。

[すぐにデッドロック情報をクリアする] クリックすると、デッドロック情報がただちにクリアされます。

参照

- ◆ 「照合の適合化オプション」『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- ◆ 「データベースの編集」『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』
- ◆ 「データベース・レベルのプロパティ」『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』
- ◆ 「文字セットの知識」『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』
- ◆ 「照合の知識」『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』
- ◆ 「デッドロック」『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』

[データベース] プロパティ・シート : [詳細情報] タブ

[データベース] プロパティ・シートの [詳細情報] タブには、次の項目があります。

[データベースのプロパティ] リスト データベースのプロパティの名前と値がリストされます。
[再表示] をクリックすると値が更新されます。[F5] キーを押しても、値を再表示できます。

- ◆ **[再表示]** クリックすると、[データベースのプロパティ] リストの値が更新されます。

説明 選択されているプロパティに関する説明です。

参照

- ◆ 「データベースの編集」 『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』
- ◆ 「データベース・レベルのプロパティ」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』

[データベース] プロパティ・シート : [SQL Remote] タブ

[データベース] プロパティ・シートの [SQL Remote] タブには、次の項目があります。

[このデータベースにパブリッシャが存在する] データベースのパブリッシャの名前を指定するときは、このオプションを選択します。このオプションを選択すると、以下の [パブリッシャ] フィールドが有効になります。

- ◆ **[パブリッシャ]** データベースのパブリッシャの名前が表示されます。[変更] をクリックすると、[パブリッシャの設定] ダイアログでパブリッシャを選択できます。

[このリモート・データベースに対応する統合データベースが存在する] データベースがリモート・データベースとして動作している場合は、このオプションを選択します。

- ◆ **[統合ユーザ]** [変更] をクリックすると、[統合ユーザの設定] ダイアログの使用可能な候補リストから統合ユーザを選択できます。
- ◆ **[メッセージ・タイプ]** パブリッシャと通信するためのメッセージ・タイプをドロップダウン・リストから選択します。

SQL Remote でサポートされているメッセージ・タイプの詳細については、「[メッセージ・タイプの使用](#)」 『SQL Remote』を参照してください。

- ◆ **[アドレス]** 統合ユーザのリモート・アドレスを入力できます。このアドレスは、ユーザに対してレプリケーション・メッセージを送信するときの宛先です。指定したメッセージ・タイプに応じた文字列を入力します。

[送信頻度] 送信頻度として、次のいずれかのオプションを選択します。

- ◆ **[送信して閉じる]** Message Agent が 1 回の実行で保留中のすべてのメッセージを送信した後で停止するように、レプリケーションの頻度が設定されます。パブリッシャがメッセージを送信する前に毎回 Message Agent を再起動する必要があります。このオプションはリモート・サイト上で Message Agent を実行する場合にのみ有効です。

ほとんどのレプリケーション設定では、統合パブリッシャからリモート・グループにパブリケーションを送信する場合、このオプションは使用されません。

- ◆ **[次の間隔で送信]** このオプションを選択すると、Message Agent の実行を継続し、この統合ユーザに指定の間隔でメッセージが送信されるようにレプリケーション頻度が設定されます。このオプションは統合サイトでもリモート・サイトでも有効です。
- ◆ **[毎日次の時刻に送信]** このオプションを選択すると、Message Agent の実行を継続し、毎日指定時刻にメッセージが送信されるようにレプリケーションの頻度が設定されます。

[サブスクライバ] このデータベースのパブリケーションに対してサブスクリプションを作成するリモート・ユーザの数が表示されます。

[サブスクリプション] データベースのパブリケーションに対するサブスクリプション数が表示されます。

[開始サブスクリプション] このデータベースで開始されたサブスクリプションの数が表示されます。

参照

- ◆ [「SQL Remote のパブリケーションとサブスクリプション」](#) 『SQL Remote』
- ◆ [\[パブリッシャの設定\] ダイアログ](#)
- ◆ [\[統合ユーザの設定\] ダイアログ](#)

[データベース] プロパティ・シート : [プロファイリング設定] タブ

[データベース] プロパティ・シートの [プロファイリング設定] タブには、次の項目があります。

[このデータベースで次のプロファイリング情報を取得し表示する] SQL Anywhere で、ストアド・プロシージャ、関数、イベント、トリガの実行回数をモニタリングする場合は、このオプションを選択します。データベースのプロファイリング情報を使用すると、データベース内でのパフォーマンスを向上させるために微調整できるプロシージャを決定できます。プロファイリング情報は Sybase Central の [プロファイリング] タブに表示されます。

このオプションを選択すると、次のオプションがアクティブになります。

- ◆ **[すべての接続]** このオプションを選択すると、すべての接続のプロファイリングが有効になります。
- ◆ **[次のユーザ ID を持つ接続]** このオプションを選択し、ドロップダウン・リストからユーザ ID を選択すると、プロファイリング情報を取得する特定のユーザ ID を指定できます。
- ◆ **[すぐにクリア]** このオプションを選択すると、データベースについて収集したすべてのプロファイリング・データが削除され、プロファイリングが終了します。このボタンは、プロファイリングが開始されている場合にだけ有効になります。

[次のプロファイリング・ログ・ファイルからのプロファイリング情報を表示する] このオプションを選択すると、ログ・ファイルからプロファイリング情報を表示できます。プロファイリング・ログ・ファイル (拡張子 *.plg* のファイル) の名前とロケーションを指定するか、[参照] をクリッ

クしてファイルを指定します。このオプションは、データベースのプロファイリングが無効になっている場合にだけ有効になります。

[次のプロファイリング・ログ・ファイルのプロファイリング情報を比較のベースラインとして使用する] このオプションを選択すると、収集されるプロファイリング情報、または前のオプションで選択したプロファイリング・ログ・ファイルとの比較の基準として使用する別のプロファイリング・ログ・ファイルを指定できます。このオプションは、[このデータベースで次のプロファイリング情報を取得し表示する]または[次のプロファイリング・ログ・ファイルからのプロファイリング情報を表示する]が選択されている場合にだけ有効になります。

[データベース内に現在あるプロファイリング情報を次のプロファイリング・ログ・ファイルに保存する] このオプションを選択すると、データベース内の現在のプロファイリング情報がプロファイリング・ログ・ファイルに保存されます。拡張子 *.plg* が付いたファイル名とロケーションを指定するか、[参照] をクリックしてファイルを指定します。

[すぐにリセット] データベースについて収集したすべてのプロファイリング・データを削除します。プロファイリングが有効になっている場合、データベースでは、プロシージャ、関数、イベント、トリガに関する新しいプロファイリング情報の収集が即座に開始されます。

参照

- ◆ 「システム・プロシージャを使用したプロシージャ・プロファイリング」 『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』

[DB 領域] プロパティ・シート : [一般] タブ

[DB 領域] プロパティ・シートの [一般] タブには、次の項目があります。

[名前] DB 領域の名前が表示されます。

[タイプ] オブジェクトのタイプが表示されます。

[ファイル] DB 領域が示すデータベース・ファイルの名前が表示されます。新しい領域の場合は、新しいファイル名を入力します。[参照] ボタンをクリックしてファイルの場所を探すこともできます。

[領域を事前に割り付ける] [DB 領域の事前割り付け] ダイアログが表示されます。このダイアログでは、ページを追加することで、DB 領域に記憶領域を事前に割り付けできます。ページを追加すると、バルク・ロードのパフォーマンスが向上します。

参照

- ◆ 「データベース・ファイル用領域の事前割り付け」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』
- ◆ [DB 領域の事前割り付け] ダイアログ

[ディレクトリ・アクセス・サーバ] プロパティ・シート : [一般] タブ

ディレクトリ・アクセス・サーバは、データベース・サーバを実行しているコンピュータのローカル・ファイル構造へのアクセスを可能にするリモート・サーバです。コンピュータのサブディレクトリにアクセスするには、プロキシ・テーブルを使用します。

[ディレクトリ・アクセス・サーバ] プロパティ・シートの [一般] タブには、次の項目があります。

[名前] ディレクトリ・アクセス・サーバの名前が表示されます。

[タイプ] オブジェクトのタイプが表示されます。

[ルート・ディレクトリ] このディレクトリ・アクセス・サーバのルート・ディレクトリのパスが表示されます。このディレクトリ・アクセス・サーバのプロキシ・テーブルを作成するときに、このルート・ディレクトリが基準になります。

[サブディレクトリ] このディレクトリ・アクセス・サーバからアクセス可能なサブディレクトリのレベル数が表示されます。

[ファイル変更] このディレクトリ・アクセス・サーバからファイルの変更が可能であるかどうかが表示されます。

参照

- ◆ 「ディレクトリ・アクセス・サーバの使用」 『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』
- ◆ 「ディレクトリ・アクセス・サーバの作成」 『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』
- ◆ 「ディレクトリ・アクセス・サーバの削除」 『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』
- ◆ 「リモート・データ・アクセスの基本概念」 『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』
- ◆ 「リモート・サーバの使用」 『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』

[ドメイン] プロパティ・シート : [一般] タブ

[ドメイン] プロパティ・シートの [一般] タブには、次の項目があります。

[名前] ドメインの名前が表示されます。

[タイプ] オブジェクトのタイプが表示されます。

[作成者] ドメインを作成して所有するデータベース・ユーザが表示されます。

[ベース・タイプ] ドメインの定義済みデータ型が表示されます。定義済みデータ型にフォーマットがある場合は、組み込みタイプ名の後に示されます。

[NULL 入力可] ドメインに基づくカラムで NULL が許可されるかどうかが表示されます。

[デフォルト値] ドメインのデフォルト値が表示されます。ドメインにデフォルト値がない場合は、何も表示されません。このドメインに基づくカラムはデフォルト値を継承しますが、後で上書きすることもできます。

参照

- ◆ 「ドメイン」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

[ドメイン] プロパティ・シート : [検査制約] タブ

[ドメイン] プロパティ・シートの [検査制約] タブには、次の項目があります。

[このドメインには次の検査制約があります。] ドメインに適用される検査制約が表示されます。検査制約はドメインの作成時に定義されています。

たとえば、次のように入力すると、従業員の勤務開始日が特定の範囲内かどうかを検査できます。

```
CHECK ( StartDate BETWEEN '1983/06/27'  
        AND CURRENT DATE )
```

「[カラムに対する検査制約の使い方](#)」 『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』を参照してください。

参照

- ◆ 「[ドメインの使い方](#)」 『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』
- ◆ 「[制約の選択](#)」 『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』

[イベント] プロパティ・シート : [一般] タブ

[イベント] プロパティ・シートの [一般] タブには、次の項目があります。

[名前] イベントの名前が表示されます。

[タイプ] オブジェクトのタイプが表示されます。

[作成者] イベントを作成して所有しているデータベース・ユーザが表示されます。

[有効化] このオプションを選択すると、スケジュールされた時刻またはトリガ条件が発生したときにイベントが実行されます。

Sybase Central から手動でイベントをトリガするには、イベントを有効にしてください。

[ロケーション] 以下のどのロケーションでイベントが実行されるかが表示されます。

- ◆ **[すべてのデータベース]** すべてのリモート・ロケーションでイベントを実行します。
- ◆ **[統合データベース]** SQL Remote レプリケーションに関連するデータベースでは、統合データベースのみでイベントを実行し、リモート・ロケーションでは実行しません。
- ◆ **[リモート・データベース]** SQL Remote レプリケーションに関連するデータベースでは、リモート・データベースのみでイベントを実行し、統合データベースでは実行しません。

[次のスケジュール時刻] イベントがスケジュールされている場合、スケジュールされている次のイベントの日時が表示されます。

[コメント] イベントの説明を入力します。たとえば、システムにおけるそのイベントの目的を、この領域に記述できます。

参照

- ◆ 「CREATE EVENT 文」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- ◆ 「スケジュールとイベントの使用によるタスクの自動化」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』
- ◆ 「[イベントのトリガ] ダイアログ」 142 ページ

[イベント] プロパティ・シート : [条件] タブ

[イベント] プロパティ・シートの [条件] タブには、次の項目があります。

[次のシステム・イベントが発生した場合、このイベントをトリガ] 環境または条件が一致した場合にイベントを実行します。

- ◆ **[システム・イベント]** イベントをトリガするために発生する必要があるシステム・イベントを選択します。

「システム・イベントの概要」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』 を参照してください。

- ◆ **[および次のトリガ条件が true の場合]** システム・イベントの他に、イベントをトリガするために満たす必要があるトリガ条件を設定します。

「イベントのトリガ条件の定義」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』 を参照してください。

- ◆ **[新規]** [トリガ条件の作成] ダイアログが表示されます。このダイアログでは、イベントの新しいトリガ条件を作成できます。
- ◆ **[編集]** [トリガ条件の編集] ダイアログが表示されます。このダイアログでは、既存のトリガ条件を変更できます。
- ◆ **[削除]** リストからトリガ条件を削除して、イベントがそのトリガ条件に基づいて実行されないようにします。

参照

- ◆ 「CREATE EVENT 文」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- ◆ 「スケジュールとイベントの使用によるタスクの自動化」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』

[外部ログイン] プロパティ・シート : [一般] タブ

[外部ログイン] プロパティ・シートの [一般] タブには、次の項目があります。

[名前] リモート・サーバの外部ログインの場合は、リモート・サーバとデータベース・ユーザの名前が表示されます。ディレクトリ・アクセス・サーバの外部ログインの場合は、ディレクトリ・アクセス・サーバとデータベースの名前が表示されます。

[タイプ] オブジェクトのタイプが表示されます。

[リモート・サーバ] 外部ログインの対象となるリモート・サーバの名前が表示されます。これは、外部ログインがリモート・サーバを対象とする場合にのみ表示されます。

[ディレクトリ・アクセス・サーバ] 外部ログインを使って通信するディレクトリ・アクセス・サーバの名前が表示されます。このフィールドは、外部ログインがディレクトリ・アクセス・サーバを対象とする場合にのみ表示されます。

[ユーザ] 外部ログインの対象データベース・ユーザの名前が表示されます。

[ログイン名] リモート・サーバ上のログイン名が表示されます。これはリモート・サーバへの外部ログインだけに適用されます。

参照

- ◆ 「外部ログインの使用」 『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』
- ◆ 「CREATE EXTERNLOGIN 文」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- ◆ 「ディレクトリ・アクセス・サーバの使用」 『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』

[外部キー] プロパティ・シート : [一般] タブ

[外部キー] プロパティ・シートの [一般] タブには、次の項目があります。

[名前] 外部キーの名前が表示されます。このフィールドで外部キーの名前を編集できます。

[タイプ] オブジェクトのタイプが表示されます。

[ユニーク] 外部キーがユニークであるかどうかが表示されます。

[外部テーブル] 外部キーが適用されるテーブルの名前と所有者が表示されます。

[外部インデックス] 外部キーの適用に使用されるインデックスの名前が表示されます。

[プライマリ制約] 外部キーが参照するプライマリ・キーまたは一意性制約の名前が表示されます。

[プライマリ制約タイプ] 外部キーが参照する制約のタイプが表示されます。これはプライマリ・キーまたは一意性制約のいずれかです。

[プライマリ・テーブル] この外部キーに関連付けられたプライマリ・キーまたは一意性制約を含むテーブルが表示されます。

[プライマリ・インデックス] プライマリ・キーまたは一意性制約の管理に使用されるインデックスの名前が表示されます。

[NULL 入力可] 外部キー・カラムに NULL 値を入力できるかどうかを決定します。このオプションを使用するには、すべての外部キー・カラムの [NULL 入力可] を [はい] に設定してください。

[一致タイプ] 外部キーに選択された一致タイプが表示されます。一致タイプによって、NULL 値が許可されている複数のカラムの外部キーを使用しているときに何を一致とみなすかが決まります。これは外部キーに NULL が許可されている場合にのみ有効です。

使用できる一致タイプを以下に示します。

- ◆ **[単純]** 参照テーブルのローに一致が発生するのは、キーの1つ以上のカラムが NULL の場合、またはすべてのカラム値が参照先テーブルのローにある対応するカラムと一致する場合です。
- ◆ **[完全]** 参照テーブルのローに一致が発生するのは、キーの1つ以上のカラムが NULL の場合、またはすべてのカラム値が参照先テーブルのローにある対応するカラムと一致する場合です。
- ◆ **[該当なし]** 不適用。外部キーに NULL は許可されません。

[更新アクション] 次のいずれかの設定を使用して、ユーザが外部キーの値を更新しようとしたときのテーブルの動作を定義します。

- ◆ **[使用不可]** 対応する外部キーがない場合は、関連するプライマリ・テーブルのプライマリ・キーの値を更新できないようにします。
- ◆ **[値をカスケード]** 関連するプライマリ・キーの新しい値と一致するように、外部キーを更新します。
- ◆ **[値を NULL に設定]** 関連するプライマリ・テーブルの更新されたプライマリ・キーに対応する外部キー値を、すべて NULL に設定します。

このオプションを使用するには、すべての外部キー・カラムの [NULL 入力可] を [はい] に設定してください。

- ◆ **[値をデフォルトに設定]** 更新または削除されたプライマリ・キー値に一致する外部キーの値を、それぞれの外部キー・カラムの DEFAULT 句で指定した値に設定します。このオプションを使用するには、すべての外部キー・カラムにデフォルト値を設定してください。

[削除アクション] 次のいずれかの設定を使用して、ユーザがデータを削除しようとしたときのテーブルの動作を定義します。

- ◆ **[使用不可]** テーブルに対応する外部キーがない場合は、関連するプライマリ・テーブルのプライマリ・キーの値を削除できないようにします。
- ◆ **[値をカスケード]** 関連するプライマリ・テーブルで削除されたプライマリ・キーと一致するローをこのテーブルから削除します。
- ◆ **[値を NULL に設定]** 関連するプライマリ・テーブルで削除されたプライマリ・キーに対応するこのテーブルの外部キー値をすべて NULL に設定します。

このオプションを使用するには、すべての外部キー・カラムの [NULL 入力可] を [はい] に設定してください。

- ◆ **[値をデフォルトに設定]** 更新または削除されたプライマリ・キー値に一致する外部キーの値を、それぞれの外部キー・カラムの DEFAULT 句で指定した値に設定します。このオプションを使用するには、すべての外部キー・カラムにデフォルト値を設定してください。

[コミット時のみチェック] データベースの COMMIT が完了するまで待機してからこの外部キーの整合性をチェックし、wait_for_commit データベース・オプションの設定を上書きするようにします。この設定を変更するには、[変更] をクリックします。

このオプションの詳細については、「[wait_for_commit オプション \[データベース\]](#)」『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』を参照してください。

[変更] [設定の変更] ダイアログが表示されます。ここで、このプライマリ・キーの設定を変更できます。

[コメント] 外部キーの説明を入力します。たとえば、システムにおけるその外部キーの目的を、この領域に記述できます。

参照

- ◆ 「外部キーの管理」 『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』
- ◆ 「データ整合性の確保」 『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』
- ◆ 「[クラスタード・インデックスの設定] ダイアログ」 138 ページ
- ◆ 「[設定の変更] ダイアログ」 119 ページ

[外部キー] プロパティ・シート : [カラム] タブ

[外部キー] プロパティ・シートの [カラム] タブには、次の項目があります。

[カラム] リスト 外部テーブルとプライマリ・テーブルのカラムが表示されます。

- ◆ **[詳細]** [詳細] ダイアログが表示され、選択されたカラムの外部カラムまたはプライマリ・カラムのプロパティの概要が表示されます。

参照

- ◆ 「外部キーの管理」 『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』

[ファンクション] プロパティ・シート : [一般] タブ

ほとんどの場合、プロシージャという語は、ユーザ定義プロシージャとユーザ定義ファンクションの両方を意味します。

[ファンクション] プロパティ・シートの [一般] タブには、次の項目があります。

[名前] ファンクションの名前が表示されます。

[タイプ] オブジェクトのタイプが表示されます。

[所有者] ファンクションを所有するデータベース・ユーザの名前が表示されます。

[構文] 最後に保存されたコードの SQL 構文が表示されます。構文は Watcom-SQL または Transact-SQL のどちらかです。

[コメント] ファンクションの説明を入力します。たとえば、システムにおけるそのファンクションの目的を、この領域に記述できます。

参照

- ◆ 「関数のタイプ」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- ◆ 「CREATE FUNCTION 文」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

[ファンクション] プロパティ・シート : [パラメータ] タブ

[ファンクション] プロパティ・シートの [パラメータ] タブには、次の項目があります。

[パラメータ] リスト ファンクションのパラメータの名前、ID、データ型、パラメータ・タイプ、モードが表示されます。モードの値は次のいずれかです。

- ◆ **[入力]** このパラメータは、ファンクションに値を与える式です。
- ◆ **[出力]** このパラメータは、ファンクションから値を受け取ることがある変数です。
- ◆ **[入力/出力]** このパラメータは、ファンクションに値を与え、ファンクションから新しい値を受け取ることがある変数です。

参照

- ◆ 「[プロシージャ・パラメータの宣言](#)」 『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』
- ◆ 「[プロシージャ、トリガ、バッチの使用](#)」 『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』
- ◆ 「[CREATE FUNCTION 文](#)」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

[ファンクション] プロパティ・シート : [パーミッション] タブ

[ファンクション] プロパティ・シートの [パーミッション] タブには、次の項目があります。

[ユーザ] リスト このファンクションに対するパーミッションを持つユーザがリストされます。リストにユーザを追加する場合は、[付与] をクリックします。ユーザのパーミッションを削除するには、ユーザを選択して、[取り消し] をクリックします。[Shift] キーを押したままでクリックすると複数のユーザを選択できます。

各ユーザの横にある [実行] フィールドをクリックすると、パーミッションの付与または取り消しができます。

- ◆ **[付与]** [パーミッション付与] ダイアログが表示されます。このダイアログでは、他のユーザまたはグループにファンクションのパーミッションを付与できます。
- ◆ **[取り消し]** ユーザまたはグループからファンクションのパーミッションを取り消し、[ユーザ] リストからそのユーザを削除します。

参照

- ◆ 「[プロシージャに対するパーミッションの付与](#)」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』
- ◆ [\[パーミッション付与\] ダイアログ](#)

[グループ] プロパティ・シート : [一般] タブ

[グループ] プロパティ・シートの [一般] タブには、次の項目があります。

[名前] グループの名前が表示されます。

[タイプ] オブジェクトのタイプが表示されます。

[接続可] このオプションを選択すると、グループがデータベースに接続できます。グループが接続を許可されないと、パスワード (指定されている場合) はアカウントから削除されます。グループの接続を許可するように後で変更する場合は、新しいパスワードを指定する必要があります。このオプションをクリアすると、[パスワード] オプションと [パスワードの確認] オプションが無効になります。

ユーザは、ほとんどの場合、接続を許可されます。グループの場合は、このオプションをオフにすると、グループ・アカウントを使用してデータベースに接続することができなくなります。

- ◆ **[パスワード]** グループのパスワードを入力します。パスワードでは大文字と小文字が区別されます。
- ◆ **[パスワードの確認]** [パスワード] テキスト・ボックスに入力したパスワードをもう一度入力して確認します。2つのフィールドの内容は、完全に一致している必要があります。パスワードでは大文字と小文字が区別されます。

[コメント] グループの説明を入力します。たとえば、システムにおけるそのグループの目的を、この領域に記述できます。

参照

- ◆ 「グループの作成」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』
- ◆ 「ユーザ ID とパーミッションの管理」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』

[グループ] プロパティ・シート : [権限] タブ

[グループ] プロパティ・シートの [権限] タブには、次の項目があります。

[DBA] グループに DBA 権限を付与します。DBA 権限を持つグループは、データベースを完全に管理できます。

[リソース] グループに RESOURCE 権限を付与します。RESOURCE 権限を持つグループは、データベース・オブジェクトを作成できます。

[リモート DBA] グループに REMOTE DBA 権限を付与します。Mobile Link クライアント・ユーティリティの dbmsync には REMOTE DBA 権限が必要です。このタイプの権限を持つユーザ ID を使用して、セキュリティ・ホールを作らずにアクションを確実に実行できるように SQL Remote Message Agent を実行する必要があります。

[バックアップ] このオプションを選択すると、グループに BACKUP 権限が付与されます。

[検証] このオプションを選択すると、グループに VALIDATE 権限が付与されます。VALIDATE 権限を持つグループは、データベース、テーブル、インデックス、チェックサムの検証など、さまざまな VALIDATE 文を使用した操作を実行できます。

参照

- ◆ 「グループのパーミッション」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』
- ◆ 「DBA 権限の概要」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』
- ◆ 「RESOURCE 権限の概要」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』

- ◆ 「GRANT REMOTE DBA 文 [Mobile Link] [SQL Remote]」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- ◆ 「BACKUP 権限の概要」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』
- ◆ 「VALIDATE 権限の概要」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』

[グループ] プロパティ・シート : [パーミッション] タブ

[グループ] プロパティ・シートの [パーミッション] タブには、次の項目があります。

[パーミッション] リスト グループがパーミッションを持っているすべてのテーブルの他に、各テーブルを所有するユーザが表示されます。各グループの横に表示されるフィールドをクリックすると、パーミッションの付与または取り消しができます。フィールドをダブルクリックすると (チェック・マークと 2 つの + 記号が表示される)、グループにパーミッションの付与オプションを与えることができます。

[表示] [パーミッション] リストに表示するオブジェクトのタイプを選択します。

- ◆ **[テーブル]** グループがパーミッションを持っているすべてのテーブル。
- ◆ **[ビュー]** グループがパーミッションを持っているすべてのビュー。
- ◆ **[プロシージャとファンクション]** グループがパーミッションを持っているすべてのプロシージャとファンクション。プロシージャとファンクションに対して付与できるのは EXECUTE パーミッションだけです。

参照

- ◆ 「グループのパーミッション」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』
- ◆ 「グループの管理」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』
- ◆ 「テーブルおよびビューのパーミッションの概要」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』
- ◆ 「グループの作成」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』

[インデックス] プロパティ・シート : [一般] タブ

[インデックス] プロパティ・シートの [一般] タブには、次の項目があります。

[名前] インデックスの名前が表示されます。このフィールドでインデックスの名前を編集できます。

[タイプ] オブジェクトのタイプが表示されます。オブジェクトのタイプは、外部キー・インデックス、プライマリ・キー・インデックス、一意性制約インデックス、またはインデックスのいずれかです。

[ユニーク] インデックスの値がユニークである必要があるかどうかを示されます。新しいインデックスを作成すると、ユニークな値が設定されます。

[テーブル] インデックスが関連付けられているテーブルの名前と所有者が表示されます。これはテーブルにインデックスがある場合にのみ表示されます。

[実体化ビュー] インデックスが関連付けられている実体化ビュー (Materialized View) の名前と所有者が表示されます。これは実体化ビュー (Materialized View) にインデックスがある場合にのみ表示されます。

[DB 領域] インデックスが格納されているデータベース・ファイルまたは DB 領域が表示されます。これはベース・テーブルと実体化ビュー (Materialized View) のインデックスだけに適用されます。

[クラスタード] このインデックスがクラスタード・インデックスであるかどうかが表示されます。クラスタード・インデックスは、バージョン 8.0.2 以降の SQL Anywhere データベースでサポートされます。

SQL Anywhere のクラスタード・インデックスには、対応するインデックス内とほぼ同じ順番でテーブル・ローが格納されます。クラスタード・インデックスを使用するとパフォーマンスが向上する可能性があります。これは、各ページのメモリへの読み込み回数が少なくて済むためです。特定のテーブル上のインデックスのうち、クラスタード・インデックスにできるのは1つだけです。

クラスタード・インデックスの詳細については、「[CREATE INDEX 文](#)」『[SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス](#)』を参照してください。

◆ **[すぐにクラスタード・インデックスを設定]** [クラスタード・インデックスの設定] ダイアログが開きます。このダイアログでは、このインデックスをクラスタード・インデックスとして指定できます。

[インデックス・タイプ] テーブルに含まれるインデックスのストア・タイプが表示されます。値は圧縮 B ツリーまたはハッシュ B ツリーのいずれかです。

[コメント] インデックスの説明を入力します。たとえば、システムにおけるそのインデックスの目的を、この領域に記述できます。

参照

- ◆ 「[インデックス](#)」『[SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法](#)』
- ◆ 「[CREATE INDEX 文](#)」『[SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス](#)』

[インデックス] プロパティ・シート : [カラム] タブ

[インデックス] プロパティ・シートの [カラム] タブには、次の項目があります。

[カラム] リスト インデックスのすべてのカラムの他に、その順序 (昇順または降順) が表示されます。順序は、新しいインデックスを作成するときに設定します。

カラムは、0 から始まるユニークな数値の順にソートされます。数値の順序がインデックス内のカラムの相対的な位置を決定します。

◆ **[詳細]** [カラムの詳細] ダイアログが表示され、選択されたカラムのプロパティの概要が表示されます。

参照

- ◆ 「インデックス」 『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』
- ◆ 「インデックスの編集」 『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』
- ◆ 「CREATE INDEX 文」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

[JAR ファイル] プロパティ・シート : [一般] タブ

[JAR ファイル] プロパティ・シートの [一般] タブには、次の項目があります。

[名前] JAR ファイルの名前が表示されます。

[タイプ] オブジェクトのタイプが表示されます。

[作成者] JAR ファイルを作成して所有しているデータベース・ユーザが表示されます。

[作成日付] JAR ファイルが作成された日付が表示されます。

[修正日付] JAR ファイルが最後に変更された日付が表示されます。

[コメント] JAR ファイルの説明を入力します。たとえば、システムにおけるその JAR ファイルの目的を、この領域に記述できます。

[すぐに更新] [JAR ファイルの更新] ダイアログが表示されます。このダイアログでは、JAR ファイルを更新できます。

「クラスと JAR ファイルの更新」 『SQL Anywhere サーバ - プログラミング』を参照してください。

参照

- ◆ 「JAR のインストール」 『SQL Anywhere サーバ - プログラミング』

[Java クラス] プロパティ・シート : [一般] タブ

[Java クラス] プロパティ・シートの [一般] タブには、次の項目があります。

[名前] Java クラスの名前が表示されます。

[タイプ] オブジェクトのタイプが表示されます。

[作成者] Java クラスを作成して所有しているデータベース・ユーザが表示されます。

[JAR ファイル] Java クラスがある JAR ファイルの名前が表示されます。Java クラスは JAR ファイル内に存在する必要はありません。

[作成日付] Java クラスが作成された日付が表示されます。

[修正日付] Java クラスが最後に変更された日付が表示されます。

[コメント] この Java クラスの説明を入力します。たとえば、システムにおけるその Java クラスの目的を、この領域に記述できます。

[すぐに更新] [Java クラスの更新] ダイアログが表示されます。このダイアログでは、Java クラスを更新できます。

「クラスと JAR ファイルの更新」 『SQL Anywhere サーバ - プログラミング』を参照してください。

参照

- ◆ 「Java クラスをデータベースにインストールする」 『SQL Anywhere サーバ - プログラミング』

[ログイン・マッピング] プロパティ・シート : [一般] タブ

[ログイン・マッピング] プロパティ・シートの [一般] タブには、次の項目があります。

[名前] 統合化ログインの名前が表示されます。

[タイプ] オブジェクトのタイプが表示されます。

[データベース・ユーザ] この統合化ログインが対象とするデータベース・ユーザが表示されます。

[コメント] この統合化ログインの説明を入力します。たとえば、システムにおけるその統合化ログインの目的を、この領域に記述できます。

参照

- ◆ 「統合化ログインの使用方法」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』
- ◆ 「GRANT 文」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

[メンテナンス・プラン・レポート] プロパティ・シート : [一般] タブ

[メンテナンス・プラン・レポート] プロパティ・シートの [一般] タブには、次の項目があります。

[名前] メンテナンス・プランの名前が表示されます。

[タイプ] レポートのタイプが表示されます。

[起動時刻] メンテナンス・プランの実行が開始した日時が表示されます。

[完了時刻] メンテナンス・プランの実行が完了した日時が表示されます。

[期間] メンテナンス・プランの実行に要した時間が表示されます。

[成功] メンテナンス・プランが正常に実行されたかどうかを示されます。

[詳細] メンテナンス・プラン全体のテキストが表示されます。

参照

- ◆ 「メンテナンス・プランの作成」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』

[メッセージ・タイプ] プロパティ・シート : [一般] タブ

[メッセージ・タイプ] プロパティ・シートの [一般] タブには、次の項目があります。

[名前] メッセージ・タイプの名前が表示されます。

[タイプ] オブジェクトのタイプが表示されます。

[パブリッシャ・アドレス] パブリッシャのアドレスを入力します。各リモート・データベースは、このアドレスの統合データベースにレプリケーション・メッセージを送り返します。

[コメント] メッセージ・タイプの説明を入力します。たとえば、システムにおけるそのメッセージ・タイプの目的を、この領域に記述できます。

参照

- ◆ 「メッセージ・タイプの使用」 『SQL Remote』

[メッセージ・タイプ] プロパティ・シート : [SQL Remote ユーザ] タブ

[メッセージ・タイプ] プロパティ・シートの [SQL Remote ユーザ] タブには、次の項目があります。

[リモート・ユーザ] リスト このメッセージ・タイプを現在使用しているすべてのリモート・ユーザの名前、アドレス、コメントをリストします。

[プロパティ] [リモート・ユーザ] リストで選択したリモート・ユーザのプロパティ・シートが表示されます。

参照

- ◆ 「メッセージ・タイプの使用」 『SQL Remote』

[Mobile Link ユーザ] プロパティ・シート : [一般] タブ

[Mobile Link ユーザ] プロパティ・シートの [一般] タブには、次の項目があります。

[名前] Mobile Link ユーザの名前が表示されます。

[タイプ] オブジェクトのタイプが表示されます。

参照

- ◆ 「Mobile Link ユーザの概要」 『Mobile Link - クライアント管理』

[Mobile Link ユーザ] プロパティ・シート : [接続] タブ

[Mobile Link ユーザ] プロパティ・シートの [接続] タブには、次の項目があります。

[プロトコル] 同期に使用する通信プロトコルを選択します。デフォルトでは TCP/IP が使用されます。

[接続] タブで指定できる設定は、使用する通信プロトコルによって決まります。buffer_size などの追加パラメータは、[詳細] フィールドで設定できます。

各プロトコルでサポートされているパラメータの完全なリストについては、次の項を参照してください。

- ◆ 「CREATE SYNCHRONIZATION USER 文 [Mobile Link]」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- ◆ 「CommunicationType (ctp) 拡張オプション」 『Mobile Link - クライアント管理』
- ◆ [TCP/IP] このオプションを選択すると、同期に TCP/IP プロトコルを使用します。バージョン 8.0.x と 9.0.x では、[TCP/IP] を選択してから [Certicom セキュリティを有効にする] を選択することは、[TLS] を選択することと同じです。
- ◆ [TLS] このオプションを選択すると、同期に TLS (トランスポート・レイヤ・セキュリティ) が使用されます。TLS は、楕円曲線暗号化 (以前の Certicom) と RSA 暗号化の両方をサポートしています。このオプションは、バージョン 10 以降でのみ使用できます。
- ◆ [HTTP] このオプションを選択すると、同期に HTTP プロトコルを使用します。
- ◆ [HTTPS] このオプションを選択すると、同期に HTTPS プロトコルを使用します。HTTPS は、楕円曲線暗号化 (以前の Certicom) と RSA 暗号化の両方をサポートしています。
- ◆ [HTTPS FIPS] このオプションを選択すると、同期に HTTPS プロトコル、暗号化に FIPS 認定のアルゴリズムが使用されます。このオプションは、バージョン 8.0.x と 9.0.x でのみ使用できます。バージョン 10 では、HTTPS プロトコルを選択し、[セキュリティ] に [FIPS 認定] オプションを選択することと同じです。
- ◆ [ActiveSync] このオプションを選択すると、ActiveSync を使用して ActiveSync 用 Mobile Link プロバイダとデータを交換します。このプロバイダは、コンピュータに常駐しています。ActiveSync パラメータでは、ActiveSync 用 Mobile Link プロバイダと Mobile Link サーバ間の通信を記述します。このオプションは、バージョン 8.0.x と 9.0.x でのみ使用できます。

「ActiveSync プロバイダ・インストール・ユーティリティ [mlasinst]」 『Mobile Link - クライアント管理』を参照してください。

[ホスト] Mobile Link サーバを実行するコンピュータの IP 番号またはホスト名です。デフォルト値は localhost です。Mobile Link サーバがクライアントと同じコンピュータで稼働している場合は、localhost を使用できます。

Windows CE では、デフォルト値はレジストリ・フォルダ *Comm\Tcpip\Hosts\ppp_peer* の *ipaddr* の値です。このため、Windows CE デバイスは、このデバイスのクレードルが接続されているコンピュータで実行されている Mobile Link サーバに接続できます。

Palm Computing Platform の場合は、localhost のデフォルト値がデバイスを指します。ホスト名や IP アドレスを明示的に指定することをおすすめします。

- ◆ **[ポート]** Mobile Link サーバは特定のポートを介して通信します。デフォルトのポート番号は、TCP/IP では **2439**、HTTP では **80**、HTTPS では **443** です。異なる値を選択する場合、指定したポートで受信を行うように Mobile Link サーバを設定してください。

[プロキシ・ホスト] プロキシ・サーバのホスト名または IP アドレスを入力します。デフォルト値は **localhost** です。このオプションは、HTTP 同期と HTTPS 同期でのみ使用できます。

- ◆ **[プロキシ・ポート]** プロキシ・サーバのポート番号を入力します。デフォルト値は、HTTP の場合は **80**、HTTPS の場合は **443** です。このオプションは、HTTP 同期と HTTPS 同期でのみ使用できます。

[URL サフィックス] 各 HTTP 要求の 1 行目の URL に追加するサフィックスを入力します。デフォルト値は **MobiLink** です。このオプションは、HTTP 同期と HTTPS 同期でのみ使用できます。

プロキシ・サーバを通じて同期するときは、Mobile Link サーバを見つけるためにサフィックスが必要な場合があります。

- ◆ **[HTTP バージョン]** 同期に使用する HTTP のバージョンを指定する値を入力します。1.0 または 1.1 を選択できます。デフォルト値は **1.1** です。

[自動接続] 以下のオプションを使用すると、Windows または Windows CE で稼働している Mobile Link クライアントがダイヤルアップ・ネットワーク接続を介して接続できるようになります。

スケジュールを使用している場合は、リモート・デバイスを自動的に同期できます。スケジュールを使用していない場合は、接続を手動でダイヤルすることなく **dbmlsync** を実行できます。

「同期のスケジュール」『[Mobile Link - クライアント管理](#)』を参照してください。

- ◆ **[ネットワーク名]** ネットワーク名を指定して、Mobile Link の自動ダイヤル機能を使用できるようにします。これによって、手動でダイヤルすることなく Windows または Windows CE から接続できます。この名前は、[設定]-[接続]-[接続] (Windows CE) または [ネットワーク接続] (Windows) のドロップダウン・リストで指定したネットワーク名にしてください。
- ◆ **[ネットワーク接続のタイムアウト]** ネットワーク名を指定するときに、ダイヤルアップに失敗した後のタイムアウトをオプションで指定できます。この機能が適用されるのは、Windows CE だけです (Windows の場合は、接続プロファイルを構成することでこの機能を制御できます)。デフォルトは **120** 秒です。
- ◆ **[開いたままにする]** ネットワーク名を指定するときに、同期の完了後に接続を開いたままにする (1) か、接続を閉じる (0) かをオプションで指定できます。デフォルトでは、接続は閉じられます。

[セキュリティ] これらのオプションでは、暗号パッケージ・プログラムを使用して、この接続を介するすべての通信を暗号化できます。楕円曲線暗号化と RSA 暗号化の両方に対して、サーバの認証に使用する証明書についての情報を以下のフィールドに指定できます。

[Certicom セキュリティを有効にする] このオプションを選択すると、この接続を介するすべての通信が暗号化されます。楕円曲線暗号化 (ECC) または RSA 暗号化を使用できます。デフォルトでは、楕円曲線が使用されます。このオプションは、バージョン 8.0.x と 9.0.x でのみ使用できます。このオプションと TCP/IP プロトコルを選択することは、バージョン 10 で TLS プロトコルを選択することと同じです。

別途ライセンスが必要な必須コンポーネント

ECC 暗号化と FIPS 承認の暗号化には、別途ライセンスが必要です。強力な暗号化テクノロジーはすべて、輸出規制対象品目です。

「別途ライセンスが必要なコンポーネント」 『SQL Anywhere 10 - 紹介』を参照してください。

「トランスポート・レイヤ・セキュリティ」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』を参照してください。

- ◆ **[楕円曲線暗号]** 楕円曲線暗号化を使用して、接続を暗号化します。バージョン 10 のデータベースでは、この暗号化を使用して TCP/IP 上の TLS 接続と HTTPS 接続を暗号化できます。バージョン 8.0.x と 9.0.x のデータベースでは、TCP/IP 接続を暗号化できます。この暗号化は、以前は Certicom 暗号化と呼ばれていました。
- ◆ **[RSA]** RSA 暗号化を使用して、通信を暗号化します。バージョン 10 のデータベースでは、この暗号化を使用して TCP/IP 上の TLS 接続と HTTPS 接続を暗号化できます。バージョン 8.0x と 9.0x のデータベースでは、TCP/IP 接続を暗号化できます。バージョン 8.0.x と 9.0.x のデータベースでは、[HTTPS] を選択するとこの暗号化が自動的に選択されます。
- ◆ **[FIPS 認定]** FIPS 認定の RSA 暗号化を使用して、通信を暗号化します。バージョン 10 のデータベースでは、この暗号化を使用して TCP/IP 上の TLS と HTTPS 接続を暗号化できます。バージョン 9.0.x のデータベースでは、TCP/IP 接続を暗号化できます。バージョン 9.0x のデータベースでは、[HTTPS FIPS] を選択するとこの暗号化が自動的に選択されます。バージョン 8.0.x のデータベースでは、この暗号化はサポートされていません。
- ◆ **[証明書に記載される会社]** 証明書を発行した認証局の名前を入力します。サーバ側とクライアント側の値を一致させる必要があります。
- ◆ **[証明書に記載される部署]** 証明書に記載される部署を入力します。これは組織単位とも呼ばれます。サーバ側とクライアント側の値を一致させる必要があります。
- ◆ **[証明書に記載される名前]** 証明書の通称を入力します。サーバ側とクライアント側の値を一致させる必要があります。
- ◆ **[信頼できる証明書]** クライアントがサーバを認証するために使用する証明書ファイルの名前を入力します。

[詳細] このフィールドには、**パラメータ = 値**の形式で追加の接続パラメータを入力します。複数のパラメータを入力する場合はセミコロンで区切ります。たとえば、内容が固定長であるメッセージの本文の最大サイズを設定し、同期のすべての HTTP 要求に同じ TCP/IP 接続を使用するようクライアントに指示するには、[詳細] フィールドに次のように入力します。

```
buffer_size=58000;persistent=TRUE
```

このフィールドに入力できる接続パラメータの完全なリストについては、「CREATE SYNCHRONIZATION USER 文 [Mobile Link]」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』を参照してください。

注意

同期の接続パラメータを設定する方法は複数あります。

競合するオプションを dbmsync で解決する方法の詳細については、「優先順位」『Mobile Link - クライアント管理』を参照してください。

[Mobile Link ユーザ] プロパティ・シートの [接続] タブの 1 つのフィールドが空白の場合、Mobile Link ユーザは同期サブスクリプションの接続パラメータ設定を継承します。パブリケーションの設定を上書きする場合にのみ、Mobile Link の [ユーザ] プロパティ・シートの [接続] タブで接続パラメータを指定してください。

参照

- ◆ 「CREATE SYNCHRONIZATION USER 文 [Mobile Link]」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- ◆ 「Mobile Link SQL Anywhere クライアントの拡張オプション」 『Mobile Link - クライアント管理』
- ◆ 「-eu オプション」 『Mobile Link - クライアント管理』
- ◆ 「CommunicationAddress (adr) 拡張オプション」 『Mobile Link - クライアント管理』

[Mobile Link ユーザ] プロパティ・シート : [拡張オプション] タブ

[Mobile Link ユーザ] プロパティ・シートの [拡張オプション] タブには、次の項目があります。

[この Mobile Link ユーザには次の拡張オプションがあります。] Mobile Link ユーザに対して設定されている拡張オプションとその値がリストされます。Mobile Link ユーザの値を設定するには、オプション名の横にある [値] フィールドをクリックします。

同期で使用できるすべての拡張オプションを次の表に示します。

これらのオプションの詳細については、「Mobile Link SQL Anywhere クライアントの拡張オプション」『Mobile Link - クライアント管理』を参照してください。

拡張オプション	デフォルト	説明
「ConflictRetries (cr) 拡張オプション」 『Mobile Link - クライアント管理』	-1 (無限に継続)	競合のためにダウンロードが失敗した場合のリトライの回数を指定します。
「ContinueDownload (cd) 拡張オプション」 『Mobile Link - クライアント管理』	OFF	再起動可能なダウンロードを指定します。
「DisablePolling (p) 拡張オプション」 『Mobile Link - クライアント管理』	OFF	ログスキャンの自動ポーリングを無効にします。
「DownloadBufferSize (dbs) 拡張オプション」 『Mobile Link - クライアント管理』	Windows CE では 32 K、その他のオペレーティング・システムでは 1 M。	ダウンロード・バッファのサイズを指定します。 デフォルトでは、単位としてバイトが使用されます。キロバイトまたはメガバイトの単位を指定するには、それぞれサフィックス k、m を使用します。

拡張オプション	デフォルト	説明
「DownloadOnly (ds) 拡張オプション」 『Mobile Link - クライアント管理』	OFF	同期がダウンロード専用であることを指定します。
「DownloadReadSize (drs) 拡張オプション」 『Mobile Link - クライアント管理』	32 K	再起動可能なダウンロードについて、通信障害の後に再送する必要があるデータの最大値を指定します。
「ErrorLogSendLimit (el) 拡張オプション」 『Mobile Link - クライアント管理』	32 K	同期時に dbmlsync から Mobile Link サーバに送信するリモート・ログ・ファイルのサイズを指定します。 デフォルトでは、単位としてバイトが使用されます。キロバイトまたはメガバイトの単位を指定するには、それぞれサフィックス k 、 m を使用します。dbmlsync の出力ログ・メッセージを送信しない場合は、この拡張オプションを値 0 に設定する必要があります。
「FireTriggers (ft) 拡張オプション」 『Mobile Link - クライアント管理』	ON	ダウンロードが適用されたときにリモート・データベースでトリガが起動されるように指定します。
「HoverRescanThreshold (hrt) 拡張オプション」 『Mobile Link - クライアント管理』	1 M	スケジュールを使用している場合、再スキャンの実行までに累積可能な廃棄メモリ量を制限します。 デフォルトでは、単位としてバイトが使用されます。キロバイトまたはメガバイトの単位を指定するには、それぞれサフィックス k 、 m を使用します。
「IgnoreHookErrors (eh) 拡張オプション」 『Mobile Link - クライアント管理』	OFF	フック関数内で発生したエラーを無視するように指定します。
「IgnoreScheduling (isc) 拡張オプション」 『Mobile Link - クライアント管理』	OFF	スケジュール設定を無視するように指定します。
「Increment (inc) 拡張オプション」 『Mobile Link - クライアント管理』	(無限)	インクリメンタル・アップロードのサイズを制御します。 デフォルトでは、単位としてバイトが使用されます。キロバイトまたはメガバイトの単位を指定するには、それぞれサフィックス k 、 m を使用します。

拡張オプション	デフォルト	説明
「LockTables (lt) 拡張オプション」 『Mobile Link - クライアント管理』	ON	アーティクル (同期対象パブリケーション内のテーブルまたはテーブルの一部) をロックしてから同期を実行するように指定します。
「Memory (mem) 拡張オプション」 『Mobile Link - クライアント管理』	1 M	キャッシュ・サイズを指定します。 デフォルトでは、単位としてバイトが使用されます。キロバイトまたはメガバイトの単位を指定するには、それぞれサフィックス k、m を使用します。
「MirrorLogDirectory (mld) 拡張オプション」 『Mobile Link - クライアント管理』	(なし)	古いミラー・ログ・ファイルを削除できるようにその場所を指定します。
「MobiLinkPwd (mp) 拡張オプション」 『Mobile Link - クライアント管理』	NULL	Mobile Link パスワードを指定します。パスワードでは大文字と小文字が区別されます。
「NewMobiLinkPwd (mn) 拡張オプション」 『Mobile Link - クライアント管理』	NULL	新しい Mobile Link パスワードを指定します。パスワードでは大文字と小文字が区別されます。
「NoSyncOnStartup (nss) 拡張オプション」 『Mobile Link - クライアント管理』	NULL	dbmsync が起動時に同期するのを防ぎます。このオプションを指定しない場合は、スケジューリング・オプションにより、dbmsync が起動時に同期されます。
「OfflineDirectory (dir) 拡張オプション」 『Mobile Link - クライアント管理』	(なし)	オフライン・トランザクションのログを含むパスを指定します。
「PollingPeriod (pp) 拡張オプション」 『Mobile Link - クライアント管理』	1 分	ログスキャンのポーリング期間を指定します。 デフォルトでは、単位として分が使用されます。秒、分、時間、日の各単位を指定するには、それぞれサフィックス s、m、h、d を使用します。
「Schedule (sch) 拡張オプション」 『Mobile Link - クライアント管理』	スケジュールなし	同期のスケジュールを指定します。
「ScriptVersion (sv) 拡張オプション」 『Mobile Link - クライアント管理』	default	スクリプト・バージョンを指定します。
「SendColumnNames (scn) 拡張オプション」 『Mobile Link - クライアント管理』	OFF	アップロード時にカラム名が送信されるように指定します。

拡張オプション	デフォルト	説明
「SendDownloadACK (sa) 拡張オプション」 『Mobile Link - クライアント管理』	OFF	クライアントからサーバにダウンロード確認が送信されるように指定します。
「SendTriggers (st) 拡張オプション」 『Mobile Link - クライアント管理』	OFF	アップロード時にトリガの動作が送信されるように指定します。
「TableOrder (tor) 拡張オプション」 『Mobile Link - クライアント管理』	(なし)	アップロード・ストリームでのテーブルの順序を指定します。
「TableOrderChecking (toc) 拡張オプション」 『Mobile Link - クライアント管理』	ON	外部キーを持つテーブルの前に別のテーブルがアップロードされないように、dbmlsync でチェックする必要があるかどうかを指定します。このオプションは、TableOrder を指定する場合に使用します。
「UploadOnly (uo) 拡張オプション」 『Mobile Link - クライアント管理』	OFF	同期がアップロードだけを含むように指定します。
「Verbose (v) 拡張オプション」 『Mobile Link - クライアント管理』	OFF	完全冗長を指定します。 このオプションは dbmlsync -v+ と同じです。
「VerboseHooks (vs) 拡張オプション」 『Mobile Link - クライアント管理』	OFF	フック・スクリプトに関するメッセージのログを取るように指定します。 このオプションは dbmlsync -vs と同じです。
「VerboseMin (vm) 拡張オプション」 『Mobile Link - クライアント管理』	OFF	少量の情報のログを取るように指定します。 このオプションは dbmlsync -v と同じです。
「VerboseOptions (vo) 拡張オプション」 『Mobile Link - クライアント管理』	OFF	指定したコマンド・ライン・オプション (拡張オプションを含む) に関する情報のログを取るように指定します。 このオプションは dbmlsync -vo と同じです。
「VerboseRowCounts (vn) 拡張オプション」 『Mobile Link - クライアント管理』	OFF	アップロードおよびダウンロードされるローの数のログを取るように指定します。 このオプションは dbmlsync -vn と同じです。

拡張オプション	デフォルト	説明
「VerboseRowValues (vr) 拡張オプション」 『Mobile Link - クライアント管理』	OFF	アップロードおよびダウンロードされるローの値のログを取るよう指定します。 このオプションは dbmsync -vr と同じです。
「VerboseUpload (vu) 拡張オプション」 『Mobile Link - クライアント管理』	OFF	アップロード・ストリームに関する情報のログを取るよう指定します。 このオプションは dbmsync -vu と同じです。

注意

同期の接続パラメータを設定する方法は複数あります。

競合するオプションを dbmsync で解決する方法の詳細については、「優先順位」 『Mobile Link - クライアント管理』 を参照してください。

[パラメータ] プロパティ・シート : [一般] タブ

[パラメータ] プロパティ・シートの [一般] タブには、次の項目があります。

[名前] 選択されているユーザの名前が表示されます。

[タイプ] オブジェクトのタイプが表示されます。

[プロシージャ] パラメータが属するプロシージャの名前が表示されます。また、カッコ内にそのプロシージャの所有者の名前が表示されます。

[データ型] パラメータのデータ型が表示されます。

有効なデータ型のリストについては、「SQL データ型」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』 を参照してください。

[パラメータ・タイプ] パラメータのタイプが表示されます。パラメータのタイプは次のいずれかです。

- ◆ **[変数]** 通常のプロシージャ・パラメータ。
- ◆ **[結果]** プロシージャによって返された結果セット内の特定の列。
- ◆ **[戻り値]** 戻り値。このパラメータ・タイプが使えるのは、関数の場合だけです。
- ◆ **[SQLSTATE]** 特殊な SQLSTATE 出力パラメータ。このパラメータは、プロシージャ終了時に SQLSTATE 値を出力する OUT パラメータです。

SQLSTATE パラメータの詳細については、「CREATE PROCEDURE 文」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』 を参照してください。

- ◆ **[SQLCODE]** 特殊な SQLCODE 出力パラメータ。このパラメータは、プロシージャ終了時に SQLCODE 値を出力する OUT パラメータです。

SQLCODE パラメータの詳細については、「[CREATE PROCEDURE 文](#)」『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』を参照してください。

[モード] パラメータのモードが表示されます。モードの値は次のいずれかです。

- ◆ **[入力]** このパラメータは、ファンクションに値を与える式です。
- ◆ **[出力]** このパラメータは、ファンクションから値を受け取ることがある変数です。
- ◆ **[入力/出力]** このパラメータは、ファンクションに値を与え、ファンクションから新しい値を受け取ることがある変数です。

参照

- ◆ 「[CREATE FUNCTION 文](#)」『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- ◆ 「[CREATE PROCEDURE 文](#)」『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

[プライマリ・キー] プロパティ・シート : [一般] タブ

[プライマリ・キー] プロパティ・シートの [一般] タブには、次の項目があります。

[名前] プライマリ・キーの名前が表示されます。このフィールドでプライマリ・キー名を編集できます。

[タイプ] オブジェクトのタイプが表示されます。

[テーブル] プライマリ・キーが適用されるテーブルの名前と所有者が表示されます。

[インデックス] プライマリ・キー制約の適用に使用されるインデックスの名前が表示されます。

[コメント] プライマリ・キーの説明を入力します。

参照

- ◆ 「[CREATE TABLE 文](#)」『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- ◆ 「[プライマリ・キーの管理 \(Sybase Central の場合\)](#)」『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』

[プライマリ・キー] プロパティ・シート : [カラム] タブ

[プライマリ・キー] プロパティ・シートの [カラム] タブには、次の項目があります。

[名前] カラムの名前が表示されます。

[ID] 各カラムの ID が表示されます。

[データ型] 選択されているカラムのデータ型が表示されます。

[コメント] 選択されているカラムにコメントが関連付けられている場合は、そのコメントが表示されます。

[詳細] [カラムの詳細] ダイアログが表示され、選択したカラムのプロパティの一覧が表示されます。

[プロシージャ] プロパティ・シート : [一般] タブ

[プロシージャ] プロパティ・シートの [一般] タブには、次の項目があります。

[名前] プロシージャの名前が表示されます。

[タイプ] オブジェクトのタイプが表示されます。

[所有者] プロシージャを所有するデータベース・ユーザの名前が表示されます。

[構文] 最後に保存されたコードの SQL 構文が表示されます。構文は Watcom-SQL または Transact-SQL のどちらかです。

[コメント] プロシージャの説明を入力します。たとえば、システムにおけるそのプロシージャの目的を、この領域に記述できます。

参照

- ◆ 「CREATE PROCEDURE 文」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

[プロシージャ] プロパティ・シート : [パラメータ] タブ

[プロシージャ] プロパティ・シートの [パラメータ] タブには、次の項目があります。

[パラメータ] リスト プロシージャのパラメータの名前、ID、データ型、パラメータ・タイプ、モードが表示されます。モードの値は次のいずれかです。

- ◆ **[入力]** このパラメータは、プロシージャに値を与える式です。
- ◆ **[出力]** このパラメータは、プロシージャから値を受け取ることがある変数です。
- ◆ **[入力/出力]** パラメータはプロシージャに値を与え、プロシージャから新しい値を受け取ることがある変数です。

参照

- ◆ 「プロシージャ・パラメータの宣言」 『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』
- ◆ 「プロシージャ、トリガ、バッチの使用」 『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』
- ◆ 「CREATE PROCEDURE 文」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

[プロシージャ] プロパティ・シート : [パーミッション] タブ

[プロシージャ] プロパティ・シートの [パーミッション] タブには、次の項目があります。

[ユーザ] リスト このプロシージャに対するパーミッションを持つユーザがリストされます。リストにユーザを追加する場合は、[付与] をクリックします。ユーザのパーミッションを削除する

には、ユーザを選択して、[取り消し] をクリックします。[Shift] キーを押しながらクリックすると、複数のユーザを選択できます。

各ユーザの横にある [実行] フィールドをクリックすると、パーミッションの付与または取り消しができます。

- ◆ **[付与]** [パーミッション付与] ダイアログが表示されます。このダイアログでは、他のユーザまたはグループにプロシージャのパーミッションを付与できます。
- ◆ **[取り消し]** ユーザまたはグループからプロシージャのパーミッションを取り消し、[ユーザ] リストからそのユーザを削除します。

参照

- ◆ 「[プロシージャに対するパーミッションの付与](#)」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』
- ◆ 「[CREATE PROCEDURE 文](#)」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

[プロキシ・テーブル] プロパティ・シート : [一般] タブ

[プロキシ・テーブル] プロパティ・シートの [一般] タブには、次の項目があります。

[名前] プロキシ・テーブルの名前が表示されます。プロキシ・テーブルの名前は変更できません。

[タイプ] オブジェクトのタイプが表示されます。

[所有者] プロキシ・テーブルを所有するデータベース・ユーザの名前が表示されます。

[リモート・ロケーション] リモート・テーブルがあるリモート・サーバの名前、リモート・データベース、リモート・テーブルを所有するリモート・データベース・ユーザ、プロキシ・テーブルの基になっているリモート・テーブルの名前が表示されます。これは、リモート・サーバ用のプロキシ・テーブルだけに適用されます。

[ディレクトリ・アクセス・サーバ] プロキシ・テーブルの基になっているディレクトリ・アクセス・サーバの名前が表示されます。これは、ディレクトリ・アクセス・サーバ用のプロキシ・テーブルだけに適用されます。

[サブディレクトリ] ディレクトリ・アクセス・サーバのルート・ディレクトリのサブディレクトリが表示されます。プロキシ・テーブルに対してクエリを実行すると、このサブディレクトリ内のファイルとディレクトリだけが表示されます。

[コメント] プロキシ・テーブルの説明を入力します。たとえば、システムにおけるそのプロキシ・テーブルの目的を、この領域に記述できます。

参照

- ◆ 「[プロキシ・テーブルの編集](#)」 『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』
- ◆ 「[CREATE EXISTING TABLE 文](#)」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

[プロキシ・テーブル] プロパティ・シート : [カラム] タブ

[プロキシ・テーブル] プロパティ・シートの [カラム] タブには、次の項目があります。

[カラム] リスト プロキシ・テーブルのすべてのカラムの他に、その型とコメントがリストされます。カラムをダブルクリックすると、[カラムの詳細] ダイアログが表示されます。

[詳細] [カラムの詳細] ダイアログが表示され、選択したカラムのプロパティの一覧が表示されます。

参照

- ◆ 「プロキシ・テーブルの編集」 『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』

[プロキシ・テーブル] プロパティ・シート : [パーミッション] タブ

[プロキシ・テーブル] プロパティ・シートの [パーミッション] タブには、次の項目があります。

[ユーザ] リスト プロキシ・テーブルに対するパーミッションを持つユーザがリストされます。リストにユーザを追加する場合は、[付与] をクリックします。ユーザのパーミッションを削除するには、ユーザを選択して、[取り消し] をクリックします。[Shift] キーを押したままでクリックすると複数のユーザを選択できます。

パーミッションの付与または取り消しを行うには、各ユーザの横にあるフィールドをクリックします。ダブルクリックすると (チェック・マークと 2 つの + 記号が表示され)、ユーザに付与オプションが与えられます。

- ◆ **[付与]** [パーミッション付与] ダイアログが表示されます。このダイアログでは、他のユーザまたはグループにプロキシ・テーブルのパーミッションを付与できます。
- ◆ **[取り消し]** ユーザまたはグループからプロキシ・テーブルのパーミッションを取り消し、[ユーザ] リストからそのユーザを削除します。

[選択] このオプションを有効にするには、[ユーザ] リストからユーザを選択します。ユーザの SELECT パーミッションが、すべてのカラムまたはカラムのサブセットのいずれに適用されるかが表示されます。[変更] をクリックすると、[カラムのパーミッション] ダイアログが表示されます。このダイアログでは、カラムのサブセットに対する SELECT パーミッションを付与できます。

[更新] このオプションを有効にするには、[ユーザ] リストからユーザを選択します。ユーザの UPDATE パーミッションが、すべてのカラムに適用されるか、またはカラムのサブセットに適用されるかが表示されます。[変更] をクリックすると、[カラムのパーミッション] ダイアログが表示されます。このダイアログでは、カラムのサブセットに対する UPDATE パーミッションを付与できます。

[参照] このオプションを有効にするには、[ユーザ] リストからユーザを選択します。ユーザの REFERENCES パーミッションが、すべてのカラムまたはカラムのサブセットのいずれに適用されるかが表示されます。[変更] をクリックすると、[カラムのパーミッション] ダイアログが表示されます。このダイアログでは、カラムのサブセットに対する REFERENCES パーミッションを付与できます。

参照

- ◆ 「[プロキシ・テーブルの編集](#)」 『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』

[プロキシ・テーブル] プロパティ・シート : [その他] タブ

[プロキシ・テーブル] プロパティ・シートの [その他] タブには、次の項目があります。

[最大テーブル幅] プロキシ・テーブルの各ローに必要なバイト数が表示されます。この数字は、文字列カラムでは長さ、数値カラムでは精度、その他すべてのデータ型では格納のためのバイト数から計算されます。long binary カラムまたは long varchar カラムの幅の数値は取得できません。プロキシ・テーブルに long binary カラムまたは long varchar カラムがある場合は、ローの幅を概算して取得します。

[ローの数] テーブルのローの概数を示します。このオプションはプロキシ・テーブルでは使用できません。

- ◆ **[計算]** 正確なローの数が計算されます。このボタンはプロキシ・テーブルに対しては有効になりません。

参照

- ◆ 「[プロキシ・テーブルの編集](#)」 『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』

[パブリケーション] プロパティ・シート : [一般] タブ

[パブリケーション] プロパティ・シートの [一般] タブには、次の項目があります。

[名前] パブリケーションの名前が表示されます。このフィールドでパブリケーションの名前を変更できます。

[タイプ] オブジェクトのタイプが表示されます。

[所有者] パブリケーションを所有するデータベース・ユーザの名前が表示されます。

[同期タイプ] パブリケーションのタイプが表示されます。タイプは次のいずれかです。

- ◆ **[ログ・スキャン]** Mobile Link と SQL Remote と互換性がある標準のパブリケーションです。
- ◆ **[スクリプト化されたアップロード]** ストアド・プロシージャを使用してアップロードを定義するパブリケーションです。このタイプのパブリケーションは Mobile Link だけと互換性があります。
- ◆ **[ダウンロードのみ]** リモート・データベースにデータをダウンロードし、データのアップロードは行わないパブリケーションです。ダウンロード専用のパブリケーションでは、クライアントのトランザクション・ログを使用しません。このタイプのパブリケーションは Mobile Link だけと互換性があります。

[コメント] パブリケーションの説明を入力します。たとえば、システムにおけるそのパブリケーションの目的を、この領域に記述できます。

参照

- ◆ 「CREATE PUBLICATION 文 [Mobile Link] [SQL Remote]」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

[パブリケーション] プロパティ・シート : [テーブル] タブ

[テーブル] タブを使用すると、テーブルを選択して、クライアント・データベースに入るアーティクルのリストに追加できます。

[パブリケーション] プロパティ・シートの [テーブル] タブには、次の項目があります。

[使用可能なテーブル] リスト 現在接続しているデータベース内のすべてのベース・テーブルがリストされます。[選択したテーブル] リストにテーブルを追加するには、[使用可能なテーブル] リストでテーブルを選択してから、[追加] をクリックします。

[選択したテーブル] リスト クライアント・データベースのパブリケーションに入れるすべてのテーブルがリストされます。[選択したテーブル] リストからテーブルを削除する場合は、テーブルを選択して [削除] をクリックします。

- ◆ **[追加]** [使用可能なテーブル] リストで選択したテーブルを [選択したテーブル] リストに追加すると、そのテーブルがパブリケーションに入ります。
- ◆ **[削除]** [選択したテーブル] リストから選択したテーブルを削除すると、そのテーブルはパブリケーションから除外されます。

[パブリケーション] プロパティ・シート : [カラム] タブ

[カラム] タブを使用すると、テーブルのカラムを選択して、クライアント・データベースに入るアーティクルのリストに追加できます。

[パブリケーション] プロパティ・シートの [カラム] タブには、次の項目があります。

[使用可能なカラム] リスト [テーブル] タブで選択したテーブルとそのカラムがリストされます。リストのテーブルを展開すると、そのカラムが表示されます。[選択したカラム] リストにカラムを追加するには、[使用可能なカラム] リストでカラムを選択してから、[追加] をクリックします。

[選択したカラム] リスト パブリケーションに入れるすべてのカラムがリストされます。[選択したカラム] リストからカラムを削除する場合は、カラムを選択して [削除] をクリックします。

- ◆ **[追加]** [使用可能なカラム] リストで選択したカラムを [選択したカラム] リストに追加すると、そのカラムはパブリケーションに入ります。
- ◆ **[削除]** [選択したカラム] リストからカラムを削除すると、そのカラムはパブリケーションから除外されます。

[パブリケーション] プロパティ・シート : [WHERE 句] タブ

Mobile Link と SQL Remote のパブリケーション用に定義されたアークティクルでは、WHERE 句を使うことによって、アークティクル内にテーブルのローのサブセットが含まれるように定義できます。Ultra Light アプリケーションでは、WHERE 句を指定することでロー・サブセットを使用できます。ただし、HotSync 同期を管理する Ultra Light パブリケーション内のアークティクルでは、WHERE 句を使用できません。

[WHERE 句] タブを使用すると、WHERE 句を指定して、クライアント・データベースに入れるローを制限できます。

[WHERE 句] タブは、アークティクルが含まれるパブリケーションのタイプがログ・スキャンの場合にのみ表示されます。

[パブリケーション] プロパティ・シートの [WHERE 句] タブには、次の項目があります。

[アークティクル] リスト パブリケーションに入っているアークティクルのリストからアークティクルを選択します。

[選択したアークティクルには次の WHERE 句があります] アークティクルに入れるローを制限するために、そのテーブルの WHERE 句をテキスト・ボックスに入力します。

次の例は、単一のアークティクルで構成され、営業担当者 ID 番号 856 のすべての受注情報が含まれるパブリケーションを作成します。

```
CREATE PUBLICATION pub_orders_samuel_singer
( TABLE SalesOrders
  WHERE SalesRepresentative = 856 )
```

「WHERE 句を使用して一部のローだけをパブリッシュする」 『SQL Remote』を参照してください。

参照

- ◆ 「WHERE 句 : ローの指定」 『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』
- ◆ 「WHERE 句を使用して一部のローだけをパブリッシュする」 『SQL Remote』

[パブリケーション] プロパティ・シート : [SUBSCRIBE BY 制限] タブ

このタブは SQL Remote のパブリケーションだけに適用され、パブリケーションの同期タイプがログ・スキャンの場合にのみ表示されます。

[SUBSCRIBE BY 制限] タブを使用すると、アークティクルに入れるテーブルのローのサブセットを定義できます。

[パブリケーション] プロパティ・シートの [SUBSCRIBE BY 制限] タブには、次の項目があります。

[アークティクル] リスト パブリケーションに入っているアークティクルのリストからアークティクルを選択します。

[選択したアークティクルには次の SUBSCRIBE BY 制限があります] アークティクルの SUBSCRIBE BY 制限オプションとして、次のいずれかを選択できます。

- ◆ **[なし]** アーティクルに SUBSCRIBE BY 制限を含めない場合に、このオプションを選択します。
- ◆ **[カラム]** カラム (SUBSCRIBE BY カラム) に基づいてテーブルのローを分割するように、アーティクルを設定します。このオプションを選択した場合は、ドロップダウン・リストからカラムを選択してください。
- ◆ **[式]** 下のフィールドに入力した式に基づいてテーブルのローを分割するように、アーティクルを設定します。

参照

- ◆ 「サブスクリプション式を使用して一部のローだけをパブリッシュする」 『SQL Remote』

[パブリケーション] プロパティ・シート : [アップロード・プロシージャ] タブ

このプロパティ・シートは、スクリプト化されたアップロード・パブリケーションだけに適用されます。

[パブリケーション] プロパティ・シートの [アップロード・プロシージャ] タブには、次の項目があります。

[アーティクル] リスト パブリケーションに入っているアーティクルのリストからアーティクルを選択します。

[アップロード・プロシージャ] リスト 1つのアーティクルに挿入用、更新用、削除用の最大3つのプロシージャを関連付けることができます。[INSERT]、[UPDATE]、[DELETE] の各タブをクリックすると、選択したアーティクルにこれらのプロシージャを指定できます。

[次のプロシージャを使用したローのアップロード] このオプションを選択してからドロップダウン・リストからプロシージャを選択すると、選択したローのアップロードに使用するプロシージャを指定できます。選択したプロシージャは下のテキスト・ボックスに表示され、そこで編集できます。プロシージャを定義しない場合は、このオプションをクリアします。

- ◆ **[ただちに新しいプロシージャを作成]** このアイコンをクリックすると、アップロード・スクリプトの新しいプロシージャを作成します。[プロシージャ作成] ウィザードが表示されます。
- ◆ **[ただちにプロシージャを保存]** このアイコンをクリックすると、選択したプロシージャへの変更を保存します。
- ◆ **[ただちにプロシージャを戻す]** このアイコンをクリックすると、選択したプロシージャの最後の保存後に行われた変更が破棄されます。

[パブリケーション] プロパティ・シート : [接続] タブ

このタブは、Mobile Link だけに適用されます。

[パブリケーション] プロパティ・シートの [接続] タブには、次の項目があります。

[プロトコル] 同期に使用する通信プロトコルを選択します。デフォルトでは TCP/IP が使用されます。

[接続] タブで指定できる設定は、使用する通信プロトコルによって決まります。buffer_size などの追加パラメータは、[詳細] フィールドで設定できます。

各プロトコルでサポートされているパラメータの完全なリストについては、次の項を参照してください。

- ◆ 「CREATE SYNCHRONIZATION USER 文 [Mobile Link]」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- ◆ 「CommunicationType (ctp) 拡張オプション」 『Mobile Link - クライアント管理』
- ◆ [TCP/IP] このオプションを選択すると、同期に TCP/IP プロトコルを使用します。バージョン 8.0.x と 9.0.x では、[TCP/IP] を選択してから [Certicom セキュリティを有効にする] を選択することは、[TLS] を選択することと同じです。
- ◆ [TLS] このオプションを選択すると、同期に TLS (トランスポート・レイヤ・セキュリティ) が使用されます。TLS は、楕円曲線暗号化 (ECC) と RSA 暗号化の両方をサポートしています。このオプションは、バージョン 10 以降でのみ使用できます。
- ◆ [HTTP] このオプションを選択すると、同期に HTTP プロトコルを使用します。
- ◆ [HTTPS] このオプションを選択すると、同期に HTTPS プロトコルを使用します。HTTPS は、楕円曲線暗号化 (ECC) と RSA 暗号化の両方をサポートしています。
- ◆ [HTTPS FIPS] このオプションを選択すると、同期に HTTPS プロトコル、暗号化に FIPS 認定のアルゴリズムが使用されます。このオプションは、バージョン 8.0.x と 9.0.x でのみ使用できます。バージョン 10 では、HTTPS プロトコルを選択し、[セキュリティ] に [FIPS 認定] オプションを選択することと同じです。
- ◆ [ActiveSync] このオプションを選択すると、ActiveSync を使用して ActiveSync 用 Mobile Link プロバイダとデータを交換します。このプロバイダは、コンピュータに常駐しています。ActiveSync パラメータでは、ActiveSync 用 Mobile Link プロバイダと Mobile Link サーバ間の通信を記述します。このオプションは、バージョン 8.0.x と 9.0.x でのみ使用できます。

「ActiveSync プロバイダ・インストール・ユーティリティ [mlasinst]」 『Mobile Link - クライアント管理』を参照してください。

[ホスト] Mobile Link サーバを実行するコンピュータの IP 番号またはホスト名です。デフォルト値は localhost です。Mobile Link サーバがクライアントと同じコンピュータで稼働している場合は、localhost を使用できます。

Windows CE では、デフォルト値はレジストリ・フォルダ *Comm\Tcpip\Hosts\ppp_peer* の *ipaddr* の値です。このため、Windows CE デバイスは、このデバイスのクレードルが接続されているコンピュータで実行されている Mobile Link サーバに接続できます。

Palm Computing Platform の場合は、localhost のデフォルト値がデバイスを指します。ホスト名や IP アドレスを明示的に指定することをおすすめします。

- ◆ [ポート] Mobile Link サーバは特定のポートを介して通信します。デフォルトのポート番号は、TCP/IP では **2439**、HTTP では **80**、HTTPS では **443** です。異なる値を選択する場合、指定したポートで受信を行うように Mobile Link サーバを設定してください。

[プロキシ・ホスト] プロキシ・サーバのホスト名または IP アドレスを入力します。デフォルト値は **localhost** です。このオプションは、HTTP 同期と HTTPS 同期でのみ使用できます。

- ◆ **[プロキシ・ポート]** プロキシ・サーバのポート番号を入力します。デフォルト値は、HTTP の場合は **80**、HTTPS の場合は **443** です。このオプションは、HTTP 同期と HTTPS 同期でのみ使用できます。

[URL サフィックス] 各 HTTP 要求の 1 行目の URL に追加するサフィックスを入力します。デフォルト値は **MobiLink** です。このオプションは、HTTP 同期と HTTPS 同期でのみ使用できません。

プロキシ・サーバを通じて同期するときは、Mobile Link サーバを見つけるためにサフィックスが必要な場合があります。

- ◆ **[HTTP バージョン]** 同期に使用する HTTP のバージョンを指定する値を入力します。1.0 または 1.1 を選択できます。デフォルト値は **1.1** です。

[自動接続] 以下のオプションを使用すると、Windows または Windows CE で稼働している Mobile Link クライアントがダイヤルアップ・ネットワーク接続を介して接続できるようになります。

スケジュールを使用している場合は、リモート・デバイスを自動的に同期できます。スケジュールを使用していない場合は、接続を手動でダイヤルすることなく **dbmlsync** を実行できます。

「同期のスケジュール」 『[Mobile Link - クライアント管理](#)』を参照してください。

- ◆ **[ネットワーク名]** ネットワーク名を指定して、Mobile Link の自動ダイヤル機能を使用できるようにします。これによって、手動でダイヤルすることなく Windows または Windows CE から接続できます。この名前は、[設定]-[接続]-[接続] (Windows CE) または [ネットワーク接続] (Windows) のドロップダウン・リストで指定したネットワーク名にしてください。
- ◆ **[ネットワーク接続のタイムアウト]** ネットワーク名を指定するときに、ダイヤルアップに失敗した後のタイムアウトをオプションで指定できます。この機能が適用されるのは、Windows CE だけです (Windows の場合は、接続プロファイルを構成することでこの機能を制御できます)。デフォルトは **120** 秒です。
- ◆ **[開いたままにする]** ネットワーク名を指定するときに、同期の完了後に接続を開いたままにする (1) か、接続を閉じる (0) かをオプションで指定できます。デフォルトでは、接続は閉じられます。

[セキュリティ] これらのオプションでは、暗号パッケージ・プログラムを使用して、この接続を介するすべての通信を暗号化できます。楕円曲線暗号化と RSA 暗号化の両方に対して、サーバの認証に使用する証明書についての情報を以下のフィールドに指定できます。

[Certicom セキュリティを有効にする] このオプションを選択すると、この接続を介するすべての通信が暗号化されます。楕円曲線暗号化または RSA 暗号化を使用できます。デフォルトでは、楕円曲線が使用されます。このオプションは、バージョン 8.0.x と 9.0.x でのみ使用できます。このオプションと TCP/IP プロトコルを選択することは、バージョン 10 で TLS プロトコルを選択することと同じです。

別途ライセンスが必要な必須コンポーネント

ECC 暗号化と FIPS 承認の暗号化には、別途ライセンスが必要です。強力な暗号化テクノロジーはすべて、輸出規制対象品目です。

「別途ライセンスが必要なコンポーネント」 『SQL Anywhere 10 - 紹介』を参照してください。

セキュリティの詳細については、「トランスポート・レイヤ・セキュリティ」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』を参照してください。

- ◆ **[楕円曲線暗号]** 楕円曲線暗号化を使用して、接続を暗号化します。バージョン 10 のデータベースでは、この暗号化を使用して TCP/IP 上の TLS 接続と HTTPS 接続を暗号化できます。バージョン 8 と 9 のデータベースでは、TCP/IP 接続を暗号化できます。この暗号化は、以前は Certicom 暗号化と呼ばれていました。
- ◆ **[RSA]** RSA 暗号化を使用して、通信を暗号化します。バージョン 10 のデータベースでは、この暗号化を使用して TCP/IP 上の TLS 接続と HTTPS 接続を暗号化できます。バージョン 8 と 9 のデータベースでは、TCP/IP 接続を暗号化できます。バージョン 8 と 9 のデータベースでは、[HTTPS] を選択するとこの暗号化が自動的に選択されます。
- ◆ **[FIPS 認定]** FIPS 認定の RSA 暗号化を使用して、通信を暗号化します。バージョン 10 のデータベースでは、この暗号化を使用して TCP/IP 上の TLS 接続と HTTPS 接続を暗号化できます。バージョン 9 のデータベースでは、TCP/IP 接続を暗号化できます。バージョン 9 のデータベースでは、[HTTPS FIPS] を選択するとこの暗号化が自動的に選択されます。バージョン 8 のデータベースでは、この暗号化はサポートされていません。
- ◆ **[証明書に記載される会社]** 証明書を発行した認証局の名前を入力します。サーバ側とクライアント側の値を一致させる必要があります。
- ◆ **[証明書に記載される部署]** 証明書に記載される部署を入力します。これは組織単位とも呼ばれます。サーバ側とクライアント側の値を一致させる必要があります。
- ◆ **[証明書に記載される名前]** 証明書の通称を入力します。サーバ側とクライアント側の値を一致させる必要があります。
- ◆ **[信頼できる証明書]** クライアントがサーバを認証するために使用する証明書ファイルの名前を入力します。

[詳細] このフィールドには、**パラメータ = 値**の形式で追加の接続パラメータを入力します。複数のパラメータを入力する場合はセミコロンで区切ります。たとえば、内容が固定長であるメッセージの本文の最大サイズを設定し、同期のすべての HTTP 要求に同じ TCP/IP 接続を使用するようクライアントに指示するには、[詳細] フィールドに次のように入力します。

```
buffer_size=58000;persistent=TRUE
```

このフィールドに入力できる接続パラメータの完全なリストについては、「CREATE SYNCHRONIZATION USER 文 [Mobile Link]」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』を参照してください。

注意

同期の接続パラメータを設定する方法は複数あります。

競合するオプションを dbmsync で解決する方法の詳細については、「優先順位」『Mobile Link - クライアント管理』を参照してください。

[Mobile Link ユーザ] プロパティ・シートの [接続] タブの 1 つのフィールドが空白の場合、Mobile Link ユーザは同期サブスクリプションの接続パラメータ設定を継承します。パブリケーションの設定を上書きする場合にのみ、Mobile Link の [ユーザ] プロパティ・シートの [接続] タブで接続パラメータを指定してください。

参照

- ◆ 「CREATE SYNCHRONIZATION USER 文 [Mobile Link]」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- ◆ 「CREATE PUBLICATION 文 [Mobile Link] [SQL Remote]」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- ◆ 「ALTER PUBLICATION 文 [Mobile Link] [SQL Remote]」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- ◆ 「-x オプション」 『Mobile Link - クライアント管理』
- ◆ 「CommunicationAddress (adr) 拡張オプション」 『Mobile Link - クライアント管理』

[パブリケーション] プロパティ・シート : [拡張オプション] タブ

このタブは、Mobile Link だけに適用されます。

[パブリケーション] プロパティ・シートの [拡張オプション] タブには、次の項目があります。

[このパブリケーションには次の拡張同期オプションがあります。] パブリケーションに対して設定されている拡張オプションとその値がリストされます。パブリケーションの値を設定するには、オプション名の横にある [値] フィールドをクリックします。

同期で使用できるすべての拡張オプションを次の表に示します。

これらのオプションの詳細については、「Mobile Link SQL Anywhere クライアントの拡張オプション」『Mobile Link - クライアント管理』を参照してください。

拡張オプション	デフォルト	説明
「ConflictRetries (cr) 拡張オプション」『Mobile Link - クライアント管理』	-1 (無限に継続)	競合のためにダウンロードが失敗した場合のリトライの回数を指定します。
「ContinueDownload (cd) 拡張オプション」『Mobile Link - クライアント管理』	OFF	再起動可能なダウンロードを指定します。
「DisablePolling (p) 拡張オプション」『Mobile Link - クライアント管理』	OFF	ログスキャンの自動ポーリングを無効にします。

拡張オプション	デフォルト	説明
「DownloadBufferSize (dbs) 拡張オプション」 『Mobile Link - クライアント管理』	Windows CE では 32 K、その他のオペレーティング・システムでは 1 M。	ダウンロード・バッファのサイズを指定します。 デフォルトでは、単位としてバイトが使用されます。キロバイトまたはメガバイトの単位を指定するには、それぞれサフィックス k 、 m を使用します。
「DownloadOnly (ds) 拡張オプション」 『Mobile Link - クライアント管理』	OFF	同期がダウンロード専用であることを指定します。
「DownloadReadSize (drs) 拡張オプション」 『Mobile Link - クライアント管理』	32 K	再起動可能なダウンロードについて、通信障害の後に再送する必要があるデータの最大値を指定します。
「ErrorLogSendLimit (el) 拡張オプション」 『Mobile Link - クライアント管理』	32 K	同期時に dbmlsync からサーバに送信するリモート・ログ・ファイルのサイズを指定します。 デフォルトでは、単位としてバイトが使用されます。キロバイトまたはメガバイトの単位を指定するには、それぞれサフィックス k 、 m を使用します。dbmlsync の出力ログ・メッセージを送信しない場合は、この拡張オプションを値 0 に設定する必要があります。
「FireTriggers (ft) 拡張オプション」 『Mobile Link - クライアント管理』	ON	ダウンロードが適用されたときにリモート・データベースでトリガが起動されるように指定します。
「HoverRescanThreshold (hrt) 拡張オプション」 『Mobile Link - クライアント管理』	1 M	スケジュールを使用している場合、再スキャンの実行までに累積可能な廃棄メモリ量を制限します。 デフォルトでは、単位としてバイトが使用されます。キロバイトまたはメガバイトの単位を指定するには、それぞれサフィックス k 、 m を使用します。
「IgnoreHookErrors (eh) 拡張オプション」 『Mobile Link - クライアント管理』	OFF	フック関数内で発生したエラーを無視するように指定します。
「IgnoreScheduling (isc) 拡張オプション」 『Mobile Link - クライアント管理』	OFF	スケジュール設定を無視するように指定します。

拡張オプション	デフォルト	説明
「Increment (inc) 拡張オプション」 『Mobile Link - クライアント管理』	(無限)	インクリメンタル・アップロードのサイズを制御します。 デフォルトでは、単位としてバイトが使用されます。キロバイトまたはメガバイトの単位を指定するには、それぞれサフィックス k、m を使用します。
「LockTables (lt) 拡張オプション」 『Mobile Link - クライアント管理』	ON	アーティクル (同期対象パブリケーション内のテーブルまたはテーブルの一部) をロックしてから同期を実行するように指定します。
「Memory (mem) 拡張オプション」 『Mobile Link - クライアント管理』	1 M	キャッシュ・サイズを指定します。 デフォルトでは、単位としてバイトが使用されます。キロバイトまたはメガバイトの単位を指定するには、それぞれサフィックス k、m を使用します。
「MirrorLogDirectory (mld) 拡張オプション」 『Mobile Link - クライアント管理』	(なし)	古いミラー・ログ・ファイルを削除できるようにその場所を指定します。
「MobiLinkPwd (mp) 拡張オプション」 『Mobile Link - クライアント管理』	NULL	Mobile Link パスワードを指定します。パスワードでは大文字と小文字が区別されます。
「NewMobiLinkPwd (mn) 拡張オプション」 『Mobile Link - クライアント管理』	NULL	新しい Mobile Link パスワードを指定します。パスワードでは大文字と小文字が区別されます。
「NoSyncOnStartup (nss) 拡張オプション」 『Mobile Link - クライアント管理』	NULL	dbmsync が起動時に同期するのを防ぎます。このオプションを指定しない場合は、スケジューリング・オプションにより、dbmsync が起動時に同期されます。
「PollingPeriod (pp) 拡張オプション」 『Mobile Link - クライアント管理』	1 分	ログスキャンのポーリング期間を指定します。 デフォルトでは、単位として分が使用されます。秒、分、時間、日の各単位を指定するには、それぞれサフィックス s、m、h、d を使用します。
「Schedule (sch) 拡張オプション」 『Mobile Link - クライアント管理』	スケジュールなし	同期のスケジュールを指定します。

拡張オプション	デフォルト	説明
「ScriptVersion (sv) 拡張オプション」 『Mobile Link - クライアント管理』	default	スクリプト・バージョンを指定します。
「SendColumnNames (scn) 拡張オプション」 『Mobile Link - クライアント管理』	OFF	アップロード時にカラム名が送信されるように指定します。
「SendDownloadACK (sa) 拡張オプション」 『Mobile Link - クライアント管理』	OFF	クライアントからサーバにダウンロード確認が送信されるように指定します。
「SendTriggers (st) 拡張オプション」 『Mobile Link - クライアント管理』	OFF	アップロード時にトリガの動作が送信されるように指定します。
「TableOrder (tor) 拡張オプション」 『Mobile Link - クライアント管理』	(なし)	アップロード・ストリームでのテーブルの順序を指定します。
「UploadOnly (uo) 拡張オプション」 『Mobile Link - クライアント管理』	OFF	同期がアップロードだけを含むように指定します。
「Verbose (v) 拡張オプション」 『Mobile Link - クライアント管理』	OFF	完全冗長を指定します。 このオプションは dbmlsync -v+ と同じです。
「VerboseHooks (vs) 拡張オプション」 『Mobile Link - クライアント管理』	OFF	フック・スクリプトに関するメッセージのログを取るように指定します。 このオプションは dbmlsync -vs と同じです。
「VerboseMin (vm) 拡張オプション」 『Mobile Link - クライアント管理』	OFF	少量の情報のログを取るように指定します。 このオプションは dbmlsync -v と同じです。
「VerboseOptions (vo) 拡張オプション」 『Mobile Link - クライアント管理』	OFF	指定したコマンド・ライン・オプション (拡張オプションを含む) に関する情報のログを取るように指定します。 このオプションは dbmlsync -vo と同じです。
「VerboseRowCounts (vn) 拡張オプション」 『Mobile Link - クライアント管理』	OFF	アップロードおよびダウンロードされるローの数のログを取るように指定します。 このオプションは dbmlsync -vn と同じです。

拡張オプション	デフォルト	説明
「VerboseRowValues (vr) 拡張オプション」 『Mobile Link - クライアント管理』	OFF	アップロードおよびダウンロードされるローの値のログを取るよう指定します。 このオプションは dbmsync -vr と同じです。
「VerboseUpload (vu) 拡張オプション」 『Mobile Link - クライアント管理』	OFF	アップロード・ストリームに関する情報のログを取るよう指定します。 このオプションは dbmsync -vu と同じです。

注意

同期の接続パラメータを設定する方法は複数あります。

競合するオプションを dbmsync で解決する方法の詳細については、「優先順位」 『Mobile Link - クライアント管理』 を参照してください。

[パブリッシャ] プロパティ・シート : [一般] タブ

[パブリッシャ] プロパティ・シートの [一般] タブには、次の項目があります。

[名前] パブリッシャの名前が表示されます。

[タイプ] オブジェクトのタイプが表示されます。

[接続可] このオプションを選択すると、パブリッシャがデータベースに接続できます。パブリッシャの接続が許可されないと、パスワード (指定されている場合) はアカウントから削除されます。パブリッシャの接続を許可するように後で変更する場合は、新しいパスワードを指定する必要があります。このオプションをクリアすると、[パスワード] オプションと [パスワードの確認] オプションが無効になります。

ユーザは、ほとんどの場合、接続を許可されます。

- ◆ **[パスワード]** パブリッシャのパスワードを入力します。パスワードでは大文字と小文字が区別されます。
- ◆ **[パスワードの確認]** [パスワード] テキスト・ボックスに入力したパスワードをもう一度入力して確認します。2つのフィールドの内容は、完全に一致している必要があります。パスワードでは大文字と小文字が区別されます。

[コメント] パブリッシャの説明を入力します。たとえば、システムにおけるそのパブリッシャの目的を、この領域に記述できます。

参照

- ◆ 「REMOTE パーミッションの付与と取り消し」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』
- ◆ 「ユーザ ID とパーミッションの管理」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』

[パブリッシャ] プロパティ・シート : [権限] タブ

[パブリッシャ] プロパティ・シートの [権限] タブには、次の項目があります。

[DBA] このオプションを選択すると、パブリッシャに DBA 権限が付与されます。DBA 権限を持つユーザは、データベースを完全に管理できます。

[リソース] このオプションを選択すると、パブリッシャに RESOURCE 権限が付与されます。RESOURCE 権限を持つユーザは、データベース・オブジェクトを作成できます。

[リモート DBA] このオプションを選択すると、パブリッシャに REMOTE DBA 権限が付与されます。Mobile Link クライアント・ユーティリティの dbmlsync には REMOTE DBA 権限が必要です。SQL Remote Message Agent も、このタイプの権限を持つユーザ ID を使用して、セキュリティ・ホールを作らずにアクションを確実に実行する必要があります。

[バックアップ] このオプションを選択すると、パブリッシャに BACKUP 権限が付与されます。

[検証] このオプションを選択すると、パブリッシャに VALIDATE 権限が付与されます。VALIDATE 権限を持つユーザは、データベース、テーブル、インデックス、チェックサムの検証など、さまざまな VALIDATE 文を使用した操作を実行できます。

参照

- ◆ 「REMOTE パーミッションの付与と取り消し」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』
- ◆ 「ユーザ ID とパーミッションの管理」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』
- ◆ 「DBA 権限の概要」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』
- ◆ 「RESOURCE 権限の概要」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』
- ◆ 「GRANT REMOTE DBA 文 [Mobile Link] [SQL Remote]」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- ◆ 「BACKUP 権限の概要」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』
- ◆ 「VALIDATE 権限の概要」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』

[パブリッシャ] プロパティ・シート : [パーミッション] タブ

[パブリッシャ] プロパティ・シートの [パーミッション] タブには、次の項目があります。

[パーミッション] リスト パブリッシャがパーミッションを持っているすべてのテーブルの他に、各テーブルを所有するユーザが表示されます。各ユーザの横に表示されるフィールドをクリックすると、パーミッションの付与または取り消しができます。フィールドをダブルクリックすると (チェック・マークと 2 つの + 記号が表示される)、ユーザにパーミッションの付与オプションを与えることができます。

[表示] [パーミッション] リストに表示するオブジェクトのタイプを選択します。

- ◆ **[テーブル]** パブリッシャがパーミッションを持っているすべてのテーブル。
- ◆ **[ビュー]** パブリッシャがパーミッションを持っているすべてのビュー。
- ◆ **[プロシージャとファンクション]** パブリッシャがパーミッションを持っているプロシージャとファンクションがすべて表示されます。プロシージャとファンクションに対して付与できるのは EXECUTE パーミッションだけです。

参照

- ◆ 「REMOTE パーミッションの付与と取り消し」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』

[リモート・プロシージャ] プロパティ・シート : [一般] タブ

[リモート・プロシージャ] プロパティ・シートの [一般] タブには、次の項目があります。

[名前] リモート・プロシージャの名前が表示されます。

[タイプ] オブジェクトのタイプが表示されます。

[所有者] リモート・プロシージャを所有するデータベース・ユーザの名前が表示されます。

[構文] 最後に保存されたコードの SQL 構文が表示されます。構文は Watcom-SQL または Transact-SQL のどちらかです。

[リモート・サーバ] プロシージャを含むリモート・データベースの名前が表示されます。

[コメント] リモート・プロシージャの説明を入力します。たとえば、システムにおけるそのリモート・プロシージャの目的を、この領域に記述できます。

[リモート・プロシージャ] プロパティ・シート : [パラメータ] タブ

[リモート・プロシージャ] プロパティ・シートの [パラメータ] タブには、次の項目があります。

[パラメータ] リスト リモート・プロシージャのパラメータの名前、データ型、パラメータ・タイプ、モードが表示されます。モードの値は次のいずれかです。

- ◆ **[入力]** このパラメータは、プロシージャに値を与える式です。
- ◆ **[出力]** このパラメータは、プロシージャから値を受け取ることがある変数です。
- ◆ **[入力/出力]** このパラメータは、リモート・プロシージャに値を与え、リモート・プロシージャから新しい値を受け取ることがある変数です。

参照

- ◆ 「プロシージャ、トリガ、バッチの使用」 『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』
- ◆ 「CREATE PROCEDURE 文」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- ◆ 「プロシージャ・パラメータの宣言」 『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』

[リモート・プロシージャ] プロパティ・シート : [パーミッション] タブ

[リモート・プロシージャ] プロパティ・シートの [パーミッション] タブには、次の項目があります。

[ユーザ] リスト リモート・プロシージャに対するパーミッションを持つユーザがリストされます。リストにユーザを追加する場合は、[付与] をクリックします。ユーザのパーミッションを削

除するには、ユーザを選択して、[取り消し] をクリックします。[Shift] キーを押したままでクリックすると複数のユーザを選択できます。

各ユーザの横にある [実行] フィールドをクリックすると、パーミッションの付与または取り消しができます。

- ◆ **[付与]** [パーミッション付与] ダイアログが表示されます。このダイアログでは、他のユーザまたはグループにプロシージャのパーミッションを付与できます。
- ◆ **[取り消し]** ユーザまたはグループからリモート・プロシージャのパーミッションを取り消し、[ユーザ] リストからそのユーザを削除します。

参照

- ◆ 「[プロシージャに対するパーミッションの付与](#)」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』

[リモート・サーバ] プロパティ・シート : [一般] タブ

[リモート・サーバ] プロパティ・シートの [一般] タブには、次の項目があります。

[名前] リモート・サーバの名前が表示されます。

[タイプ] オブジェクトのタイプが表示されます。

[読み込み専用] リモート・サーバが読み込み専用かどうかが表示されます。

[サーバ・タイプ] データベース・サーバのクラスまたはソフトウェア・プラットフォームが表示されます。ドロップダウン・リストから別のソフトウェア・プラットフォームを選択して、サーバ・タイプを変更できます。

選択するサーバ・タイプによって、選択できる接続のタイプが制限されます。たとえば、[サーバ・タイプ] ドロップダウン・リストから [一般的なサーバ] を選択すると、接続に使用できるのは ODBC のみになります。

[接続タイプ] 接続プロトコルとして、ODBC または JDBC を選択できます。

- ◆ **[オープン・データベース・コネクティビティ (ODBC)]** このオプションを選択すると ODBC 接続プロトコルを使用できます。ODBC は [サーバ・タイプ] ドロップダウン・リストに表示されているすべてのサーバで使用できます。
- ◆ **[Java データベース・コネクティビティ (JDBC)]** このオプションを選択すると JDBC 接続プロトコルを使用できます。JDBC は、Sybase SQL Anywhere と Sybase Adaptive Server Enterprise のサーバ・タイプで使用できます。使用しているデータベースが Java 実行可能でない場合は、[Java データベース・コネクティビティ (JDBC)] オプションは有効にはなりません。

接続プロトコル ODBC と JDBC の詳細については、次の項を参照してください。

- ◆ 「[JDBC の概要](#)」 『SQL Anywhere サーバ - プログラミング』
- ◆ 「[Sybase Central を使用したリモート・サーバの作成](#)」 『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』

[接続情報] サーバの名前やアドレスなどの起動接続パラメータを指定できます。

データ・ソースが ODBC の場合は、データ・ソース名を入力します。JDBC アクセスの場合は、コンピュータ名または IP アドレスとポート番号を *hostname:portnumber* の形式で入力します。

[テスト接続] リモート・サーバの定義で指定した情報を使って正しく接続できるかどうかをテストします。

参照

- ◆ 「CREATE SERVER 文」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- ◆ 「リモート・サーバの使用」 『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』

[リモート・ユーザ] プロパティ・シート : [一般] タブ

[リモート・ユーザ] プロパティ・シートの [一般] タブには、次の項目があります。

[名前] リモート・ユーザの名前が表示されます。

[タイプ] オブジェクトのタイプが表示されます。

[接続可] このオプションを選択すると、リモート・ユーザがデータベースに接続できます。リモート・ユーザが接続を許可されないと、パスワード (指定されている場合) はアカウントから削除されます。リモート・ユーザの接続を許可するように後で変更する場合は、新しいパスワードを指定する必要があります。このオプションをクリアすると、[パスワード] オプションと [パスワードの確認] オプションが無効になります。

ユーザは、ほとんどの場合、接続を許可されます。

- ◆ **[パスワード]** リモート・ユーザのパスワードを入力します。パスワードでは大文字と小文字が区別されます。
- ◆ **[パスワードの確認]** [パスワード] テキスト・ボックスに入力したパスワードをもう一度入力して確認します。2つのフィールドの内容は、完全に一致している必要があります。パスワードでは大文字と小文字が区別されます。

[コメント] リモート・ユーザの説明を入力します。たとえば、リモート・ユーザがシステムを使用する目的などをここに記述できます。

参照

- ◆ 「REMOTE パーMISSIONの付与と取り消し」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』
- ◆ 「ユーザ ID とパーMISSIONの管理」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』

[リモート・ユーザ] プロパティ・シート : [権限] タブ

[リモート・ユーザ] プロパティ・シートの [権限] タブには、次の項目があります。

[DBA] このオプションを選択すると、リモート・ユーザに DBA 権限が付与されます。DBA 権限を持つユーザは、データベースを完全に管理できます。

[リソース] このオプションを選択すると、リモート・ユーザに RESOURCE 権限が付与されます。RESOURCE 権限を持つユーザは、データベース・オブジェクトを作成できます。

[リモート DBA] このオプションを選択すると、リモート・ユーザに REMOTE DBA 権限が付与されます。Mobile Link クライアント・ユーティリティの dbmlsync には REMOTE DBA 権限が必要です。SQL Remote Message Agent も、このタイプの権限を持つユーザ ID を使用して、セキュリティ・ホールを作らずにアクションを確実に実行する必要があります。

[バックアップ] このオプションを選択すると、リモート・ユーザに BACKUP 権限が付与されます。

[検証] このオプションを選択すると、リモート・ユーザに VALIDATE 権限が付与されます。VALIDATE 権限を持つユーザは、データベース、テーブル、インデックス、チェックサムの検証など、さまざまな VALIDATE 文を使用した操作を実行できます。

参照

- ◆ 「REMOTE パーミッションの付与と取り消し」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』
- ◆ 「ユーザ ID とパーミッションの管理」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』
- ◆ 「DBA 権限の概要」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』
- ◆ 「RESOURCE 権限の概要」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』
- ◆ 「GRANT REMOTE DBA 文 [Mobile Link] [SQL Remote]」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- ◆ 「BACKUP 権限の概要」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』
- ◆ 「VALIDATE 権限の概要」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』

[リモート・ユーザ] プロパティ・シート : [パーミッション] タブ

[リモート・ユーザ] プロパティ・シートの [パーミッション] タブには、次の項目があります。

[パーミッション] リスト リモート・ユーザがパーミッションを持っているすべてのテーブルの他に、各テーブルを所有するユーザが表示されます。各テーブルのフィールドをクリックすると、パーミッションの付与または取り消しができます。フィールドをダブルクリックすると (チェック・マークと 2 つの + 記号が表示される)、ユーザにパーミッションの付与オプションを与えることができます。

[表示] [パーミッション] リストに表示するオブジェクトのタイプを選択します。

- ◆ **[テーブル]** リモート・ユーザがパーミッションを持っているすべてのテーブル。
- ◆ **[ビュー]** リモート・ユーザがパーミッションを持っているすべてのビュー。
- ◆ **[プロシージャとファンクション]** リモート・ユーザがパーミッションを持っているすべてのプロシージャとファンクション。プロシージャとファンクションに対して付与できるのは EXECUTE パーミッションだけです。

参照

- ◆ 「REMOTE パーミッションの付与と取り消し」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』

[リモート・ユーザ] プロパティ・シート : [SQL Remote] タブ

[リモート・ユーザ] プロパティ・シートの [SQL Remote] タブには、次の項目があります。

[メッセージ・タイプ] パブリッシャと通信するためのメッセージ・タイプを選択できます。

[アドレス] リモート・ユーザのリモート・アドレスを入力できます。このアドレスは、ユーザに対してレプリケーション・メッセージを送信するときの宛先です。指定したメッセージ・タイプに応じた文字列を入力します。

特定のメッセージ・タイプに使用するアドレスの詳細については、「[メッセージ・タイプの使用](#)」『SQL Remote』を参照してください。

- ◆ **[送信して閉じる]** パブリッシャのエージェントが 1 回の実行で保留中のすべてのメッセージをリモート・グループに送信した後で停止するように、レプリケーションの頻度が設定されます。つまり、パブリッシャがメッセージを送信する前に毎回エージェントを再起動する必要があります。

ほとんどのレプリケーション設定では、統合パブリッシャからリモート・グループにパブリケーションを送信する場合、このオプションは使用されません。

- ◆ **[次の間隔で送信]** パブリッシャのエージェントの実行を継続し、リモート・グループに指定の間隔でメッセージが送信されるようにレプリケーションの頻度が設定されます。
- ◆ **[毎日次の時刻に送信]** パブリッシャのエージェントの実行を継続し、リモート・グループに毎日指定時刻にメッセージが送信されるようにレプリケーションの頻度が設定されます。

参照

- ◆ 「REMOTE パーミッションの付与と取り消し」『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』
- ◆ 「CREATE SUBSCRIPTION 文 [SQL Remote]」『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

[スケジュール] プロパティ・シート : [一般] タブ

[スケジュール] プロパティ・シートの [一般] タブには、次の項目があります。

[名前] 選択されているイベント・スケジュールの名前が表示されます。

[タイプ] オブジェクトのタイプが表示されます。

[イベント] スケジュールが適用されるイベントの名前が表示されます。

[起動時刻] 次のいずれかのオプションを選択して、イベントが発生する時刻を指定します。

- ◆ **[次の時刻に開始]** このオプションを選択して、イベントをスケジュールする日の特定のスケジュール時刻を指定します。[開始日]を指定した場合、[起動時刻]は指定した日のその時刻を意味します。[開始日]を指定しない場合、[起動時刻]は、現在の日付(その時刻が経過していない場合)とそれ以降の毎日となります。
- ◆ **[次の時間帯に開始]** 選択したイベントが発生する時間の範囲。たとえば、午前 11 時～午後 0 時の間に発生するようにイベントをスケジュールできます。[開始日]を指定した場合、指定の日まで開始されません。

[開始日] イベントの実行開始をスケジュールする日付。デフォルトは現在の日付です。テキスト・ボックスに日付を入力するか、リストから年、月、日を選択できます。

イベントが反復されないスケジュールされたイベントの場合、開始時刻は未来に設定する必要があります。反復されないスケジュールされたイベントを作成する場合に、そのイベントの開始時刻が過ぎているときは、エラーになります。

参照

- ◆ 「CREATE EVENT 文」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- ◆ 「スケジュールとイベントの使用によるタスクの自動化」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』

[スケジュール] プロパティ・シート : [再帰] タブ

このタブの設定はすべてオプションです。

[スケジュール] プロパティ・シートの [再帰] タブには、次の項目があります。

[次の間隔で繰り返し] 連続してスケジュールするイベントの発生間隔を選択します。このオプションを選択すると、イベント定義に SCHEDULE EVERY 句が追加されます。

スケジュールされたイベントの時刻は、スケジュールの作成時に計算され、イベント・ハンドラの実行が完了したときに再計算されます。「CREATE EVENT 文」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』を参照してください。

[次の条件でトリガ] このオプションを選択し、[曜日] または [日付] オプションのいずれかを選択します。このオプションを選択すると、イベント定義に SCHEDULE ON 句が追加されます。

- ◆ **[曜日]** 希望の曜日の横のチェックボックスをオンにして、選択したイベントが発生する曜日を選択します。
- ◆ **[日付]** 希望の日の横のチェックボックスをオンにして、選択したイベントが発生する日を選択します。

参照

- ◆ 「スケジュールの定義」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』
- ◆ 「スケジュールとイベントの使用によるタスクの自動化」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』
- ◆ 「CREATE EVENT 文」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

[サーバ] プロパティ・シート : [一般] タブ

[サーバ] プロパティ・シートの [一般] タブには、次の項目があります。

[名前] データベース・サーバの名前が表示されます。

[タイプ] オブジェクトのタイプが表示されます。

【製品名】 データベース・サーバの製品タイプが表示されます。たとえば、SQL Anywhere や Adaptive Server Anywhere などです。

【バージョン】 データベース・サーバのバージョン番号が表示されます。

【コンピュータ】 データベース・サーバを実行しているコンピュータの名前が表示されます。

【オペレーティング・システム】 データベース・サーバを現在実行しているオペレーティング・システムが表示されます。

【オペレーティング・システムのバージョン】 データベース・サーバを現在実行しているオペレーティング・システムのバージョンが表示されます。

参照

- ◆ 「サーバ・レベルのプロパティ」 『SQL Anywhere サーバ-データベース管理』

[サーバ] プロパティ・シート : [詳細情報] タブ

[サーバ] プロパティ・シートの [詳細情報] タブには、次の項目があります。

【データベース・サーバのプロパティ】 リスト サーバのプロパティとその値の詳細なリストです。[再表示] をクリックすると値が更新されます。[F5] キーを押しても、データベース・サーバのプロパティの値を再表示できます。

【再表示】 クリックすると、[サーバのプロパティ] リストの値が更新されます。

【説明】 リストからプロパティを選択すると、そのプロパティの説明が [説明] ウィンドウに表示されます。

参照

- ◆ 「サーバ・レベルのプロパティ」 『SQL Anywhere サーバ-データベース管理』

[サーバ] プロパティ・シート : [オプション] タブ

このタブにあるデータベース・サーバ・オプションは、データベース・サーバの実行中にリセットできるオプションに対応しています。

「sa_server_option システム・プロシージャ」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』を参照してください。

[サーバ] プロパティ・シートの [オプション] タブには、次の項目があります。

【現在の時刻】 現在の時刻が表示されます。[再表示] をクリックすると現在の時刻が更新されます。[F5] キーを押しても、現在の時刻を更新できます。

【終了時間】 データベース・サーバを停止する時刻を指定できます。次に示す現在の時刻と同じフォーマットを使用します。

YYYY-MM-DD HH:NN:SS

[新しい接続を禁止] このオプションを選択すると、他のユーザがデータベースに接続できなくなります。このオプションは、保守作業を行う場合に便利です。

[各接続で最後に実行された文を記憶] このオプションを選択すると、各接続で最後に実行された文が記憶されます。

参照

- ◆ 「サーバ・レベルのプロパティ」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』

[サーバ] プロパティ・シート : [要求ロギング] タブ

[サーバ] プロパティ・シートの [要求ロギング] タブには、次の項目があります。

[要求のロギングを可能にする] このオプションを選択すると、サーバが処理する要求がログ・ファイルに記録されます。このオプションは、主としてトラブルシューティングに使用されます。SQL Anywhere 10.0.0 以降のデータベースでは、新しいデータベース・トレーシング機能でデータベース要求のより詳細なログが作成されます。[要求のロギングを可能にする] を選択すると、次のオプションが有効になります。

「トレーシング・セッションのデータ」 『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』を参照してください。

- ◆ **[このサーバへの全接続]** 現在のデータベース・サーバへのすべての接続からの要求がログ・ファイルに記録されます。
- ◆ **[次のデータベースへの全接続]** 指定するデータベースへのすべての接続からの要求がログ・ファイルに記録されます。
- ◆ **[次の接続]** 指定する接続からの要求だけがログ・ファイルに記録されます。
- ◆ **[すべての要求を記録]** データベース・サーバで処理された要求がすべてログ・ファイルに記録されます。
- ◆ **[次の要求のみを記録]** このオプションを選択すると、ログを取る要求のタイプを指定できます。
 - ◆ **[SQL]** SQL 文の要求のログを取ります。
 - ◆ **[プロシージャとファンクション]** プロシージャとファンクションの呼び出しのログを取ります。
 - ◆ **[クエリ・プラン]** クエリ・プランのログを取ります。
 - ◆ **[ホスト変数を含む]** ホスト変数をログに含めます。
 - ◆ **[トリガ]** トリガの呼び出しのログを取ります。
 - ◆ **[処理をブロックされた接続]** 処理をブロックされた接続のログを取ります。

SQL 要求のみをログした場合に記録される SQL 文のリストについては、「sa_server_option システム・プロシージャ」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』を参照してください。

- ◆ **[ログ・ファイル名]** [要求のロギングを可能にする] を選択した場合は、ログ・ファイル名を指定する必要があります。[参照] ボタンをクリックしてファイルの場所を探すこともできます。
- ◆ **[要求ログ・ファイルがすでに存在する場合は上書きする]** このオプションを選択すると、既存の要求ログ・ファイルが上書きされます。
- ◆ **[最大ログ・ファイル・サイズ]** 要求ログ・ファイルのキロバイト単位の最大サイズ。
- ◆ **[ログ・ファイルの最大数]** 維持するログ・ファイルの最大数。各ファイルは、拡張子に番号が追加されます。

参照

- ◆ 「サーバ・レベルのプロパティ」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』
- ◆ 「-zr サーバ・オプション」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』
- ◆ 「-zl サーバ・オプション」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』
- ◆ 「要求ロギング」 『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』

[サービス] プロパティ・シート : [一般] タブ

[サービス] プロパティ・シートの [一般] タブには、次の項目があります。

[名前] サービスの名前が表示されます。サービスは、一連のオプションを使ってデータベース・サーバやその他のアプリケーションを実行します。

[タイプ] オブジェクトのタイプが表示されます。

[サービス・タイプ] サービスのタイプ (Network、Standalone、DBRemote、または Mobile Link) が表示されます。

[ステータス] サービスが開始しているか、停止しているかが表示されます。

サービス・ステータスの詳細については、「サービスの開始と停止」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』 を参照してください。

[起動タイプ] サービスの起動オプションとして次のいずれかを選択できます。起動オプションは、次回 Windows を起動するときに適用されます。

- ◆ **[自動]** このオプションを選択すると、オペレーティング・システムの起動時にサービスが自動的に起動します。
- ◆ **[手動]** サービスを手動で起動するときは、このオプションを選択します。サービスを手動で起動する場合は、操作を行うユーザが Administrator 権限を持っている必要があります。

Administrator 権限については、Windows のマニュアルを参照してください。

- ◆ **[無効]** サービスを無効にして起動しないようにするときは、このオプションを選択します。

参照

- ◆ 「CREATE SERVICE 文」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

- ◆ 「Windows サービスの管理」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』
- ◆ 「Windows サービスの概要」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』

[サービス] プロパティ・シート : [設定] タブ

[サービス] プロパティ・シートの [設定] タブには、次の項目があります。

[ファイル名] 実行ファイルのパスを入力します。たとえば、`c:\Program Files\SQL Anywhere 10\win32\dbeng10.exe` のように入力します。

[参照] をクリックして、ファイルを検索することもできます。

[パラメータ] 実行ファイルの追加のパラメータ (ファイル名とオプション) をテキスト・ボックスに入力します。実行ファイルで使用するのと同じオプションをサービスに対して使用できません。

たとえば、SQL Anywhere サンプル・データベースにユーザ DBA で接続して、SQL Remote Message Agent サービスを開始するには、次のように入力します。

```
-c "UID=DBA;PWD=sql;DBN=demo"
```

参照

- ◆ 「Windows 用サービス・ユーティリティ (dbsvc)」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』
- ◆ 「SQL Anywhere データベース・サーバ」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』

[サービス] プロパティ・シート : [アカウント] タブ

[サービス] プロパティ・シートの [アカウント] タブには、次の項目があります。

[ローカル・システム・アカウント] このオプションを選択すると、システムのローカル・アカウントでサービスが実行されます。

- ◆ **[デスクトップとの対話をサービスに許可]** このオプションを使用できるのは、[ローカル・システム・アカウント] を選択した場合だけです。デスクトップのアイコンをクリックしてサーバ・メッセージ・ウィンドウを表示する場合は、このオプションを選択します。

[その他のアカウント] このオプションを選択すると、ローカル・アカウント以外のアカウントでサービスが実行されます。ドロップダウン・リストからユーザ ID を選択するか、ユーザ ID を入力できます。このオプションを選択すると、[パスワード] フィールドと [パスワードの確認] フィールドが有効になります。

- ◆ **[パスワード]** [その他のアカウント] を選択した場合はユーザ ID に対して適切なパスワードを指定してください。また、[パスワードの確認] テキスト・ボックスでパスワードを確認してください。
- ◆ **[パスワードの確認]** [パスワード] テキスト・ボックスに入力したパスワードをもう一度入力して確認します。2つのフィールドの内容は、完全に一致している必要があります。パスワードでは大文字と小文字が区別されます。

参照

- ◆ 「Windows サービスの管理」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』
- ◆ 「Windows 用サービス・ユーティリティ (dbsvc)」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』

[サービス] プロパティ・シート : [依存性] タブ

[サービス] プロパティ・シートの [依存性] タブには、次の項目があります。

[このサービスはサービス・グループに所属] サービスをサービス・グループのメンバに割り当てた場合は、このオプションを選択します。

- ◆ **[サービス・グループ]** サービスが属するサービス・グループを指定できます。サービスが属するサービス・グループを変更するには、[変更] をクリックします。[サービス・グループの設定] ダイアログが表示されます。このダイアログでは、サービスのサービス・グループを指定できます。

[サービス] リスト このサービスの前に起動するサービスとサービス・グループすべてがリストされます。このリストには、サービスまたはサービス・グループのタイプも表示されます。

このリストにサービスまたはサービス・グループを追加するには、[サービスの追加] または [サービス・グループの追加] をクリックします。サービスまたはサービス・グループを [サービス] リストから削除する場合は、サービスまたはサービス・グループを選択して、[削除] をクリックします。[Shift] キーを押したままでクリックすると複数のサービスまたはサービス・グループを選択できます。

- ◆ **[サービスの追加]** [サービスの依存の追加] ダイアログが表示されます。このダイアログでは、すべてのサービスを表示して、[サービス] リストに追加するサービスを選択できます。
- ◆ **[サービス・グループの追加]** [サービス・グループの依存の追加] ダイアログが表示されます。このダイアログでは、[サービス] リストに追加するサービス・グループを選択できます。
- ◆ **[削除]** [サービス] リストからサービスまたはサービス・グループを削除します。削除したグループまたはサービスは、このサービスよりも前に起動する必要がなくなります。

参照

- ◆ 「サービスの依存」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』
- ◆ 「Windows サービスの管理」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』
- ◆ 「一度に複数のサービスを実行する」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』

[サービス] プロパティ・シート : [ポーリング] タブ

このタブで行う設定は、現在選択しているサービスだけでなく、すべてのサービスに適用されます。

[サービス] プロパティ・シートの [ポーリング] タブには、次の項目があります。

[ポーリングを可能にする] Sybase Central でサービスをポーリングしてステータスの変更 (開始または停止) を確認する場合は、このオプションを選択します。

- ◆ **[次の間隔でポーリング]** [ポーリングを可能にする] を選択した場合は、Sybase Central がサービスをポーリングしてステータスの変更を確認する間隔を指定してください。デフォルトの間隔は 10 秒です。このウィンドウで設定したポーリング時間は、明示的に変更するまでそのまま使われます。

参照

- ◆ 「サービスのポーリング頻度の設定」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』
- ◆ 「Windows サービスの管理」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』

[SQL Remote サブスクリプション] プロパティ・シート : [一般] タブ

[SQL Remote サブスクリプション] プロパティ・シートの [一般] タブには、次の項目があります。

[名前] パブリケーション名と所有者、このパブリケーションをサブスクライブする SQL Remote ユーザが表示されます。

[タイプ] オブジェクトのタイプが表示されます。

[パブリケーション] SQL Remote ユーザがサブスクライブするパブリケーションが表示されます。

[サブスクライバ] このパブリケーションをサブスクライブする SQL Remote ユーザが表示されます。

[サブスクリプション値] SQL Remote サブスクリプションのサブスクリプション値が表示されます。サブスクリプション値は、パブリケーションのサブスクリプション式と比較される文字列です。サブスクライバは、サブスクリプション式がサブスクリプション値と一致するすべてのローを受信します。

[SQL Remote サブスクリプション] プロパティ・シート : [詳細] タブ

[SQL Remote サブスクリプション] プロパティ・シートの [詳細] タブには、次の項目があります。

[ステータス] サブスクリプションが開始しているか、停止しているかが表示されます。

[サブスクリプションの開始] [すぐに開始] をクリックすると、サブスクリプションを手動で開始できます。ただし、抽出ユーティリティ (dbxtract) を使ってサブスクリプションを自動的に開始することをおすすめします。「抽出ユーティリティ」 『SQL Remote』を参照してください。

[サブスクリプションの停止] [すぐに停止] をクリックすると、開始されたサブスクリプションを停止できます。

[サブスクリプションの同期化] [すぐに同期化] をクリックすると、サブスクリプションを手動で同期できます。ただし、抽出ユーティリティ (dbxtract) を使ってサブスクリプションを自動的に同期することをおすすめします。「抽出ユーティリティ」 『SQL Remote』を参照してください。

参照

- ◆ 「START SUBSCRIPTION 文 [SQL Remote]」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- ◆ 「STOP SUBSCRIPTION 文 [SQL Remote]」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- ◆ 「抽出ユーティリティ」 『SQL Remote』
- ◆ 「抽出ユーティリティ (dbextract) の使用」 『SQL Remote』

[統計情報] プロパティ・シート : [一般] タブ

[統計情報] プロパティ・シートの [一般] タブには、次の項目があります。

[名前] 統計の名前が表示されます。

[タイプ] オブジェクトのタイプが表示されます。

[説明] 統計についての簡単な説明が表示されます。

[パフォーマンス・モニタでこの統計情報をグラフ表示] 統計をパフォーマンス・モニタに加えるには、このオプションを選択します。パフォーマンス・モニタから統計を削除するには、このオプションをクリアします。

参照

- ◆ 「パフォーマンスのモニタリングと改善」 『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』

[同期サブスクリプション] プロパティ・シート : [一般] タブ

[同期サブスクリプション] プロパティ・シートの [一般] タブには、次の項目があります。

[名前] パブリケーション名と所有者、このパブリケーションをサブスクライブする Mobile Link ユーザが表示されます。

[タイプ] オブジェクトのタイプが表示されます。

[パブリケーション] Mobile Link ユーザがサブスクライブするパブリケーションが表示されます。

[サブスクライブ] このパブリケーションをサブスクライブする Mobile Link ユーザが表示されます。

[最終ダウンロード時刻] 最後にダウンロードされた時刻が表示されます。

[最終アップロード時刻] 最後にアップロードされた時刻が表示されます。

[世代番号] 同期サブスクリプションの世代番号が表示されます。

世代番号を使用すれば、リモート・データベースに、ファイルのダウンロード前にデータをアップロードさせることができます。データベース上の同期サブスクリプションごとに異なる世代番号が自動生成されます。

「Mobile Link の世代番号」 『Mobile Link - サーバ管理』を参照してください。

参照

- ◆ 「CREATE SYNCHRONIZATION SUBSCRIPTION 文 [Mobile Link]」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- ◆ 「SQL Remote のパブリケーションとサブスクリプション」 『SQL Remote』

[同期サブスクリプション] プロパティ・シート : [接続] タブ

[同期サブスクリプション] プロパティ・シートの [接続] タブには、次の項目があります。

[プロトコル] 同期に使用する通信プロトコルを選択します。デフォルトでは TCP/IP が使用されます。

[接続] タブで指定できる設定は、使用する通信プロトコルによって決まります。buffer_size などの追加パラメータは、[詳細] フィールドで設定できます。

各プロトコルでサポートされているパラメータの完全なリストについては、次の項を参照してください。

- ◆ 「CREATE SYNCHRONIZATION USER 文 [Mobile Link]」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- ◆ 「CommunicationType (ctp) 拡張オプション」 『Mobile Link - クライアント管理』
- ◆ **[TCP/IP]** このオプションを選択すると、同期に TCP/IP プロトコルを使用します。バージョン 8.0.x と 9.0.x では、[TCP/IP] を選択してから [Certicom セキュリティを有効にする] を選択することは、[TLS] を選択することと同じです。
- ◆ **[TLS]** このオプションを選択すると、同期に TLS (トランスポート・レイヤ・セキュリティ) が使用されます。TLS は、楕円曲線暗号化 (ECC) と RSA 暗号化の両方をサポートしています。このオプションは、バージョン 10 以降でのみ使用できます。
- ◆ **[HTTP]** このオプションを選択すると、同期に HTTP プロトコルを使用します。
- ◆ **[HTTPS]** このオプションを選択すると、同期に HTTPS プロトコルを使用します。HTTPS は、楕円曲線暗号化 (ECC) と RSA 暗号化の両方をサポートしています。
- ◆ **[HTTPS FIPS]** このオプションを選択すると、同期に HTTPS プロトコル、暗号化に FIPS 認定のアルゴリズムが使用されます。このオプションは、バージョン 8.0.x と 9.0.x でのみ使用できます。バージョン 10 では、HTTPS プロトコルを選択し、[セキュリティ] に [FIPS 認定] オプションを選択することと同じです。
- ◆ **[ActiveSync]** このオプションを選択すると、ActiveSync を使用して ActiveSync 用 Mobile Link プロバイダとデータを交換します。このプロバイダは、コンピュータに常駐しています。ActiveSync パラメータでは、ActiveSync 用 Mobile Link プロバイダと Mobile Link サーバ間の通信を記述します。このオプションは、バージョン 8.0.x と 9.0.x でのみ使用できます。

「ActiveSync プロバイダ・インストール・ユーティリティ [mlasinst]」 『Mobile Link - クライアント管理』を参照してください。

【ホスト】 Mobile Link サーバを実行するコンピュータの IP 番号またはホスト名です。デフォルト値は `localhost` です。Mobile Link サーバがクライアントと同じコンピュータで稼働している場合は、**localhost** を使用できます。

Windows CE では、デフォルト値はレジストリ・フォルダ `Comm\Tcpip\Hosts\ppp_peer` の `ipaddr` の値です。このため、Windows CE デバイスは、このデバイスのクレードルが接続されているコンピュータで実行されている Mobile Link サーバに接続できます。

Palm Computing Platform の場合は、`localhost` のデフォルト値がデバイスを指します。ホスト名や IP アドレスを明示的に指定することをおすすめします。

- ◆ **【ポート】** Mobile Link サーバは特定のポートを介して通信します。デフォルトのポート番号は、TCP/IP では **2439**、HTTP では **80**、HTTPS では **443** です。異なる値を選択する場合、指定したポートで受信を行うように Mobile Link サーバを設定してください。

【プロキシ・ホスト】 プロキシ・サーバのホスト名または IP アドレスを入力します。デフォルト値は `localhost` です。このオプションは、HTTP 同期と HTTPS 同期でのみ使用できます。

- ◆ **【プロキシ・ポート】** プロキシ・サーバのポート番号を入力します。デフォルト値は、HTTP の場合は **80**、HTTPS の場合は **443** です。このオプションは、HTTP 同期と HTTPS 同期でのみ使用できます。

【URL サフィックス】 各 HTTP 要求の 1 行目の URL に追加するサフィックスを入力します。デフォルト値は `MobiLink` です。このオプションは、HTTP 同期と HTTPS 同期でのみ使用できます。

プロキシ・サーバを通じて同期するときは、Mobile Link サーバを見つけるためにサフィックスが必要な場合があります。

- ◆ **【HTTP バージョン】** 同期に使用する HTTP のバージョンを指定する値を入力します。1.0 または 1.1 を選択できます。デフォルト値は **1.1** です。

【自動接続】 以下のオプションを使用すると、Windows または Windows CE で稼働している Mobile Link クライアントがダイヤルアップ・ネットワーク接続を介して接続できるようになります。

スケジュールを使用している場合は、リモート・デバイスを自動的に同期できます。スケジュールを使用していない場合は、接続を手動でダイヤルすることなく `dbmlsync` を実行できます。

「同期のスケジュール」 『[Mobile Link - クライアント管理](#)』を参照してください。

- ◆ **【ネットワーク名】** ネットワーク名を指定して、Mobile Link の自動ダイヤル機能を使用できるようにします。これによって、手動でダイヤルすることなく接続できます。この名前は、`[設定]-[接続]-[接続]` (Windows CE) または `[ネットワーク接続]` (Windows) のドロップダウン・リストで指定したネットワーク名にしてください。
- ◆ **【ネットワーク接続のタイムアウト】** ネットワーク名を指定するときに、ダイヤルアップに失敗した後のタイムアウトをオプションで指定できます。この機能が適用されるのは、Windows CE だけです (Windows の場合は、接続プロファイルを構成することでこの機能を制御できます)。デフォルトは **120** 秒です。

- ◆ **[開いたままにする]** ネットワーク名を指定するときに、同期の完了後に接続を開いたままにする (1) か、接続を閉じる (0) かをオプションで指定できます。デフォルトでは、接続は閉じられます。

[セキュリティ] これらのオプションでは、暗号パッケージ・プログラムを使用して、この接続を介するすべての通信を暗号化できます。楕円曲線暗号化と RSA 暗号化の両方に対して、サーバの認証に使用する証明書についての情報を以下のフィールドに指定できます。

[Certicom セキュリティを有効にする] このオプションを選択すると、この接続を介するすべての通信が暗号化されます。楕円曲線暗号化または RSA 暗号化を使用できます。デフォルトでは、楕円曲線が使用されます。このオプションは、バージョン 8.0.x と 9.0.x でのみ使用できます。このオプションと TCP/IP プロトコルを選択することは、バージョン 10 で TLS プロトコルを選択することと同じです。

別途ライセンスが必要な必須コンポーネント

ECC 暗号化と FIPS 承認の暗号化には、別途ライセンスが必要です。強力な暗号化テクノロジーはすべて、輸出規制対象品目です。

「別途ライセンスが必要なコンポーネント」 『SQL Anywhere 10 - 紹介』を参照してください。

セキュリティの詳細については、「[トランスポート・レイヤ・セキュリティ](#)」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』を参照してください。

- ◆ **[楕円曲線暗号]** 楕円曲線暗号化を使用して、通信を暗号化します。バージョン 10 のデータベースでは、この暗号化を使用して TCP/IP 上の TLS 接続と HTTPS 接続を暗号化できます。バージョン 8 と 9 のデータベースでは、TCP/IP 接続を暗号化できます。この暗号化は、以前は Certicom 暗号化と呼ばれていました。
- ◆ **[RSA]** RSA 暗号化を使用して、通信を暗号化します。バージョン 10 のデータベースでは、この暗号化を使用して TCP/IP 上の TLS 接続と HTTPS 接続を暗号化できます。バージョン 8 と 9 のデータベースでは、TCP/IP 接続を暗号化できます。バージョン 8 と 9 のデータベースでは、[HTTPS] を選択するとこの暗号化が自動的に選択されます。
- ◆ **[FIPS 認定]** FIPS 認定 RSA 暗号化を使用して、通信を暗号化します。バージョン 10 のデータベースでは、この暗号化を使用して TCP/IP 上の TLS 接続と HTTPS 接続を暗号化できます。バージョン 9 のデータベースでは、TCP/IP 接続を暗号化できます。バージョン 9 のデータベースでは、[HTTPS FIPS] を選択するとこの暗号化が自動的に選択されます。バージョン 8 のデータベースでは、この暗号化はサポートされていません。
- ◆ **[証明書に記載される会社]** 証明書を発行した認証局の名前を入力します。サーバ側とクライアント側の値を一致させる必要があります。
- ◆ **[証明書に記載される部署]** 証明書に記載される部署を入力します。これは組織単位とも呼ばれます。サーバ側とクライアント側の値を一致させる必要があります。
- ◆ **[証明書に記載される名前]** 証明書の通称を入力します。サーバ側とクライアント側の値を一致させる必要があります。
- ◆ **[信頼できる証明書]** クライアントがサーバを認証するために使用する証明書ファイルの名前を入力します。

[詳細] このフィールドには、**パラメータ = 値**の形式で追加の接続パラメータを入力します。複数のパラメータを入力する場合はセミコロンで区切ります。たとえば、内容が固定長であるメッセージの本文の最大サイズを設定し、同期のすべての HTTP 要求に同じ TCP/IP 接続を使用するようクライアントに指示するには、**[詳細]** フィールドに次のように入力します。

`buffer_size=58000;persistent=TRUE`

このフィールドに入力できる接続パラメータの完全なリストについては、「[CREATE SYNCHRONIZATION USER 文 \[Mobile Link\]](#)」『[SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス](#)』を参照してください。

注意

同期の接続パラメータを設定する方法は複数あります。

競合するオプションを `dbmsync` で解決する方法の詳細については、「[優先順位](#)」『[Mobile Link - クライアント管理](#)』を参照してください。

参照

- ◆ 「[CREATE SYNCHRONIZATION USER 文 \[Mobile Link\]](#)」『[SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス](#)』
- ◆ 「[-x オプション](#)」『[Mobile Link - クライアント管理](#)』
- ◆ 「[CommunicationAddress \(adr\) 拡張オプション](#)」『[Mobile Link - クライアント管理](#)』

[同期サブスクリプション] プロパティ・シート : [拡張オプション] タブ

[同期サブスクリプション] プロパティ・シートの [拡張オプション] タブには、次の項目があります。

[拡張オプション] リスト Mobile Link ユーザに対して設定されている拡張オプションとその値がリストされます。Mobile Link ユーザの値を設定するには、オプション名の横にある [値] フィールドをクリックします。

同期で使用できるすべての拡張オプションを次の表に示します。

これらのオプションの詳細については、「[Mobile Link SQL Anywhere クライアントの拡張オプション](#)」『[Mobile Link - クライアント管理](#)』を参照してください。

拡張オプション	デフォルト	説明
「 ConflictRetries (cr) 拡張オプション 」『 Mobile Link - クライアント管理 』	-1 (無限に継続)	競合のためにダウンロードが失敗した場合のリトライの回数を指定します。
「 ContinueDownload (cd) 拡張オプション 」『 Mobile Link - クライアント管理 』	OFF	再起動可能なダウンロードを指定します。
「 DisablePolling (p) 拡張オプション 」『 Mobile Link - クライアント管理 』	OFF	ログスキャンの自動ポーリングを無効にします。

拡張オプション	デフォルト	説明
「DownloadBufferSize (dbs) 拡張オプション」 『Mobile Link - クライアント管理』	Windows CE では 32 K、その他のオペレーティング・システムでは 1 M。	ダウンロード・バッファのサイズを指定します。 デフォルトでは、単位としてバイトが使用されます。キロバイトまたはメガバイトの単位を指定するには、それぞれサフィックス k 、 m を使用します。
「DownloadOnly (ds) 拡張オプション」 『Mobile Link - クライアント管理』	OFF	同期がダウンロード専用であることを指定します。
「DownloadReadSize (drs) 拡張オプション」 『Mobile Link - クライアント管理』	32 K	再起動可能なダウンロードについて、通信障害の後に再送する必要があるデータの最大値を指定します。
「ErrorLogSendLimit (el) 拡張オプション」 『Mobile Link - クライアント管理』	32 K	同期時に dbmsync からサーバに送信するリモート・ログ・ファイルのサイズを指定します。 デフォルトでは、単位としてバイトが使用されます。キロバイトまたはメガバイトの単位を指定するには、それぞれサフィックス k 、 m を使用します。dbmsync の出力ログ・メッセージを送信しない場合は、この拡張オプションを値 0 に設定する必要があります。
「FireTriggers (ft) 拡張オプション」 『Mobile Link - クライアント管理』	ON	ダウンロードが適用されたときにリモート・データベースでトリガが起動されるように指定します。
「HoverRescanThreshold (hrt) 拡張オプション」 『Mobile Link - クライアント管理』	1 M	スケジュールを使用している場合、再スキャンの実行までに累積可能な廃棄メモリ量を制限します。 デフォルトでは、単位としてバイトが使用されます。キロバイトまたはメガバイトの単位を指定するには、それぞれサフィックス k 、 m を使用します。
「IgnoreHookErrors (eh) 拡張オプション」 『Mobile Link - クライアント管理』	OFF	フック関数内で発生したエラーを無視するように指定します。
「IgnoreScheduling (isc) 拡張オプション」 『Mobile Link - クライアント管理』	OFF	スケジュール設定を無視するように指定します。

拡張オプション	デフォルト	説明
「Increment (inc) 拡張オプション」 『Mobile Link - クライアント管理』	(無限)	インクリメンタル・アップロードのサイズを制御します。 デフォルトでは、単位としてバイトが使用されます。キロバイトまたはメガバイトの単位を指定するには、それぞれサフィックス k、m を使用します。
「LockTables (lt) 拡張オプション」 『Mobile Link - クライアント管理』	ON	アーティクル (同期対象パブリケーション内のテーブルまたはテーブルの一部) をロックしてから同期を実行するように指定します。
「Memory (mem) 拡張オプション」 『Mobile Link - クライアント管理』	1 M	キャッシュ・サイズを指定します。 デフォルトでは、単位としてバイトが使用されます。キロバイトまたはメガバイトの単位を指定するには、それぞれサフィックス k、m を使用します。
「MirrorLogDirectory (mld) 拡張オプション」 『Mobile Link - クライアント管理』	(なし)	古いミラー・ログ・ファイルを削除できるようにその場所を指定します。
「MobiLinkPwd (mp) 拡張オプション」 『Mobile Link - クライアント管理』	NULL	Mobile Link パスワードを指定します。パスワードでは大文字と小文字が区別されます。
「NewMobiLinkPwd (mn) 拡張オプション」 『Mobile Link - クライアント管理』	NULL	新しい Mobile Link パスワードを指定します。パスワードでは大文字と小文字が区別されます。
「NoSyncOnStartup (nss) 拡張オプション」 『Mobile Link - クライアント管理』	NULL	dbmsync が起動時に同期するのを防ぎます。このオプションを指定しない場合は、スケジューリング・オプションにより、dbmsync が起動時に同期されます。
「OfflineDirectory (dir) 拡張オプション」 『Mobile Link - クライアント管理』	(なし)	オフライン・トランザクションのログを含むパスを指定します。
「PollingPeriod (pp) 拡張オプション」 『Mobile Link - クライアント管理』	1 分	ログスキャンのポーリング期間を指定します。 デフォルトでは、単位として分が使用されます。秒、分、時間、日の各単位を指定するには、それぞれサフィックス s、m、h、d を使用します。

拡張オプション	デフォルト	説明
「Schedule (sch) 拡張オプション」 『Mobile Link - クライアント管理』	スケジュールなし	同期のスケジュールを指定します。
「ScriptVersion (sv) 拡張オプション」 『Mobile Link - クライアント管理』	default	スクリプト・バージョンを指定します。
「SendColumnNames (scn) 拡張オプション」 『Mobile Link - クライアント管理』	OFF	アップロード時にカラム名が送信されるように指定します。
「SendDownloadACK (sa) 拡張オプション」 『Mobile Link - クライアント管理』	OFF	クライアントからサーバにダウンロード確認が送信されるように指定します。
「SendTriggers (st) 拡張オプション」 『Mobile Link - クライアント管理』	OFF	アップロード時にトリガの動作が送信されるように指定します。
「TableOrder (tor) 拡張オプション」 『Mobile Link - クライアント管理』	(なし)	アップロード・ストリームでのテーブルの順序を指定します。
「TableOrderChecking (toc) 拡張オプション」 『Mobile Link - クライアント管理』	ON	外部キーを持つテーブルの前に別のテーブルがアップロードされることがないように、dbmlsync でチェックする必要があるかどうかを指定します。このオプションは、TableOrder を指定する場合に使用します。
「UploadOnly (uo) 拡張オプション」 『Mobile Link - クライアント管理』	OFF	同期がアップロードだけを含むように指定します。
「Verbose (v) 拡張オプション」 『Mobile Link - クライアント管理』	OFF	完全冗長を指定します。 このオプションは dbmlsync -v+ と同じです。
「VerboseHooks (vs) 拡張オプション」 『Mobile Link - クライアント管理』	OFF	フック・スクリプトに関するメッセージのログを取るように指定します。 このオプションは dbmlsync -vs と同じです。
「VerboseMin (vm) 拡張オプション」 『Mobile Link - クライアント管理』	OFF	少量の情報のログを取るように指定します。 このオプションは dbmlsync -v と同じです。

拡張オプション	デフォルト	説明
「VerboseOptions (vo) 拡張オプション」 『Mobile Link - クライアント管理』	OFF	指定したコマンド・ライン・オプション (拡張オプションを含む) に関する情報のログを取るように指定します。 このオプションは dbmlsync -vo と同じです。
「VerboseRowCounts (vn) 拡張オプション」 『Mobile Link - クライアント管理』	OFF	アップロードおよびダウンロードされるローの数のログを取るように指定します。 このオプションは dbmlsync -vn と同じです。
「VerboseRowValues (vr) 拡張オプション」 『Mobile Link - クライアント管理』	OFF	アップロードおよびダウンロードされるローの値のログを取るように指定します。 このオプションは dbmlsync -vr と同じです。
「VerboseUpload (vu) 拡張オプション」 『Mobile Link - クライアント管理』	OFF	アップロード・ストリームに関する情報のログを取るように指定します。 このオプションは dbmlsync -vu と同じです。

注意

同期の接続パラメータを設定する方法は複数あります。

競合するオプションを dbmlsync で解決する方法の詳細については、「優先順位」 『Mobile Link - クライアント管理』 を参照してください。

[システム・トリガ] プロパティ・シート : [一般] タブ

[システム・トリガ] プロパティ・シートの [一般] タブには、次の項目があります。

[名前] システム・トリガが適用される外部キー制約の名前が表示されます。

[タイプ] オブジェクトのタイプが表示されます。

[外部テーブル] 外部キーがあるテーブルが表示されます。

[プライマリ・テーブル] 外部キーに関連付けられたプライマリ・キーまたは一意性制約を含むテーブルが表示されます。

[イベント] システム・トリガを実行させるイベント (カラムの更新または削除) が表示されます。

[タイミング] トリガをイベントの前に実行するかイベントの後に実行するかが表示されます。

[アクション] プライマリ・キーの更新または削除時に、利用できる参照整合性アクションのいずれを使用するかが表示されます。

- ◆ **[値を NULL に設定]** 変更されたプライマリ・キーを参照しているすべての外部キーを NULL に設定します。
- ◆ **[値をデフォルトに設定]** 変更されたプライマリ・キーを参照しているすべての外部キーを、そのカラムのデフォルト値 (テーブル定義で指定された値) に設定します。
- ◆ **[値をカスケード]** このアクションを ON UPDATE と併用した場合、更新されたプライマリ・キーを参照しているすべての外部キーが、新しい値に更新されます。このアクションを ON DELETE と併用した場合、削除されたプライマリ・キーを参照している外部キーがあるすべてのローが削除されます。

参照

- ◆ 「参照整合性アクション」 『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』

[テーブル] プロパティ・シート : [一般] タブ

[テーブル] プロパティ・シートの [一般] タブには、次の項目があります。

[名前] テーブルの名前が表示されます。このフィールドでテーブルの名前を変更できます。

[タイプ] オブジェクトのタイプが表示されます。

[所有者] テーブルを所有するデータベース・ユーザが表示されます。

[DB 領域] テーブルが格納されているデータベース・ファイル (または DB 領域) が表示されます。これはベース・テーブルだけに適用されます。

[コミット・アクション] このオプションは、テーブルがグローバル・テンポラリ・テーブルとして作成された場合にのみ表示されます。COMMIT が実行される時にテーブルのローが削除されるか保存されるかが示されます。コミット・アクションがない場合は、[なし (非トランザクション指向)] と表示されます。

[共有] このコントロールは、テーブルがグローバル・テンポラリ・テーブルとして作成された場合にのみ表示されます。テーブルがすべての接続で共有されるかどうかを示します。

[コメント] テーブルの説明を入力します。たとえば、システムにおけるそのテーブルの目的を、この領域に記述できます。

参照

- ◆ 「テーブルの編集」 『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』
- ◆ 「CREATE TABLE 文」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

[テーブル] プロパティ・シート : [カラム] タブ

[テーブル] プロパティ・シートの [カラム] タブには、次の項目があります。

[カラム] リスト テーブルのすべてのカラムの他に、その ID、データ型、コメントがリストされます。

[詳細] [カラムの詳細] ダイアログが表示され、カラムのプロパティの一覧が表示されます。

参照

- ◆ 「プライマリ・キーの管理 (Sybase Central の場合)」 『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』
- ◆ 「テーブルの編集」 『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』

[テーブル] プロパティ・シート : [パーミッション] タブ

[テーブル] プロパティ・シートの [パーミッション] タブには、次の項目があります。

[パーミッション] リスト テーブルに対するパーミッションを持つユーザがリストされます。リストにユーザを追加する場合は、[付与] をクリックします。リストからユーザを削除するには、ユーザを選択して、[取り消し] をクリックします。[Shift] キーを押しながらクリックすると、複数のユーザを選択できます。

パーミッションの付与または取り消しを行うには、各ユーザの横にあるフィールドをクリックします。ダブルクリックすると (チェック・マークと 2 つの + 記号が表示され)、ユーザに付与オプションが与えられます。

- ◆ **[付与]** [パーミッション付与] ダイアログが表示されます。このダイアログでは、他のユーザまたはグループにテーブルのパーミッションを付与できます。
- ◆ **[取り消し]** ユーザのパーミッションを取り消し、そのユーザを [パーミッション] リストから削除します。

[選択] ユーザの SELECT パーミッションが、すべてのカラムまたはカラムのサブセットのいずれに適用されるかが表示されます。[変更] をクリックすると、カラムのサブセットの SELECT パーミッションが付与されます。

[更新] ユーザの UPDATE パーミッションが、すべてのカラムまたはカラムのサブセットのいずれに適用されるかが表示されます。[変更] をクリックすると、カラムのサブセットの UPDATE パーミッションが付与されます。

[参照] ユーザの REFERENCES パーミッションが、すべてのカラムかカラムのサブセットのいずれに適用されるかが表示されます。[変更] をクリックすると、カラムのサブセットの REFERENCES パーミッションが付与されます。

- ◆ **[変更]** [変更] をクリックすると、カラムのサブセットの REFERENCES パーミッションが付与されます。

参照

- ◆ 「テーブルおよびビューのパーミッションの概要」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』
- ◆ 「テーブルの編集」 『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』

[テーブル] プロパティ・シート : [その他] タブ

[テーブル] プロパティ・シートの [その他] タブには、次の項目があります。

[最大テーブル幅] テーブルの各ローに必要なバイト数が表示されます。この数字は、文字列カラムでは長さ、数値カラムでは精度、その他すべてのデータ型では格納のためのバイト数から計算されます。LONG BINARY または LONG VARCHAR カラムの幅の数値は取得できません。テーブルに LONG BINARY または LONG VARCHAR カラムがある場合、ローの幅を概算して取得します。

[ローの数] テーブルのローの概数を示します。この値を更新するには、[計算] をクリックします。

◆ **[計算]** テーブルのローの数を計算します。

[空き領域] 各テーブル・ページに確保する空き領域のサイズを指定します。空き領域は、データが更新されたときにローのサイズが増えた場合に使用されます。テーブル・ページに空き領域がない場合は、ページのローのサイズが増えるたびに、ローを複数のテーブル・ページに分割することが必要になり、ローの断片化が発生します。また、パフォーマンス低下の可能性がありま

◆ **[デフォルト]** このオプションを選択すると、各ページにデフォルトの空き領域が確保されます。デフォルトでは、各ページに 200 バイトが確保されます。これはベース・テーブルだけに適用されます。

◆ **[パーセンテージ]** このオプションを選択した場合、0 ～ 100 までの整数を指定します。0 を指定すると、各ページに空き領域は残らず、各ページが完全にパックされます。高い値に設定すると、各ローは単独でページに挿入されます。

[ALTER TABLE 文] 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』を参照してください。

[テーブルがデータをレプリケート中] このテーブルをレプリケーション・プライマリ・サイトに含めるには、このオプションを選択します。これはベース・テーブルだけに適用されます。

[テーブル・データは暗号化済み] このオプションを選択すると、暗号化スコープとしてテーブルを指定してデータベースを作成するときに、このテーブルのデータが暗号化されます。これはベース・テーブルだけに適用されます。

レプリケーション・プライマリ・サイトの詳細については、「**プライマリ・サイトのコンポーネント**」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』を参照してください。

参照

◆ 「**テーブルの編集**」 『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』

[テーブル] プロパティ・シート : [検査制約] タブ

このタブが表示されるのは、バージョン 8.0.x の SQL Anywhere で作成されたデータベースに対してだけです。

[テーブル] プロパティ・シートの [検査制約] タブには、次の項目があります。

[検査制約] 単一のカラムや一連のカラムに関する条件を定義することで、テーブルの検査制約を作成できます。検査制約を使用すると、特定のカラム (複数可) に入力可能な値を制約できます。

たとえば、次のように入力すると、従業員の勤務開始日が特定の範囲内かどうかを検査できます。

```
CHECK ( StartDate BETWEEN '1983/06/27'  
        AND CURRENT DATE )
```

「[カラムに対する検査制約の使い方](#)」 『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』を参照してください。

[トリガ] プロパティ・シート : [一般] タブ

[トリガ] プロパティ・シートの [一般] タブには、次の項目があります。

[名前] トリガの名前が表示されます。

[タイプ] オブジェクトのタイプが表示されます。

[テーブル] このトリガが関連付けられているテーブルが表示されます。

[ビュー] このトリガが関連付けられているビューが表示されます。

[構文] 最後に保存されたコードの SQL 構文が表示されます。Watcom-SQL または Transact-SQL です。

[イベント] トリガを実行させるイベント (挿入、削除、更新、カラムの更新) が表示されます。

[タイミング] トリガをイベントの前に実行するか、イベントの後に実行するか、またはイベントの代わりに実行するかが表示されます。ローレベル・トリガには、SQL Remote の競合タイミングも設定できます。トリガが実行されてから、UPDATE または UPDATE OF カラムリスト・イベントが実行されます。

[レベル] トリガがロー・レベルのトリガと文レベルのトリガのどちらであるかが表示されます。

[順序] テーブルのトリガで、同じ種類のイベントに対して同じタイミングで実行されるものの起動順序を表す番号が表示されます。INSTEAD OF トリガに順序を設定することはできません。[タイミング] が [INSTEAD OF] に設定されている場合、このプロパティは表示されません。

[コメント] トリガの説明を入力します。たとえば、システムにおけるそのトリガの目的を、この領域に記述できます。

参照

- ◆ 「[プロシージャとトリガの概要](#)」 『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』
- ◆ 「[プロシージャ、トリガ、バッチの使用](#)」 『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』
- ◆ 「[CREATE TRIGGER 文](#)」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- ◆ 「[INSTEAD OF トリガ](#)」 『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』

[Ultra Light プロジェクト] プロパティ・シート : [一般] タブ

このプロパティ・シートは、バージョン 9.0.2 以前のデータベースに接続している場合にのみ表示されます。

[Ultra Light プロジェクト] プロパティ・シートの [一般] タブには、次の項目があります。

[名前] Ultra Light プロジェクトの名前が表示されます。

[タイプ] オブジェクトのタイプが表示されます。

[Ultra Light 文] プロパティ・シート : [一般] タブ

このプロパティ・シートは、バージョン 9.0.2 以前のデータベースに接続している場合にのみ表示されます。

[Ultra Light 文] プロパティ・シートの [一般] タブには、次の項目があります。

[名前] Ultra Light 文の名前が表示されます。

[タイプ] オブジェクトのタイプが表示されます。

[プロジェクト] この Ultra Light 文が属する Ultra Light プロジェクトの名前が表示されます。

[コード・セグメント] セグメント名を入力する必要があるのは、Palm Computing Platform 対応のマルチセグメント・アプリケーションを開発しているときに Ultra Light のデフォルトの割り当てを上書きする場合だけです。

Palm Computing Platform 用のアプリケーションを構築するときは、コード・セグメント名を入力することで、Ultra Light 文が格納される場所を指定する必要があります。ドロップダウン・リストからセグメント名を選択するか、新しくセグメント名を指定できます。このフィールドを空白にすると、Ultra Light 文はデフォルトのセグメント ULSEGDEF に保存されます。

コード・セグメント名には、先頭が文字の 8 文字以内の文字列を指定してください。空白を含めることはできません。コード・セグメント名には英数字とアンダースコアを使用できます。

コード・セグメントの詳細については、「[Ultra Light データベースの作成と設定](#)」『[Ultra Light - データベース管理とリファレンス](#)』を参照してください。

[Ultra Light 文] プロパティ・シート : [SQL 文] タブ

このプロパティ・シートは、バージョン 9.0.2 以前のデータベースに接続している場合にのみ表示されます。

[Ultra Light 文] プロパティ・シートの [SQL 文] タブには、次の項目があります。

[この Ultra Light 文には次の SQL 文が含まれています。] Ultra Light 文が表示されます。このウィンドウで SQL 文を編集できます。

[一意性制約] プロパティ・シート : [一般] タブ

[一意性制約] プロパティ・シートの [一般] タブには、次の項目があります。

[名前] 一意性制約の名前が表示されます。このフィールドで一意性制約の名前を変更できます。

[タイプ] オブジェクトのタイプが表示されます。

[テーブル] 一意性制約が適用されるテーブルの名前と所有者が表示されます。

[インデックス] 一意性制約の適用に使用されるインデックスの名前が表示されます。

[コメント] 一意性制約の説明を入力します。

参照

- ◆ 「CREATE TABLE 文」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

[一意性制約] プロパティ・シート : [カラム] タブ

[一意性制約] プロパティ・シートの [カラム] タブには、次の項目があります。

[名前] カラムの名前が表示されます。

[ID] 各カラムの ID が表示されます。

[データ型] 選択されているカラムのデータ型が表示されます。

[コメント] 選択されているカラムにコメントが関連付けられている場合は、そのコメントが表示されます。

[詳細] [カラムの詳細] ダイアログが表示され、選択したカラムのプロパティの一覧が表示されます。

参照

- ◆ 「CREATE TABLE 文」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

[ユーザ] プロパティ・シート : [一般] タブ

[ユーザ] プロパティ・シートの [一般] タブには、次の項目があります。

[名前] ユーザの名前が表示されます。

[タイプ] オブジェクトのタイプが表示されます。

[接続可] このオプションを選択すると、ユーザがデータベースに接続できます。ユーザが接続を許可されないと、パスワード (指定されている場合) はアカウントから削除されます。ユーザの接続を許可するように後で変更する場合は、新しいパスワードを指定する必要があります。このオプションをクリアすると、[パスワード] オプションと [パスワードの確認] オプションが無効になります。

ユーザは、ほとんどの場合、接続を許可されます。

- ◆ **[パスワード]** ユーザのパスワードを入力します。パスワードでは大文字と小文字が区別されます。

- ◆ **[パスワードの確認]** [パスワード] テキスト・ボックスに入力したパスワードをもう一度入力して確認します。2つのフィールドの内容は、完全に一致している必要があります。パスワードでは大文字と小文字が区別されます。

[コメント] ユーザの説明を入力します。たとえば、リモート・ユーザがシステムを使用する目的などをここに記述できます。

参照

- ◆ 「GRANT 文」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- ◆ 「REMOTE パーミッションの付与と取り消し」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』
- ◆ 「ユーザ ID とパーミッションの管理」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』

[ユーザ] プロパティ・シート : [権限] タブ

[ユーザ] プロパティ・シートの [権限] タブには、次の項目があります。

[DBA] このオプションを選択すると、ユーザに DBA 権限が付与されます。DBA 権限を持つユーザは、データベースを完全に管理できます。

[リソース] このオプションを選択すると、ユーザに RESOURCE 権限が付与されます。RESOURCE 権限を持つユーザは、データベース・オブジェクトを作成できます。

[リモート DBA] このオプションを選択すると、ユーザに REMOTE DBA 権限が付与されます。Mobile Link クライアント・ユーティリティの dbmlsync には REMOTE DBA 権限が必要です。SQL Remote Message Agent も、このタイプの権限を持つユーザ ID を使用して、セキュリティ・ホールを作らずにアクションを確実に実行する必要があります。

[バックアップ] このオプションを選択すると、ユーザに BACKUP 権限が付与されます。

[検証] このオプションを選択すると、ユーザに VALIDATE 権限が付与されます。VALIDATE 権限を持つユーザは、データベース、テーブル、インデックス、チェックサムの検証など、さまざまな VALIDATE 文を使用した操作を実行できます。

参照

- ◆ 「DBA および RESOURCE 権限の付与」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』
- ◆ 「ユーザ ID とパーミッションの管理」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』
- ◆ 「GRANT 文」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- ◆ 「DBA 権限の概要」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』
- ◆ 「RESOURCE 権限の概要」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』
- ◆ 「GRANT REMOTE DBA 文 [Mobile Link] [SQL Remote]」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- ◆ 「BACKUP 権限の概要」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』
- ◆ 「VALIDATE 権限の概要」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』

[ユーザ] プロパティ・シート : [パーミッション] タブ

[ユーザ] プロパティ・シートの [パーミッション] タブには、次の項目があります。

[パーミッション] リスト ユーザがパーミッションを持っているすべてのテーブルの他に、各テーブルを所有するユーザが表示されます。各テーブルのフィールドをクリックすると、パーミッションの付与または取り消しができます。フィールドをダブルクリックすると(チェック・マークと2つの+記号が表示される)、ユーザにパーミッションの付与オプションを与えることができます。

[表示] [パーミッション] リストに表示するオブジェクトのタイプを選択します。

- ◆ **[テーブル]** ユーザがパーミッションを持っているすべてのテーブル。
- ◆ **[ビュー]** ユーザがパーミッションを持っているすべてのビュー。
- ◆ **[プロシージャとファンクション]** ユーザがパーミッションを持っているすべてのプロシージャとファンクション。プロシージャとファンクションに対して付与できるのは EXECUTE パーミッションだけです。

参照

- ◆ 「テーブルに対するパーミッションの付与」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』
- ◆ 「ビューに対するパーミッションの付与」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』
- ◆ 「パーミッションを付与する権利をユーザに付与する」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』
- ◆ 「REMOTE パーミッションの付与と取り消し」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』

[ビュー] プロパティ・シート : [一般] タブ

[ビュー] プロパティ・シートの [一般] タブには、次の項目があります。

[名前] ビューの名前が表示されます。

[タイプ] オブジェクトのタイプが表示されます。

[所有者] オブジェクトを所有するデータベース・ユーザが表示されます。

[DB 領域] 実体化ビュー (Materialized View) が格納されているデータベース・ファイル(または DB 領域)が表示されます。これは実体化ビュー (Materialized View) だけに適用されます。

[ステータス] オブジェクトのステータスが表示されます。次の値があります。

- ◆ **有効** データベース・サーバでオブジェクトが使用できる状態。このステータスは ENABLED と同義です。つまり、オブジェクトを ENABLE にすると、ステータスが VALID になります。「ビューのステータス」 『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』を参照してください。
- ◆ **無効** 内部処理(依存するオブジェクトのスキーマを変更する処理など)の後にオブジェクトの再コンパイルに失敗した状態。文でオブジェクトが参照されるたびにデータベース・サーバでは再コンパイルが再試行されます。「ビューのステータス」 『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』を参照してください。
- ◆ **無効** ユーザが (ALTER TABLE...DISABLE VIEW DEPENDENCIES 文を使用するなどして) オブジェクトを明示的に無効にした状態。「ビューのステータス」 『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』を参照してください。

[すぐに再コンパイルして有効にする] クリックすると、ビューが再コンパイルされて有効になり、データベースで使用できるようになります。

ビューを有効にする前に、そのビューが参照しているその他のビューが無効であればもう一度有効にする必要があります。「[ビューの有効化と無効化](#)」『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』または「[実体化ビュー \(Materialized View\) の有効化と無効化](#)」『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』を参照してください。

[すぐに無効にする] クリックすると、ビューが無効になります。データベース・サーバでは、ビューの定義はデータベース内に保持されますが、ビューは使用できなくなります。

ビューを無効にすると、そのビューを明示的に参照するクエリと、そのビューを直接または間接的に参照するビューにも影響があります。「[ビューの有効化と無効化](#)」『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』または「[実体化ビュー \(Materialized View\) の有効化と無効化](#)」『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』を参照してください。

[最適化に使用] このオプションを選択すると、クエリの最適化中に実体化ビュー (Materialized View) を使用できるようにするかどうかを指定できます。これは実体化ビュー (Materialized View) だけに適用されます。

[最終更新時刻] ビューが最後に更新された日時が表示されます。これは実体化ビュー (Materialized View) だけに適用されます。

[既知の失効時刻] ビューが失効したと認識された時刻が表示されます。この値は、基本のベース・テーブルの1つが変更されたことが検出された時刻に対応します。これは実体化ビュー (Materialized View) だけに適用されます。

[コメント] ビューの説明を入力します。たとえば、システムにおけるそのビューの目的を、この領域に記述できます。

参照

- ◆ 「[CREATE VIEW 文](#)」『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- ◆ 「[ビューの作成](#)」『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』
- ◆ 「[ビューの編集](#)」『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』
- ◆ 「[実体化ビュー \(Materialized View\) の編集](#)」『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』
- ◆ 「[CREATE MATERIALIZED VIEW 文](#)」『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

[ビュー] プロパティ・シート : [カラム] タブ

[ビュー] プロパティ・シートの [カラム] タブには、次の項目があります。

[カラム] リスト ビューに含まれるカラムがリストされます。

参照

- ◆ 「[ビューの編集](#)」『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』

[ビュー] プロパティ・シート : [パーミッション] タブ

[ビュー] プロパティ・シートの [パーミッション] タブには、次の項目があります。

[パーミッション] リスト ビューに対するパーミッションを持つユーザがリストされます。リストにユーザを追加する場合は、[付与] をクリックします。リストからユーザを削除するには、ユーザを選択して、[取り消し] をクリックします。[Shift] キーを押しながらクリックすると、複数のユーザを選択できます。

特定のユーザのパーミッションの付与または取り消しを行うには、各ユーザの横にあるフィールドをクリックします。ダブルクリックすると (チェック・マークと 2 つの + 記号が表示され)、ユーザに付与オプションが与えられます。

- ◆ **[付与]** [パーミッション付与] ダイアログが表示されます。このダイアログでは、他のユーザまたはグループにテーブルのパーミッションを付与できます。
- ◆ **[取り消し]** ユーザのパーミッションを取り消し、そのユーザを [パーミッション] リストから削除します。

参照

- ◆ 「ビューに対するパーミッションの付与」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』
- ◆ 「ビューの編集」 『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』

[ビュー] プロパティ・シート : [その他] タブ

このタブは、実体化ビュー (Materialized View) だけに適用されます。

[ビュー] プロパティ・シートの [その他] タブには、次の項目があります。

[最大ビュー幅] ビューの各ローに必要なバイト数です。

[ローの数] ビューのローの概数を示します。この値を更新するには、[計算] をクリックします。

- ◆ **[計算]** ビューのローの数を計算します。

[空き領域] 各ビュー・ページに確保する空き領域のサイズを指定します。空き領域は、データが更新されたときにローのサイズが増えた場合に使用されます。ビュー・ページに空き領域がない場合は、ページのローのサイズが増えるたびに、ローを複数のビュー・ページに分割することが必要になり、ローの断片化が発生します。また、パフォーマンス低下の可能性があります。

[ALTER VIEW 文] 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』を参照してください。

- ◆ **[デフォルト]** このオプションを選択すると、ページごとに 200 バイトが予約されます。
- ◆ **[パーセンテージ]** このオプションを選択した場合、0 ~ 100 までの整数を指定します。0 を指定すると、各ページに空き領域は残らず、各ページが完全にパックされます。高い値に設定すると、各ローは単独でページに挿入されます。

[ビュー・データは暗号化済み] 暗号化スコープとしてテーブルを指定してデータベースを作成するときに、このオプションを選択すると、この実体化ビュー (Materialized View) のデータが暗号化されます。

参照

- ◆ 「ビューの編集」 『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』

[Web サービス] プロパティ・シート : [一般] タブ

[Web サービス] プロパティ・シートの [一般] タブには、次の項目があります。

[名前] 選択された Web サービスの名前が表示されます。

[タイプ] オブジェクトのタイプが表示されます。

[サービス・タイプ] 選択された Web サービスが、RAW、XML、HTML、SOAP、DISH のいずれであるかが表示されます。サービス・タイプを変更するには、ドロップダウン・リストから別のタイプを選択します。

[フォーマット] このフィールドは、SOAP サービスと DISH サービスにのみ適用されます。

.NET、Java JAX-RPC などの各種 SOAP クライアントと互換性のある出力フォーマットが生成されます。SOAP サービスのフォーマットを指定しなければ、サービスの DISH サービス宣言からフォーマットが継承されます。DISH サービスがフォーマットを宣言していない場合は、.NET クライアントと互換性のある DNET がデフォルトになります。フォーマット・タイプの異なる複数の DISH サービスを定義すると、フォーマットを宣言していない SOAP サービスをさまざまな種類の SOAP クライアントで使用できるようになります。

[データ型] このフィールドは、SOAP サービスにだけ適用されます。値は次のいずれかです。

- ◆ **OFF** 入力と出力のデータ型指定はありません。これはデフォルトです。
- ◆ **ON** 入力パラメータと結果セットの応答のデータ型指定をサポートします。
- ◆ **IN** 入力パラメータだけのデータ型指定をサポートします。
- ◆ **OUT** すべての SOAP サービス・フォーマットの結果セット応答のデータ型情報を指定します。

[サービス名プレフィクス] このフィールドは、DISH サービスにだけ適用されます。名前がこのプレフィクスで始まる SOAP サービスだけが、DISH サービスによって処理されます。

[権限が必要] ユーザがこの Web サービスを使用するときに認証が必要かどうかを示します。

このオプションを選択すると、認証が必要になります。認証が必要な場合、このサービスに接続するユーザは必ず、ユーザ名とパスワードを入力する必要があります。[ユーザ] フィールドの横にチェック・マークが表示された場合は、指定されたユーザとして認証しないとこの Web サービスを使用できません。一方、[ユーザ] フィールドの横にチェック・マークが表示されず、かつ認証が必要な場合、任意のデータベース・ユーザを使って認証すれば、この Web サービスを使用できます。

認証が必要でない場合、以下のドロップダウン・リストから特定のユーザを選択する必要があります。すべての要求は、[ユーザ] フィールドに指定されたユーザのアカウントとパーミッションを使って実行されます。

[ユーザ] サービス要求の実行に使用されるユーザのアカウントが表示されます。サービスが認証を必要としない場合、このドロップダウン・リストから特定のユーザを選択する必要があります。すべての要求は、このユーザのアカウントとパーミッションを使って実行されます。

[セキュリティが必要] 非セキュアな接続を受け入れるかどうかが表示されます。このオプションを選択すると、Web サービスにセキュリティが必要になります。Web サービスでセキュリティが必要である場合、HTTPS 接続だけが受け入れられます。このオプションをクリアした場合、HTTP 接続と HTTPS 接続の両方が受け入れられます。

[URL パス] URI パスを受け入れるかどうかを指定します。受け入れる場合はその処理方法も指定します。

URL と URI の詳細については、次の項を参照してください。

- ◆ 「URL の解釈方法の概要」 『SQL Anywhere サーバ - プログラミング』
- ◆ 「Web サービス・クライアント関数とプロシージャの作成」 『SQL Anywhere サーバ - プログラミング』

- ◆ **[オフ]** URI パスの後半を許可しない場合は、このオプションを選択します。サービスの名前が通常のスラッシュ (/) で終わる場合、[オフ] を選択します。たとえば、[オフ] を選択し、URL パスが `http://<host-name>/<service-name>/aaa/bbb/cc` の場合、`http://<host-name>/<service-name>` だけが許可されます。URI パスの後半 `/aaa/bbb/cc` は許可されません。
- ◆ **[オン]** URI パスの後半が許可され、その後半が単一のパラメータとして設定される場合に、このオプションを選択します。たとえば、URL パス `http://<host-name>/<service-name>/aaa/bbb/cc` では、URI パスの後半は `/aaa/bbb/cc` です。これは、単一のパラメータとして処理されません。
- ◆ **[要素]** URL パスの後半が許可され、その後半が複数のパラメータとして設定される場合に、このオプションを選択します。たとえば、URL パス `http://<host-name>/<service-name>/aaa/bbb/cc` では、パスの各要素は別個のパラメータとして処理されます。たとえば、`url1=aaa`、`url2=bbb`、`url3=ccc` のようになります。

[コメント] Web サービスの説明を入力します。たとえば、システムにおけるその Web サービスの目的を、この領域に記述できます。

参照

- ◆ 「SQL Anywhere Web サービス」 『SQL Anywhere サーバ - プログラミング』
- ◆ 「CREATE SERVICE 文」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

[Web サービス] プロパティ・シート : [SQL 文] タブ

[Web サービス] プロパティ・シートの [SQL 文] タブには、次の項目があります。

[この Web サービスには次の SQL 文が含まれています。] Web サービスの SQL 文が表示されます (特定の SQL 文が指定されている場合)。このオプションを選択すると、以下のテキスト・ボックスが有効になります。ここで、Web サービスの SQL 文を入力できます。

文とはコマンドのことであり、通常はストアド・プロシージャです。文は、ユーザがサービスにアクセスしたときに呼び出されます。特定の文を定義した場合、それがこのサービスで実行可能な唯一の文となります。文を持たないサービスでは、深刻なセキュリティ上の問題が発生します。というのも、Web クライアントによる任意のコマンドの実行が可能となるからです。そのようなサービスを作成した場合、認証を有効にし、有効なユーザ名とパスワードの入力をすべてのクライアントに要求してください。その場合でも、運用システムでは、文が定義されたサービスだけが実行されるようにしてください。

SQL 文は、SOAP サービスでは必須です。RAW サービス、XML サービス、HTML サービスではオプションであり、DISH サービスでは利用できません。

参照

- ◆ 「Web サービスの作成」 『SQL Anywhere サーバ - プログラミング』
- ◆ 「CREATE SERVICE 文」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

ダイアログ・ボックスの概要

SQL Anywhere プラグインで変更可能な設定のほとんどは、ダイアログ・ボックス上に表示されます。それらのダイアログには、[ファイル]メニューまたは[ツール]メニューからアクセスできます。Sybase Central に他のプラグインがインストールされていると、それらのプラグインによる追加のメニュー項目が表示されることがあります。

[ファイル]メニューには、Sybase Central のメイン・ウィンドウ内に表示されるオブジェクトに関するコマンドがあります。表示されるメニュー項目は、選択されているオブジェクトによって変わります。たとえば、テーブルを選択すると、[ファイル]メニューにはテーブルに関するコマンドやオプションのメニュー項目が表示されます。同じように、カラムを選択すると、[ファイル]メニューにはカラムに関するオプションのメニュー項目が表示されます。これらのメニュー項目はすべて、オブジェクトを右クリックすると表示されるポップアップ・メニューからもアクセスできます。

[ツール]メニューには、接続、切断、プラグイン、Sybase Central のオプションに関するコマンドがあります。これらのメニュー項目は、メイン・ウィンドウ内で選択されているオブジェクトに関係なく、常に表示されます。

また、プロパティ・シートを使って SQL Anywhere の設定を変更することもできます。これらのプロパティ・シートは、設定可能なプロパティがあるオブジェクトを選択すると、[ファイル]メニュー(またはポップアップ・メニュー)に表示されます。

[「SQL Anywhere プロパティ・シートの概要」 30 ページ](#)を参照してください。

[サービスの依存の追加] ダイアログ

[サービスの依存の追加] ダイアログには、次の項目があります。

[リストからサービスを1つ以上選択します。] システムのサービスがすべてリストされます。表示されたリストからサービスを選択して [OK] をクリックすると、そのサービスが、[サービス] プロパティ・シートの [依存性] タブにあるサービスとサービス・グループのリストに追加されます。

[Shift] キーを押したままでクリックすると複数のサービスを選択できます。サービスをダブルクリックすると、選択したサービスが [依存性] タブのリストに追加され、ダイアログが閉じます。

参照

- ◆ 「サービスの依存」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』
- ◆ 「一度に複数のサービスを実行する」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』

[サービス・グループの依存の追加] ダイアログ

[サービス・グループの依存の追加] ダイアログには、次の項目があります。

[リストからサービス・グループを1つ以上選択します。] システムのサービス・グループがすべてリストされます。表示されたリストからサービス・グループを選択して [OK] をクリックする

と、そのサービス・グループが、[サービス] プロパティ・シートの [依存性] タブにあるサービスとサービス・グループのリストに追加されます。

[Shift] キーを押したままでクリックすると複数のサービス・グループを選択できます。ダブルクリックすると、選択したサービス・グループが [依存性] タブのリストに追加され、ダイアログが閉じます。

参照

- ◆ 「サービス・グループの概要」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』
- ◆ 「一度に複数のサービスを実行する」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』

[トレーシング・レベルの追加] ダイアログ

[トレーシング・レベルの追加] ダイアログには、次の項目があります。

[スコープ] ドロップダウン・リストからオプションを選択すると、トレーシングのスコープを指定できます。選択するスコープによっては、別のドロップダウン・リストが表示される場合があります。たとえば、[origin] を選択すると、[オリジン] ドロップダウン・リストが表示され、[external] または [internal] を選択できます。

[トレーシング・タイプ] ドロップダウン・リストからオプションを選択すると、トレーシングのタイプを指定できます。表示されるトレーシングのタイプは、選択した [スコープ] によって異なります。

[条件] ドロップダウン・リストからオプションを選択すると、条件を指定できます。表示される条件は、選択した [トレーシング・タイプ] によって異なります。

[値 (ミリ秒)] 選択した条件の値をミリ秒単位で入力します。このオプションは、条件を選択した場合にのみ使用できます。

参照

- ◆ 「トレーシングの設定の変更」 『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』
- ◆ 「診断トレーシングを使用した詳細なアプリケーション・プロファイリング」 『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』

[設定の変更] ダイアログ

このダイアログでは、コミット時のチェック、NULL 値を許可するかどうか、および更新/削除動作に関する外部キーの設定を変更できます。

[設定の変更] ダイアログには、次の項目があります。

[NULL 値の入力可] 外部キー・カラムに NULL 値を入力できるかどうかを決定します。このオプションを使用するには、すべての外部キー・カラムの [NULL 入力可] を [はい] に設定してください。

- ◆ **[単純]** このオプションを選択すると、参照元テーブルでキー内の 1 つ以上のカラムが NULL であるか、すべてのカラム値が、参照先テーブルのローにある対応するカラム値と一致する場

合に一致するとみなされます。このオプションは、[NULL 値の入力可] を選択した場合にのみ使用できます。

- ◆ **[完全]** このオプションを選択すると、参照元テーブルでキー内のすべてのカラム値が NULL であるか、すべてのカラム値が、参照先テーブルのローにある値と一致する場合に一致するとみなされます。このオプションは、[NULL 値の入力可] を選択した場合にのみ使用できます。

[更新アクション] 次のいずれかの設定を使用して、ユーザがデータを更新しようとしたときのテーブルの動作を定義します。

- ◆ **[使用不可]** 対応する外部キーがない場合は、関連するプライマリ・テーブルのプライマリ・キーの値を更新できないようにします。
- ◆ **[値をカスケード]** 関連するプライマリ・キーの新しい値と一致するように、外部キーを更新します。
- ◆ **[値を NULL に設定]** 関連するプライマリ・テーブルの更新されたプライマリ・キーに対応する外部キー値を、すべて NULL に設定します。
- ◆ **[値をデフォルトに設定]** 更新または削除されたプライマリ・キー値に一致する外部キーの値を、それぞれの外部キー・カラムの DEFAULT 句で指定した値に設定します。このオプションを使用するには、すべての外部キー・カラムにデフォルト値を設定してください。

[削除アクション] 次のいずれかの設定を使用して、ユーザがデータを削除しようとしたときのテーブルの動作を定義します。

- ◆ **[使用不可]** テーブルに対応する外部キーがない場合は、関連するプライマリ・テーブルのプライマリ・キーの値を削除できないようにします。
- ◆ **[値をカスケード]** 関連するプライマリ・テーブルで削除されたプライマリ・キーと一致するローをこのテーブルから削除します。
- ◆ **[値を NULL に設定]** 関連するプライマリ・テーブルで削除されたプライマリ・キーに対応するこのテーブルの外部キー値をすべて NULL に設定します。このオプションを使用するには、すべての外部キー・カラムの [NULL 入力可] を [はい] に設定してください。
- ◆ **[値をデフォルトに設定]** 更新または削除されたプライマリ・キー値に一致する外部キーの値を、それぞれの外部キー・カラムの DEFAULT 句で指定した値に設定します。このオプションを使用するには、すべての外部キー・カラムにデフォルト値を設定してください。

[コミット時にチェック] データベースの COMMIT が完了するまで待機してからこの外部キーの整合性をチェックし、wait_for_commit データベース・オプションの設定を上書きするようにします。

参照

- ◆ 「[外部キー] プロパティ・シート : [一般] タブ」 49 ページ
- ◆ 「外部キーの管理」 『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用方法』
- ◆ 「データ整合性の確保」 『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用方法』
- ◆ 「wait_for_commit オプション [データベース]」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』

[トレーシング・レベルの変更] ダイアログ

[トレーシング・レベルの変更] ダイアログには、次の項目があります。

[レベル] リスト データベースのトレーシング・レベルのリストが表示されます。各レベルのスコープ、名前、レベル、条件、値が表示されます。

[有効化] レベルの横にあるチェックボックスをオンにすると、そのレベルが有効になります。チェックボックスをオフにすると、レベルは有効になりません。

- ◆ **[新規]** [トレーシング・レベルの追加] ダイアログが表示され、新しいトレーシング・レベルを作成できます。
- ◆ **[削除]** 選択されているトレーシング・レベルが削除されます。これは、レベルを選択した場合にのみ使用できます。
- ◆ **[再表示]** トレーシング・レベルのリストが再表示されます。これは、1つ以上のレベルの[有効化] オプションを変更した場合にのみ使用できます。

参照

- ◆ 「トレーシング・セッションの実行中のトレーシングの設定の変更」 『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』
- ◆ 「診断トレーシングを使用した詳細なアプリケーション・プロファイリング」 『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』

[ユーザを統合ユーザに変更] ダイアログ

[ユーザを統合ユーザに変更] ダイアログには、次の項目があります。

[ユーザ] 選択されているユーザの名前が表示されます。

[メッセージ・タイプ] パブリッシャと通信するためのメッセージ・タイプを選択します。

[アドレス] レプリケーション・メッセージの送信先を入力します。パブリッシャと統合ユーザは個別のアドレスを持っています。選択したメッセージ・タイプに対して有効なアドレスを入力してください。たとえば、FTP メッセージ・タイプを選択した場合、有効なアドレスはホスト (ftp.mycompany.com など) または IP アドレス (192.138.151.66 など) です。

[送信頻度] 次のいずれかの値を選択することで、Message Agent の実行頻度を指定します。

- ◆ **[送信して閉じる]** このオプションを選択すると、Message Agent が 1 回の実行で保留中のすべてのメッセージをこの統合ユーザへ送信してから停止するように、レプリケーションの頻度が設定されます。パブリッシャがメッセージを送信する前に毎回 Message Agent を再起動する必要があります。このオプションはリモート・サイト上で Message Agent を実行する場合にのみ有用です。
- ◆ **[次の間隔で送信]** このオプションを選択すると、Message Agent の実行を継続し、この統合ユーザに指定の間隔でメッセージが送信されるようにレプリケーション頻度が設定されます。このオプションは統合サイトでもリモート・サイトでも有用です。

- ◆ **[毎日次の時刻に送信]** このオプションを選択すると、Message Agent の実行を継続し、この統合ユーザに毎日指定時刻にメッセージが送信されるようにレプリケーション頻度が設定されます。このオプションは特にリモート・サイトで有用です。

参照

- ◆ 「GRANT CONSOLIDATE 文 [SQL Remote]」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- ◆ 「メッセージ・タイプの処理」 『SQL Remote』
- ◆ 「REMOTE パーミッションの付与と取り消し」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』
- ◆ 「SQL Remote パーミッションの管理」 『SQL Remote』

[リモート・ユーザに変更] ダイアログ

[リモート・ユーザに変更] ダイアログには、次の項目があります。

[ユーザ] 選択されているユーザの名前が表示されます。

[メッセージ・タイプ] パブリッシャと通信するためのメッセージ・タイプを選択します。

[アドレス] レプリケーション・メッセージの送信先を入力します。パブリッシャとリモート・ユーザは個別のアドレスを持っています。選択したメッセージ・タイプに対して有効なアドレスを入力してください。たとえば、FTP メッセージ・タイプを選択した場合、有効なアドレスはホスト (ftp.mycompany.com など) または IP アドレス (192.138.151.66 など) です。

[送信頻度] 次のいずれかの値を選択することで、Message Agent の実行頻度を指定します。

- ◆ **[送信して閉じる]** このオプションを選択すると、パブリッシャのエージェントが 1 回の実行で保留中のすべてのメッセージをこのリモート・ユーザへ送信し、終了後シャットダウンするように、レプリケーションの頻度が設定されます。エージェントは、パブリッシャがメッセージを送信する前に毎回再起動する必要があります。このオプションはリモート・サイト上で Message Agent を実行する場合にのみ有用です。
- ◆ **[次の間隔で送信]** このオプションを選択すると、パブリッシャのエージェントの実行を継続し、このリモート・ユーザに指定の間隔でメッセージが送信されるようにレプリケーション頻度が設定されます。このオプションは統合サイトでもリモート・サイトでも有用です。
- ◆ **[毎日次の時刻に送信]** このオプションを選択すると、パブリッシャのエージェントの実行を継続し、このリモート・ユーザに毎日指定時刻にメッセージが送信されるようにレプリケーション頻度が設定されます。このオプションは特にリモート・サイトで有用です。

参照

- ◆ 「GRANT REMOTE 文 [SQL Remote]」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- ◆ 「メッセージ・タイプの処理」 『SQL Remote』
- ◆ 「REMOTE パーミッションの付与と取り消し」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』
- ◆ 「SQL Remote パーミッションの管理」 『SQL Remote』

[カラムのパーミッション] ダイアログ

[カラムのパーミッション] ダイアログには、次の項目があります。

[このユーザには次のカラム・パーミッションがあります。] 選択したユーザがテーブルの各カラムに対して持っている、カラムとパーミッションのタイプがリストされます。各カラムの横に表示されるフィールドをクリックすると、パーミッションの付与または取り消しができます。フィールドをダブルクリックすると (チェックマークと 2 つの + 記号が表示される)、ユーザにパーミッションの付与オプションを与えることができます。

[詳細] 選択したカラムの [カラムの詳細] ダイアログが表示されます。[カラムの詳細] ダイアログには、選択したカラムの名前、タイプ、プライマリ・キー、一意性制約、NULL の可否、コメントが表示されます。

参照

- ◆ 「テーブルに対するパーミッションの付与」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』

[接続の詳細] ダイアログ

[接続の詳細] ダイアログには、次の項目があります。

[接続 ID] 選択されているブロックされた接続の接続 ID が表示されます。

[接続名] 接続の名前が表示されます。

[ユーザ] 接続のユーザ ID が表示されます。

[通信リンク] 通信リンクのタイプが表示されます。

[ノード・アドレス] クライアント/サーバ接続のクライアント側に対応するノード・アドレスが表示されます。

[アプリケーション情報] アプリケーション情報が表示されます。

[接続時間] 接続の開始時刻が表示されます。

[切断時刻] 接続が切断された時刻が表示されます。

参照

- ◆ 「デッドロック」 『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』
- ◆ 「sa_conn_info システム・プロシージャ」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

[統合ユーザのオプション] ダイアログ

注意

オプション設定を変更した場合、すぐに有効になる設定もありますが、それ以外の設定を有効にするためにはデータベースを再起動してください。

[統合ユーザのオプション] ダイアログには、次の項目があります。

[統合ユーザ] 選択した統合ユーザの名前が表示されます。

[表示] オプション・タイプのリストが表示されます。たとえば、[データベースのオプション]を選択すると、データベースに関連するオプションのみが [オプション] リストに表示されます。

[オプション] リスト [参照] リストで選択したオプションのタイプに基づいて、オプションの設定とデフォルト値が表示されます。オプションの選択が済んだら、ダイアログの横にあるボタンが使用可能になります。

- ◆ **[新規]** 統合ユーザのオプションを設定しているときは、このボタンは有効になりません。新しいオプションを追加するには、[データベースのオプション] ダイアログを開いてください。[データベースのオプション] ダイアログを開く方法の詳細については、「[データベース・オプションの設定](#)」『[SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法](#)』を参照してください。
- ◆ **[すぐに削除]** 統合ユーザのオプションを設定しているときは、このボタンは有効になりません。オプションを削除するには、[データベースのオプション] ダイアログを開いてください。[データベースのオプション] ダイアログを開く方法の詳細については、「[データベース・オプションの設定](#)」『[SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法](#)』を参照してください。
- ◆ **[一時的な設定を行う]** 統合ユーザのオプション設定を一時的に変更するには、[オプション] リストからオプションを選択して、必要な設定を [値] フィールドに入力し、[一時的な設定を行う] をクリックします。

一時的な設定値は、現在の Sybase Central セッションの間だけ有効です。

- ◆ **[恒久的な設定を行う]** 統合ユーザのオプション設定を永続的に変更するには、[オプション] リストからオプションを選択して、必要な設定を [値] フィールドに入力し、[恒久的な設定を行う] をクリックします。

恒久的な値は、次に明示的に変更されるまでは、セッションが変わっても有効です。

[値] [オプション] リストからオプションを選択して、必要な設定を [値] フィールドに入力します。[一時的な設定を行う] または [恒久的な設定を行う] のどちらかをクリックすると、設定を一時的または恒久的にすることができます。ただし、オプションに PUBLIC グループが設定されていないと、個々のユーザ ID にそのオプション値を設定することはできません。

「[アルファベット順のオプション・リスト](#)」『[SQL Anywhere サーバ - データベース管理](#)』を参照してください。

参照

- ◆ 「[SET OPTION 文](#)」『[SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス](#)』
- ◆ 「[データベースの編集](#)」『[SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法](#)』
- ◆ 「[ユーザ ID とパーミッションの管理](#)」『[SQL Anywhere サーバ - データベース管理](#)』

[トリガ条件の作成] ダイアログ

[トリガ条件の作成] ダイアログには、次の項目があります。

[条件] 事前設定されたトリガ条件をリストから選択します。この条件と値 (以下で指定) が満たされると、選択したイベントがトリガされます。

[演算子] リストから演算子を選択します。比較演算子によって、トリガ条件の条件と値が比較されます。

[値] 条件の値を入力します。この値と条件 (上記で指定) が満たされると、選択したイベントがトリガされます。

参照

- ◆ 「イベントのトリガ条件の定義」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』

[データベースのオプション] ダイアログ

このダイアログで設定するすべてのオプションは、PUBLIC グループに対して設定されます。PUBLIC グループのオプション値を変更すると、独自の数値を設定していない全ユーザのオプション値を変更することになります。ただし、オプションに PUBLIC グループが設定されていないと、個々のユーザ ID にそのオプション値を設定することはできません。

注意

オプションを変更した場合、すぐに有効になる設定もありますが、それ以外の設定を有効にするためにはデータベースを再起動してください。

[データベースのオプション] ダイアログには、次の項目があります。

[データベース] 選択されているデータベースの名前が表示されます。

[表示] オプション・タイプのリストが表示されます。たとえば、[データベースのオプション] を選択すると、データベースに関連するオプションのみが [オプション] リストに表示されます。

[オプション] リスト [参照] リストで選択したオプションのタイプに基づいて、オプションの設定とデフォルト値が表示されます。オプションの選択が済んだら、ダイアログの横にあるボタンが使用可能になります。

- ◆ **[新規]** [パブリック・オプションの作成] ダイアログが表示されます。このダイアログで、新しいオプションを定義して値を設定できます。
- ◆ **[すぐに削除]** 選択されているオプションをリストから削除します。
- ◆ **[一時的な設定を行う]** データベースのオプション設定を一時的に変更するには、[オプション] リストからオプションを選択して、必要な設定を [値] フィールドに入力し、[一時的な設定を行う] をクリックします。

一時的な設定値は、現在の Sybase Central セッションの間だけ有効です。

- ◆ **[恒久的な設定を行う]** データベースのオプション設定を永続的に変更するには、[オプション] リストからオプションを選択して、必要な設定を [値] フィールドに入力し、[恒久的な設定を行う] をクリックします。

恒久的な値は、次に明示的に変更されるまでは、セッションが変わっても有効です。

[値] [オプション] リストからオプションを選択して、必要な設定を [値] フィールドに入力します。[一時的な設定を行う] または [恒久的な設定を行う] のどちらかをクリックすると、設定を一時的または恒久的にすることができます。

「アルファベット順のオプション・リスト」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』 を参照してください。

参照

- ◆ 「SET OPTION 文」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- ◆ 「データベースの編集」 『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』
- ◆ 「ユーザ ID とパーミッションの管理」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』

[トリガ条件の編集] ダイアログ

[トリガ条件の編集] ダイアログには、次の項目があります。

[条件] 事前設定されたトリガ条件をリストから選択します。この条件と値 (以下で指定) が満たされると、選択したイベントがトリガされます。

[演算子] リストから演算子を選択します。比較演算子によって、トリガ条件の条件と値が比較されます。

[値] 条件の値を入力します。この値と条件 (上記で指定) が満たされると、選択したイベントがトリガされます。

参照

- ◆ 「イベントのトリガ条件の定義」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』

[所有者別にオブジェクトをフィルタ] ダイアログ

[所有者別にオブジェクトをフィルタ] ダイアログには、次の項目があります。

[データベース] 選択されているデータベースの名前が表示されます。

[表示するオブジェクトを持つユーザとグループを選択します] データベースに接続しているすべてのユーザとグループの名前とコメントがリストされます。ユーザまたはグループの横のチェックボックスを選択すると、オブジェクトが表示されます。

システム・テーブルはユーザ SYS が所有します。

[すべて選択] このオプションを選択すると、リストのすべてのユーザに属するオブジェクトが表示されます。

[すべてをクリア] このオプションを選択すると、[ユーザ] リストのすべてのチェックボックスがクリアされます。

[デフォルトに戻す] [デフォルトに戻す] をクリックすると、このタブのユーザのリストがデフォルト値 (選択または選択解除) に戻ります。

参照

- ◆ 「データベースの編集」 『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』
- ◆ 「データベースのシステム・オブジェクトの表示」 『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』

[パーミッション付与] ダイアログ

[パーミッション付与] ダイアログには、次の項目があります。

[リストから 1 つ以上のユーザとグループを選択] パーミッションを付与できるユーザまたはグループがリストされます。ユーザを選択して [OK] をクリックすると、選択したテーブル、プロシージャ、関数、またはビューのパーミッションがユーザまたはグループに付与されます。ユーザまたはグループをダブルクリックすると、選択したデータベース・オブジェクトのパーミッションがユーザまたはグループに付与され、ダイアログが閉じます。

[Shift] キーを押したままでユーザまたはグループの名前をクリックすると、複数のユーザにパーミッションを付与できます。

参照

- ◆ 「テーブルに対するパーミッションの付与」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』
- ◆ 「GRANT 文」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

[グラフィカルなプラン] ダイアログ

[グラフィカルなプラン] ダイアログには、次の項目があります。

[記録されたグラフィカルなプラン] オプティマイザによって検討された、選択されているクエリのプランがグラフィカルに表示されます。グラフィカルなプラン内のオブジェクトをクリックすると、詳細が表示されます。

[詳細] 選択されているオブジェクトの詳細情報が表示されます。

参照

- ◆ 「グラフィカルなプラン」 『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』

[グループのオプション] ダイアログ

注意

オプションを変更した場合、すぐに有効になる設定もありますが、それ以外の設定を有効にするためにはデータベースを再起動してください。

[グループのオプション] ダイアログには、次の項目があります。

[グループ] 選択されているグループの名前が表示されます。

[表示] オプション・タイプのリストが表示されます。たとえば、[データベースのオプション]を選択すると、データベースに関連するオプションのみが [オプション] リストに表示されます。

[オプション] リスト [参照] リストで選択したオプションのタイプに基づいて、オプションの設定とデフォルト値が表示されます。オプションの選択が済んだら、ダイアログの横にあるボタンが使用可能になります。

- ◆ **[新規]** グループのオプションを設定しているときは、このボタンは有効になりません。[オプション] リストに新たにオプションを追加するには、[データベースのオプション] ダイアログを開いてください。[データベースのオプション] ダイアログを開く方法の詳細については、「データベース・オプションの設定」『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』を参照してください。
- ◆ **[すぐに削除]** グループのオプションを設定しているときは、このボタンは有効になりません。[オプション] リスト内のオプションを削除するには、[データベースのオプション] ダイアログを開いてください。[データベースのオプション] ダイアログを開く方法の詳細については、「データベース・オプションの設定」『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』を参照してください。
- ◆ **[一時的な設定を行う]** グループのオプション設定を一時的に変更するには、[オプション] リストからオプションを選択して、必要な設定を [値] フィールドに入力し、[一時的な設定を行う] をクリックします。

一時的な設定値は、現在の Sybase Central セッションの間だけ有効です。

- ◆ **[恒久的な設定を行う]** グループのオプション設定を永続的に変更するには、[オプション] リストからオプションを選択して、必要な設定を [値] フィールドに入力し、[恒久的な設定を行う] をクリックします。

恒久的な値は、次に明示的に変更されるまでは、セッションが変わっても有効です。

[値] [オプション] リストからオプションを選択して、必要な設定を [値] フィールドに入力します。[一時的な設定を行う] または [恒久的な設定を行う] のどちらかをクリックすると、設定を一時的または恒久的にすることができます。ただし、オプションに PUBLIC グループが設定されていないと、グループにそのオプション値を設定することはできません。

「アルファベット順のオプション・リスト」『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』を参照してください。

参照

- ◆ 「SET OPTION 文」『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- ◆ 「データベースの編集」『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』
- ◆ 「ユーザ ID とパーミッションの管理」『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』

[新しいメンバ] ダイアログ

[新しいメンバ] ダイアログには、次の項目があります。

[リストから 1 つ以上のユーザとグループを選択] 選択されたグループに追加可能なデータベース内のすべてのユーザとグループの、名前とコメントがリストされます。

[新しいメンバシップ] ダイアログ

[新しいメンバシップ] ダイアログには、次の項目があります。

[リストから 1 つ以上のグループを選択] 選択されたユーザまたはグループを追加可能なデータベース内のすべてのグループの、名前とコメントがリストされます。

[分析を開くかトレーシング・データベースに接続] ダイアログ

[分析を開くかトレーシング・データベースに接続] ダイアログには、次の項目があります。

[アプリケーション・プロファイリング・ウィザードで作成された分析ファイル内] このオプションを選択すると、プロファイリング情報が分析ファイルに含まれることを指定できます。

◆ **[分析ファイル名]** ドロップダウン・リストから分析ファイルを選択するか、[参照] をクリックしてファイルを指定します。このオプションは [分析ファイル内] を選択した場合にのみ使用できます。

◆ **[説明]** 選択されている分析ファイルに関連する説明が表示されます。このオプションは [分析ファイル内] を選択した場合にのみ表示されます。

◆ **[ユーザ名]** プロファイリング対象のデータベースへのログインに必要なユーザ名。

◆ **[パスワード]** プロファイリング対象のデータベースへのログインに必要なパスワード。

[トレーシング・データベース内] このオプションを選択すると、プロファイリング情報がトレーシング・データベースに含まれることを指定できます。

参照

◆ 「**アプリケーション・プロファイリング**」 『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』

[オプション] ダイアログ : [更新のチェック] タブ

SQL Anywhere がソフトウェアの更新をチェックするかどうか、およびチェックする場合はその頻度を設定できます。更新のチェックは、Interactive SQL、Sybase Central、または SQL Anywhere コンソール・ユーティリティを開いたときに行われます。

任意のタイミングで更新をチェックできます。それには、[スタート] メニューで [プログラム] - [SQL Anywhere 10] - [更新のチェック] を選択するか、Sybase Central、Interactive SQL、SQL Anywhere コンソール・ユーティリティの [ヘルプ] メニューを使用します。

Sybase Central の [オプション] ダイアログの [更新のチェック] タブには、次の項目があります。

[更新をチェックする頻度を指定してください。] 次のいずれかのオプションを選択して、SQL Anywhere によって更新をチェックする頻度を指定します。デフォルトでは、[チェックしない] が選択されています。

- ◆ **[アプリケーションの起動時]** このオプションを選択すると、Interactive SQL、Sybase Central、コンソール・ユーティリティを起動するたびに、SQL Anywhere によって更新がチェックされます。
- ◆ **[毎日]** このオプションを選択すると、毎日 Interactive SQL、Sybase Central、コンソール・ユーティリティが初めて起動されたときに、SQL Anywhere によって更新がチェックされます。
- ◆ **[週 1 回]** このオプションを選択すると、毎週 Interactive SQL、Sybase Central、SQL Anywhere コンソール・ユーティリティが初めて起動されたときに、SQL Anywhere によって更新がチェックされます。
- ◆ **[月 1 回]** このオプションを選択すると、毎月 Interactive SQL、Sybase Central、SQL Anywhere コンソール・ユーティリティが初めて起動されたときに、SQL Anywhere によって更新がチェックされます。
- ◆ **[チェックしない]** このオプションを選択すると、SQL Anywhere によって更新はチェックされません。これはデフォルト設定です。

[チェックする項目を指定してください。] 次のオプションを自由に組み合わせて、SQL Anywhere でチェックする更新の種類を指定します。デフォルトでは、次のオプションはすべて選択されています。

- ◆ **[Express Bug Fix]** このオプションを選択すると、SQL Anywhere によって Express Bug Fix がチェックされます。

Express Bug Fix は、1 つ以上のバグ・フィックスが含まれる、ソフトウェアのサブセットです。これらのバグ・フィックスは、更新のリリース・ノートにリストされます。バグ・フィックス更新を適用できるのは、同じバージョン番号を持つインストール済みのソフトウェアに対してだけです。このソフトウェアについては、ある程度のテストが行われているとはいえ、完全なテストが行われたわけではありません。自分自身でソフトウェアの妥当性を確かめるまでは、アプリケーションとともにこれらのファイルを配布しないでください。
- ◆ **[メンテナンス・リリース]** このオプションを選択すると、SQL Anywhere によってソフトウェアのメンテナンス・リリースがチェックされます。

メンテナンス・リリースは、同じメジャー・バージョン番号を持つ旧バージョンのインストール済みソフトウェアをアップグレードするための完全なソフトウェア・セットです (バージョン番号のフォーマットは、**メジャー.マイナー.パッチ.ビルド**です)。バグ・フィックスとその他の変更については、アップグレードのリリース・ノートにリストされます。
- ◆ **[その他の情報]** このオプションを選択すると、その他の情報 (新製品のリリースや予定されているイベントなど) がチェックされます。

[オプション] ダイアログ : [ロギング] タブ

[オプション] ダイアログの [ロギング] タブには、次の項目があります。

[ロギングを可能にする] このオプションを選択すると、データベースのロギングが有効になります。

◆ **[日付と時刻を出力に追加]** このオプションを選択すると、ログ・ウィンドウまたはログ・ファイルに各 SQL 文を発行した日付と時刻が付加されます。

[テキストをラップ] [サーバ・メッセージと実行された SQL] ウィンドウ枠またはログ・ファイルの各行の長さを指定します。1 行の長さが設定された文字数になると自動的に次の行に折り返されます。デフォルトで、1 行は 80 文字です。

[保存] [保存] をクリックすると、ロギング情報がファイルに保存されます。

[クリア] [サーバ・メッセージと実行された SQL] ウィンドウ枠で選択したタブの内容がクリアされます。

[プラグインの環境設定] ダイアログ : [一般] タブ

[プラグインの環境設定] ダイアログの [一般] タブには、次の項目があります。

[設定] [一般] タブのユーザ設定によって、Sybase Central 内でユーザが特定のタスクを実行したときの SQL Anywhere の応答方法が決定されます。

◆ **[DBA 権限のないユーザ ID と接続したときに警告する]** この設定を選択すると、DBA 権限のないユーザ ID で接続しようとしたときに、警告メッセージが表示されます。すべてのプラグイン機能を有効にするには、DBA 権限を持ったユーザ ID でログインする必要があります。

◆ **[インデックスに概数値データ型のカラムがある場合に警告する]** この設定を選択すると、概数値データ型のカラムがインデックスにある場合に警告が表示されます。プライマリ・キーや、一意性制約があるカラムには FLOAT や DOUBLE などの概数値データ型を使用しないことをおすすめします。概数値データ型は、算術演算後の丸め誤差がでます。

◆ **[デバッグ中にブレークポイントが検出されたときに通知する]** この設定を選択すると、デバッグ・モードでの作業中にブレークポイントが検出されたときに、通知メッセージが表示されます。

◆ **[デバッグ中に文がキャンセルされたときに通知する]** このオプションを選択すると、デバッグ・モードでの作業中に文がキャンセルされたときに、通知メッセージが表示されます。

◆ **[クリップボードとドラッグ・アンド・ドロップ操作でグループへのユーザの追加を確認する]** Sybase Central では、ドラッグ・アンド・ドロップ操作とコピー・アンド・ペースト操作を使用して、ユーザやグループを追加できます。

この設定を選択すると、ドラッグ・アンド・ドロップまたはコピー・アンド・ペーストでユーザまたはグループが追加される前に Sybase Central から確認プロンプトが表示されます。

◆ **[クリップボードとドラッグ・アンド・ドロップ操作でパーミッションの付与を確認する]** Sybase Central では、ドラッグ・アンド・ドロップ操作とコピー・アンド・ペースト操作を使用して、テーブル、ビュー、プロシージャ、関数のパーミッションをユーザまたはグループに付与することができます。

この設定を選択すると、テーブル、ビュー、プロシージャ、または関数にユーザまたはグループをドラッグする操作やコピー・アンド・ペーストする操作をした場合、パーミッションが付与される前に Sybase Central から確認プロンプトが表示されます。

- ◆ **[クリップボードとドラッグ・アンド・ドロップ操作で SQL Remote サブスクリプションの作成を確認する]** Sybase Central では、ドラッグ・アンド・ドロップ操作とコピー・アンド・ペースト操作を使用して、リモート・ユーザと統合ユーザ用の SQL Remote サブスクリプションを作成できます。

この設定を選択すると、リモート・ユーザまたは統合ユーザをパブリケーションにドラッグする操作やコピー・アンド・ペーストする操作をした場合、ユーザをパブリケーションにサブスクライブする前に、Sybase Central から確認プロンプトが表示されます。

- ◆ **[クリップボードとドラッグ・アンド・ドロップ操作で Mobile Link 同期サブスクリプションの作成を確認する]** Sybase Central では、ドラッグ・アンド・ドロップ操作とコピー・アンド・ペースト操作を使用して、Mobile Link ユーザ用の同期サブスクリプションを作成できます。

この設定を選択すると、Mobile Link ユーザをパブリケーションにドラッグする操作やコピー・アンド・ペーストする操作をした場合、Mobile Link ユーザをパブリケーションにサブスクライブする前に、Sybase Central から確認プロンプトが表示されます。

- ◆ **[テーブル・データ編集時に削除を確認する]** この設定を選択すると、Sybase Central の [データ] タブでデータを削除する前に SQL Anywhere から確認プロンプトが表示されます。
- ◆ **[テーブル・データ編集時に更新を確認する]** この設定を選択すると、Sybase Central の [データ] タブでデータを更新する前に SQL Anywhere から確認プロンプトが表示されます。
- ◆ **[テーブル・データ編集時に更新を明示的に確認する]** この設定を選択すると、Sybase Central で暗黙的な更新が実行される前に SQL Anywhere から確認プロンプトが表示されます。暗黙的な更新が実行されるのは、[データ] タブで特定のローを編集しているときに、Sybase Central 内のそのロー以外の場所をクリックした場合です。
- ◆ **[テーブル・データ編集時にキャンセルを確認する]** この設定を選択すると、Sybase Central の [データ] タブでテーブル・データの変更をキャンセルする前に Sybase Central から確認プロンプトが表示されます。
- ◆ **[メンテナンス・プランの開始時に情報ダイアログを表示する]** この設定を選択すると、メンテナンス・プランを選択し、メニューから [ただちに実行] を選択することでプランを開始したときに Sybase Central から情報ダイアログが表示されます。
- ◆ **[メンテナンス・プランに関連するイベントを変更または削除するときに警告ダイアログを表示する]** この設定を選択すると、メンテナンス・プランに関連付けられているイベントを変更または削除したときに Sybase Central から警告ダイアログが表示されます。

[デフォルトに戻す] [デフォルトに戻す] をクリックすると、このタブのユーザ設定がデフォルト値 (選択または選択解除) に戻ります。デフォルトでは、このタブのすべてのユーザ設定が選択されています。

[プラグインの環境設定] ダイアログ : [ユーティリティ] タブ

[プラグインの環境設定] ダイアログの [ユーティリティ] タブには、次の項目があります。

【設定】 [ユーティリティ] タブのユーザ設定によって、ウィザードの概要ページを表示するかどうかと、ウィザード完了後にウィザードのメッセージ・ウィンドウを閉じるかどうかは制御されます。

- ◆ **[データベース作成ウィザードの概要ページを表示する]** この設定を選択すると、[データベース作成] ウィザードを開いたときにウィザードの概要ページが表示されます。
- ◆ **[データベース・アップグレード・ウィザードの概要ページを表示する]** この設定を選択すると、[データベースのアップグレード] ウィザードを開いたときにウィザードの概要ページが表示されます。
- ◆ **[データベース・バックアップ・ウィザードの概要ページを表示する]** この設定を選択すると、[データベースのバックアップ] ウィザードを開いたときにウィザードの概要ページが表示されます。
- ◆ **[データベース・リストア・ウィザードの概要ページを表示する]** この設定を選択すると、[データベースのリストア] ウィザードを開いたときにウィザードの概要ページが表示されます。
- ◆ **[バックアップ・イメージ作成ウィザードの概要ページを表示する]** この設定を選択すると、[イメージのバックアップ作成] ウィザードを開いたときにウィザードの概要ページが表示されます。
- ◆ **[データベース・アンロード・ウィザードの概要ページを表示する]** この設定を選択すると、[データベースのアンロード] ウィザードを開いたときにウィザードの概要ページが表示されます。
- ◆ **[データベース抽出ウィザードの概要ページを表示する]** この設定を選択すると、[データベースの抽出] ウィザードを開いたときにウィザードの概要ページが表示されます。
- ◆ **[データベース検証ウィザードの概要ページを表示する]** この設定を選択すると、[データベースの検証] ウィザードを開いたときにウィザードの概要ページが表示されます。
- ◆ **[データベースの圧縮ウィザードの概要ページを表示する]** この設定を選択すると、[データベースの圧縮] ウィザードを開いたときにウィザードの概要ページが表示されます。
- ◆ **[データベース展開ウィザードの概要ページを表示する]** この設定を選択すると、[データベースの展開] ウィザードを開いたときにウィザードの概要ページが表示されます。
- ◆ **[ライト・ファイルの作成ウィザードの概要ページを表示する]** この設定を選択すると、[ライト・ファイルの作成] ウィザードを開いたときにウィザードの概要ページが表示されます。
- ◆ **[ログ・ファイル変換ウィザードの概要ページを表示する]** この設定を選択すると、[ログ・ファイルの変換] ウィザードを開いたときにウィザードの概要ページが表示されます。
- ◆ **[ログ・ファイル設定変更ウィザードの概要ページを表示する]** この設定を選択すると、[ログ・ファイル設定の変更] ウィザードを開いたときにウィザードの概要ページが表示されます。
- ◆ **[データベース消去ウィザードの概要ページを表示する]** この設定を選択すると、[データベースの消去] ウィザードを開いたときにウィザードの概要ページが表示されます。

- ◆ **[データベース移行ウィザードの概要ページを表示する]** この設定を選択すると、[データベースの移行] ウィザードを開いたときにウィザードの概要ページが表示されます。
- ◆ **[インデックス・コンサルタントの概要ページを表示する]** この設定を選択すると、インデックス・コンサルタントを開いたときに概要ページが表示されます。
- ◆ **[完了後にウィザードのメッセージ・ウィンドウを閉じる]** この設定を選択すると、ウィザードを完了した後にメッセージ・ウィンドウを閉じます。デフォルトでは、この設定は選択されていません。
- ◆ **[アプリケーション・プロファイリング・ウィザードの概要ページを表示する]** この設定を選択すると、[アプリケーション・プロファイリング] ウィザードを開いたときにウィザードの概要ページが表示されます。
- ◆ **[アプリケーション・プロファイリング・ウィザードを表示する]** この設定を選択すると、[アプリケーション・プロファイリング] ウィザードが表示されます。
- ◆ **[トレーシング・ウィザードの概要ページを表示する]** この設定を選択すると、[トレーシング] ウィザードを開いたときにウィザードの概要ページが表示されます。
- ◆ **[バージョン 9.0.2 以前のソフトウェアで作成されたデータベースをアップグレードするときに警告する]** この設定を選択すると、バージョン 9.0.2 以前のソフトウェアで作成されたデータベースのアップグレード時に警告が表示されます。バージョン 10 のデータベースを作成するには、[データベースのアンロード] ウィザードを使用する必要があります。
- ◆ **[データベースのアンロード時に実行中のデータベース・ファイル名が指定されたときに警告する]** この設定は、[データベース・アンロード] ウィザードにのみ適用されます。アンロードするデータベースが実行中のときに [データベース・アンロード] ウィザードを起動すると、アンロードの前に SQL Anywhere データベース・サーバによってデータベースが自動的に停止されます。データベースの停止の前に警告を表示させたい場合は、この設定を選択してください。

[データベース・アンロード] ウィザードの使用 『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』を参照してください。

[デフォルトに戻す] [デフォルトに戻す] をクリックすると、このタブのユーザ設定がデフォルト値 (選択または選択解除) に戻ります。デフォルトでは、[完了後にウィザードのメッセージ・ウィンドウを閉じる] を除いてこのタブのすべてのユーザ設定が選択されています。

[プラグインの環境設定] ダイアログ : [テーブル・データ] タブ

[プラグインの環境設定] ダイアログの [テーブル] タブには、次の項目があります。

[このテーブル・データの表示に使用するフォントを指定してください。] 次のオプションのいずれかを選択することで、Sybase Central でテーブル・データを表示するときに [データ] タブのテーブル・データで使用するフォントを指定します。

- ◆ **[システム]** コンピュータの標準のテキスト・フォントを使用する場合は、このオプションを選択します。これはデフォルト設定です。

- ◆ **[エディタ]** コード・エディタと同じフォントを使用する場合は、このオプションを選択します。
「コード・エディタの使用」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』を参照してください。
- ◆ **[カスタム]** 使用するフォント、フォント・スタイル、ポイント・サイズを指定する場合は、このオプションを選択します。[参照]をクリックすると、[フォント]ダイアログで目的の設定を選択できます。

[DB 領域の事前割り付け] ダイアログ

[DB 領域の事前割り付け] ダイアログには、次の項目があります。

[DB 領域に事前割り付けする領域のサイズを指定してください。] DB 領域に事前割り付けする領域のサイズを入力します。DB 領域にディスク領域を事前割り付けすると、対応するデータベース・ファイルのサイズがその分だけ大きくなります。

データベースの「ページ・サイズ」は、データベース作成時に固定化されるので、変更できません。

参照

- ◆ 「ALTER DBSPACE 文」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- ◆ 「データベース・ファイル用領域の事前割り付け」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』

[パブリッシャのオプション] ダイアログ

注意

オプション設定を変更した場合、すぐに有効になる設定もありますが、それ以外の設定を有効にするためにはデータベースを再起動してください。

[パブリッシャのオプション] ダイアログには、次の項目があります。

[パブリッシャ] パブリッシャの名前が表示されます。

[表示] オプション・タイプのリストが表示されます。たとえば、[データベースのオプション]を選択すると、データベースに関連するオプションのみが[オプション]リストに表示されます。

[オプション] リスト [参照] リストで選択したオプションのタイプに基づいて、オプションの設定とデフォルト値が表示されます。オプションの選択が済んだら、ダイアログの横にあるボタンが使用可能になります。

- ◆ **[新規]** パブリッシャのオプションを設定しているときは、このボタンは有効になりません。新しいオプションを追加するには、[データベースのオプション]ダイアログを開いてください。

- ◆ **[すぐに削除]** パブリッシャのオプションを設定しているときは、このボタンは有効になりません。オプションを削除するには、[データベースのオプション] ダイアログを開いてください。
- ◆ **[一時的な設定を行う]** パブリッシャのオプション設定を一時的に変更するには、[オプション] リストからオプションを選択して、必要な設定を [値] フィールドに入力し、[一時的な設定を行う] をクリックします。

一時的な設定値は、現在の Sybase Central セッションの間だけ有効です。

- ◆ **[恒久的な設定を行う]** パブリッシャのオプション設定を永続的に変更するには、[オプション] リストからオプションを選択して、必要な設定を [値] フィールドに入力し、[恒久的な設定を行う] をクリックします。

恒久的な値は、次に明示的に変更されるまでは、セッションが変わっても有効です。

[値] [オプション] リストからオプションを選択して、必要な設定を [値] フィールドに入力します。[一時的な設定を行う] または [恒久的な設定を行う] のどちらかをクリックすると、設定を一時的または恒久的にすることができます。ただし、オプションに PUBLIC グループが設定されていないと、個々のユーザ ID にそのオプション値を設定することはできません。

「アルファベット順のオプション・リスト」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』を参照してください。

参照

- ◆ 「SET OPTION 文」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- ◆ 「データベースの編集」 『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』
- ◆ 「ユーザ ID とパーミッションの管理」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』

[クエリ書き換え最適化履歴] ダイアログ

[クエリ書き換え最適化履歴] ダイアログには、次の項目があります。

[履歴] SQL 文に適用された各タイプの書き換え最適化に関する詳細情報と、SQL のテキストが変更された結果が表示されます。

参照

- ◆ 「クエリの最適化と実行」 『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』

[推奨] ダイアログ

[推奨] ダイアログには、次の項目があります。

[説明] アプリケーション・プロファイリングの推奨内容に関する説明が表示されます。

[詳細] (または [SQL スクリプト]) 選択されている推奨内容に関連する詳細が表示されます。

- ◆ **上矢印** 上矢印をクリックすると、前の推奨内容が表示されます。

- ◆ **下矢印** 下矢印をクリックすると、次の推奨内容が表示されます。

[保存] 選択されている推奨内容をファイルに保存できます。

[削除] 選択されている推奨内容を削除します。

参照

- ◆ 「アプリケーション・プロファイリング」 『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』
- ◆ 「診断トレーシング情報の分析」 『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』

[リモート・ユーザのオプション] ダイアログ

注意

オプション設定を変更した場合、すぐに有効になる設定もありますが、それ以外の設定を有効にするためにはデータベースを再起動してください。

[リモート・ユーザのオプション] ダイアログには、次の項目があります。

[リモート・ユーザ] 選択したリモート・ユーザの名前が表示されます。

[表示] オプション・タイプのリストが表示されます。たとえば、[データベースのオプション]を選択すると、データベースに関連するオプションのみが[オプション]リストに表示されます。

[オプション] リスト [参照] リストで選択したオプションのタイプに基づいて、オプションの設定とデフォルト値が表示されます。オプションの選択が済んだら、ダイアログの横にあるボタンが使用可能になります。

- ◆ **[新規]** リモート・ユーザのオプションを設定しているときは、このボタンは有効になりません。新しいオプションを追加するには、[データベースのオプション] ダイアログを開いてください。[データベースのオプション] ダイアログを開く方法の詳細については、「データベース・オプションの設定」 『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』を参照してください。
- ◆ **[すぐに削除]** リモート・ユーザのオプションを設定しているときは、このボタンは有効になりません。オプションを削除するには、[データベースのオプション] ダイアログを開いてください。[データベースのオプション] ダイアログを開く方法の詳細については、「データベース・オプションの設定」 『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』を参照してください。
- ◆ **[一時的な設定を行う]** リモート・ユーザのオプション設定を一時的に変更するには、[オプション] リストからオプションを選択して、必要な設定を[値] フィールドに入力し、[一時的な設定を行う]をクリックします。

一時的な設定値は、現在の Sybase Central セッションの間だけ有効です。

- ◆ **[恒久的な設定を行う]** リモート・ユーザのオプション設定を永続的に変更するには、[オプション] リストからオプションを選択して、必要な設定を[値] フィールドに入力し、[恒久的な設定を行う]をクリックします。

恒久的な値は、次に明示的に変更されるまでは、セッションが変わっても有効です。

[値] [オプション] リストからオプションを選択して、必要な設定を [値] フィールドに入力します。[一時的な設定を行う] または [恒久的な設定を行う] のどちらかをクリックすると、設定を一時的または恒久的にすることができます。ただし、オプションに PUBLIC グループが設定されていないと、個々のユーザ ID にそのオプション値を設定することはできません。

「アルファベット順のオプション・リスト」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』を参照してください。

参照

- ◆ 「SET OPTION 文」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- ◆ 「データベースの編集」 『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』
- ◆ 「ユーザ ID とパーミッションの管理」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』

[統合ユーザの設定] ダイアログ

[統合ユーザの設定] ダイアログには、次の項目があります。

[リストから新しい統合ユーザを選択] データベースの統合ユーザを選択できるユーザがリストされます。ユーザを選択して [OK] をクリックすると、選択したユーザに CONSOLIDATED パーミッションが付与されます。ユーザをダブルクリックすると、CONSOLIDATE パーミッションがそのユーザに付与され、ダイアログが閉じます。

1 つのデータベースで選択できる統合ユーザは 1 名のみです。統合ユーザの名前は、[データベース] プロパティ・シートの [SQL Remote] タブに表示されます。

参照

- ◆ 「GRANT CONSOLIDATE 文 [SQL Remote]」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- ◆ 「SQL Remote パーミッションの管理」 『SQL Remote』

[クラスタード・インデックスの設定] ダイアログ

クラスタード・インデックスは、バージョン 8.0.2 以降の SQL Anywhere データベースでサポートされます。

[クラスタード・インデックスの設定] ダイアログには、次の項目があります。

[テーブル] クラスタード・インデックス設定対象のテーブルの名前が表示されます。

[このテーブルのクラスタ化するインデックスを指定します。] このオプションを選択すると、以下のインデックス・リストが有効になるので、そこからクラスタ化するインデックスを選択します。

[インデックス] リスト このテーブルのすべてのインデックスが表示されます。クラスタード・インデックスを指定するには、リストから特定のインデックスを選択し、[OK] をクリックします。ただし、特定のテーブル上のインデックスのうち、クラスタード・インデックスにできるのは 1 つだけです。

参照

- ◆ 「CREATE INDEX 文」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- ◆ 「クラスタード・インデックスの使用」 『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』

[パブリッシャの設定] ダイアログ

[パブリッシャの設定] ダイアログには、次の項目があります。

[リストから新しいパブリッシャを選択] パブリッシャを選択できるユーザがリストされます。ユーザを選択して [OK] をクリックすると、選択したユーザに PUBLISH パーミッションが付与されます。ユーザをダブルクリックすると、PUBLISH パーミッションがそのユーザに付与され、ダイアログが閉じます。

1 つのデータベースで選択できるパブリッシャは 1 つのみです。

参照

- ◆ 「GRANT PUBLISH 文 [SQL Remote]」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- ◆ 「SQL Remote パーミッションの管理」 『SQL Remote』

[サービス・グループの設定] ダイアログ

[サービス・グループの設定] ダイアログには、次の項目があります。

[新しいサービス・グループ] このオプションを選択すると、選択したサービスを割り当てる新しいサービス・グループが作成されます。

- ◆ **[サービス・グループ名]** 上記の [新しいサービス・グループ] を選択した場合は、新しいサービス・グループの名前を入力します。

[既存のサービス・グループ] このオプションを選択すると、選択したサービスが既存のサービス・グループのメンバに割り当てられます。

- ◆ **[サービス・グループ] リスト** 既存のサービス・グループがすべてリストされます。このリストが有効になるのは、[既存のサービス・グループ] オプションを選択した場合です。選択したサービスをサービス・グループに割り当てるには、このリストから既存のサービス・グループを選択して [OK] をクリックします。サービス・グループをダブルクリックすると、そのサービス・グループにサービスが割り当てられ、ダイアログが閉じます。

参照

- ◆ 「一度に複数のサービスを実行する」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』

[SQL 文の詳細] ダイアログ

[SQL 文の詳細] ダイアログには、[SQL 文の詳細] ウィンドウ枠と [クエリ情報] ウィンドウ枠があります。選択する SQL 文によって表示されるフィールドが異なるので、次に示すフィールドの一部が表示されない場合があります。

[SQL 文の詳細] SQL 文に関する次の情報が表示されます。

- ◆ **[要求 ID]** 要求 ID が表示されます。
- ◆ **[SQL 文]** 選択されている SQL 文の完全なテキストが表示されます。表示される文のテキストは、元のテキストとは一致しない場合があります。この文がデータベース・サーバによって解析された後で取得された場合や(ストアド・プロシージャやトリガなど、コンパイル済みデータベース・オブジェクトの一部であるため)、サンプリングまたはコストの条件を満たすという理由だけのためにトレースに含めるように選択された場合は、最初の記述と異なる場合があります。特に、ビューの定義は多くの場合、クエリに展開される(インラインで展開される)ので、ビュー以降のクエリは大きく異なる場合があります。
- ◆ **[ホスト/内部変数]** 選択されている SQL 文のホスト変数、内部変数、その値が表示されます。
- ◆ **[起動時刻]** 文の起動時刻が表示されます。
- ◆ **[期間]** 文の継続時間が表示されます。継続時間は、データベース・サーバで要求の処理に実際に要した時間です。
- ◆ **[カーソルのクローズ時間]** カーソルのクローズ時間が表示されます。
- ◆ **[接続 ID]** 選択されている文の接続 ID が表示されます。
- ◆ **[ユーザ]** 選択されている文のユーザ ID が表示されます。
- ◆ **[SQL エラー・コード]** エラーに関連付けられている SQL エラー・コードの数値が表示されます。
- ◆ **[プロシージャまたはトリガ]** 選択されている文に関連するストアド・プロシージャまたはトリガが表示されます。
- ◆ **[プロシージャまたはトリガの行番号]** 該当するプロシージャまたはトリガの行番号が表示されます。

[クエリ情報] SQL 文に関する次のクエリ情報が表示されます。

- ◆ **[独立性レベル]** 選択されている文の独立性レベルが表示されます。
- ◆ **[転送フェッチ]** 選択されている文の転送フェッチの数が表示されます。
- ◆ **[リバース・フェッチ]** 文のリバース・フェッチの数が表示されます。
- ◆ **[絶対フェッチ]** 文の絶対フェッチの数が表示されます。
- ◆ **[最初のフェッチ時刻]** 選択されているデータベースの最初のフェッチ時刻が表示されます。

- ◆ **[使用されたオプティマイザのバイパス]** オプティマイザのバイパスが使用されたかどうかが表示されます。
- ◆ **[実際のテキスト・プラン]** 実際のテキスト・プランが表示されます。
- ◆ **[実行時のプラン]** 実行時のプランが表示されます。オブジェクトをクリックすると、そのオブジェクトの詳細が表示されます。[高度な詳細]をクリックすると、さらに詳細な情報が表示されます。

参照

- ◆ 「診断トレーシング情報の分析」 『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』
- ◆ 「テキスト・プラン」 『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』

[SQL Viewer オプション] ダイアログ

[SQL Viewer オプション] ダイアログには、次の項目があります。

[ログギングを可能にする] このオプションを選択すると、データベースのログギングが有効になります。

- ◆ **[日付と時刻を出力に追加]** このオプションを選択すると、ログ・ビューワまたはログ・ファイルに各 SQL 文を発行した日付と時刻が付加されます。

[テキストをラップ] [サーバ・メッセージと実行された SQL] ウィンドウ枠またはログ・ファイルの各行の長さを指定します。1 行の長さが設定された文字数になると自動的に次の行に折り返されます。デフォルトで、1 行は 80 文字です。

[保存] [保存] をクリックすると、ログギング情報がファイルに保存されます。

[クリア] [サーバ・メッセージと実行された SQL] ウィンドウ枠で選択したタブの内容がクリアされます。

[データベースの開始] ダイアログ

[データベースの開始] ダイアログには、次の項目があります。

[サーバ] データベースが開始されると、選択したデータベース・サーバの名前が表示されます。

[データベース・ファイル] サーバ・コンピュータにある SQL Anywhere のデータベース・ファイルのフル・パスと名前を入力します。たとえば、C:\¥databases¥mydatabase.db のように入力します。

[参照] ボタンをクリックしてファイルの場所を探すこともできます。

[暗号化キー] 暗号化キーを入力して、データベースを開始します。暗号化キーを指定して、高度に暗号化されたデータベースを開始します。このフィールドは、強力に暗号化されたデータベースに対してのみ有効です。

次の項を参照してください。

- ◆ 「データベースの暗号化」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』
- ◆ 「初期化ユーティリティ (dbinit)」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』

[データベース名] 接続するデータベースの名前を入力します。ファイル名の代わりに、クライアント・アプリケーションのユーザにとってさらにわかりやすい名前をデータベースに付けることができます。複数のデータベースが同時にデータベース・サーバで実行できるため、データベース名を指定することによって、同一データベース・サーバで実行しているデータベースを区別できます。データベースが停止するまでは、指定する名前によって識別されます。

データベース名はオプションです。データベース名を指定しないと、データベース・ファイル名のルート (.db 拡張子を省いたファイル名) がデフォルトのデータベース名になります。たとえば、データベース *sample.db* がある場合、デフォルトのデータベース名は *sample* です。

[最終切断後にデータベースを停止] このオプションを選択すると、最後の接続が終了したときにデータベースが停止します。

このオプションは、データベース・サーバを自動的に停止する `-ga` サーバ・オプションとは異なります。

参照

- ◆ 「データベース・サーバの実行」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』
- ◆ 「データベースの編集」 『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』

[イベントのトリガ] ダイアログ

[イベントのトリガ] ダイアログには、次の項目があります。

[イベント] イベントの名前と所有者が表示されます。

[パラメータ] このフィールドには `name=value,name=value...` の形式でイベント・パラメータを入力します。

イベントでパラメータが不要な場合は、[OK] をクリックするとイベントがトリガされます。

このダイアログでは、イベント・ハンドラのコンテキストをシミュレートするためにパラメータを明示的に指定できます。このダイアログを使用すると、ディスク領域の制限 (ディスク領域の使用量が指定の割合を超えたとき) などのトリガ条件、またはイベント・ハンドラをトリガするために必要なその他のトリガ条件をテストできます。

たとえば、データベースに接続しているユーザ ID に応じて異なるアクションを実行するイベントを設定できます。これは、イベント・ハンドラでイベント・パラメータ (*"User"*) を呼び出すことで実行できます。ユーザ *P_Chin* についてこのイベントのトリガをシミュレートするには、[パラメータ] テキスト・ボックスに次のように入力します。

```
"User"='P_Chin'
```

User という語は、SQL の予約語であるため二重引用符で囲んでください。

参照

- ◆ 「TRIGGER EVENT 文」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

- ◆ 「EVENT_CONDITION 関数 [システム]」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- ◆ 「CREATE EVENT 文」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- ◆ 「スケジュールとイベントの使用によるタスクの自動化」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』

[データのアンロード] ダイアログ

[データのアンロード] ダイアログには、次の項目があります。

[UNLOAD 文を使用してサーバ・コンピュータにデータ・ファイルを保存] このオプションは、サーバ・コンピュータ上のファイルにデータをエクスポートする場合に選択します。このオプションを選択すると、アンロード中、テーブル全体に排他ロックが配置されます。UNLOAD 文の方が OUTPUT 文よりもパフォーマンスが向上します。ファイル内のデータは 1 行に 1 ローズつエクスポートされ、値はカンマで区切られ、文字列は一重引用符で囲まれます。このオプションを選択し、データベースがローカル・コンピュータで実行されていない場合は、[参照] ボタンが無効になります。

[OUTPUT 文を使用してローカル・コンピュータにデータ・ファイルを保存] このオプションは、ローカル・コンピュータにデータ・ファイルをエクスポートする場合に選択します。ファイル内のデータは 1 行に 1 ローズつエクスポートされ、値はカンマで区切られ、文字列は一重引用符で囲まれます。

[次のディレクトリにデータ・ファイルを保存] データを保存するディレクトリを入力します。データ・ファイルをサーバ・コンピュータに保存する場合、相対ファイル名はデータベース・サーバの開始ディレクトリを基準にファイルを指定します。ファイルの保存先ディレクトリを探すには、[参照] をクリックします。

[プライマリ・キーでデータを並べ替える] このオプションを選択すると、エクスポートされたデータがプライマリ・キー値の順に並ぶため、再ロードが速くなります。

[ローカル・コンピュータ上の次のファイルに再ロード・ファイルを保存] データの再ロードに使用する *reload.sql* ファイルの名前とロケーションを入力します。

[LOAD 文を使用してサーバ・コンピュータからデータを再ロード] このオプションは、LOAD 文を使ってデータを再ロードする場合に使用します。LOAD 文の方が INPUT 文よりもパフォーマンスが向上します。*reload.sql* ファイルで参照されているファイル名がサーバ・コンピュータを基準としている場合にこのオプションを選択します。

「LOAD TABLE 文を使用したデータのインポート」 『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』を参照してください。

[INPUT 文を使用してローカル・コンピュータからデータを再ロード] このオプションは、INPUT 文を使ってデータを再ロードする場合に使用します。*reload.sql* ファイルで参照されているファイル名がローカル・コンピュータを基準としている場合にこのオプションを選択します。

参照

- ◆ 「UNLOAD TABLE 文」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- ◆ 「OUTPUT 文 [Interactive SQL]」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- ◆ 「LOAD TABLE 文」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

- ◆ 「INPUT 文 [Interactive SQL]」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

[JAR ファイルの更新] ダイアログ

[JAR ファイルの更新] ダイアログには、次の項目があります。

[更新した JAR ファイルの場所を指定してください] 更新する JAR ファイルのパスをテキスト・ボックスに入力します。パスがわからない場合は、[参照] ボタンをクリックしてファイルを探すことができます。(例：*C:¥my JAR files¥Silver.jar*)。

[すべてのクラスをインストール] このオプションを選択すると、この JAR ファイルのすべてのクラスがインストールされます。

[選択したクラスをインストール] 選択した JAR ファイルから特定のクラスを指定してインストールするときは、このオプションを選択します。クラスの名前はカンマで区切って入力してください。[選択] をクリックすると、選択した JAR ファイルのクラスのリストが表示されます。

- ◆ **[すべて選択]** JAR ファイルのリストに含まれるすべてのクラスがインストールされます。
- ◆ **[すべてをクリア]** JAR ファイルのリストに含まれるすべてのクラスがクリアされ、クラスはインストールされません。

参照

- ◆ 「チュートリアル：データベースにおける Java の使用」 『SQL Anywhere サーバ - プログラミング』

[Java クラスの更新] ダイアログ

[Java クラスの更新] ダイアログには、次の項目があります。

[更新した Java クラス・ファイルの場所を指定してください] 更新する Java クラスの完全なパスを入力します。たとえば、*C:¥my classes¥Utility.class* と入力します。

または、[参照] をクリックすると、Java クラスを検索できます。

参照

- ◆ 「チュートリアル：データベースにおける Java の使用」 『SQL Anywhere サーバ - プログラミング』
- ◆ 「クラスと JAR ファイルの更新」 『SQL Anywhere サーバ - プログラミング』

[ユーザのオプション] ダイアログ

注意

オプション設定を変更した場合、すぐに有効になる設定もありますが、それ以外の設定を有効にするためにはデータベースを再起動してください。

[ユーザのオプション] ダイアログには、次の項目があります。

[ユーザ] 選択されているユーザの名前が表示されます。

[表示] オプション・タイプのリストが表示されます。たとえば、[データベースのオプション] を選択すると、データベースに関連するオプションのみが [オプション] リストに表示されます。

[オプション] リスト [参照] リストで選択したオプションのタイプに基づいて、オプションの設定とデフォルト値が表示されます。オプションの選択が済んだら、ダイアログの横にあるボタンが使用可能になります。

- ◆ **[新規]** ユーザのオプションを設定しているときは、このボタンは有効になりません。新しいオプションを追加するには、[データベースのオプション] ダイアログを開いてください。
[データベースのオプション] ダイアログを開く方法の詳細については、「[データベース・オプションの設定](#)」『[SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法](#)』を参照してください。
- ◆ **[すぐに削除]** ユーザのオプションを設定しているときは、このボタンは有効になりません。オプションを削除するには、[データベースのオプション] ダイアログを開いてください。
[データベースのオプション] ダイアログを開く方法の詳細については、「[データベース・オプションの設定](#)」『[SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法](#)』を参照してください。
- ◆ **[一時的な設定を行う]** ユーザのオプション設定を一時的に変更するには、[オプション] リストからオプションを選択して、必要な設定を [値] フィールドに入力し、[一時的な設定を行う] をクリックします。

一時的な設定値は、現在の Sybase Central セッションの間だけ有効です。

- ◆ **[恒久的な設定を行う]** ユーザのオプション設定を永続的に変更するには、[オプション] リストからオプションを選択して、必要な設定を [値] フィールドに入力し、[恒久的な設定を行う] をクリックします。

恒久的な値は、次に明示的に変更されるまでは、セッションが変わっても有効です。

[値] [オプション] リストからオプションを選択して、必要な設定を [値] フィールドに入力します。[一時的な設定を行う] または [恒久的な設定を行う] のどちらかをクリックすると、設定を一時的または恒久的にすることができます。ただし、オプションに PUBLIC グループが設定されていないと、個々のユーザ ID にそのオプション値を設定することはできません。

「[アルファベット順のオプション・リスト](#)」『[SQL Anywhere サーバ - データベース管理](#)』を参照してください。

参照

- ◆ 「[SET OPTION 文](#)」『[SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス](#)』
- ◆ 「[データベースの編集](#)」『[SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法](#)』
- ◆ 「[ユーザ ID とパーミッションの管理](#)」『[SQL Anywhere サーバ - データベース管理](#)』

[Windows CE の SQL Remote 用メッセージ・タイプ] ダイアログ

[Windows CE の SQL Remote 用メッセージ・タイプ] ダイアログには、次の項目があります。

[Windows CE デバイスに次のメッセージ・タイプがあります] このウィンドウには、Windows CE デバイスで使用できるメッセージ・タイプがリストされます。SQL Remote レプリケーションのためのメッセージ・タイプを選択するには、リストからメッセージ・タイプを選択して [OK] をクリックします。

- ◆ サポートされているメッセージ・タイプは、FILE、FTP、SMTP です。

[選択したメッセージ・タイプには次のパラメータがあります] このウィンドウには、選択したメッセージ・タイプの各パラメータの名前と値がリストされます。

- ◆ **[名前]** 選択したメッセージ・タイプのパラメータ名がリストされます。
- ◆ **[値]** 選択したメッセージ・タイプのパラメータの値が表示されます。値を変更するには、フィールドをクリックして別の値を入力します。

次の表は、サポートされている各 SQL Remote メッセージ・タイプのパラメータを示します。

FILE メッセージ制御パラメータ

名前	値	デフォルト	説明
Directory	文字列	"	メッセージが格納されるディレクトリを設定します。この設定は、SQLREMOTE 環境変数の代替となります。「 SQLREMOTE 環境変数 」『 SQL Anywhere サーバ-データベース管理 』を参照してください。
Debug	YES、NO	NO	YES を設定すると、FILE リンクが行ったファイル・システム呼び出しがすべて表示されます。
Unlink_Delay	整数	初回の失敗時は 1 秒待機、 2 回目の失敗時は 2 秒待機 など	ファイル削除に失敗した後、次にファイルの削除を試みるまでの秒数を設定します。

「[FILE メッセージ・システム](#)」 『[SQL Remote](#)』を参照してください。

FTP メッセージ制御パラメータ

名前	値	デフォルト	説明
Host	文字列	"	メッセージが格納されるコンピュータのホスト名または IP アドレス。
User	文字列	"	ftp ホストにアクセスするためのユーザ名。
Password	文字列	"	ftp ホストにアクセスするためのパスワード。

名前	値	デフォルト	説明
Root_Directory	文字列	"	メッセージが保存される、ftp ホスト・サイトのルート・ディレクトリ。
Port	文字列	"	ftp の接続に使用される IP ポート番号。通常は不要です。
Debug	YES、NO	NO	デバッグ出力の表示を制御するパラメータ。
Active_Mode	YES、NO	NO	<p>すべてのデータ転送接続をクライアントとサーバのどちらが開始するかを制御するパラメータ。</p> <p>このパラメータを NO (受動モード) に設定すると、クライアントがすべてのデータ転送接続 (この場合はメッセージ・リンク) を開始します。</p> <p>このパラメータを YES (アクティブ・モード) に設定すると、サーバがすべてのデータ接続を開始します。</p> <p>FTP サーバが正しく設定されていないファイアウォールの保護を受けていると、デフォルトの受動転送モードを使用できない場合があります。</p> <p>このパラメータの詳細については、「FTP 問題のトラブルシューティング」『SQL Remote』を参照してください。</p>

「[FTP メッセージ・システム](#)」『[SQL Remote](#)』を参照してください。

SMTP メッセージ制御パラメータ

名前	値	デフォルト	説明
Local_Host	文字列	"	ローカル・コンピュータの名前。ローカル・ホスト名は、任意の SMTP サーバとのセッションを開始するのに必要です。ほとんどのネットワーク環境では、ローカル・ホスト名が自動的に判断されるため、この値を指定する必要はありません。

名前	値	デフォルト	説明
TOP_Supported	YES、NO	YES	受信メッセージを列挙するときに、SQL Remote は TOP という POP3 コマンドを使用します。TOP コマンドは、すべての POP サーバでサポートされているわけではありません。 この値を NO に設定すると、RETR コマンドを使用します。このコマンドは TOP よりも効率は落ちますが、すべての POP サーバで動作します。
Smtp_Host	文字列	"	SMTP サーバが動作しているコンピュータの名前。SMTP/POP3 ログイン・ダイアログの SMTP ホスト・フィールドに対応しています。
Pop3_Host	文字列	"	POP ホストを実行しているコンピュータの名前。SMTP/POP3 ログイン・ダイアログの POP3 ホスト・フィールドに対応しています。
Pop3_Userid	文字列	"	POP ユーザ ID は、SMTP/POP3 ログイン・ダイアログのユーザ ID フィールドに対応しています。
Pop3_password	文字列	"	POP パスワードは SMTP/POP3 ログイン・ダイアログのパスワード・フィールドに対応しています。
Debug	YES、NO	NO	デバッグ情報の表示を制御するパラメータ。YES を設定すると、SMTP と POP3 のコマンドと応答が表示されます。

「SMTP メッセージ・システム」 『SQL Remote』 を参照してください。

参照

- ◆ 「メッセージ・タイプの処理」 『SQL Remote』
- ◆ 「メッセージ・タイプの使用」 『SQL Remote』

デバッガのヘルプ

以下の項では、SQL Anywhere デバッガで利用できるダイアログについて説明します。

デバッガの使用の詳細については、「[プロシージャ、関数、トリガ、イベントのデバッグ](#)」
『[SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法](#)』を参照してください。

デバッガ [ウォッチの追加] ダイアログ

ウォッチ対象の SQL 式 (ストアド・プロシージャの場合) または Java 式 (Java クラスの場合) を入力します。入力した式は、Sybase Central でデバッグ・タスクが実行されるときに [ウォッチ] ウィンドウに表示されます。

たとえば、ストアド・プロシージャのデバッグ時に SQLSTATE 値を追跡するには、SQLSTATE とだけ入力します。

参照

- ◆ 「式」 『[SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス](#)』

デバッガ [ブレークポイント] ダイアログ

[ブレークポイント] ダイアログには、次の項目があります。

[すべてのブレークポイント] 現在のデータベース内のすべてのブレークポイントのリスト。次の各項目はカラムの説明を示します。

- ◆ **[プロシージャ]** このブレークポイントを適用するストアド・プロシージャ。
- ◆ **[コンテキスト]** このブレークポイントを含むソース・コードの行。
- ◆ **[条件]** このブレークポイントによって実行が中断されるために真になる必要がある条件。
- ◆ **[カウント]** このブレークポイントによって実行が中断されるまでのスキップ回数。0 を指定した場合、常にブレークポイントによって実行が停止されます。
- ◆ **[データベース]** このブレークポイントを適用するデータベース。
- ◆ **[サーバ]** このブレークポイントを適用するデータベース・サーバ。

[閉じる] [ブレークポイント] ダイアログを閉じます。

[編集] 現在選択されているブレークポイントを編集します。たとえば、このブレークポイントによって実行が中断されるための条件を設定または変更できます。

[コードの表示] [ブレークポイント] ダイアログが閉じ、選択されたブレークポイントのコードが表示されます。

[有効にする] 選択されたブレークポイントが有効になり、実行が中断されるようになります。コード・ウィンドウ内で、ブレークポイントは赤色の円として表示されます。

[無効にする] 選択されたブレークポイントが無効になり、実行が中断されなくなります。コード・ウィンドウ内で、ブレークポイントは灰色の円として表示されます。

[削除] 選択されているブレークポイントをリストから削除します。

[新規] 新しいブレークポイントを作成します。

参照

- ◆ 「ブレークポイントの活用」 『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』

デバッガ [ブレークポイントの編集] ダイアログ/[新しいブレークポイント] ダイアログ

[ブレークポイントの編集] および [新しいブレークポイント] ダイアログには、次の項目があります。

[サーバ] このブレークポイントを適用するデータベース・サーバ。

[データベース] このブレークポイントを適用するデータベース。

[プロシージャ] SQL プロシージャの場合、このブレークポイントを適用するストアド・プロシージャ。

[クラス] Java クラスの場合、このブレークポイントを適用するクラス。

[条件] 評価結果が真になるべき条件。これが真になった場合に、このブレークポイントによって実行が中断されます。

この条件は、プロシージャ内の変数に関するものでなくてもかまいません。たとえば、特定のユーザによって作成された接続に適用されるブレークポイントを設定できます。それには、次のような条件を入力します。

```
CURRENT USER = 'user-name'
```

[探索条件] 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』を参照してください。

[カウント] このブレークポイントによって実行が中断されるまでのスキップ回数。0 を指定した場合、常にブレークポイントによって実行が停止されます。

[このブレークポイントを有効にする] このオプションを選択すると、このブレークポイントによって実行が中断されるようになります。

参照

- ◆ 「ブレークポイント条件の編集」 『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』

デバッガ [Java ソース・コード・パス] ダイアログ

デバッガ [Java ソース・コード・パス] ダイアログには、次の項目があります。

[フォルダのリスト] フォルダまたは個々のファイルのリスト。デバッガはこのリスト内で Java ソースを検索します。

[フォルダの参照] リストに追加するフォルダを参照します。

[ファイルの参照] リストに追加する個々のファイルを参照します。

参照

- ◆ 「クラスの作成」 [『SQL Anywhere サーバ - プログラミング』](#)

インデックス・コンサルタント

インデックス・コンサルタントは、ユーザがデータベースのインデックスを適切に選択できるように支援します。インデックス・コンサルタントは、単一のクエリまたは一連のデータベース要求 (**負荷**と呼ばれる) に対するインデックスの選択プロセスを支援します。インデックス・コンサルタントは、さまざまな仮想インデックス・セットを作成します。インデックス・コンサルタントは、仮想インデックス・セットごとに、インデックスが実際に存在するものと仮定してクエリや要求を最適化します。インデックス・コンサルタントは、分析結果に基づいて一連の推奨案を作成します。

参照

- ◆ 「インデックス・コンサルタント」 『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』
- ◆ 「インデックス・コンサルタントの推奨内容の解釈」 『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』
- ◆ 「インデックス・コンサルタントの推奨内容の実装」 『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』

Ultra Light プロジェクト

9.0.2 以前のバージョンでは、リファレンス・データベース内の SQL 文を Ultra Light プロジェクトに割り当てることができます。このように SQL 文をグループ分けすることで、同じリファレンス・データベースを使用する複数の静的 Ultra Light アプリケーションを開発できます。

リファレンス・データベースに対して Ultra Light ジェネレータが実行され、データベースのソース・コード・ファイルが生成されると、ジェネレータはプロジェクト名を引数として取り、そのプロジェクトにおける SQL 文のコードを生成します。Embedded SQL の場合、SQL プリプロセッサが Ultra Light プロジェクトを定義するため、Ultra Light プロジェクトを明示的に作成する必要はありません。

Ultra Light 文

9.0.2 以前のバージョンでは、Ultra Light アプリケーションで使用できるデータ・アクセス要求を定義するには、リファレンス・データベースで、そのアプリケーションの Ultra Light プロジェクトに SQL 文のセットを追加します。SQL 文が追加されると、Ultra Light ジェネレータによって SQL 文のセットを実行するデータベース・エンジンのコードが作成されます。

静的型 C++ API では、パブリケーションを使用してデータ・アクセス・メソッドを定義することもできます。Embedded SQL では、SQL プリプロセッサが Embedded SQL のソース・ファイルにある SQL 文をリファレンス・データベースに追加します。

パブリケーション

パブリケーションとは、同期されるデータを識別するデータベース・オブジェクトです。パブリケーションは、テーブルのカラム、ロー、あるいはその両方のサブセットであるアティクルで構成されています。各パブリケーションに、1つまたは複数のテーブル全体、または選択したローとカラムからなるテーブルの一部を含めることができます。1つのパブリケーションでは、1つのテーブルを複数のアティクルに含めることはできません。

Mobile Link では、クライアント上にのみ存在します。1つのパブリケーションは複数のアティクルから構成されています。Mobile Link ユーザは、パブリケーションに対して同期サブスクリプションを作成することによって、パブリケーションを同期できます。SQL Remote ユーザは、パブリケーションに対してサブスクリプションを作成することによって、パブリケーションを受信できます。

参照

- ◆ Mobile Link SQL Anywhere クライアント : 「データのパブリッシュ」 『Mobile Link - クライアント管理』
- ◆ Mobile Link Ultra Light クライアント : 「Ultra Light のパブリケーション」 『Mobile Link - クライアント管理』
- ◆ SQL Remote : 「データのパブリッシュ」 『SQL Remote』

アーティクル

Mobile Link または SQL Remote では、アーティクルは、テーブル全体もしくはテーブル内のカラムとローのサブセットを表します。アーティクルの集合がパブリケーションです。

参照

- ◆ Mobile Link SQL Anywhere クライアント : 「既存のパブリケーションの変更」 『Mobile Link - クライアント管理』
- ◆ Mobile Link Ultra Light クライアント : 「Ultra Light のパブリケーション」 『Mobile Link - クライアント管理』
- ◆ SQL Remote : 「データのパブリッシュ」 『SQL Remote』

サブスクリプション

Mobile Link では、「同期サブスクリプション」は、特定の Mobile Link ユーザをパブリケーションとリンクします。また、同期に必要なその他の情報を含めることもできます。たとえば、Mobile Link サーバのアドレスや、同期サブスクリプションに必要な他のオプションを指定できます。特定の同期サブスクリプションの値によって、Mobile Link ユーザに設定された値が上書きされます。同期サブスクリプションは、Mobile Link SQL Anywhere リモート・データベース内でのみ必要です。サーバ論理は、統合データベース内の Mobile Link システム・テーブルに格納されている同期スクリプトによって実装されます。

SQL Remote では、データはレプリケート用にパブリケーション単位で編成されます。SQL Remote メッセージを受信するには、REMOTE パーミッションを持つユーザ ID に対して「サブスクリプション」を作成します。SQL Remote では、パブリケーションとサブスクリプションは双方向の関係です。統合データベース上のパブリケーションに対してリモート・ユーザ用のサブスクリプションを作成するときにはリモート・データベース上の統合データベースにもサブスクリプションを作成してください。この作業は、抽出ユーティリティが自動的に実行します。

参照

- ◆ Mobile Link : 「同期サブスクリプションの作成」 『Mobile Link - クライアント管理』
- ◆ SQL Remote : 「SQL Remote のパブリケーションとサブスクリプション」 『SQL Remote』

[接続] ダイアログのツール

[ツール] [接続] ダイアログの [ツール] ボタンをクリックすると、次のユーティリティを使用できます。

- ◆ **[テスト接続]** このツールは、SQL Anywhere データベースに接続する場合にのみ使用できます。指定した情報で正しく接続できるかどうかをテストします。

[詳細の表示] をクリックすると、データベース・サーバの検索に接続パラメータが使用される方法に関するデバッグ情報が表示されます。

- ◆ **[Windows CE プロキシ・ポートの設定]** このツールは、ActiveSync がインストールされ、SQL Anywhere または Ultra Light のデータベースに接続している場合にのみ使用できます。Windows CE データベースに接続するための TCP/IP ポート・リダイレクタを設定できます (Windows CE サービスがインストールされている場合)。

参照

- ◆ 「[接続] ダイアログのヘルプ」 1 ページ
- ◆ 「[接続] ダイアログの使用」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』

[インデックス] フォルダ

[インデックス] フォルダを使用して、データベース内のすべてのインデックスを表示できます。データベースに接続したら、[インデックス] フォルダをクリックすると、すべてのインデックスが表示されます。

エントリごとに次の情報が表示され、これらの情報を使用してリストをソートできます。

- ◆ **[名前]** インデックスの名前が表示されます。
- ◆ **[オブジェクト名]** インデックスが関連付けられているオブジェクトの名前が表示されます。
- ◆ **[オブジェクト所有者]** インデックスが関連付けられているオブジェクトの所有者の名前が表示されます。
- ◆ **[インデックス・タイプ]** インデックスのタイプが表示されます。タイプは、外部キー・インデックス、プライマリ・キー・インデックス、一意性制約インデックス、またはインデックスのいずれかです。
- ◆ **[ユニーク]** インデックスの値がユニークである必要があるかどうかを示されます。新しいインデックスを作成すると、ユニークな値が設定されます。
- ◆ **[カラム]** インデックスのすべてのカラムが表示されます。

参照

- ◆ 「[インデックス] プロパティ・シート : [一般] タブ」 54 ページ
- ◆ 「インデックスの作成」 『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』

テーブルの編集の取り消し

Sybase Central でテーブルを編集するときに、ローごとに変更を取り消すことができます。

編集したローは、左側に鉛筆のアイコンが表示されます。編集したローの変更を取り消すには、変更を取り消すローをクリックして選択し、[編集]-[元に戻す]を選択します。選択したローの変更が取り消され、鉛筆のアイコンが表示されなくなります。引き続き鉛筆のアイコンが表示されているその他任意のローの変更を取り消すことができます。

参照

- ◆ 「Sybase Central」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』
- ◆ 「[テーブル] プロパティ・シート : [一般] タブ」 105 ページ

データベース検索

Sybase Central の検索機能を使用すると、指定したオブジェクト名をデータベース内で検索するか、データベース・オブジェクトの SQL 内で文字列を検索できます。

この [検索] ウィンドウ枠には、次の項目があります。

[検索文字列] 検索するオブジェクト名または SQL 文字列を入力するか、ドロップダウン・リストから項目を選択します。

[場所] ドロップダウン・リストから項目を選択し、検索対象を絞り込むことができます。

[大文字と小文字を区別] このオプションを選択すると、大文字と小文字の区別も含めて、[検索文字列] ボックス内のテキストと完全に一致するテキストだけが検索されます。

[完全に一致する単語を検索] このオプションを選択すると、完全に一致する 1 つまたは複数の単語だけが検索されます。たとえば、このオプションを選択し、「s erve」という単語を検索した場合、「server」という単語内の「serve」は一致するとみなされません。

[SQL を検索] このオプションを選択すると、指定した文字列が SQL 文内で検索されます。

[動的プロパティ (接続、統計、ロック) の検索] このオプションを選択すると、動的プロパティ内も検索されます。

[検索] [検索] をクリックすると、[検索文字列] で指定したオブジェクトまたは文字列が検索されます。

[結果] リスト 見つかった各項目の名前、オブジェクトのタイプ、コンテキストが表示されます。

第 4 章

Mobile Link プラグインの管理モードのヘルプ

目次

Mobile Link プラグインの管理モード・ヘルプの概要	164
Mobile Link のプロパティ・シート	165
Mobile Link サーバ・ログ・ファイル・ビューワ：[メッセージ] タブ	178
Mobile Link サーバ・ログ・ファイル・ビューワ：[概要] タブ	180
Mobile Link サーバ・ログ・ファイル・ビューワ：[同期] タブ	181

Mobile Link プラグインの管理モード・ヘルプの概要

管理モードでは、統合データベースまたはリモート・データベースに接続されており、オンラインで作業していることとなります。これに対して、モデル・モードでは、接続されていないので、XML ファイルを変更してから、後でこのファイルを配備します。

管理モードでは、通常はモデル・モードで、プログラムで、またはシステム・プロシージャや SQL 文を使用して行う作業をグラフィカル・インタフェースで行うことができます。Sybase Central には、オブジェクトのプロパティを設定するためのプロパティ・シート、また段階を踏んで一般的な管理タスクを実行できるウィザードがあります。

警告

モデル・モード以外で変更した場合は、変更内容をリバース・エンジニアリングでモデルに戻すことはできません。

参照

- ◆ 「Mobile Link のプロパティ・シート」 165 ページ
- ◆ 「Mobile Link プラグインのモデル・モードのヘルプ」 183 ページ
- ◆ 「Mobile Link サーバ・システム・プロシージャ」 『Mobile Link - サーバ管理』
- ◆ 「Mobile Link SQL 文」 『Mobile Link - クライアント管理』

Mobile Link のプロパティ・シート

この項では、オブジェクトのプロパティの表示や設定ができる Mobile Link のプロパティ・シートについて詳しく説明します。Mobile Link に接続しているときに、プロパティ・シートを表示するには、オブジェクトを選択した状態で Sybase Central の [ファイル] メニューを使用するか、オブジェクトを右クリックして表示されるポップアップ・メニューを使用します。

[Carrier] プロパティ・シート : [一般] タブ

プロパティは起動時に読み込まれます。プロパティを変更した場合、Mobile Link サーバを停止して再起動しないと、その変更が有効になりません。

[Carrier] プロパティ・シートの [一般] タブには、次の項目があります。

[名前] Carrier の名前が表示されます。このフィールドで Carrier の名前を変更できます。

[タイプ] オブジェクトのタイプが表示されます。

[有効化] この Carrier を使用する場合に、このオプションを選択します。複数の Carrier マッピングを定義および使用できます。

「enable プロパティ」 『Mobile Link - サーバ起動同期』を参照してください。

[説明] この Carrier の説明を入力します。

参照

- ◆ 「プロパティの設定」 『Mobile Link - サーバ起動同期』
- ◆ 「ゲートウェイと Carrier の設定」 『Mobile Link - サーバ起動同期』

[Carrier] プロパティ・シート : [その他] タブ

[Carrier] プロパティ・シートの [その他] タブには、次の項目があります。

[ネットワーク・プロバイダ ID] 選択されているネットワーク・プロバイダの ID が表示されます。

[SMTP] SMTP の追加情報を指定します。

◆ **[ユーザ・プレフィクス]** ユーザ・プレフィクスを入力します。

◆ **[ドメイン]** Carrier のドメイン名を入力します。

参照

- ◆ 「Carrier プロパティ」 『Mobile Link - サーバ起動同期』

[カラム] プロパティ・シート : [一般] タブ

この [カラム] プロパティ・シートには、特定のテーブルに属するカラムに関する情報が表示されます。

[カラム] プロパティ・シートの [一般] タブには、次の項目があります。

[名前] カラムの名前。このフィールドでカラム名を編集できます。

[タイプ] オブジェクトのタイプが表示されます。

[テーブル] カラムが含まれるテーブルの名前の他に、テーブルの所有者が表示されます。

[データ型] オブジェクトのデータ型が表示されます。

[NULL 入力可] NULL が許可されるかどうかを示されます。

[デフォルト値] カラムのデフォルト値がある場合にその値が表示されます。

[コメント] カラムの説明を入力します。たとえば、システムにおけるそのカラムの目的を、この領域に記述できます。

[接続スクリプト] プロパティ・シート : [一般] タブ

[接続スクリプト] プロパティ・シートでは、選択された接続スクリプトに関する情報を参照できます。接続スクリプトは、特定のテーブルに関連付けられていない高いレベルのイベントを制御します。これらのイベントは、各同期の処理中に必要な全般的なタスクを実行するときに使用します。

[接続スクリプト] プロパティ・シートの [一般] タブには、次の項目があります。

[名前] 選択されているスクリプト・バージョンの名前が表示されます。スクリプト・バージョン名は、文字列です。テキスト・ボックスでバージョン名を編集できます。

[タイプ] 選択されているオブジェクトのタイプが表示されます。この場合のオブジェクト・タイプは接続スクリプトです。

[スクリプト ID] 選択されている接続スクリプトをユニークに識別する整数が表示されます。

[バージョン] バージョン名を識別する文字列が表示されます。

[バージョン ID] 選択されているバージョンをユニークに識別する整数が表示されます。

[言語] スクリプト言語が表示されます。

[展開済み] スクリプトが展開されているかどうかを示されます。

[共有バージョン] 共有バージョンがある場合は表示されます。

参照

- ◆ 「接続スクリプト」 『Mobile Link - サーバ管理』
- ◆ 「スクリプト・バージョン」 『Mobile Link - サーバ管理』

[データベース] プロパティ・シート : [一般] タブ

[データベース] プロパティ・シートの [一般] タブには、次の項目があります。

[名前] 選択されているデータベースの名前が表示されます。

[タイプ] データベースのタイプが表示されます。

[製品名] SQL Anywhere などの製品名が表示されます。

[バージョン] 選択されているデータベースのバージョン番号が表示されます。

[ユーザ] Mobile Link ユーザの名前が表示されます。

[ゲートウェイ] プロパティ・シート : [一般] タブ

[ゲートウェイ] プロパティ・シートの [一般] タブには、次の項目があります。

[名前] ゲートウェイの名前が表示されます。

[タイプ] オブジェクトのタイプが表示されます。

[有効化] このゲートウェイを使用する場合に、このオプションを選択します。

「enable プロパティ」 『[Mobile Link - サーバ起動同期](#)』を参照してください。

[説明] ゲートウェイの説明を入力します。

参照

- ◆ 「[ゲートウェイ・プロパティ](#)」 『[Mobile Link - サーバ起動同期](#)』

[ゲートウェイ] プロパティ・シート : [サーバ] タブ

[ゲートウェイ] プロパティ・シートの [サーバ] タブには、次の項目があります。

[サーバ] ゲートウェイの次のサーバ情報を指定します。

◆ **[ホスト]** SMTP サーバが動作しているコンピュータの名前を入力します。

◆ **[このサーバは認証が必要]** 選択したサーバに認証が必要な場合はこのオプションを選択します。このオプションを選択すると、[ユーザ] オプションと [パスワード] オプションがアクティブになります。

◆ **[ユーザ]** SMTP 認証に使用するユーザ ID を入力します。

◆ **[パスワード]** SMTP 認証に使用するパスワードを入力します。

[ヘッダ] 次のヘッダ情報を指定します。

◆ **[開始]** これは、電子メール (SMTP 要求) の送信元のアドレスです。デフォルトは anonymous です。

参照

- ◆ 「SMTP ゲートウェイ・プロパティ」 『Mobile Link - サーバ起動同期』
- ◆ 「smtp_gateway プロパティ」 『Mobile Link - サーバ起動同期』
- ◆ 「sender プロパティ」 『Mobile Link - サーバ起動同期』

[ゲートウェイ] プロパティ・シート : [ポート] タブ

[ゲートウェイ] プロパティ・シートの [ポート] タブには、次の項目があります。

[宛先ポート] リモート・デバイスの宛先 (リスナ) ポートを指定します。

- ◆ **[デフォルト・ポート (5001) を使用]** このオプションを選択すると、デフォルトのポートが使用されます。
- ◆ **[次のポートを使用]** このオプションを選択すると、使用するポートを指定できます。

[オリジン・ポート] オリジン (送信元) ポートを指定します。

- ◆ **[システムが割り当てるポートを使用]** このオプションを選択すると、パケットの送信元のポートがシステムによって割り当てられます。
- ◆ **[次のポートを使用]** このオプションを選択すると、パケットの送信に使用するポートを指定できます。

[ネットワーク・アドレス] 送信者のネットワーク・アドレスを指定します。

- ◆ **[デフォルトのネットワーク・アドレスを使用]** このオプションを選択すると、デフォルトのネットワーク・アドレスが使用されます。
- ◆ **[次のネットワーク・アドレスを使用]** このオプションを選択すると、送信者の IP アドレスを指定できます。

参照

- ◆ 「ゲートウェイと Carrier」 『Mobile Link - サーバ起動同期』
- ◆ 「UDP ゲートウェイ・プロパティ」 『Mobile Link - サーバ起動同期』

[ゲートウェイ] プロパティ・シート : [ゲートウェイ] タブ

[ゲートウェイ] プロパティ・シートの [ゲートウェイ] タブには、次の項目があります。

[この Device Tracker ゲートウェイは、次のゲートウェイを使用] 次のいずれかのオプションを選択することで、デバイスの追跡に使用するゲートウェイを指定します。

- ◆ **[SYNC ゲートウェイ]** [SYNC ゲートウェイ] を選択し、Device Tracker で使用するゲートウェイをドロップダウン・リストから選択します。デフォルトは Default-SYNC です。
- ◆ **[UDP ゲートウェイ]** [UDP ゲートウェイ] を選択し、Device Tracker で使用するゲートウェイをドロップダウン・リストから選択します。デフォルトは Default-UDP です。

- ◆ **[SMTP ゲートウェイ]** [SMTP ゲートウェイ] を選択し、Device Tracker で使用するゲートウェイをドロップダウン・リストから選択します。デフォルトは Default-SMTP です。

参照

- ◆ 「デバイス・トラッキング」 『Mobile Link - サーバ起動同期』
- ◆ 「SYNC ゲートウェイ・プロパティ」 『Mobile Link - サーバ起動同期』
- ◆ 「UDP ゲートウェイ・プロパティ」 『Mobile Link - サーバ起動同期』
- ◆ 「SMTP ゲートウェイ・プロパティ」 『Mobile Link - サーバ起動同期』

[ゲートウェイ] プロパティ・シート : Device Tracker の [配信] タブ

[ゲートウェイ] プロパティ・シートの Device Tracker の [配信] タブには、次の項目があります。

[メッセージ配信の確認] このオプションを選択すると、Listener は、メッセージを受信した旨の確認メッセージを統合データベースから受信した後で、同期を開始します。接続情報を提供するには、Listener の起動時に -x オプションを指定してください。このオプションはデフォルトでオンになっています。

参照

- ◆ 「ゲートウェイと Carrier」 『Mobile Link - サーバ起動同期』

[ゲートウェイ] プロパティ・シート : SMTP ゲートウェイの [配信] タブ

[ゲートウェイ] プロパティ・シートの SMTP ゲートウェイの [配信] タブには、次の項目があります。

[クライアント・バージョン] このゲートウェイを使用するクライアントのバージョンに関する情報を入力できます。

- ◆ **[このゲートウェイは、9.0.1 以降のクライアントのみをサポートする]** すべての Listener が SQL Anywhere バージョン 9.0.1 以降のクライアントである場合に、このオプションを選択します。これがデフォルト設定です。

- ◆ **[メッセージ配信の確認]** メッセージの配信を確認する場合に、このオプションを選択します。この設定が影響するのは、このゲートウェイ経由で直接送信する場合だけです。

「confirm_delivery プロパティ」 『Mobile Link - サーバ起動同期』 を参照してください。

- ◆ **[このゲートウェイは、9.0.0 クライアントのみをサポートする]** すべての Listener が SQL Anywhere バージョン 9.0.0 クライアントである場合に、このオプションを選択します。

[確認のタイムアウト] 確認のタイムアウト時間を入力してください。確認のタイムアウトのデフォルトは 10 分です。

「confirm_timeout プロパティ」 『Mobile Link - サーバ起動同期』 を参照してください。

- ◆ **[次の時間経過後にタイムアウト]** ドロップダウン・リストから確認のタイムアウト間隔を選択します。

- ◆ **[次のタイムアウト間隔を使用]** 確認のタイムアウト間隔を分と秒の単位で指定します。

参照

- ◆ 「[ゲートウェイと Carrier](#)」 [『Mobile Link - サーバ起動同期』](#)

[ゲートウェイ] プロパティ・シート : SYNC ゲートウェイの [配信] タブ

[ゲートウェイ] プロパティ・シートの SYNC ゲートウェイの [配信] タブには、次の項目があります。

[メッセージ配信の確認] メッセージの配信を確認する場合に、このオプションを選択します。この設定が影響するのは、このゲートウェイ経由で直接送信する場合だけです。

[アクションの確認] このオプションを選択すると、リモート・デバイスでアクションが実行された後、Listener が確認を返すように設定されます。

[確認のタイムアウト] 確認のタイムアウト時間を入力してください。確認のタイムアウトのデフォルトは1分です。

「[confirm_timeout](#) プロパティ」 [『Mobile Link - サーバ起動同期』](#) を参照してください。

- ◆ **[次の時間経過後にタイムアウト]** ドロップダウン・リストから確認のタイムアウト間隔を選択します。
- ◆ **[次のタイムアウト間隔を使用]** 確認のタイムアウト間隔を分と秒の単位で指定します。

参照

- ◆ 「[ゲートウェイと Carrier](#)」 [『Mobile Link - サーバ起動同期』](#)

[ゲートウェイ] プロパティ・シート : UDP ゲートウェイの [配信] タブ

[ゲートウェイ] プロパティ・シートの UDP ゲートウェイの [配信] タブには、次の項目があります。

[クライアント・バージョン] このゲートウェイを使用するクライアントのバージョンに関する情報を入力できます。

- ◆ **[このゲートウェイは、9.0.1 以降のクライアントのみをサポートする]** すべての Listener が SQL Anywhere バージョン 9.0.1 以降のクライアントである場合に、このオプションを選択します。これがデフォルト設定です。

- ◆ **[メッセージ配信の確認]** メッセージの配信を確認する場合に、このオプションを選択します。この設定が影響するのは、このゲートウェイ経由で直接送信する場合だけです。

「[confirm_delivery](#) プロパティ」 [『Mobile Link - サーバ起動同期』](#) を参照してください。

- ◆ **[このゲートウェイは、9.0.0 クライアントのみをサポートする]** すべての Listener が SQL Anywhere バージョン 9.0.0 クライアントである場合に、このオプションを選択します。

[確認のタイムアウト] 確認のタイムアウト時間を入力してください。確認のタイムアウトのデフォルトは1分です。

「confirm_timeout プロパティ」 『Mobile Link - サーバ起動同期』を参照してください。

- ◆ **[次の時間経過後にタイムアウト]** ドロップダウン・リストから確認のタイムアウト間隔を選択します。
- ◆ **[次のタイムアウト間隔を使用]** 確認のタイムアウト間隔を分と秒の単位で指定します。

参照

- ◆ 「ゲートウェイと Carrier」 『Mobile Link - サーバ起動同期』

[グローバル通知] プロパティ・シート : [一般] タブ

プロパティは起動時に読み込まれます。プロパティを変更した場合、Mobile Link サーバを停止して再起動しないと、その変更が有効になりません。

[グローバル通知] プロパティ・シートの [一般] タブには、次の項目があります。

[冗長性レベル] すべての Notifier、ゲートウェイ、Carrier に対する冗長レベルを指定します。次のいずれかのレベルを選択してください。

- ◆ **[トレーシングなし (レベル 0)]** トレースを使用しません。これがデフォルト設定です。
- ◆ **[起動およびシャットダウン・トレーシング (レベル 1)]** 起動、停止、プロパティのトレースを使用します。
- ◆ **[通知トレーシング (レベル 2)]** 通知メッセージを表示します。
- ◆ **[完全トレーシング (レベル 3)]** ポーリング・レベルのトレースを使用します。

参照

- ◆ 「verbosity プロパティ」 『Mobile Link - サーバ起動同期』

[Notifier] プロパティ・シート : [一般] タブ

プロパティは起動時に読み込まれます。プロパティを変更した場合、Mobile Link サーバを停止して再起動しないと、その変更が有効になりません。

[Notifier] プロパティ・シートの [一般] タブには、次の項目があります。

[名前] Notifier の名前が表示されます。このフィールドで Notifier の名前を変更できます。

[タイプ] オブジェクトのタイプが表示されます。

[有効化] Notifier を有効にするには、このオプションを選択します。

「enable プロパティ」 『Mobile Link - サーバ起動同期』を参照してください。

注意

-m コマンド・ライン・オプションを使用して Mobile Link を起動すると、QAnyNotifier_client Notifier は常に有効になります。「-m オプション」 『Mobile Link - サーバ管理』を参照してください。

[実行時にコントロール・ウィンドウを表示する] Notifier が動作しているコンピュータ上で [Notifier] ダイアログを表示するには、このオプションを選択します。このユーザ・インタフェースを使用すると、ポーリング間隔を一時的に変更したり、すぐにポーリングを実行したりできます。また、Mobile Link サーバを停止せずに Notifier を停止するために使用することも可能です(一度停止すると、Mobile Link サーバを停止して再度起動しないと、Notifier を再度起動できません)。このオプションはデフォルトで選択されています。

「gui プロパティ」 『Mobile Link - サーバ起動同期』を参照してください。

[他の Notifier とデータベース接続を共有する] このオプションを選択すると、データベース接続が他の Notifier と共有されます。

[説明] Notifier の説明を入力します。

参照

- ◆ 「Mobile Link 通知プロパティ」 『Mobile Link - サーバ起動同期』

[Notifier] プロパティ・シート : [接続] タブ

プロパティは起動時に読み込まれます。プロパティを変更した場合、Mobile Link サーバを停止して再起動しないと、その変更が有効になりません。

[Notifier] プロパティ・シートの [接続] タブには、次の項目があります。

[独立性レベル] 接続の独立性レベルを指定します。デフォルトの独立性レベルは、[コミットされた読み込み (レベル 1)] です。次のいずれかを選択してください。

- ◆ [コミットされない読み込み (レベル 0)]
- ◆ [コミットされた読み込み (レベル 1)]
- ◆ [繰り返し可能読み出し (レベル 2)]
- ◆ [直列可能 (レベル 3)]

次の項を参照してください。

- ◆ 「isolation プロパティ」 『Mobile Link - サーバ起動同期』
- ◆ 「独立性レベルと一貫性」 『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』

[接続文字列] デフォルトの接続動作を変更する場合に、JDBC 接続文字列を指定します。これはオプションの値です。

デフォルトでは、Notifier は `ianywhere.ml.script.ServerContext` を使用して統合データベースに接続します。つまり、Notifier は現在の `mlsrv10` セッションのコマンド・ラインで指定された接続文字列を使用するという事です。

統合データベースを含む任意のデータベースに接続する接続文字列を指定できます。別のデータベースに接続するときに通知ロジックとデータを同期データから分離するのに便利です。

「[connect_string プロパティ](#)」 『[Mobile Link - サーバ起動同期](#)』を参照してください。

参照

- ◆ 「[Mobile Link 通知プロパティ](#)」 『[Mobile Link - サーバ起動同期](#)』

[Notifier] プロパティ・シート : [ポーリング] タブ

プロパティは起動時に読み込まれます。プロパティを変更した場合、Mobile Link サーバを停止して再起動しないと、その変更が有効になりません。

[Notifier] プロパティ・シートの [ポーリング] タブには、次の項目があります。

[次の間隔でポーリング] ドロップダウン・リストからポーリング間隔を選択します。デフォルトは 30 秒です。

[次のポーリング間隔を使用] Notifier のポーリング間隔を指定します。

「[poll_every プロパティ](#)」 『[Mobile Link - サーバ起動同期](#)』を参照してください。

参照

- ◆ 「[Mobile Link 通知プロパティ](#)」 『[Mobile Link - サーバ起動同期](#)』

[Notifier] プロパティ・シート : [イベント] タブ

[Notifier] プロパティ・シートの [イベント] タブには、次の項目があります。

[イベント] リスト 各 Notifier イベントに関連付けられている名前と SQL 文が表示されます。イベントを選択すると、下のウィンドウ枠に SQL 文が表示されます。

[SQL 文] 選択されている SQL 文が表示されます。必要に応じて SQL 文を変更し、[適用] をクリックすると変更が保存されます。

参照

- ◆ 「[Notifier プロパティ](#)」 『[Mobile Link - サーバ起動同期](#)』
- ◆ 「[Notifier イベント](#)」 『[Mobile Link - サーバ起動同期](#)』

[Mobile Link 10 プラグインの環境設定] プロパティ・シート : [一般] タブ

[Mobile Link 10 プラグインの環境設定] プロパティ・シートの [一般] タブには、次の項目があります。

[設定] 次の1つまたは複数の設定を指定して、Mobile Link プラグインの設定を決定します。

- ◆ **[同期モデル作成ウィザードの [プライマリ・キー要件] ページを表示する]** この設定を選択すると、[同期モデル作成] ウィザードを開いたときにウィザードの [プライマリ・キー要件] ページが表示されます。
- ◆ **[操作完了後にメッセージ・ダイアログを自動的に閉じる]** この設定を選択すると、操作が完了したときにメッセージ・ダイアログが自動的に閉じます。
- ◆ **[同期モデルの一部として展開したスクリプトを上書きするときに警告する]** この設定を選択すると、同期実行モードの一環として展開されたスクリプトが上書きされるときに警告が表示されます。
- ◆ **[同期からリモート・カラムを除外するときに警告する]** この設定を選択すると、同期からリモート・カラムが除外されたときに警告が表示されます。

[デフォルトに戻す] [デフォルトに戻す] をクリックすると、このタブのユーザ設定がデフォルト値(選択または選択解除)に戻ります。デフォルトでは、[操作完了後にメッセージ・ダイアログを自動的に閉じる] を除いてこのタブのすべてのユーザ設定が選択されています。

[リモート・データベース] プロパティ・シート : [一般] タブ

[リモート・データベース] プロパティ・シートの [一般] タブには、次の項目があります。

[名前] リモート・データベースの名前が表示されます。

[タイプ] オブジェクトのタイプが表示されます。

参照

- ◆ 「リモート・データベースの作成」 『Mobile Link - クライアント管理』
- ◆ 「リモート ID」 『Mobile Link - クライアント管理』

[同期モデル] プロパティ・シート : [一般] タブ

[同期モデル] プロパティ・シートの [一般] タブには、次の項目があります。

[名前] 同期モデルの名前が表示されます。

[タイプ] オブジェクトのタイプが表示されます。

[ファイル] 同期モデル・ファイルの名前とロケーションが表示されます。

[パブリケーション名] パブリケーションの名前が表示されます。

[スクリプト・バージョン] 同期に使用されるスクリプトのバージョンの名前が表示されます。

[説明] 同期モデルの説明を入力します。

参照

- ◆ 「同期処理」 『Mobile Link - クイック・スタート』

[同期テーブル] プロパティ・シート : [一般] タブ

[同期テーブル] プロパティ・シートの [一般] タブには、次の項目があります。

[名前] 同期テーブルの名前が表示されます。

[タイプ] オブジェクトのタイプが表示されます。

[ID] 同期テーブルをユニークに識別する整数が表示されます。

参照

- ◆ 「[同期モデル作成] ウィザード : [テーブル同期マッピング] ページ」 189 ページ

[サブスクリプション] プロパティ・シート : [一般] タブ

[サブスクリプション] プロパティ・シートの [一般] タブには、次の項目があります。

[名前] パブリケーションの名前が表示されます。

[タイプ] オブジェクトのタイプが表示されます。

[リモート ID] データベースをユニークに識別するリモート ID が表示されます。このカラムは、ml_database テーブルの rid カラムを参照します。

[ユーザ] リモート・データベースに関連付けられている Mobile Link ユーザの名前が表示されます。

[サブスクリプション ID] ml_subscription テーブルの subscription_id カラムの値が表示されます。ml_subscription テーブルのプライマリ・キーは、この値とリモート・データベース ID から構成されます。

[進行状況] サブスクリプションに対するすべての操作がアップロードされ確認された点が表示されます。

[最終アップロード時刻] リモートの正常な最終アップロードがコミットされた時点の統合データベースでの時刻が表示されます。

[最終ダウンロード時刻] Mobile Link ユーザが最後にデータをダウンロードしたときのタイムスタンプ値が表示されます。

参照

- ◆ 「同期サブスクリプションの作成」 『Mobile Link - クライアント管理』
- ◆ 「リモート ID」 『Mobile Link - クライアント管理』
- ◆ 「自動検証」 『Mobile Link - サーバ管理』
- ◆ 「進行オフセット」 『Mobile Link - クライアント管理』

[テーブル] プロパティ・シート : [一般] タブ

[テーブル] プロパティ・シートの [一般] タブには、次の項目があります。

[名前] テーブルの名前が表示されます。

[タイプ] オブジェクトのタイプが表示されます。

[所有者] テーブルを作成して所有しているデータベース・ユーザが表示されます。

[コメント] テーブルの説明を入力します。たとえば、システムにおけるそのテーブルの目的を、この領域に記述できます。

参照

- ◆ 「[Mobile Link 統合データベース](#)」 『[Mobile Link - サーバ管理](#)』

[テーブル・スクリプト] プロパティ・シート : [一般] タブ

[テーブル・スクリプト] プロパティ・シートの [一般] タブには、次の項目があります。

[名前] テーブル・スクリプトの名前が表示されます。

[タイプ] オブジェクトのタイプが表示されます。

[スクリプト ID] 選択されているテーブル・スクリプトをユニークに識別する整数が表示されます。

[バージョン] テーブル・スクリプトが属するバージョンの名前が表示されます。

[バージョン ID] テーブル・スクリプトが属するバージョンをユニークに識別する整数が表示されます。

[同期テーブル] テーブル・スクリプトが属する同期テーブルの名前が表示されます。

[言語] テーブル・スクリプトの記述言語が表示されます。

[展開済み] スクリプトが展開されているかどうかを示されます。

[共有バージョン] 共有バージョンがある場合は表示されます。

参照

- ◆ 「[スクリプトの追加と削除](#)」 『[Mobile Link - サーバ管理](#)』

[ユーザ] プロパティ・シート : [一般] タブ

[ユーザ] プロパティ・シートの [一般] タブには、次の項目があります。

[名前] ユーザの名前が表示されます。

[タイプ] オブジェクトのタイプが表示されます。

[ID] ユーザをユニークに識別する整数が表示されます。

[このユーザにパスワードを設定] このオプションを選択すると、ユーザのパスワードを設定できます。このオプションをクリアすると、[パスワード] オプションと [パスワードの確認] オプションが無効になります。

- ◆ **[パスワード]** ユーザのパスワードを入力します。パスワードでは大文字と小文字が区別されます。
- ◆ **[パスワードの確認]** [パスワード] テキスト・ボックスに入力したパスワードをもう一度入力して確認します。2つのフィールドの内容は、完全に一致している必要があります。パスワードでは大文字と小文字が区別されます。

参照

- ◆ 「[Mobile Link ユーザの概要](#)」 『[Mobile Link - クライアント管理](#)』
- ◆ 「[Mobile Link ユーザの作成と登録](#)」 『[Mobile Link - クライアント管理](#)』
- ◆ 「[ユーザの最初のパスワードを設定する](#)」 『[Mobile Link - クライアント管理](#)』

[バージョン] プロパティ・シート : [一般] タブ

[バージョン] プロパティ・シートでは、選択されたスクリプト・バージョンに関する情報を参照できます。スクリプト・バージョンを使用すると、スクリプトを異なる環境で実行されるスクリプト・セットに編成することができます。バージョンを指定することによって、アップロード・ストリームの処理やダウンロード・ストリームの準備に使用する同期スクリプト・セットを Mobile Link クライアントで選択できます。

[バージョン] プロパティ・シートの [一般] タブには、次の項目があります。

[名前] 選択されているスクリプト・バージョンの名前が表示されます。スクリプト・バージョン名は、文字列です。テキスト・ボックスでバージョン名を編集できます。

[タイプ] 選択されているオブジェクトのタイプが表示されます。この場合のオブジェクト・タイプはバージョンです。

[ID] 選択されているバージョンをユニークに識別する整数が表示されます。

[説明] バージョンの説明を入力します。たとえば、システムにおけるそのバージョンの目的を、この領域に記述できます。

参照

- ◆ 「[スクリプト・バージョン](#)」 『[Mobile Link - サーバ管理](#)』

Mobile Link サーバ・ログ・ファイル・ビューワ : [メッセージ] タブ

Mobile Link サーバ・ログ・ファイル・ビューワは、Mobile Link サーバ・ログ・ファイルを読み取り、メッセージを同期ごとにまとめて表示します。

Mobile Link サーバ・ログ・ファイル・ビューワの [メッセージ] タブには、次の項目があります。

[フィルタ] 次のオプションを1つ以上指定して、下にある [メッセージ] ウィンドウ枠に表示されるメッセージをフィルタします。たとえば、表示されるメッセージを特定のリモート ID が関連する同期に限定するには、[リモート ID] オプションを選択し、有効なリモート ID を入力して、[適用] をクリックします。

[適用] をクリックすると、[メッセージ] タブの表示が更新されます。

- ◆ **[エラーを表示]** このオプションを選択すると、同期エラー・メッセージが [メッセージ] ウィンドウ枠に表示されます。
- ◆ **[警告を表示]** このオプションを選択すると、同期警告メッセージが [メッセージ] ウィンドウ枠に表示されます。
- ◆ **[情報を表示]** このオプションを選択すると、同期情報メッセージが [メッセージ] ウィンドウ枠に表示されます。
- ◆ **[開始位置]** 日付と時刻を選択して指定します。日付と時刻の指定には次のフォーマットを使用します。

YYYYMM-DD HH:NN:SS

このオプションにより、指定した時刻以降のメッセージのみが表示されます。

[開始位置] と [終了位置] をどちらも選択すると、タイムスタンプがこの2つの時刻の間になっているメッセージが表示されます。

- ◆ **[終了位置]** 日付と時刻を選択して指定します。日付と時刻の指定には次のフォーマットを使用します。

MM-DD HH:NN:SS

このオプションにより、指定した時刻以前のメッセージのみが含まれるようになります。

[開始位置] と [終了位置] をどちらも選択すると、タイムスタンプがこの2つの時刻の間になっているメッセージを含む同期が表示されます。

- ◆ **[ログの内容]** このフィールドに文字列を入力すると、それを内容に含むものだけが表示されます。フィルタでは大文字と小文字は区別されます。ワイルドカードはサポートされていません。
- ◆ **[リモート ID]** 指定されたリモート ID でメッセージをフィルタします。
- ◆ **[ユーザ名]** 指定されたユーザ名でメッセージをフィルタします。

[適用] クリックすると、指定されたメッセージ・フィルタが適用されます。

[メッセージ] ウィンドウ枠 フィルタされたメッセージが表示されます。このテーブルには次のメッセージ情報が表示されます。

- ◆ **フラグ・カラム** このカラムにタイトルはありません。警告またはエラーがあるメッセージにアイコンが表示されます。
- ◆ **[タイムスタンプ] カラム** 同期が開始された日付と時刻が表示されます。
- ◆ **[ID] カラム** リモート・ユーザ ID が表示されます。
- ◆ **[メッセージ] カラム** メッセージが表示されます。

Mobile Link サーバ・ログ・ファイル・ビューワ : [概要] タブ

[Mobile Link サーバ・ログ・ファイル・ビューワ] ダイアログの [概要] タブは、他のタブでフィルタが適用されているかどうかに関係なく、ログ・ファイル全体の情報の概要が表示されます。

たとえば、このタブには同期の数、平均同期時間、ユーザごとのエラー数などが表示されます。

[概要] タブには、次の項目があります。

[ファイル] テーブル

[名前] ログ・ファイルの名前が表示されます。

[日付] ログ・ファイルが最後に変更された日付が表示されます。

[概要] テーブル

[統計情報] 同期の数、ユーザの数、同時同期の最大数などの概要統計情報が表示されます。

[値] 統計情報ごとのインスタンス数が表示されます。

[ユーザ統計] テーブル

[ユーザ統計] テーブルには、ユーザごとの同期情報の概要が表示されます。このテーブルには次のカラムがあります。

[ユーザ名] ユーザの名前が表示されます。

[同期] 試行された同期の数が表示されます。

[平均同期時間] 平均同期時間が秒単位で表示されます。

[エラー] エラーを含む同期の数が表示されます。

[エラー (%)] エラーを含む同期の割合が表示されます。

Mobile Link サーバ・ログ・ファイル・ビューワ : [同期] タブ

Mobile Link サーバ・ログ・ファイル・ビューワの [同期] タブは、Mobile Link サーバ・ログ・ファイルを読み取り、メッセージを同期ごとにまとめて表示します。

Mobile Link サーバ・ログ・ファイル・ビューワの [同期] タブには、次の項目があります。

[フィルタ] 次のオプションを1つ以上指定して、[同期] ウィンドウ枠や [詳細] ウィンドウ枠に表示される同期情報をフィルタします。たとえば、表示される同期を、特定のリモート ID またはユーザ名が関連しているものや、エラー・メッセージを含むものに制限できます。

[同期] および [詳細] ウィンドウ枠の表示を更新するには、[適用] をクリックします。

- ◆ **[エラーを表示]** このオプションを選択すると、エラー・メッセージが含まれる同期が表示されます。
- ◆ **[警告を表示]** このオプションを選択すると、警告メッセージが含まれる同期が表示されます。
- ◆ **[情報を表示]** このオプションを選択すると、同期に関連付けられている情報メッセージが表示されます。
- ◆ **[開始位置]** 日付と時刻を選択して指定します。日付と時刻の指定には次のフォーマットを使用します。

YYYY MM-DD HH:NN:SS

このオプションにより、指定した時刻以降のメッセージが含まれている同期が表示されます。

[開始位置] と [終了位置] をどちらも選択すると、タイムスタンプがこの2つの時刻の間になっているメッセージを含む同期が表示されます。

- ◆ **[終了位置]** 日付と時刻を選択して指定します。日付と時刻の指定には次のフォーマットを使用します。

YYYY MM-DD HH:NN:SS

このオプションにより、指定した時刻以前のメッセージが含まれている同期のみが含まれるようになります。

[開始位置] と [終了位置] をどちらも選択すると、タイムスタンプがこの2つの時刻の間になっているメッセージを含む同期が表示されます。

- ◆ **[ログの内容]** このフィールドに文字列を入力すると、それを内容に含むものだけが表示されます。フィルタでは大文字と小文字は区別されます。ワイルドカードはサポートされていません。
- ◆ **[リモート ID]** 指定されたリモート ID でメッセージをフィルタします。
- ◆ **[ユーザ名]** 指定されたユーザ名でメッセージをフィルタします。

[適用] クリックすると、指定されたメッセージ・フィルタが適用されます。

[同期] ウィンドウ枠

フィルタされた同期が表示されます。

[詳細] ウィンドウ枠

選択されている同期の詳細情報が表示されます。

第 5 章

Mobile Link プラグインのモデル・モードのヘルプ

目次

Mobile Link モデル・モードのウィザード	184
[リモート・テーブルの新規作成] ダイアログ	228
Mobile Link モデル・モード	229

Mobile Link モデル・モードのウィザード

Mobile Link モデル・モードのウィザードを使用すると、同期モデルの作成、スキーマの更新、同期モデルの展開の各タスクを順を追って簡単に実行できます。

[同期モデル作成] ウィザード : [ようこそ] ページ

このページには次の項目があります。

[新しい同期モデルの名前を指定してください。] 同期モデルの識別に使用する名前を入力します。指定する名前は、ユニークにする必要があります。この名前は、モデル・ファイルに対して、および展開するファイルとディレクトリのデフォルト名として使用されます。

[新しい同期モデル・ファイルを保存するフォルダを指定してください。] 新しい同期モデルに使用するフォルダの名前とロケーションを指定するか、[参照] をクリックしてフォルダを選択します。

参照

- ◆ 「モデルの作成」 『Mobile Link - クイック・スタート』
- ◆ 「Mobile Link のモデルの概要」 『Mobile Link - クイック・スタート』
- ◆ 「[同期モデル展開] ウィザード : 概要」 198 ページ
- ◆ 「同期システムの要素」 『Mobile Link - クイック・スタート』

[同期モデル作成] ウィザード : [プライマリ・キー要件] ページ

同期システムでは、プライマリ・キーは、異なるデータベース (リモートと統合) 内の同じローを識別する唯一の方法であり、競合を検出する唯一の方法です。したがって、Mobile Link アプリケーションは以下の規則に従う必要があります。

- ◆ 同期される各リモート・テーブルには、プライマリ・キーが存在する必要がある。
- ◆ プライマリ・キーの値は更新しない。
- ◆ プライマリ・キーは、同期されるすべてのデータベース間でユニークでなければならない。

[同期モデル作成] ウィザードの [プライマリ・キー要件] ページでは、アプリケーションやデータベースが Mobile Link による同期のプライマリ・キーの要件を満たしている必要があることを確認します。[同期モデル作成] ウィザードの次のページに進むには、3つのプライマリ・キーの条件を選択する必要があります。

プライマリ・キーの要件の詳細については、「ユニークなプライマリ・キーの管理」 『Mobile Link - サーバ管理』を参照してください。

このページには次の項目があります。

[すべてのテーブルにプライマリ・キーがある] すべてのリモート・テーブルにプライマリ・キーがあることを確認する場合はこの条件を選択します。

[アプリケーションはプライマリ・キーを更新しない] アプリケーションでプライマリ・キーを更新しないことを確認する場合はこの条件を選択します。

[新しいローにユニークなプライマリ・キーがあることを確認した] 新しいローにユニークなプライマリ・キーがあることを確認した場合はこの条件を選択します。

[今後 [プライマリ・キー要件] ページを表示しない] このオプションを選択すると、今後 [プライマリ・キー要件] ページが表示されません。このオプションは、Sybase Central の Mobile Link プラグインの [Mobile Link 10 プラグインの環境設定] ページからも変更できます。

参照

- ◆ 「[Mobile Link とプライマリ・キー](#)」 『[Mobile Link - サーバ管理](#)』

[同期モデル作成] ウィザード : [統合データベース・スキーマ] ページ

このページには次の項目があります。

[統合データベースの選択] このボタンをクリックして、同期モデルのスキーマ情報を取得する統合データベースをクリックして選択します。[接続] ダイアログが表示されます。統合データベースに必要な接続情報を指定します。

注意

指定されたデータベースが Mobile Link 統合データベースとして設定されていない場合は、Mobile Link システム設定のインストールを求めるプロンプトが表示されます。

Mobile Link 設定スクリプトは、データベースに Mobile Link システム・テーブル、ストアド・プロシージャ、トリガ、ビューを追加します。これらのテーブルとプロシージャは Mobile Link 同期に必要です。

- ◆ [はい] をクリックすると、Mobile Link システム設定スクリプトを統合データベースにすぐにインストールします。

たとえば、同期モデルを指定された統合データベースに展開する場合は [はい] をクリックします。

設定スクリプトを実行するデータベース・ユーザには、Mobile Link システム・テーブルを更新するパーミッションが与えられます。このパーミッションは、Mobile Link サーバを起動したり Mobile Link を設定したりする場合に必要です。「必要なパーミッション」『[Mobile Link - サーバ管理](#)』を参照してください。

- ◆ [いいえ] をクリックすると、Mobile Link 設定スクリプトを指定された統合データベースにインストールしません。

たとえば次の場合に [いいえ] をクリックします。

- ◆ スキーマを取得するためだけに指定した統合データベースを使用し、モデルを展開する予定がない場合。
- ◆ 同期モデルを指定した統合データベースに展開するが、それには [同期モデル展開] ウィザードを使用する予定の場合。
- ◆ 展開後に設定スクリプトを自分で実行する場合。

Mobile Link システム設定のインストール以外の場合では、モデルを展開しないかぎり、統合データベースにその他の変更は加えられません。

「[統合データベースの設定](#)」『[Mobile Link - サーバ管理](#)』を参照してください。

指定した統合データベースへの接続は、別の統合データベースを選択したとき、またはウィザードを終了したときに切断されます。

次の各フィールドは、最初はすべて空白ですが、統合データベースを選択すると、その統合データベースに関する情報が表示されます。

[名前] 統合データベースの ODBC データ・ソース名が表示されます。

[ユーザ] 統合データベースに接続しているデータベース・ユーザのユーザ名が表示されます。

[製品名] 統合データベースのタイプが表示されます。たとえば、SQL Anywhere などです。

[バージョン] 統合データベースのバージョンが表示されます。

参照

- ◆ 「[Mobile Link 統合データベース](#)」『[Mobile Link - サーバ管理](#)』

[同期モデル作成] ウィザード : [リモート・データベース・スキーマ] ページ

[同期モデル作成] ウィザードの [リモート・データベース・スキーマ] ページでは、リモート・データベース・スキーマを指定できます。リモート・スキーマを取得するために既存のリモート・データベースに接続することも、統合データベース・スキーマに基づいて新しいリモート・データベース・スキーマを作成することもできます。

このページには次の項目があります。

[既存のリモート・データベースがありますか?] 使用できる既存のリモート・データベースがあるかどうかを指定します。

- ◆ **[いいえ、新しいリモート・データベース・スキーマを作成します]** リモート・データベースのスキーマを統合データベースに基づくようにする場合は、このオプションを選択します。このオプションを選択した場合は、統合データベース内で、リモート・データベースのスキーマの作成に使用するテーブルを後で指定する必要があります。
- ◆ **[はい、既存のリモート・データベースを使用します]** SQL Anywhere または Ultra Light の既存のリモート・データベースに接続してモデルのリモート・データベース・スキーマを取得する場合はこのオプションを選択します。

たとえば、次の場合に [はい] を選択します。

- ◆ すでにリモート・データベースがある場合、特にスキーマが統合データベース・スキーマのサブセットではない場合。
- ◆ 統合カラムとリモート・カラムのタイプが異なっている必要がある場合。たとえば、統合データベースの NCHAR カラムを Ultra Light リモート・データベースの CHAR カラムにマッピングする必要がある場合。
- ◆ リモート・テーブルと統合データベースのテーブルの所有者が異なっている必要がある場合。新しい SQL Anywhere リモート・データベースでは、リモート・テーブルの所有者は、統合データベース内の対応するテーブルの所有者と同じになります。別の所有者にするには、その所有者がテーブルを所有する既存の SQL Anywhere リモート・データベースを使用してください。Ultra Light データベースは、所有者を持ちません。

ヒント:

既存のリモート・データベースのスキーマを変更する必要がある場合は、モデルの外部にあるデータベースを変更してから、[スキーマ更新] ウィザードを実行してモデルを更新します。

- ◆ **[リモート・データベースの選択]** このボタンをクリックして、リモート・データベースのスキーマ情報を取得する既存のリモート・データベースを選択します。

[接続] ダイアログが表示されます。

リモート・データベースに接続するために必要な情報を指定します。

次の各フィールドは、最初はすべて空白ですが、統合データベースを選択すると、その統合データベースに関する情報が表示されます。

- ◆ **[名前]** リモート・データベースの名前が表示されます。

- ◆ **[ユーザ]** リモート・データベースに接続しているユーザのユーザ名が表示されます。
- ◆ **[製品名]** リモート・データベースのタイプを表示します (SQL Anywhere または Ultra Light)。
- ◆ **[バージョン]** 製品のバージョンを表示します。

参照

- ◆ 「[SQL Anywhere クライアント](#)」 『[Mobile Link - クライアント管理](#)』
- ◆ 「[Ultra Light クライアント](#)」 『[Mobile Link - クライアント管理](#)』

[同期モデル作成] ウィザード : [新しいリモート・データベース・スキーマ] ページ

このページでは、リモート・データベースのスキーマの作成に使用する統合データベースのテーブルを選択できます。統合データベース内で選択したテーブルがリモート・データベースに作成され、対応する統合テーブルとリモート・テーブルの間で同期が設定されます。ウィザードの完了後に、テーブルとカラムのマッピングを修正できます。

このページには次の項目があります。

[テーブル] リスト 現在接続している統合データベース内のテーブルのテーブル名と所有者が表示されます。システム・テーブルと Mobile Link システム・テーブルは除きます。

[すべてを選択] [すべてを選択] をクリックすると、リスト内のすべてのテーブルが、リモート・データベースのスキーマに含めるテーブルとして選択されます。

[すべてをクリア] [すべてをクリア] をクリックすると、[テーブル] リストのすべてのチェックボックスがクリアされます。

[所有者] ドロップダウン・リストから特定のユーザを選択します。

[所有者の選択] [所有者の選択] をクリックすると、[所有者] ドロップダウン・リストで指定したユーザが所有するテーブルがすべて選択されます。

参照

- ◆ 「[リモート・テーブルと統合データベースの関係](#)」 『[Mobile Link - サーバ管理](#)』

[同期モデル作成] ウィザード : [既存のリモート・データベース] ページ

[同期モデル作成] ウィザードの [既存のリモート・データベース] ページでは、同期するリモート・データベース・テーブルを選択できます。

このページには次の項目があります。

[テーブル] リスト 現在接続しているリモート・データベース内のテーブルのテーブル名と所有者が表示されます。システム・テーブルと Mobile Link システム・テーブルは除きます。

[すべてを選択] [すべてを選択] をクリックすると、リスト内のすべてのテーブルが、同期に追加するテーブルとして選択されます。

[すべてをクリア] [すべてをクリア] をクリックすると、[テーブル] リストのすべてのチェックボックスがクリアされます。

[所有者] ドロップダウン・リストから特定のユーザを選択すると、リストがその所有者までスクロールします。次に [所有者の選択] ボタンを使用して、選択したユーザが所有するテーブルを選択します。

[所有者の選択] [所有者の選択] をクリックすると、[所有者] ドロップダウン・リストで指定したユーザが所有するテーブルがすべて選択されます。

参照

- ◆ 「リモート・テーブルと統合データベースの関係」 『Mobile Link - サーバ管理』
- ◆ 「リモート・データベースと統合データベース間での Mobile Link データ・マッピング」 『Mobile Link - サーバ管理』

[同期モデル作成] ウィザード : [テーブル同期マッピング] ページ

このページでは、モデルで選択したリモート・テーブルと統合テーブル間のテーブル・マッピングを指定できます。このページは、同期モデルのリモート・データベース・スキーマが既存のリモート・データベースに基づいている場合に適用されます。

このページには、リモート・テーブルと、統合データベースで利用可能なテーブルの間のマッピングが表示されます。[マッピング方向] カラムは、マッピングが [双方向]、[アップロードのみ]、[ダウンロードのみ]、または [同期されない] のどれであるかを示します。

テーブルには次の項目があります。

[リモート・テーブル] カラム 選択したリモート・データベース・テーブルが表示されます。

[マッピング方向] カラム リモート・テーブルと選択した統合テーブル間の同期の方向を表示します。方向は、[双方向]、[ダウンロードのみ]、[アップロードのみ]、[同期されない] のいずれかです。デフォルトは [双方向] です。ドロップダウン・リストから新しい方向を選択すると、方向を変更できます。

[統合テーブル] カラム [リモート・テーブル] カラムのテーブルに対するマッピングが試みられる統合データベース・テーブルを示します。

注意

デフォルトのテーブル・マッピングは完全ではありません。すべてのテーブルのマッピングが見つからなかったり、テーブルがマッピングされてもそのマッピングが意図したものではなかったりする可能性があるため、次に進む前にテーブルのマッピングをすべて確認してください。

ドロップダウン・リストから統合テーブルを選択すると、統合テーブルを変更できます。

処理を先に進めるには、すべてのテーブルがマッピングされる必要があります。

[同期モデル作成] ウィザード : [ダウンロード・タイプ] ページ

このページには次の項目があります。

[デフォルトで使用するダウンロードのタイプを指定してください。] 次のオプションのうちの1つを選択してください。

- ◆ **[タイムスタンプベースのダウンロード]** このオプションを選択すると、タイムスタンプベースのダウンロードがデフォルトとして使用されます。前回の同期以降に変更されたローのみがダウンロードされます。

「タイムスタンプベースのダウンロード」 『Mobile Link - サーバ管理』を参照してください。

- ◆ **[スナップショット・ダウンロード]** このオプションを選択すると、スナップショット・ダウンロードがデフォルトとして使用されます。前回の同期以降に変更されていない場合でも、すべてのローがダウンロードされます。

「スナップショットを使った同期」 『Mobile Link - サーバ管理』を参照してください。

- ◆ **[カスタム・ダウンロード・ロジック]** download_cursor スクリプトと download_delete_cursor スクリプトを自動的に生成せず、独自に作成する場合は、このオプションを選択します。

次の項を参照してください。

- ◆ 「同期スクリプトの作成」 『Mobile Link - サーバ管理』
- ◆ 「download_cursor スクリプトの作成」 『Mobile Link - サーバ管理』
- ◆ 「download_delete_cursor スクリプトの作成」 『Mobile Link - サーバ管理』

生成されたスクリプトの使用と独自のスクリプトの作成のどちらを選択したかにかかわらず、ウィザードの完了後にスクリプトを編集できます。

参照

- ◆ 「削除の処理」 『Mobile Link - サーバ管理』
- ◆ 「download_cursor テーブル・イベント」 『Mobile Link - サーバ管理』
- ◆ 「download_delete_cursor テーブル・イベント」 『Mobile Link - サーバ管理』

[同期モデル作成] ウィザード : [タイムスタンプ・ダウンロードのオプション] ページ

タイムスタンプベースのダウンロードを行うには、ローの変更を追跡するために、統合データベースの同期されるテーブルごとにタイムスタンプ・カラムが必要です。

警告

タイムスタンプ・カラムには、統合データベースで同期が最後に変更された時刻が記録されます。このカラムは、統合データベースにあります。その他の目的で同期または変更しないでください。

このページでは、タイムスタンプ・カラムの名前と、カラムを同期テーブルに追加するか、シャドー・テーブルを作成してタイムスタンプを保持するかを指定できます。

このページには次の項目があります。

[タイムスタンプ・カラム名] タイムスタンプ・カラムの名前が表示されます。

[同期テーブルでタイムスタンプ・カラムを使用する] このオプションを選択すると、統合データベースの同期テーブルにタイムスタンプ・カラムが追加されます。統合データベースの定義を変更する場合はこのオプションを選択します。モデルを展開すると、統合データベースでタイムスタンプ・カラムがない各同期テーブルにタイムスタンプ・カラムが追加されます。

このモデルを統合データベースに再展開しようとする、モデル内の統合スキーマの更新を求めるプロンプトが表示されます。

[シャドー・テーブルを使用してタイムスタンプ・カラムを保持する] このオプションを選択すると、統合データベースの同期テーブルごとにシャドー・テーブルが作成されます。タイムスタンプ・カラムを追加して同期された統合データベースのスキーマを修正しない場合は、このオプションを選択します。シャドー・テーブルには、テーブルのプライマリ・キーを保持するカラムと、タイムスタンプを保持するカラムという2つのカラムがあります。シャドー・テーブルは、ベース・テーブルと同じ所有者で作成されます。

参照

- ◆ 「[download_delete_cursor](#) スクリプトの作成」 『Mobile Link - サーバ管理』
- ◆ 「[タイムスタンプベースのダウンロード](#)」 『Mobile Link - サーバ管理』
- ◆ 「[ダウンロード・タイムスタンプの生成および使用方法](#)」 『Mobile Link - サーバ管理』

[同期モデル作成] ウィザード : [削除のダウンロード] ページ

このページでは、統合データベースから削除をダウンロードするかどうかを指定できます。

このページには次の項目があります。

[統合データベース上で削除されたデータを、リモート・データベース上で削除しますか ?] 次のオプションのうちの1つを選択してください。

- ◆ **[はい]** [はい] を選択すると、統合データベース内の削除がダウンロードされます。
- ◆ **[いいえ]** [いいえ] を選択すると、統合データベース内の削除がダウンロードされません。

スナップショット・ダウンロードを選択し、それ以外のオプションがない場合、スナップショットがダウンロードされる前にリモート・データベース内のすべてのローが削除されます。タイムスタンプベースのダウンロードの場合、次のオプションがあります。

[シャドー・テーブルを使用して削除を記録する] このオプションを選択すると、シャドー・テーブルを使用して、統合データベース内の削除が追跡されます。統合データベースでローが削除されるたびに、対応するシャドー・テーブルではローが追加されます。シャドー・テーブルは、ベース・テーブルと同じ所有者で作成されます。

- ◆ **[タイムスタンプ・カラム名]** タイムスタンプ・カラムの名前が表示されます。デフォルトは `last_modified` です。

[論理削除を使用する] 実際にローを削除するのではなく、論理削除を使用する場合は、このオプションを選択します。ローが削除されたかどうかを 1 文字のカラムを使用して示す方法を指定します。

- ◆ **[カラム名]** ローが削除されたかどうかを示すカラムの名前を指定します。この名前のカラムがすでに存在する場合は、1 文字のカラムが追加されます。
- ◆ **[ローが削除されたことを示す値]** ローが削除された場合のカラムの値を指定します。デフォルトは Y です。1 文字の値だけが許可されます。
- ◆ **[ローが削除されていないことを示す値]** ローが削除されていない場合のカラムの値を指定します。デフォルトは N です。1 文字の値だけが許可されます。

参照

- ◆ 「[削除の処理](#)」 『[Mobile Link - サーバ管理](#)』
- ◆ 「[download_delete_cursor スクリプトの作成](#)」 『[Mobile Link - サーバ管理](#)』

[同期モデル作成] ウィザード : [サブセットのダウンロード] ページ

各 Mobile Link リモート・データベースには、統合データベースに格納されているデータのサブセットが含まれます。このページでは、これらのサブセットを設定できます。

このページには次の項目があります。

[すべてのリモート・データベースが同じデータをダウンロードするようにしますか ?] 次のいずれかのオプションを選択して、すべてのリモート・データベースに同じデータをダウンロードするかどうかを指定します。

- ◆ **[はい]** すべてのリモート・データベースに同じデータをダウンロードする場合は、このオプションを選択します。

ヒント

一部のテーブルだけでデータをサブセットする場合は、このオプションを選択することで、すべてのテーブルに対するサブセット化を有効にすることができます。ウィザードが完了したら、非サブセット・テーブルのサブセット化を無効にできます。こちらの方法の方が、後で複数のテーブルのサブセット化を有効にするよりも簡単です。

- ◆ **[いいえ]** すべてのリモート・データベースに同じデータをダウンロードしない場合は、このオプションを選択します。このオプションを選択すると、次のオプションが有効になります。
 - ◆ **[同期ユーザ]** このオプションを選択すると、Mobile Link ユーザ名によってデータが分割され、登録済みの Mobile Link ユーザごとに異なるデータがダウンロードされます。
 - ◆ **[リモート ID]** このオプションを選択すると、リモート ID によってデータが分割され、リモート・データベースごとに異なるデータがダウンロードされます。
 - ◆ **[ダウンロード・カーソルの WHERE 句で SQL 式を使用する]** ダウンロードするローを指定する SQL 式を使用するには、このオプションを選択します。各同期は、SQL 式が true のローのみをダウンロードします。

参照

- ◆ 「リモート・データベース間でローを分割する」 『Mobile Link - サーバ管理』

[同期モデル作成] ウィザード : [同期ユーザによるサブセットのダウンロード] ページ

このページでは、Mobile Link ユーザ名によってデータを分割するために必要な情報を指定できます。このオプションを使用するには、Mobile Link ユーザ名が統合データベース上に存在する必要があります。Mobile Link ユーザ名は展開時に選択するため、統合データベースの既存の値と一致する名前を選択できます。サブセットしているテーブルとは異なるテーブルに Mobile Link ユーザ名がある場合は、そのテーブルにジョインする必要があります。たとえば、姓と名を含むカラムをジョインできます。

このページには次の項目があります。

[各ダウンロード・テーブルのカラムを使用する] 指定したカラムを含むダウンロード・テーブルについて、各ローが 1 人の Mobile Link ユーザだけによってダウンロードされます。アップロードも実行されるテーブルの場合は、カラムを同期するか、そのデフォルト値を定義する必要があります。

- ◆ **[カラム名]** ドロップダウン・リストからカラム名を選択します。ドロップダウン・リストには、同期される統合テーブルのカラムすべてが含まれます。

[ジョインされている関係テーブル内のカラムを使用する] サブセットしているテーブルとは異なるテーブルに Mobile Link ユーザ名がある場合は、そのテーブルにジョインする必要があります。このオプションを使用するときの例については、下の例を参照してください。ジョインについて次の情報を指定します。

- ◆ **[ジョインするテーブル]** ドロップダウン・リストからテーブルを選択します。このテーブルは、下で指定されたカラムを持つそれぞれの同期されたテーブルにジョインされます。
- ◆ **[一致させるカラム]** ドロップダウン・リストからカラムを選択します。
- ◆ **[ダウンロードした各テーブル T を、次のジョイン条件で関係テーブルにジョインするためのカラムを選択してください。]** 各ドロップダウン・リストからカラムを選択して、テーブルがジョインされる方法を指定します。

例

CustDB の ULOrder テーブルは、ユーザ間で共有できます。デフォルトで、注文は、作成した従業員に割り当てられています。しかし、別の従業員によって作成された注文を確認したい場合があります。たとえば、マネージャは、部署の従業員が作成したすべての注文を確認する必要があるかもしれません。CustDB データベースでは、このような状況に備えるために、ULEmpCust テーブルを使用します。これにより、顧客を従業員に割り当てることができます。マネージャは、ある従業員と顧客の関係における注文をダウンロードします。

このシナリオで同期を設定するには、[ジョインされている関係テーブル内のカラムを使用する] オプションを選択し、このウィザード・ページで次のオプションを設定します。

オプション	値
[ジョインするテーブル]	ULEmpCust
[一致させるカラム]	emp_id
[T] ドロップダウン・リスト (ULOrder テーブル用)	emp_id (整数)
DBA.ULEmpCust テーブル	emp_id (整数)

次の download_cursor スクリプトは、これらの設定に基づいて生成されます。

```
SELECT "DBA"."ULOrder"."order_id",
       "DBA"."ULOrder"."cust_id",
       "DBA"."ULOrder"."prod_id",
       "DBA"."ULOrder"."emp_id",
       "DBA"."ULOrder"."disc",
       "DBA"."ULOrder"."quant",
       "DBA"."ULOrder"."notes",
       "DBA"."ULOrder"."status"
FROM "DBA"."ULOrder", "DBA"."ULEmpCust"
WHERE "DBA"."ULOrder"."last_modified" >= {ml s.last_table_download}
AND "DBA"."ULOrder"."emp_id" = "DBA"."ULEmpCust"."emp_id"
AND "DBA"."ULEmpCust"."emp_id" = {ml s.username}
```

この例では、タイムスタンプベースのダウンロードを使用します。

[同期モデル作成] ウィザードの完了後に、このスクリプトをモデル・モードの [イベント] タブで表示および修正できます。「モデル内のスクリプトの変更」『[Mobile Link - クイック・スタート](#)』を参照してください。

参照

- ◆ 「[Mobile Link ユーザの概要](#)」 『[Mobile Link - クライアント管理](#)』
- ◆ 「[ジョイン：複数テーブルからのデータ検索](#)」 『[SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法](#)』
- ◆ 「[スクリプトでのリモート ID と Mobile Link ユーザ名の使用](#)」 『[Mobile Link - クライアント管理](#)』

[同期モデル作成] ウィザード：[リモート ID によるサブセットのダウンロード] ページ

このページでは、リモート ID によってデータを分割するために必要な情報を指定できます。このオプションを使用するには、リモート ID が統合データベースにあることが必要です。リモート ID はデフォルトでは GUID として作成されますが、統合データベースの既存の値に一致する ID を設定できます。サブセットしているテーブルとは異なるテーブルにリモート ID がある場合は、そのテーブルにジョインする必要があります。

このページには次の項目があります。

[各ダウンロード・テーブルのカラムを使用する] 指定したカラムを含むダウンロード・テーブルについて、各ローが 1 つのリモート ID だけによってダウンロードされます。アップロードも実行されるテーブルの場合は、カラムを同期するか、そのデフォルト値を定義する必要があります。

- ◆ **[カラム名]** ドロップダウン・リストからカラム名を選択します。ドロップダウン・リストには、同期されるすべての統合テーブルのカラムすべてが含まれます。

[ジョインされている関係テーブル内のカラムを使用する] サブセットしているテーブルとは異なるテーブルにリモート ID がある場合は、そのテーブルにジョインする必要があります。ジョインについて次の情報を指定します。

- ◆ **[ジョインするテーブル]** ドロップダウン・リストからテーブルを選択します。
- ◆ **[一致させるカラム]** ドロップダウン・リストからカラムを選択します。
- ◆ **[ダウンロードした各テーブル T を、次のジョイン条件で関係テーブルにジョインするためのカラムを選択してください。]** 各ドロップダウン・リストからカラムを選択して、テーブルがジョインされる方法を指定します。

参照

- ◆ 「リモート ID」 『Mobile Link - クライアント管理』
- ◆ 「リモート・データベース間でローを分割する」 『Mobile Link - サーバ管理』
- ◆ 「スクリプトでのリモート ID と Mobile Link ユーザ名の使用」 『Mobile Link - クライアント管理』

[同期モデル作成] ウィザード : [SQL 式によるサブセットのダウンロード] ページ

このページでは、SQL 式スクリプトを構築するために必要な情報を指定できます。この SQL Anywhere 式は、download_cursor スクリプトで使用される式と同じです。この式は、一部が自動的に作成されます。このオプションを使用する方法の例については、下の例を参照してください。

このページには次の項目があります。

[ダウンロード・カーソルの FROM 句に追加するテーブル] download_cursor で別のテーブルへのジョインが必要な場合に、テーブル名を入力します。ジョインで複数のテーブルが必要な場合は、カンマで区切ります。「download_cursor スクリプトの作成」 『Mobile Link - サーバ管理』を参照してください。

[ダウンロード・カーソルの WHERE 句で使用する SQL 式] ダウンロード・カーソルの WHERE 句で使用する SQL 式を入力します。download_cursor をすべて自分で作成する必要はありません。ダウンロード・サブセットのジョインやその他の制限を指定するために追加情報を指定する必要があるだけです。「download_cursor スクリプトの作成」 『Mobile Link - サーバ管理』を参照してください。

例

Mobile Link ユーザによる Customer というテーブルのダウンロードをサブセットし、active=1 である場合だけローをダウンロードするとします。Mobile Link ユーザ名はサブセットしているテーブルに存在しないため、ユーザ名が含まれる SalesRep というテーブルへのジョインを作成する必要があります。この例では、タイムスタンプベースのダウンロードを想定しています。

このシナリオで同期を設定するには、[ダウンロード・カーソルの FROM 句に追加するテーブル]に次のように入力します。

SalesRep

[ダウンロード・カーソルの WHERE 句で使用する SQL 式] に次のように入力します。

```
SalesRep.ml_username = {ml s.username}
AND Customer.active = 1
AND Customer.cust_id = SalesRep.cust_id
```

次の download_cursor スクリプトは、これらの設定に基づいて生成されます。

```
SELECT "DBA"."Customer"."cust_id",
       "DBA"."Customer"."cust_name"
FROM "DBA"."Customer", SalesRep
WHERE "DBA"."Customer"."last_modified" >= {ml s.last_table_download}
AND SalesRep.ml_username = {ml s.username}
AND Customer.active = 1
AND Customer.cust_id = SalesRep.cust_id
```

WHERE 句の最後の行により、Customer から SalesRep へのキー・ジョインが作成されます。

[同期モデル作成] ウィザードの完了後に、このスクリプトをモデル・モードの [イベント] タブで表示および修正できます。「[モデル内のスクリプトの変更](#)」 『[Mobile Link - クイック・スタート](#)』を参照してください。

参照

- ◆ 「[Mobile Link ユーザの概要](#)」 『[Mobile Link - クライアント管理](#)』
- ◆ 「[リモート ID](#)」 『[Mobile Link - クライアント管理](#)』
- ◆ 「[リモート・データベース間でローを分割する](#)」 『[Mobile Link - サーバ管理](#)』
- ◆ 「[スクリプトでのリモート ID と Mobile Link ユーザ名の使用](#)」 『[Mobile Link - クライアント管理](#)』
- ◆ 「[スクリプトでの最終ダウンロード時間の使用](#)」 『[Mobile Link - サーバ管理](#)』
- ◆ 「[download_cursor スクリプトの作成](#)」 『[Mobile Link - サーバ管理](#)』

[同期モデル作成] ウィザード : [アップロード競合の検出] ページ

最後の同期後に、リモート・データベースと統合データベースの両方でローが更新されていた場合に競合が発生します。このページでは、使用する競合検出のレベルを設定できます。

このページには次の項目があります。

[競合検出を実行しない] このオプションを選択すると、競合が検出されません。アップロードされた更新は、競合を確認しないで適用されます。これにより、統合データベースから現在のローの値をフェッチする必要がなくなるため、更新の同期が高速になることがあります。

[ローベースの競合検出] このオプションを選択すると、アップロード時にローベースの競合検出が使用されます。最後の同期後に、リモート・データベースと統合データベースの両方でローが更新されていた場合に競合が検出されます。次の項を参照してください。

- ◆ 「[upload_fetch テーブル・イベント](#)」 『[Mobile Link - サーバ管理](#)』
- ◆ 「[upload_update テーブル・イベント](#)」 『[Mobile Link - サーバ管理](#)』

[カラムベースの競合検出] このオプションを選択すると、カラムベースの競合検出が使用されます。リモート・データベースと統合データベースの両方で、ローの同じカラムが更新されていた

場合に競合が検出されます。「[upload_fetch_column_conflict テーブル・イベント](#)」 『[Mobile Link - サーバ管理](#)』を参照してください。

参照

- ◆ 「競合の解決」 『[Mobile Link - サーバ管理](#)』

[同期モデル作成] ウィザード : [アップロード競合の解決] ページ

このページでは、検出された競合の解決方法を設定できます。

このページには次の項目があります。

[統合データベースの勝ち] このオプションを選択すると、リモート・データベースからアップロードされた更新が統合データベースと競合する場合に、リモート・データベースの更新が拒否されます。

[リモート・データベースの勝ち] このオプションを選択すると、リモート・データベースからアップロードされた更新が統合データベースと競合しても、リモート・データベースの更新が受け入れられます。このオプションは、カラムベースの競合検出だけに使用してください。他の検出方法に使用した場合は、競合検出を使用しないことと同じになります。

[最新データベースの勝ち (維持しているタイムスタンプ・カラムを使用)] このオプションを選択すると、タイムスタンプ・カラムを使用して、どの変更を受け入れるかが判断されます。このオプションは、タイムスタンプ・カラムがあるテーブルのみに適用されます。

- ◆ **[タイムスタンプ・カラム]** ドロップダウン・リストからタイムスタンプ・カラムを選択します。

このタイムスタンプ・カラムは存在する必要があるだけでなく、その値はリモート・データベース・テーブルと統合データベース・テーブルの両方で保持されている必要があります。このオプションでは、アプリケーションの変更や、値を保持するためのトリガの使用が必要になる可能性があります。

警告

タイムスタンプベースのダウンロードで使用されるカラムと同じカラムを選択しないでください。そのカラムには、統合データベースでローが前回変更された時刻が記録されるため、同期しないでください。

[カスタム競合解決] 独自の `resolve_conflicts` スクリプトを使用する場合は、このオプションを選択します。スクリプトは、このウィザードの完了後にモデル・モードの [イベント] タブで記述できます。「[resolve_conflict スクリプトによる競合の解決](#)」 『[Mobile Link - サーバ管理](#)』を参照してください。

参照

- ◆ 「競合の解決」 『[Mobile Link - サーバ管理](#)』
- ◆ 「ダウンロード・タイムスタンプの生成および使用方法」 『[Mobile Link - サーバ管理](#)』
- ◆ 「タイムスタンプベースのダウンロード」 『[Mobile Link - サーバ管理](#)』

[同期モデル作成] ウィザード : [パブリケーション、スクリプト・バージョン、説明] ページ

このページでは、パブリケーションとスクリプト・バージョンの名前や、同期モデルの説明を指定できます。

このページには次の項目があります。

[パブリケーションの名前を指定してください。] パブリケーションの名前を入力します。デフォルトのパブリケーション名はモデル名です。[「CREATE PUBLICATION 文 \[Mobile Link\] \[SQL Remote\]」](#) [『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』](#)を参照してください。

[スクリプト・バージョンの名前を指定してください。] スクリプト・バージョンの名前を入力します。デフォルトのスクリプト名はモデル名です。スクリプト・バージョンには、ml_sis_1 または ml_qa_1 という名前は使用できません。これらの名前は、Mobile Link によって内部的に使用されています。[「スクリプト・バージョン」](#) [『Mobile Link - サーバ管理』](#)を参照してください。

警告

スクリプト・バージョンの名前は、ml_ で始めないでください。ml_ で始まるスクリプト・バージョンは内部用に予約されています。

[この同期モデルに説明を付けることができます。] オプションで、この同期モデルと関連付けるための説明を指定できます。

[同期モデル作成] ウィザード : [同期モデル作成ウィザードの完了] ページ

このページでは、指定した情報に基づいて、新しい同期モデルの名前とロケーションの概要が表示されます。また、モデルの展開前にさらに変更を加える必要があるかどうかも示されます。

ウィザードを完了し、新しい同期モデルを作成するには、情報を確認し、[完了] をクリックします。

[完了] をクリックすると、作成したモデルがモデル・モードで開きます。また、統合データベースへの接続が切断されます。これでオフラインで作業している状態になり、モデルに変更を加えることができます。モデルを展開するまで、モデルの外で変更は行われません。そのときまで統合データベースは変更されず、またリモート・データベースは作成または変更されません。[「モデル・モード」](#) [『Mobile Link - クイック・スタート』](#)を参照してください。

同期モデルを作成する前に変更を行うには、[戻る] をクリックします。

[同期モデル展開] ウィザード : 概要

モデルが完成したら、[同期モデル展開] ウィザードを使用して配備します。次の複数の要素を配備できます。

- ◆ 統合データベースの変更内容

- ◆ SQL Anywhere または Ultra Light リモート・データベース (データベースを作成するか、既存のデータベースにテーブルを追加するか、既存のデータベースを変更しないで使用)
- ◆ アプリケーションに必要なユーティリティを実行するバッチ・ファイル
- ◆ Mobile Link サーバ設定
- ◆ サーバによって開始される同期の設定

統合データベースへの配備

展開ウィザードでは、次の2つの方法で統合データベースに配備できます。

- ◆ Mobile Link システム・テーブルにデータを追加し、必要なシャドー・テーブル、カラム、トリガ、ストアド・プロシージャを作成することで、モデルを統合データベースに直接適用します。必要に応じて、Mobile Link アプリケーションを実行するバッチ・ファイルも作成できます。
- ◆ 同じ変更内容をすべて含む SQL ファイルを作成します。このファイルを確認、変更し、いつでも実行できます。結果は変更を直接適用する場合と同じです。

リモート・データベースの配備

既存のリモート・データベースを使用するか、ウィザードでリモート・データベースを作成できます。ウィザードでは、リモート・データベースを直接作成するか、リモート・データベースを作成する SQL ファイルを作成できます。

ウィザードでは、モデルで指定したデータベース所有者を使用して、デフォルトのデータベース・オプションでリモート・データベース (SQL Anywhere または Ultra Light) が作成されます。また、[同期モデル作成] ウィザードを使用しないでカスタム設定でリモート・データベースを作成し、ウィザードを使用して必要なリモート・テーブルを追加するか、すでにリモート・テーブルがある既存のリモート・データベースに配備することもできます。

同期ツールを実行するバッチ・ファイルの配備

ウィザードでは、次のバッチ・ファイルを作成できます。

- ◆ 指定するオプションで Mobile Link サーバを実行するバッチ・ファイル
- ◆ SQL Anywhere のリモート・データベースの場合、指定するオプションで `dbmlsync` を実行するバッチ・ファイル
- ◆ Ultra Light のリモート・データベースの場合、指定するオプションで `ulsync` を実行するバッチ・ファイル。`ulsync` は、同期のテストに使用されるので、正常に機能する Ultra Light アプリケーションがない場合に初めて同期するときに役立ちます。
- ◆ サーバによって開始される同期を設定する場合は、Notifier と Listener を実行するバッチ・ファイル

注意

モデルは、展開後に変更できます。モデルを変更する最適な方法は、Sybase Central モデル・モードで変更して再展開することです。Sybase Central の管理モードで配備したシステムを変更するか、システム・プロシージャやその他の方法でデータベースを直接変更することもできます。ただし、展開したモデルを変更したら、変更内容をリバース・エンジニアリングでモデルに戻すことはできません。

参照

- ◆ 「[\[同期モデル作成\] ウィザード : \[ようこそ\] ページ](#)」 184 ページ

[同期モデル展開] ウィザード : [ようこそ] ページ

このページには次の項目があります。

[最後の展開設定を使用してただちに展開する] このオプションを選択すると、最後に使用された展開の設定を使用して、同期モデルがすぐに配備されます。このオプションは、同期モデルを以前に展開したことがある場合にのみ使用できます。

[最後の展開設定で初期化してこのウィザードを実行する] このオプションを選択すると、最後の展開の設定で初期化された [同期モデル展開] ウィザードが実行されます。このオプションは、同期モデルを以前に展開したことがある場合にのみ使用できます。

[次の 1 つまたは複数の項目の展開の詳細を指定する] 次の 1 つまたは複数のオプションを選択します。

- ◆ **[統合データベース]** このオプションを選択すると、統合データベースの配備の詳細を指定できます。
- ◆ **[リモート・データベースと同期クライアント]** このオプションを選択すると、リモート・データベースと同期クライアントの配備の詳細を指定できます。
- ◆ **[Mobile Link サーバ]** このオプションを選択すると、Mobile Link サーバの配備の詳細を指定できます。

参照

- ◆ 「[モデルの配備](#)」 『[Mobile Link - クイック・スタート](#)』

[同期モデル展開] ウィザード : [統合データベースの展開先] ページ

このページでは、統合データベースの同期モデルをファイルに展開して後で実行するか、データベースに直接展開するかを指定できます。

このページには次の項目があります。

[次の SQL ファイルに変更を保存する (同じフォルダにコマンド・ファイルを作成する)] このオプションを選択すると、同期モデルを保存するファイルを指定できます。ファイル名とロケーションを入力するか、[\[参照\]](#) をクリックしてファイルを選択します。このモデルと同じ名前のファイルがあった場合は、このモデルの展開時に上書きされます。

[統合データベースに接続して変更を直接適用する] このオプションを選択すると、同期モデルが統合データベースに直接展開されます。

[統合データベースの選択] 同期モデルを展開する統合データベースをクリックして選択します。[\[接続\]](#) ダイアログが表示されます。統合データベースの接続情報を指定します。

参照

- ◆ 「モデルの配備」 『Mobile Link - クイック・スタート』

[同期モデル展開] ウィザード : [リモート・データベースの展開] ページ

このページでは、同期モデルを展開するリモート・データベースのタイプを選択できます。

このページには次の項目があります。

[新しい SQL Anywhere データベース] このオプションを選択すると、同期モデルのリモート・スキーマと、デフォルトのデータベース作成オプションを使用して、新しい SQL Anywhere データベースが作成されます。「データベースの作成」 『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』を参照してください。

[新しい Ultra Light データベース] このオプションを選択すると、同期モデルのリモート・スキーマと、デフォルトのデータベース作成オプションを使用して、新しい Ultra Light データベースが作成されます。「Ultra Light データベースの作成」 『Ultra Light - データベース管理とリファレンス』を参照してください。

[既存の SQL Anywhere または Ultra Light データベース] このオプションを選択すると、既存の SQL Anywhere または Ultra Light のリモート・データベースに同期モデルが展開されます。

参照

- ◆ 「モデルの配備」 『Mobile Link - クイック・スタート』
- ◆ 「リモート・データベースの配備」 『Mobile Link - クライアント管理』

[同期モデル展開] ウィザード : [新しい SQL Anywhere リモート・データベース] ページ

このページでは、SQL Anywhere リモート・データベースを作成するコマンド・ファイルと SQL ファイルを作成して後で実行するか、新しい SQL Anywhere リモート・データベースをすぐに作成するかを指定できます。

このページには次の項目があります。

[データベースの作成コマンドが含まれたコマンド・ファイルと SQL ファイルを作成する] このオプションを選択すると、リモート・データベースを作成する SQL ファイルとコマンド・ファイルを作成し、後で実行できます。

- ◆ **[SQL ファイル]** SQL ファイルの名前とロケーションを入力するか、[参照] をクリックしてファイルを選択します。コマンド・ファイルも同じロケーションに作成されます。

[リモートの SQL Anywhere データベースを作成する] このオプションを選択すると、SQL Anywhere リモート・データベースが、デフォルトのデータベース作成オプションを使用して、指定したロケーションに作成されます。

- ◆ **[SQL Anywhere データベース・ファイル]** リモート・データベースのメインの SQL Anywhere データベース・ファイルの名前とロケーションを入力するか、[参照] をクリックしてファイルを選択します。トランザクション・ログ・ファイルも同じロケーションに作成されます。

参照

- ◆ 「モデルの配備」 『Mobile Link - クイック・スタート』
- ◆ 「リモート・データベースの作成」 『Mobile Link - クライアント管理』

[同期モデル展開] ウィザード : [新しい Ultra Light リモート・データベース] ページ

このページでは、Ultra Light リモート・データベースを作成するコマンド・ファイルと SQL ファイルを作成して後で実行するか、新しい Ultra Light リモート・データベースをすぐに作成するかを指定できます。

このページには次の項目があります。

[データベースの作成コマンドが含まれたコマンド・ファイルと SQL ファイルを作成する] このオプションを選択すると、リモート・データベースを作成する SQL ファイルとコマンド・ファイルを作成し、後で実行できます。

- ◆ **[SQL ファイル]** SQL ファイルの名前とロケーションを入力するか、[参照] をクリックしてファイルを選択します。コマンド・ファイルも同じロケーションに作成されます。

[リモートの Ultra Light データベースを作成する] このオプションを選択すると、Ultra Light リモート・データベースが、デフォルトのデータベース作成オプションを使用して、指定したロケーションに作成されます。

- ◆ **[Ultra Light データベース・ファイル]** リモート・データベースのメインの Ultra Light データベース・ファイルの名前とロケーションを入力するか、[参照] をクリックしてファイルを選択します。

参照

- ◆ 「モデルの配備」 『Mobile Link - クイック・スタート』
- ◆ 「リモート・データベースの作成」 『Mobile Link - クライアント管理』

[同期モデル展開] ウィザード : [既存のリモート・データベース] ページ

このページでは、リモート・データベースを更新するコマンド・ファイルと SQL ファイルに同期モデルを展開して後で実行するか、すぐにリモート・データベースに接続してデータベースを更新するかを指定できます。

このページには次の項目があります。

[次の SQL ファイルに変更を保存する (同じフォルダにコマンド・ファイルを作成する)] このオプションを選択して、SQL ファイルの名前とロケーションを指定するか、[参照] をクリックしてファイルを選択します。コマンド・ファイルも同じロケーションに作成されます。

- ◆ **[リモート・スキーマを作成するための SQL コマンドを含める]** このオプションを選択すると、リモート・スキーマを作成するための SQL コマンドが含まれます。このオプションを使用すると、既存のスキーマを上書きできます。このオプションを使用して展開すると、既存のリモート・データベースのテーブルのうち、モデルのテーブルと同じ名前を持つテーブルが削除されて再作成されます。このオプションは、変更を直接適用するためにリモート・データベースに接続していない場合のみ適用されます。
- ◆ **[リモート・データベースのタイプ]** ドロップダウン・リストから SQL Anywhere または Ultra Light を選択して、リモート・データベースのタイプを指定します。

[リモート・データベースに接続して変更を直接適用する] このオプションを選択すると、同期モデルがリモート・データベースに直接展開されます。既存のデータベース・スキーマは、モデルのリモート・データベース・スキーマと一致する必要があります。

[リモート・データベースの選択] 同期モデルを展開するリモート・データベースをクリックして選択します。[接続] ダイアログが表示されます。リモート・データベースに接続するための接続情報を指定します。

参照

- ◆ 「モデルの配備」 『Mobile Link - クイック・スタート』

[同期モデル展開] ウィザード : [Mobile Link ユーザ] ページ

このページを使用すると、Mobile Link サーバへの接続時に Mobile Link クライアントで使用される Mobile Link ユーザ名とパスワードを指定できます。ユーザ名とパスワードは、データベース・アカウントと一致させる必要はありません。

このページには次の項目があります。

[Mobile Link サーバに接続するのに使用するユーザ名を指定してください。] Mobile Link クライアントから Mobile Link サーバへの接続に使用する Mobile Link ユーザ名を入力します。「[Mobile Link ユーザの概要](#)」 『[Mobile Link - クライアント管理](#)』を参照してください。

[使用するパスワードを指定してください。] 指定したユーザ名のパスワードを入力します。「[Mobile Link ユーザの概要](#)」 『[Mobile Link - クライアント管理](#)』を参照してください。

[Mobile Link 認証用にこのユーザを統合データベースに登録する] このオプションを選択すると、指定した Mobile Link ユーザが Mobile Link サーバ用として統合データベースに登録されます。「[Mobile Link ユーザ認証ユーティリティ \[mluser\]](#)」 『[Mobile Link - サーバ管理](#)』を参照してください。

参照

- ◆ 「モデルの配備」 『Mobile Link - クイック・スタート』
- ◆ 「Mobile Link ユーザの作成と登録」 『Mobile Link - クライアント管理』

[同期モデル展開] ウィザード : [同期ストリーム・パラメータ] ページ

このページでは、Mobile Link のクライアントとサーバ間で使用する通信ストリームを指定できます。

このページには次の項目があります。

[TCP/IP] このオプションを選択し、Mobile Link のクライアントとサーバ間の通信に TCP/IP を使用するポートを指定します。これがデフォルトです。高いパフォーマンスを得るにはこのオプションをおすすめします。

◆ **[ポート]** Mobile Link サーバが受信に使用するソケット・ポート番号を入力します。デフォルトのポートは 2439 です。

[TLS] このオプションを選択し、Mobile Link のクライアントとサーバ間の通信にトランスポート・レイヤ・セキュリティと TCP/IP を使用するポートを指定します。

◆ **[ポート]** Mobile Link サーバが受信に使用するソケット・ポート番号を入力します。デフォルトのポートは 2439 です。

[HTTP] このオプションを選択し、Mobile Link のクライアントとサーバ間の通信に標準の Web プロトコルを使用するポートを指定します。

◆ **[ポート]** Mobile Link サーバが受信に使用するソケット・ポート番号を入力します。デフォルトのポートは 80 です。

[HTTPS] このオプションを選択し、安全なトランザクションを処理する HTTP の変形プロトコルを使用するポートを指定します。HTTPS プロトコルは、RSA または ECC 暗号化を使用して HTTP over SSL/TLS を実装します。

◆ **[ポート]** Mobile Link サーバが受信に使用するソケット・ポート番号を入力します。デフォルトのポートは 443 です。

別途ライセンスが必要な必須コンポーネント

ECC 暗号化と FIPS 承認の暗号化には、別途ライセンスが必要です。強力な暗号化テクノロジーはすべて、輸出規制対象品目です。

「別途ライセンスが必要なコンポーネント」 『SQL Anywhere 10 - 紹介』を参照してください。

参照

- ◆ 「モデルの配備」 『Mobile Link - クイック・スタート』
- ◆ 「-x オプション」 『Mobile Link - サーバ管理』

[同期モデル展開] ウィザード : [セキュア・ストリーム暗号化タイプ] ページ

このページでは、セキュリティ機能のある同期ストリームに使用する暗号化のタイプを選択できます。

このページには次の項目があります。

[RSA] このオプションを選択すると、RSA 暗号化が使用されます。

◆ **[RSA の FIPS 140-2 認定実装]** このオプションを選択すると、米国連邦情報処理規格 (FIPS) 140-2 認定のセキュリティ・アルゴリズムが暗号化に使用されます。

[楕円曲線暗号 (ECC)] このオプションを選択すると、楕円曲線暗号 (ECC) が暗号化に使用されます。

別途ライセンスが必要な必須コンポーネント

ECC 暗号化と FIPS 承認の暗号化には、別途ライセンスが必要です。強力な暗号化テクノロジーはすべて、輸出規制対象品目です。

「別途ライセンスが必要なコンポーネント」 『SQL Anywhere 10 - 紹介』を参照してください。

参照

- ◆ 「モデルの配備」 『Mobile Link - クイック・スタート』
- ◆ 「tls_type」 『Mobile Link - クライアント管理』

[同期モデル展開] ウィザード: [クライアント・ストリーム・パラメータ] ページ

このページでは、Mobile Link クライアントだけに適用される通信ストリーム・パラメータを選択できます。

このページには次の項目があります。

[ホスト] Mobile Link サーバ・コンピュータのホスト名または IP アドレスを入力します。

[追加のクライアント・ストリーム・オプション] 必要な場合は、(オプション=値;...) の形式でセミコロンで区切った追加のクライアント・ストリーム・パラメータを入力します。『Mobile Link クライアントのネットワーク・プロトコル・オプション』 『Mobile Link - クライアント管理』を参照してください。

次の表は、指定できるオプションのリストです。

- ◆ **TCP/IP プロトコル・オプション** tcpip プロトコルを指定する場合は、オプションで次のプロトコル・オプションを指定できます。

TCP/IP プロトコル・オプション	詳細の参照先
buffer_size=bytes	「buffer_size」 『Mobile Link - クライアント管理』
client_port=nnnnn[-mmmmm]	「client_port」 『Mobile Link - クライアント管理』
compression={zlib none}	「compression」 『Mobile Link - クライアント管理』
host=hostname	「host」 『Mobile Link - クライアント管理』

TCP/IP プロトコル・オプション	詳細の参照先
<code>network_leave_open={off on}</code>	「network_leave_open」 『Mobile Link - クライアント管理』
<code>network_name=name</code>	「network_name」 『Mobile Link - クライアント管理』
<code>port=portnumber</code>	「port」 『Mobile Link - クライアント管理』
<code>timeout=seconds</code>	「timeout」 『Mobile Link - クライアント管理』
<code>zlib_download_window_size=window-bits</code>	「zlib_download_window_size」 『Mobile Link - クライアント管理』
<code>zlib_upload_window_size=window-bits</code>	「zlib_upload_window_size」 『Mobile Link - クライアント管理』

- ◆ **TLS プロトコル** TLS プロトコル (TLS セキュリティ付きの TCP/IP) を指定すると、必要に応じて次のプロトコル・オプションを指定できます。

TLS プロトコル・オプション	詳細の参照先
<code>buffer_size=bytes</code>	「buffer_size」 『Mobile Link - クライアント管理』
<code>certificate_company=company_name</code>	「certificate_company」 『Mobile Link - クライアント管理』
<code>certificate_name=name</code>	「certificate_name」 『Mobile Link - クライアント管理』
<code>certificate_unit=company_unit</code>	「certificate_unit」 『Mobile Link - クライアント管理』
<code>client_port=nnnn[-mmmm]</code>	「client_port」 『Mobile Link - クライアント管理』
<code>compression={zlib none}</code>	「compression」 『Mobile Link - クライアント管理』
<code>host=hostname</code>	「host」 『Mobile Link - クライアント管理』
<code>fips={y n}</code>	「fips」 『Mobile Link - クライアント管理』
<code>network_leave_open={off on}</code>	「network_leave_open」 『Mobile Link - クライアント管理』
<code>network_name=name</code>	「network_name」 『Mobile Link - クライアント管理』
<code>port=portnumber</code>	「port」 『Mobile Link - クライアント管理』
<code>timeout=seconds</code>	「timeout」 『Mobile Link - クライアント管理』
<code>tls_type={rsa ecc}</code>	「tls_type」 『Mobile Link - クライアント管理』

TLS プロトコル・オプション	詳細の参照先
<code>zlib_download_window_size=window-bits</code>	「 zlib_download_window_size 」 『Mobile Link - クライアント管理』
<code>zlib_upload_window_size=window-bits</code>	「 zlib_upload_window_size 」 『Mobile Link - クライアント管理』

- ◆ **HTTP プロトコル** http プロトコルを指定する場合は、オプションで次のプロトコル・オプションを指定できます。

HTTP プロトコル・オプション	詳細の参照先
<code>buffer_size=number</code>	「 buffer_size 」 『Mobile Link - クライアント管理』
<code>client_port=nnnnn[-mmmmm]</code>	「 client_port 」 『Mobile Link - クライアント管理』
<code>compression={zlib none}</code>	「 compression 」 『Mobile Link - クライアント管理』
<code>custom_header=header</code>	「 custom_header 」 『Mobile Link - クライアント管理』
<code>http_password=password</code>	「 http_password 」 『Mobile Link - クライアント管理』
<code>http_proxy_password=password</code>	「 http_proxy_password 」 『Mobile Link - クライアント管理』
<code>http_proxy_userid=userid</code>	「 http_proxy_userid 」 『Mobile Link - クライアント管理』
<code>http_userid=userid</code>	「 http_userid 」 『Mobile Link - クライアント管理』
<code>host=hostname</code>	「 host 」 『Mobile Link - クライアント管理』
<code>network_leave_open={off on}</code>	「 network_leave_open 」 『Mobile Link - クライアント管理』
<code>network_name=name</code>	「 network_name 」 『Mobile Link - クライアント管理』
<code>persistent={off on}</code>	「 persistent 」 『Mobile Link - クライアント管理』
<code>port=portnumber</code>	「 port 」 『Mobile Link - クライアント管理』
<code>proxy_host=proxy-hostname-or-ip</code>	「 proxy_host 」 『Mobile Link - クライアント管理』
<code>proxy_port=proxy-portnumber</code>	「 proxy_port 」 『Mobile Link - クライアント管理』
<code>set_cookie=cookie-name=cookie-value</code>	「 set_cookie 」 『Mobile Link - クライアント管理』
<code>timeout=seconds</code>	「 timeout 」 『Mobile Link - クライアント管理』

HTTP プロトコル・オプション	詳細の参照先
<code>trusted_certificates=filename</code>	「trusted_certificates」 『Mobile Link - クライアント管理』
<code>url_suffix=suffix</code>	「url_suffix」 『Mobile Link - クライアント管理』
<code>version=HTTP-version-number</code>	「version」 『Mobile Link - クライアント管理』
<code>zlib_download_window_size=window-bits</code>	「zlib_download_window_size」 『Mobile Link - クライアント管理』
<code>zlib_upload_window_size=window-bits</code>	「zlib_upload_window_size」 『Mobile Link - クライアント管理』

- ◆ **HTTPS プロトコル** HTTPS プロトコルでは RSA 暗号化が使用されます。

別途ライセンスが必要な必須コンポーネント

ECC 暗号化と FIPS 承認の暗号化には、別途ライセンスが必要です。強力な暗号化テクノロジーはすべて、輸出規制対象品目です。

[「別途ライセンスが必要なコンポーネント」](#) 『SQL Anywhere 10 - 紹介』を参照してください。

HTTPS プロトコルを指定する場合は、オプションで次のプロトコル・オプションを指定できます。

HTTPS プロトコル・オプション	詳細の参照先
<code>buffer_size=number</code>	「buffer_size」 『Mobile Link - クライアント管理』
<code>certificate_company=company_name</code>	「certificate_company」 『Mobile Link - クライアント管理』
<code>certificate_name=name</code>	「certificate_name」 『Mobile Link - クライアント管理』
<code>certificate_unit=company_unit</code>	「certificate_unit」 『Mobile Link - クライアント管理』
<code>client_port=nnnnn[-mmmmm]</code>	「client_port」 『Mobile Link - クライアント管理』
<code>compression={zlib none}</code>	「compression」 『Mobile Link - クライアント管理』
<code>custom_header=header</code>	「custom_header」 『Mobile Link - クライアント管理』
<code>fips={y n}</code>	「fips」 『Mobile Link - クライアント管理』

HTTPS プロトコル・オプション	詳細の参照先
<code>host=hostname</code>	「 host 」 『Mobile Link - クライアント管理』
<code>http_password=password</code>	「 http_password 」 『Mobile Link - クライアント管理』
<code>http_proxy_password=password</code>	「 http_proxy_password 」 『Mobile Link - クライアント管理』
<code>http_proxy_userid=userid</code>	「 http_proxy_userid 」 『Mobile Link - クライアント管理』
<code>http_userid=userid</code>	「 http_userid 」 『Mobile Link - クライアント管理』
<code>network_leave_open={off on}</code>	「 network_leave_open 」 『Mobile Link - クライアント管理』
<code>network_name=name</code>	「 network_name 」 『Mobile Link - クライアント管理』
<code>persistent={off on}</code>	「 persistent 」 『Mobile Link - クライアント管理』
<code>port=portnumber</code>	「 port 」 『Mobile Link - クライアント管理』
<code>proxy_host=proxy-hostname-or-ip</code>	「 proxy_host 」 『Mobile Link - クライアント管理』
<code>proxy_port=proxy-portnumber</code>	「 proxy_port 」 『Mobile Link - クライアント管理』
<code>set_cookie=cookie-name=cookie-value</code>	「 set_cookie 」 『Mobile Link - クライアント管理』
<code>timeout=seconds</code>	「 timeout 」 『Mobile Link - クライアント管理』
<code>tls_type={rsa ecc}</code>	「 tls_type 」 『Mobile Link - クライアント管理』
<code>trusted_certificates=filename</code>	「 trusted_certificates 」 『Mobile Link - クライアント管理』
<code>url_suffix=suffix</code>	「 url_suffix 」 『Mobile Link - クライアント管理』
<code>version=HTTP-version-number</code>	「 version 」 『Mobile Link - クライアント管理』
<code>zlib_download_window_size=window-size</code>	「 zlib_download_window_size 」 『Mobile Link - クライアント管理』

HTTPS プロトコル・オプション	詳細の参照先
<code>zlib_upload_window_size=window-bits</code>	「 zlib_upload_window_size 」 『 Mobile Link - クライアント管理 』

参照

- ◆ 「[Mobile Link クライアントのネットワーク・プロトコル・オプション](#)」 『[Mobile Link - クライアント管理](#)』
- ◆ 「[モデルの配備](#)」 『[Mobile Link - クイック・スタート](#)』

[同期モデル展開] ウィザード : [Mobile Link サーバ・ストリーム・パラメータ] ページ

このページでは、Mobile Link サーバだけに適用される通信ストリーム・パラメータを選択できます。

このページには次の項目があります。

[追加のサーバ・ストリーム・オプション] 必要な場合は、(オプション=値;...) の形式でセミコロンで区切った追加のサーバ・ストリーム・オプションを入力します。「[-x オプション](#)」 『[Mobile Link - サーバ管理](#)』を参照してください。

次の表は、指定できるオプションのリストです。

- ◆ **TCP/IP オプション** tcpip プロトコルを指定する場合は、オプションで次のプロトコル・オプションを指定できます。

TCP/IP プロトコル・オプション	説明
<code>host=hostname</code>	Mobile Link サーバが受信に使用するホスト名または IP 番号。デフォルト値は localhost です。
<code>ignore=hostname</code>	接続を確立する場合に、Mobile Link サーバが無視するホスト名または IP 番号。このオプションを使用すると、最も可能性が低いレベルにある負荷分散装置からの要求を無視することができ、Mobile Link サーバ・ログと Mobile Link モニタの出力ファイルへの過剰な出力を回避できます。無視するホストは複数指定できます。たとえば、 -x tcpip (ignore=lb1;ignore=123.45.67.89) の形式で指定します。コマンド・ラインで -x の複数のインスタンスを指定した場合、すべてのインスタンスでホストが無視されます。たとえば、 -x tcpip(ignore=1.1.1.1)-x http と指定した場合、1.1.1.1 の接続は TCP/IP と HTTP の両方のストリームで無視されます。ただし、これは -xo オプションを使用した接続には影響しません。
<code>port=portnumber</code>	Mobile Link サーバが受信に使用するソケット・ポート番号。デフォルトのポートは 2439 です。これは、Mobile Link サーバの IANA 登録ポート番号です。

- ◆ **TLS (TCP/IP とトランスポート・レイヤ・セキュリティ) オプション** `tls` プロトコル (トランスポート・レイヤ・セキュリティを使用する TCP/IP) を指定する場合は、オプションで次のプロトコル・オプションを指定できます。

TLS プロトコル・オプション	説明
<code>fips={yes no}</code>	<code>tls_type=rsa</code> を使用して TLS プロトコルを指定した場合、 <code>fips=yes</code> を指定して、TCP/IP プロトコルと、FIPS 承認の暗号化アルゴリズムを使用して接続を受け入れることができます。FIPS 接続では、別の FIPS 140-2 承認ソフトウェアを使用します。FIPS 承認のない RSA 暗号化を使用するサーバは、FIPS 承認の RSA 暗号化を使用するクライアントと互換性があり、FIPS 承認の RSA 暗号化を使用しているサーバは、FIPS 承認のない RSA 暗号化を使用しているクライアントと互換性があります。
<code>host=hostname</code>	Mobile Link サーバが受信に使用するホスト名または IP 番号。デフォルト値は <code>localhost</code> です。
<code>ignore=hostname</code>	接続を確立する場合に、Mobile Link サーバが無視するホスト名または IP 番号。このオプションを使用すると、最も可能性が低いレベルにある負荷分散装置からの要求を無視することができます。Mobile Link サーバ・ログと Mobile Link モニタの出力ファイルへの過剰な出力を回避できます。無視するホストは複数指定できます。たとえば、 <code>-x tcpip (ignore=lb1;ignore=123.45.67.89)</code> の形式で指定します。
<code>port=portnumber</code>	Mobile Link サーバが受信に使用するソケット・ポート番号。デフォルトのポートは 2439 です。これは、Mobile Link サーバの IANA 登録ポート番号です。
<code>tls_type={rsa ecc}</code>	<p><code>tls</code> として TCP/IP プロトコルを指定した場合、楕円曲線暗号方式 (<code>ecc</code>) または RSA 暗号化 (<code>rsa</code>) を指定できます。下位互換性を保つために、<code>ecc</code> を <code>certicom</code> と指定することもできます。デフォルトの <code>tls_type</code> は <code>rsa</code> です。</p> <p>TLS を指定する場合は、次のように証明書と証明書パスワードを指定してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆ <code>certificate=certificate_file</code> サーバ認証で使用される証明書のパスとファイル名を指定します。 ◆ <code>certificate_password=password</code> 証明書のパスワードを指定します。 <p>「トランスポート・レイヤ・セキュリティを使用する Mobile Link サーバの起動」『SQL Anywhere サーバ・データベース管理』を参照してください。</p>

- ◆ **HTTP オプション** `http` プロトコルを指定する場合は、オプションで次のプロトコル・オプションを指定できます。

HTTP オプション	説明
buffer_size=number	Mobile Link サーバから送信される HTTP メッセージの本文の最大サイズ (バイト単位)。このオプションを変更すると、HTTP メッセージの送信に割り当てられるメモリ量が減少または増加します。デフォルトは 65535 バイトです。
host=hostname	Mobile Link サーバが受信に使用するホスト名または IP 番号。デフォルト値は localhost です。
port=portnumber	Mobile Link サーバが受信に使用するソケット・ポート番号。ポート番号は、Mobile Link サーバがモニタするように設定されているポートと一致させます。デフォルトのポートは 80 です。
version=http-version	Mobile Link サーバは、クライアントが使用している HTTP のバージョンを自動的に検出します。このパラメータは、クライアントが使用しているバージョンをサーバが検出できない場合に使用される、HTTP のデフォルト・バージョンを指定する文字列です。 1.0 または 1.1 を選択できます。デフォルト値は 1.1 です。

- ◆ **HTTP オプション** HTTPS プロトコルでは、トランスポート・レイヤ・セキュリティで RSA デジタル証明書を使用します。FIPS 暗号化を指定すると、プロトコルは、https と互換性のある、別の FIPS 140-2 承認ソフトウェアを使用します。

詳細については、「[トランスポート・レイヤ・セキュリティを使用する Mobile Link サーバの起動](#)」『[SQL Anywhere サーバ - データベース管理](#)』を参照してください。

https プロトコルを指定する場合は、オプションで次のプロトコル・オプションを指定できません。

HTTP オプション	説明
buffer_size=number	Mobile Link サーバから送信される HTTPS メッセージの本文の最大サイズ (バイト単位)。このオプションを変更すると、HTTPS メッセージの送信に割り当てられるメモリ量が減少または増加します。デフォルトは 65535 バイトです。
certificate=server-certificate	サーバ認証で使用する証明書のパスとファイル名。HTTPS では、RSA 証明書にしてください。
certificate_password=password	証明書のパスワードを指定するオプションのパラメータ。 「 トランスポート・レイヤ・セキュリティ 」『 SQL Anywhere サーバ - データベース管理 』を参照してください。

HTTP オプション	説明
fips={yes no}	fips=yes を指定すると、HTTPS プロトコルと、FIPS 承認の暗号化アルゴリズムを使用して、接続を受け入れることができます。FIPS 接続では、別の FIPS 140-2 承認ソフトウェアを使用します。FIPS 承認のない RSA 暗号化を使用するサーバは、FIPS 承認の RSA 暗号化を使用するクライアントと互換性があり、FIPS 承認のない RSA 暗号化を使用しているサーバは、FIPS 承認のない RSA 暗号化を使用しているクライアントと互換性があります。
host=hostname	Mobile Link サーバが受信に使用するホスト名または IP 番号。デフォルト値は localhost です。
port=portnumber	Mobile Link サーバが受信に使用するソケット・ポート番号。ポート番号は、Mobile Link サーバがモニタするように設定されているポートと一致させます。デフォルトのポートは 443 です。
tls_type={rsa ecc}	<p>tls として TCP/IP プロトコルを指定した場合、楕円曲線暗号方式 (ecc) または RSA 暗号化 (rsa) を指定できます。下位互換性を保つために、ecc を certicom と指定することもできます。デフォルトの tls_type は rsa です。</p> <p>トランスポート・レイヤ・セキュリティを使用する場合は、証明書と証明書のパスワードを指定する必要があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆ certificate=certificate_file サーバ認証で使用される証明書のパスとファイル名を指定します。 ◆ certificate_password=password 証明書のパスワードを指定します。 <p>「トランスポート・レイヤ・セキュリティを使用する Mobile Link サーバの起動」 『SQL Anywhere サーバ-データベース管理』を参照してください。</p>
version=http-version	Mobile Link サーバは、クライアントが使用している HTTP のバージョンを自動的に検出します。このパラメータは、クライアントが使用しているバージョンをサーバが検出できない場合に使用される、HTTP のデフォルト・バージョンを指定する文字列です。 1.0 または 1.1 を選択できます。デフォルト値は 1.1 です。

参照

- ◆ 「-x オプション」 『Mobile Link - サーバ管理』
- ◆ 「モデルの配備」 『Mobile Link - クイック・スタート』
- ◆ 「Mobile Link サーバのオプション」 『Mobile Link - サーバ管理』

[同期モデル展開] ウィザード : [セキュア・ストリーム・サーバ証明書] ページ

このページでは、暗号化された同期ストリームに使用する証明書ファイルを指定できます。

このページには次の項目があります。

[身元証明書ファイル] クライアントでサーバの認証に使用する証明書ファイルの名前を入力するか、[\[参照\]](#) をクリックしてファイルを選択します。「[certificate_name](#)」 『[Mobile Link - クライアント管理](#)』を参照してください。

参照

- ◆ 「モデルの配備」 『[Mobile Link - クイック・スタート](#)』

[同期モデル展開] ウィザード : [セキュア・ストリーム・クライアント・パラメータ] ページ

このページでは、暗号化された同期ストリームのクライアント・セキュリティ・オプションを選択できます。

このページには次の項目があります。

[クライアントのコンピュータの証明書ストア] このオプションを選択すると、クライアント・コンピュータの証明書ストアが使用されます。

[以下の信用されたルート証明書ファイル] このオプションを選択して、信用されたルート証明書のリストを含むファイルを指定します。

- ◆ **[信用されたルート証明書ファイル]** 信用されたルート証明書ファイルの名前とロケーションを入力するか、[\[参照\]](#) をクリックしてファイルを選択します。「[trusted_certificates](#)」 『[Mobile Link - クライアント管理](#)』を参照してください。

[証明書に記載される会社] 必要な場合は、証明書に記載される会社を指定します。証明書に記載される会社を指定した場合、サーバ証明書に記されている組織フィールドがこの値と一致する場合にのみ証明書が承認されます。「[certificate_company](#)」 『[Mobile Link - クライアント管理](#)』を参照してください。

[証明書に記載される部署] 必要な場合は、証明書に記載される部署を指定します。証明書に記載される部署を指定した場合、サーバ証明書に記されている組織単位フィールドがこの値と一致する場合にのみ証明書が承認されます。「[certificate_unit](#)」 『[Mobile Link - クライアント管理](#)』を参照してください。

[証明書に記載される名前] 必要な場合は、証明書に記載される名前を指定します。証明書に記載される名前を指定した場合、サーバ証明書に記されている共通名フィールドがこの値と一致する場合にのみ証明書が承認されます。「[certificate_name](#)」 『[Mobile Link - クライアント管理](#)』を参照してください。

参照

- ◆ 「モデルの配備」 『[Mobile Link - クイック・スタート](#)』
- ◆ 「証明書フィールドの確認」 『[SQL Anywhere サーバ - データベース管理](#)』

[同期モデル展開] ウィザード : [Mobile Link サーバの冗長性] ページ

このページでは、Mobile Link サーバの冗長性レベルを設定できます。このレベルによって、Mobile Link サーバから報告される情報量が決まります。

このページには次の項目があります。

[警告とエラー以外、同期ごとの情報は表示しない] このオプションを選択すると、各同期の Mobile Link サーバ・ウィンドウとエラー・ログに警告とエラーだけが報告されます。これはデフォルトです。

[同期ごとの情報を最小にする (-v)] このオプションを選択すると、各同期の Mobile Link サーバ・ウィンドウとエラー・ログに最小限の情報が報告されます。[「-v オプション」](#) [『Mobile Link - サーバ管理』](#)を参照してください。

[標準のデバッグ冗長性 (-vcnrs)] このオプションを選択すると、各同期の Mobile Link サーバ・ウィンドウとエラー・ログに、デバッグに必要な標準の情報量が報告されます。次の情報が表示されます。

- ◆ 呼び出された各同期スクリプトの内容
- ◆ ロー・カウントの要約
- ◆ アップロードまたはダウンロードされた各ローのカラム値
- ◆ 呼び出された各同期スクリプトの名前

[「-v オプション」](#) [『Mobile Link - サーバ管理』](#)を参照してください。

[最大冗長性 (-v+)] このオプションを選択すると、冗長性を向上するすべてのログ・オプションがオンになります。[「-v オプション」](#) [『Mobile Link - サーバ管理』](#)を参照してください。

[次のファイルにメッセージ・ログを保存する (-ot スイッチを使用)] このオプションを選択すると、出力メッセージを指定したファイルに保存できます。メッセージが追加される前に、ファイルの内容が削除されます。それ以外の場合は、出力メッセージは画面に表示されます。

参照

- ◆ 「モデルの配備」 [『Mobile Link - クイック・スタート』](#)

[同期モデル展開] ウィザード : [Mobile Link サーバのオプション] ページ

このページでは、Mobile Link サーバのオプションを設定できます。

このページには次の項目があります。

[Mobile Link サーバの名前を指定してください。] Mobile Link サーバの名前を入力します。

[Mobile Link サーバの追加のコマンド・ライン・オプション] Mobile Link の追加のサーバ・オプションがある場合は入力します。[「Mobile Link サーバのオプション」](#) [『Mobile Link - サーバ管理』](#)を参照してください。

次の表は、指定できるオプションのリストです。

オプション	説明
@data	指定された環境変数または設定ファイルからオプションを読み込む。「@data オプション」 『Mobile Link - サーバ管理』を参照してください。
-a	同期エラー時の自動再接続を無効にする。「-a オプション」 『Mobile Link - サーバ管理』を参照してください。
-b	文字列のブランクの埋め込みを削除する。「-b オプション」 『Mobile Link - サーバ管理』を参照してください。
-bn size	競合の検出のため BLOB を比較するときに考慮する最大バイト数を指定する。「-bn オプション」 『Mobile Link - サーバ管理』を参照してください。
-c "keyword=value; ..."	統合データベース用の ODBC データベース接続パラメータを指定する。「-c オプション」 『Mobile Link - サーバ管理』を参照してください。
-cm size	サーバのメモリ・キャッシュのサイズを指定する。「-cm オプション」 『Mobile Link - サーバ管理』を参照してください。
-cn connections	統合データベース・サーバとの最大同時接続数を設定する。「-cn オプション」 『Mobile Link - サーバ管理』を参照してください。
-cr count	データベース接続リトライの最大回数を設定する。「-cr オプション」 『Mobile Link - サーバ管理』を参照してください。
-ct connection-timeout	接続が使用されなくなってからタイムアウトになるまでの時間を設定する。「-ct オプション」 『Mobile Link - サーバ管理』を参照してください。
-dl	コンソールにすべてのログ・メッセージを表示する。「-dl オプション」 『Mobile Link - サーバ管理』を参照してください。
-ds size	すべての再起動可能なダウンロードで使用する保存できるデータの最大量を指定する。「-ds オプション」 『Mobile Link - サーバ管理』を参照してください。
-dsd	SQL Anywhere と Microsoft SQL Server 統合データベースのデフォルトのダウンロード独立性レベルであるスナップショット・アイソレーションを無効にする。「-dsd オプション」 『Mobile Link - サーバ管理』を参照してください。

オプション	説明
-dt	現在のデータベース内のみでトランザクションを検出する。「 -dt オプション 」『 Mobile Link - サーバ管理 』を参照してください。
-e filename	送信されたりモート・エラー・ログを指定のファイルに格納する。「 -e オプション 」『 Mobile Link - サーバ管理 』を参照してください。
-esu	アップロードにスナップショット・アイソレーションを使用する。「 -esu オプション 」『 Mobile Link - サーバ管理 』を参照してください。
-et filename	ファイルが存在する場合は、最初に内容を削除してから、送信されたりモート・エラー・ログを指定のファイルに格納する。「 -et オプション 」『 Mobile Link - サーバ管理 』を参照してください。
-f	同期スクリプトに変更がないものとみなす。「 -f オプション 」『 Mobile Link - サーバ管理 』を参照してください。
-fips	すべての Mobile Link セキュア・ストリームを強制的に FIPS 準拠にする。「 -fips オプション 」『 Mobile Link - サーバ管理 』を参照してください。
-fr	テーブル・データ・スクリプトがない場合は、同期をアボートせず、警告の発行だけを行う。「 -fr オプション 」『 Mobile Link - サーバ管理 』を参照してください。
-ftr path	mlfiletransfer ユーティリティによって使用されるファイル用のロケーションを作成する。「 -ftr オプション 」『 Mobile Link - サーバ管理 』を参照してください。
-m [filename]	QAnywhere のメッセージ機能を有効にする。「 -m オプション 」『 Mobile Link - サーバ管理 』を参照してください。
-nc connections	同時接続の最大数を設定する。「 -nc オプション 」『 Mobile Link - サーバ管理 』を参照してください。
-notifier	サーバ起動同期用に Notifier を起動する。「 -notifier オプション 」『 Mobile Link - サーバ管理 』を参照してください。
-o logfile	ファイルにメッセージのログを取る。「 -o オプション 」『 Mobile Link - サーバ管理 』を参照してください。
-on size	ログ・ファイルの最大サイズを設定する。「 -on オプション 」『 Mobile Link - サーバ管理 』を参照してください。

オプション	説明
-oq	起動エラーの発生時にポップアップ・ダイアログを表示しない。「 -oq オプション 」『 Mobile Link - サーバ管理 』を参照してください。
-os size	出力ファイルの最大サイズ。「 -os オプション 」『 Mobile Link - サーバ管理 』を参照してください。
-ot logfile	最初に内容を削除してから、ファイルにメッセージのログを取る。「 -ot オプション 」『 Mobile Link - サーバ管理 』を参照してください。
-q	同期サーバのウィンドウを最小化する。「 -q オプション 」『 Mobile Link - サーバ管理 』を参照してください。
-r retries	デッドロックされたアップロードを、この回数までリトライする。「 -r オプション 」『 Mobile Link - サーバ管理 』を参照してください。
-rd delay	デッドロックされたトランザクションをリトライするまでの最大遅延秒数を設定する。「 -rd オプション 」『 Mobile Link - サーバ管理 』を参照してください。
-s count	一度にフェッチされ、送信されるローの最大数を指定する。「 -s オプション 」『 Mobile Link - サーバ管理 』を参照してください。
-sl dnet script-options	.NET CLR のオプションを設定し、起動時に仮想マシンを強制的にロードする。「 -sl dnet オプション 」『 Mobile Link - サーバ管理 』を参照してください。
-sl java script-options	Java 仮想マシンのオプションを設定し、起動時に仮想マシンを強制的にロードする。「 -sl java オプション 」『 Mobile Link - サーバ管理 』を参照してください。
-sm number	アクティブに動作できる同期の最大数を設定する。「 -sm オプション 」『 Mobile Link - サーバ管理 』を参照してください。
-ud	UNIX プラットフォーム上でデーモンとして実行する。「 -ud オプション 」『 Mobile Link - サーバ管理 』を参照してください。
-ux	コンソールを開く。「 -ux オプション 」『 Mobile Link - サーバ管理 』を参照してください。
-v [levels]	ログ・ファイルに書き込まれるメッセージのタイプを制御する。「 -v オプション 」『 Mobile Link - サーバ管理 』を参照してください。

オプション	説明
-w count	データベース・ワーカ・スレッド数を設定する。「 -w オプション 」 『 Mobile Link - サーバ管理 』を参照してください。
-wu count	アップロード処理の同時実行を許可されるデータベース・ワーカ・スレッドの最大数を設定する。「 -wu オプション 」 『 Mobile Link - サーバ管理 』を参照してください。
-x protocol[(network-parameters)]	通信プロトコルを指定する。オプションで、 parameter=value の形式でネットワーク・パラメータを指定します。複数のパラメータを指定する場合はセミコロンで区切ります。「 -x オプション 」 『 Mobile Link - サーバ管理 』を参照してください。
-xo protocol[(network-parameters)]	バージョン8と9のクライアントの場合は、通信プロトコルを指定する。オプションで、 parameter=value の形式でネットワーク・パラメータを指定します。複数のパラメータを指定する場合はセミコロンで区切ります。「 -xo オプション 」 『 Mobile Link - サーバ管理 』を参照してください。
-zp	統合データベースとリモート・データベース間にタイムスタンプの競合がある場合に、最小精度よりも高い精度を持つタイムスタンプ値を競合検出に使用する。「 -zp オプション 」 『 Mobile Link - サーバ管理 』を参照してください。
-zs name	サーバ名を指定する。「 -zs オプション 」 『 Mobile Link - サーバ管理 』を参照してください。
-zt number	Mobile Link サーバを実行するのに使用されるプロセスの最大数を指定する。「 -zt オプション 」 『 Mobile Link - サーバ管理 』を参照してください。
-zu { + - }	authenticate user スクリプトが未定義の場合に、ユーザの自動的な追加を制御する。「 -zu オプション 」 『 Mobile Link - サーバ管理 』を参照してください。
-zus	Mobile Link がアップロード内容のないテーブルのアップロード・スクリプトを呼び出すようにする。「 -zus オプション 」 『 Mobile Link - サーバ管理 』を参照してください。
-zw 1,...5	表示する警告メッセージのレベルを制御する。「 -zw オプション 」 『 Mobile Link - サーバ管理 』を参照してください。
-zwd code	特定の警告コードを無効にする。「 -zwd オプション 」 『 Mobile Link - サーバ管理 』を参照してください。

オプション	説明
-zwe code	特定の警告コードを有効にする。 「-zwe オプション」 『Mobile Link - サーバ管理』を参照してください。

[Mobile Link サーバを開始するために生成されるコマンド・ファイルの保存場所を指定してください。] コマンド・ファイルを保存するロケーションを入力するか、[\[参照\]](#) をクリックしてファイルを選択します。

参照

- ◆ 「モデルの配備」 『Mobile Link - クイック・スタート』

[同期モデル展開] ウィザード : [SQL Anywhere リモート同期クライアントの冗長性] ページ

このページでは、リモート SQL Anywhere 同期クライアントの冗長性レベルを設定できます。このレベルによって、同期クライアントから報告される情報量が決まります。

このページには次の項目があります。

[最小の同期進行情報] このオプションを選択すると、各同期の Mobile Link サーバ・ウィンドウとエラー・ログに最小限の情報が報告されます。

[中程度の冗長性 (-v)] このオプションを選択すると、各同期の Mobile Link サーバ・ウィンドウとエラー・ログに多少の情報が報告されます。[「-v オプション」](#) 『Mobile Link - クライアント管理』を参照してください。

[デバッグ冗長性 (-v+)] このオプションを選択すると、各同期の Mobile Link サーバ・ウィンドウとエラー・ログに、デバッグに必要な標準の情報量が報告されます。このオプションを選択すると、c (接続文字列をログに公開) と p (パスワードをログに公開) を除くログのオプションがすべてオンになります。

[「-v オプション」](#) 『Mobile Link - クライアント管理』を参照してください。

[次のファイルにメッセージ・ログを保存する (-ot スイッチを使用)] このオプションを選択し、メッセージ・ログ・ファイルを保存するロケーションを入力するか、[\[参照\]](#) をクリックしてファイルを選択します。

[「-ot オプション」](#) 『Mobile Link - クライアント管理』を参照してください。

参照

- ◆ 「モデルの配備」 『Mobile Link - クイック・スタート』

[同期モデル展開] ウィザード : [SQL Anywhere リモート同期クライアントの詳細オプション] ページ

このページでは、リモート同期クライアントに追加の同期オプションを指定できます。

このページには次の項目があります。

[拡張オプション] テーブル SQL Anywhere リモート同期クライアントに使用できる拡張オプションが表示されます。

- ◆ **[名前]** 拡張オプションの名前が表示されます。「[Mobile Link SQL Anywhere クライアントの拡張オプション](#)」 『[Mobile Link - クライアント管理](#)』を参照してください。
- ◆ **[値]** 選択する拡張オプションによって、オプションの値をこのフィールドに入力するか、ドロップダウン・リストから [ON] または [OFF] を選択します。「[Mobile Link SQL Anywhere クライアントの拡張オプション](#)」 『[Mobile Link - クライアント管理](#)』を参照してください。

[同期クライアント (dbmsync) の追加のコマンド・ライン・オプションを指定するには、以下のフィールドにオプションを入力します。] dbmsync の追加のコマンド・ライン・オプションを入力します。「[dbmsync 構文](#)」 『[Mobile Link - クライアント管理](#)』を参照してください。

[dbmsync を開始するために生成されるコマンド・ファイルの保存場所を指定してください。] コマンド・ファイルを保存するロケーションを入力するか、[参照] をクリックしてファイルを選択します。

参照

- ◆ 「[モデルの配備](#)」 『[Mobile Link - クイック・スタート](#)』
- ◆ 「[dbmsync 拡張オプションの使用](#)」 『[Mobile Link - クライアント管理](#)』
- ◆ 「[dbmsync の同期のカスタマイズ](#)」 『[Mobile Link - クライアント管理](#)』

[同期モデル展開] ウィザード : [Ultra Light リモート同期クライアントの詳細オプション] ページ

このページでは、Ultra Light 同期テスト・ユーティリティ (ulsync) の詳細オプションを選択できます。

このページには次の項目があります。

[ulsync の追加のコマンド・ライン・オプションを指定するには、以下のフィールドにオプションを入力します。] ulsync の追加のコマンド・ライン・オプションを入力します。「[Ultra Light 同期ユーティリティ \(ulsync\)](#)」 『[Ultra Light - データベース管理とリファレンス](#)』を参照してください。

次の表は、指定できるオプションのリストです。

オプション	説明
-a <i>authenticate-parameters</i>	Mobile Link サーバ <i>authenticate_parameters</i> スクリプトで必要な値を設定します。このような値には、ユーザ名やパスワードなどがあります。必要な場合は、このオプションを 20 回まで繰り返すことができます。
-c " <i>connection-string</i> "	必須。 <i>connection-string</i> の DBF パラメータまたは <i>file_name</i> パラメータで指定するデータベースに接続します。ユーザ ID とパスワードの両方を指定しなかった場合は、デフォルトの UID DBA と PWD sql が使用されます。

オプション	説明
-e sync-parms	<p>単一の拡張同期オプションを設定します。複数の -e オプションを使用すると、複数の拡張同期オプションを設定できます。キーワードは大文字と小文字が区別されません。Username と Version は必ず設定する必要があります。次に例を示します。</p> <p>-e Username=MyName -e Version=MyNum</p> <p>「拡張同期パラメータ」『Ultra Light - データベース管理とリファレンス』を参照してください。</p>
-k stream-type	<p>暗号化されているか、暗号化されていない同期ストリームを指定します。stream-type は <i>tcpip</i>、<i>tls</i>、<i>http</i>、<i>https</i> のいずれかである必要があります。デフォルトのストリームは <i>tcpip</i> です。</p> <p>Palm OS の場合は、Ultra Light データベースの作成時に RSA 証明書を格納している必要があります。その他のシステムでは、-x trusted certificate=path オプションを使用して、または暗号化コードの一部として証明書ルックアップ・メカニズムがある名前のないファイルとして、証明書ファイルを指定できます。</p>
-n	同期を実行しません。前回の同期の結果を表示するには、このオプションを -r と組み合わせて使用します。
-or	<p>読み込み専用モードでデータベースを同期させます。Ultra Light によって、元のファイルのコピーが作成され、このコピーを使用して、データベースを変更しないでスクリプトがテストされます。コピーされたファイルの変更内容は終了時に破棄されます。</p> <p>すでに CE デバイスに配備されているデータベースにデスクトップから直接接続している場合は、このパラメータはサポートされません。</p>
-r	前回の同期の結果を表示します。
-q	クワイエット・モードで実行し、メッセージを表示しません。
-v	同期の進行状況のメッセージを表示します。
-x netopt-string	<p>セミコロンで区切った同期ネットワーク・プロトコル・オプション(ストリーム・パラメータ)とそれぞれの値のリストです。「Ultra Light 同期ストリームのネットワーク・プロトコルのオプション」『Mobile Link - クライアント管理』を参照してください。</p> <p>デフォルト値は host=localhost です。</p>

[ulsync を開始するために生成されるコマンド・ファイルの保存場所を指定してください。] コマンド・ファイルを保存するロケーションを入力するか、[参照]をクリックしてファイルを選択します。

参照

- ◆ 「[モデルの配備](#)」 『[Mobile Link - クイック・スタート](#)』

[同期モデル展開] ウィザード : [サーバによって開始される同期のリスナ] ページ

このページでは、サーバによって開始される同期でリモート・コンピュータで使用される Listener のオプションを選択できます。「[Listener](#)」 『[Mobile Link - サーバ起動同期](#)』を参照してください。

Notifier の設定を選択するには、Sybase Central でモデルを開き、右ウィンドウ枠で [通知] タブをクリックします。「[モデル・モードでのサーバ起動同期の設定](#)」 『[Mobile Link - クイック・スタート](#)』を参照してください。

このページには次の項目があります。

[リモート・データベース・ファイル名] リモート・データベース・ファイルの名前を入力します。Listener でリモート ID を取得するためにこの情報が必要です。Listener は、リモート・データベース・ファイルと同じフォルダで起動する必要があります。同じフォルダで起動しない場合は、Listener のオプション・ファイルを編集する必要があります。「[Listener 構文](#)」 『[Mobile Link - サーバ起動同期](#)』を参照してください。

[SQL Anywhere Mobile Link クライアント (dbmlsync) の実行] このオプションを選択すると、SQL Anywhere Mobile Link クライアント (dbmlsync) が実行されます。「[Mobile Link SQL Anywhere クライアント・ユーティリティ \[dbmlsync\]](#)」 『[Mobile Link - クライアント管理](#)』を参照してください。

[Windows メッセージをウィンドウ・クラスに通知する] このオプションを選択すると、ウィンドウ・クラスに Windows メッセージが通知されます。

◆ **[Windows メッセージ]** Windows メッセージがある場合は、メッセージの本文または ID を入力します。「[Listener 構文](#)」 『[Mobile Link - サーバ起動同期](#)』の post コマンドを参照してください。

◆ **[ウィンドウ・クラス名]** ウィンドウ・クラス名を入力します。「[-wc オプション](#)」 『[Mobile Link - クライアント管理](#)』を参照してください。

[追加のリスナ (dblsn) コマンド・ライン・オプション] 追加の Listener コマンド・ライン・オプションがある場合は入力します。「[Listener 構文](#)」 『[Mobile Link - サーバ起動同期](#)』を参照してください。

[dblsn を開始するために生成されるコマンド・ファイルの保存場所を指定してください。] コマンド・ファイルを保存するロケーションを入力するか、[参照] をクリックしてファイルを選択します。Listener のオプション・ファイル *dblsn.txt* がコマンド・ファイルと同じフォルダに作成されます。

参照

- ◆ 「[Listener ユーティリティ](#)」 『[Mobile Link - サーバ起動同期](#)』
- ◆ 「[Listener 構文](#)」 『[Mobile Link - サーバ起動同期](#)』
- ◆ 「[モデルの配備](#)」 『[Mobile Link - クイック・スタート](#)』
- ◆ 「[メッセージ・ハンドラ](#)」 『[Mobile Link - サーバ起動同期](#)』
- ◆ 「[Listener オプションの保存](#)」 『[Mobile Link - サーバ起動同期](#)』

[同期モデル展開] ウィザード : [展開ウィザードの完了] ページ

[同期モデル展開] ウィザードの [展開ウィザードの完了] ページでは、ウィザードを完了したことを確認します。

[完了] をクリックすると、展開ファイルが作成されるか、選択したデータベースに変更内容が書き込まれます。このモデルと同じ名前のファイルがある場合は、上書きされます。

同期モデルを展開する前に変更を行うには、[戻る] をクリックします。

次のステップ

- ◆ 「[展開したモデルの同期](#)」 『[Mobile Link - クイック・スタート](#)』

[スキーマ更新] ウィザード : [ようこそ] ページ

このページでは、同期モデルのスキーマとデータベースのスキーマを比較することで、同期モデル内の統合データベースとリモート・データベースのスキーマを更新できます。

このページには次の項目があります。

[更新するスキーマを指定してください。] スキーマを更新するデータベースを選択します。

- ◆ **[統合データベース・スキーマ]** モデル内の統合データベースのスキーマを、統合データベースのスキーマで更新する場合は、このオプションを選択します。
- ◆ **[リモート・データベース・スキーマ]** モデル内のリモート・データベースのスキーマを、既存のリモート・データベースのスキーマで更新する場合は、このオプションを選択します。
- ◆ **[統合データベース・スキーマとリモート・データベース・スキーマ]** モデル内の統合データベースとリモート・データベースの両方のスキーマを、統合データベースと既存のリモート・データベースのスキーマで更新する場合は、このオプションを選択します。

参照

- ◆ 「[リモート・データベースと統合データベース間での Mobile Link データ・マッピング](#)」
『[Mobile Link - サーバ管理](#)』

[スキーマ更新] ウィザード : [統合データベース・スキーマ] ページ

Mobile Link アプリケーションの統合データベースにするデータベースに接続し、ウィザードでこのデータベースのスキーマ情報を取得できるようにします。

このページには次の項目があります。

[統合データベースの選択] 同期モデルの統合データベースのスキーマ情報を取得する統合データベースをクリックして選択します。

[接続] ダイアログが表示されます。統合データベースの接続情報を指定します。

詳細については、「[\[接続\] ダイアログ : \[ID\] タブ \(Mobile Link と QAnywhere の場合\)](#)」 6 ページと「[\[接続\] ダイアログ : \[詳細\] タブ \(Mobile Link と QAnywhere の場合\)](#)」 13 ページを参照してください。

注意

指定されたデータベースが Mobile Link 統合データベースとして設定されていない場合は、Mobile Link システム設定のインストールを求めるプロンプトが表示されます。

- ◆ [はい] をクリックすると、Mobile Link システム設定スクリプトを統合データベースにすぐにインストールします。

たとえば、同期モデルを指定された統合データベースに展開する場合は [はい] をクリックします。

- ◆ [いいえ] をクリックすると、Mobile Link 設定スクリプトを指定された統合データベースにインストールしません。

たとえば次の場合に [いいえ] をクリックします。

- ◆ スキーマを取得するためだけに指定した統合データベースを使用し、モデルを展開する予定がない場合。
- ◆ 同期モデルを指定した統合データベースに展開するが、それには [同期モデル展開] ウィザードを使用する予定の場合。
- ◆ 展開後に設定スクリプトを自分で実行する場合。

Mobile Link システム設定のインストール以外の場合では、モデルを展開しないかぎり、統合データベースにその他の変更は加えられません。

[「統合データベースの設定」](#) [『Mobile Link - サーバ管理』](#) を参照してください。

次の各フィールドは、最初はすべて空白ですが、統合データベースを指定すると、その統合データベースに関する情報が表示されます。

[名前] 統合データベースの名前が表示されます。

[ユーザ] 統合データベースに接続しているユーザのユーザ ID が表示されます。

[製品名] 統合データベースの製品名が表示されます。たとえば、SQL Anywhere などです。

[バージョン] 使用している製品のバージョンが表示されます。

[スキーマ更新] ウィザード : [リモート・データベース・スキーマ] ページ

このページでは、リモート・データベースのスキーマを取得するロケーションを選択できます。

このページには次の項目があります。

[同期モデルでリモート・スキーマを更新する方法を指定してください。] 次のいずれかを選択して、リモート・スキーマを更新する方法を指定します。

- ◆ **[統合データベース・スキーマから]** リモート・データベースのスキーマの更新に使用するテーブルを統合データベースから選択する場合はこのオプションを選択します。
- ◆ **[既存のリモート・データベースから]** SQL Anywhere または Ultra Light の既存のリモート・データベースに接続してリモート・スキーマを更新する場合はこのオプションを選択します。
- ◆ **[リモート・データベースの選択]** このボタンをクリックして、同期モデルのスキーマ情報を取得するリモート・データベースを選択します。[接続] ダイアログが表示されます。リモート・データベースの接続情報を指定します。
次の項を参照してください。
 - ◆ 「[接続] ダイアログ : [ID] タブ (SQL Anywhere の場合)」 3 ページ
 - ◆ 「[接続] ダイアログ : [データベース] タブ (SQL Anywhere の場合)」 9 ページ
 - ◆ 「[接続] ダイアログ : [詳細] タブ (SQL Anywhere の場合)」 12 ページ
- ◆ **[名前]** リモート・データベースの名前が表示されます。
- ◆ **[ユーザ]** リモート・データベースに接続しているユーザのユーザ ID が表示されます。
- ◆ **[製品名]** リモート・データベースの製品名が表示されます。たとえば、SQL Anywhere などです。
- ◆ **[バージョン]** 使用している製品のバージョンが表示されます。

[スキーマ更新] ウィザード : [新しいリモート・データベース・スキーマ] ページ

このページでは、リモート・データベースのスキーマの更新に使用する統合データベースのテーブルを選択できます。このウィザードの完了後に、モデル・モードの [マッピング] タブを使用して、対応する統合テーブルとリモート・テーブル間の同期を設定します。「[リモート・テーブルと統合データベースの関係](#)」 『[Mobile Link - サーバ管理](#)』を参照してください。

このページには次の項目があります。

[テーブル] リスト 現在接続している統合データベース内のテーブルのテーブル名と所有者が表示されます。

[すべて選択] [すべて選択] をクリックすると、リスト内のすべてのテーブルが、リモート・データベースのスキーマに含まれます。

[すべてをクリア] [すべてをクリア] をクリックすると、[テーブル] リストのすべてのチェックボックスがクリアされます。

[所有者] ドロップダウン・リストから特定のユーザを選択し、[所有者の選択] ボタンを使用すると、選択したユーザが所有するテーブルが選択されます。

[所有者の選択] [所有者の選択] をクリックすると、[所有者] ドロップダウン・リストで指定したユーザが所有するテーブルがすべて選択されます。

参照

- ◆ 「[リモート・データベースと統合データベース間での Mobile Link データ・マッピング](#)」 『[Mobile Link - サーバ管理](#)』

[スキーマ更新] ウィザード : [スキーマ更新ウィザードの完了] ページ

このページには、検出されたスキーマの変更の概要が表示されます。

[スキーマ更新] ウィザードは、同期モデル内に現在存在するスキーマと、指定されたデータベースを比較し、そのデータベースのスキーマに一致するように同期モデルを変更します。

ウィザードを完了し、同期モデルのスキーマを更新するには、情報を確認し、[完了] をクリックします。

[リモート・テーブルの新規作成] ダイアログはリモート・テーブルをモデルに追加しますが、[スキーマ更新] ウィザードはこれと異なり、テーブルをマッピングしません。[マッピング] タブを使用して、テーブル・マッピングを作成する必要があります。「[モデルで作成するリモート・データベースの変更](#)」 [『Mobile Link - クイック・スタート』](#) を参照してください。

[リモート・テーブルの新規作成] ダイアログ

[リモート・テーブルの新規作成] ダイアログでは、統合スキーマで同期されていないテーブルから選択することで、リモート・スキーマに新しいテーブルと対応するテーブル・マッピングを作成できます。

このページには次の項目があります。

[候補リストから統合テーブルを1つ以上選択してください。] 候補テーブルのリストには、リモート・スキーマに現在含まれていない統合テーブルが示されます。これらのテーブルを1つ以上選択して、リモート・スキーマに追加します。新しいリモート・テーブルには、対応する統合テーブルと同じ名前で、同じカラムのセットができます。また、リモート・テーブルと統合テーブル間のマッピングが自動的に作成されます。

Mobile Link モデル・モード

モデル・モードでは、[同期モデル作成] ウィザードで選択したオプションをカスタマイズできます。たとえば、モデル・モードから1つのテーブルをダウンロード専用、別のテーブルをアップロード専用にカスタマイズできます。

モデル・モードでの作業は、オフラインになります。変更はモデル・ファイルに対して行われます。展開時に、すぐに統合データベースに変更を適用するか、変更を適用するために後で実行できるファイルを作成するかを選択できます。

モデル・モードには次のタブがあります。

- ◆ **[マッピング]** [マッピング] タブには [テーブル・マッピング] と [詳細] という2つのウィンドウ枠があります。このタブのオプションの詳細については、「[\[マッピング\]: \[テーブル・マッピング\]](#)」 [230 ページ](#)を参照してください。
- ◆ **[イベント]** [イベント] タブでは、同期スクリプトを表示または変更できます。このタブのオプションの詳細については、「[\[イベント\] タブ](#)」 [235 ページ](#)を参照してください。
- ◆ **[認証]** [認証] タブでは、モデルで使用する Mobile Link 認証方法を表示または変更できます。このタブのオプションの詳細については、「[\[認証\] タブ](#)」 [237 ページ](#)を参照してください。
- ◆ **[通知]** [通知] タブでは、モデルのサーバ起動同期設定を表示または変更できます。このタブのオプションの詳細については、「[\[通知\] タブ](#)」 [237 ページ](#)を参照してください。

参照

- ◆ 「[テーブル・マッピングとカラム・マッピングの変更](#)」 『Mobile Link - クイック・スタート』
- ◆ 「[モデルで作成するリモート・データベースの変更](#)」 『Mobile Link - クイック・スタート』
- ◆ 「[ダウンロード・タイプの変更](#)」 『Mobile Link - クイック・スタート』
- ◆ 「[削除の処理方法の変更](#)」 『Mobile Link - クイック・スタート』
- ◆ 「[ダウンロード・サブセットの変更](#)」 『Mobile Link - クイック・スタート』
- ◆ 「[競合の検出と解決の変更](#)」 『Mobile Link - クイック・スタート』
- ◆ 「[モデル内のスクリプトの変更](#)」 『Mobile Link - クイック・スタート』
- ◆ 「[モデル・モードでの外部サーバに対する認証](#)」 『Mobile Link - クイック・スタート』
- ◆ 「[モデル・モードでのサーバ起動同期の設定](#)」 『Mobile Link - クイック・スタート』
- ◆ 「[モデル・モードでのスキーマの更新](#)」 『Mobile Link - クイック・スタート』

[マッピング] タブ

[テーブル・マッピング] ウィンドウ枠でテーブル・マッピングのローを選択すると、[詳細] ウィンドウ枠にその情報が表示されます。

[マッピング]: [テーブル・マッピング]

[テーブル・マッピング] ウィンドウ枠には、リモート・テーブルあたり 1 つのローが含まれます。統合データベースが選択され、マッピングの方向が [双方向]、[アップロードのみ]、[ダウンロードのみ] のいずれかである場合に、リモート・テーブルがマッピングされます。

各カラムには、[同期モデル作成] ウィザードで選択した値、または選択しなかった場合はウィザードのデフォルト値が表示されます。これらの値は、このテーブルを編集してテーブルごとに変更できます。

[テーブル・マッピング] ウィンドウ枠には、次のカラムがあります。

序数のカラム このカラムにタイトルはありません。テーブル内のグリッド線の番号を示します。カラムの見出しをクリックしてテーブルのソート順序を変更してもグリッド番号は変わりません。リモート・テーブルが追加、削除するようマーク付け、または修正された場合は、このカラムにアイコンが表示されます。

[ステータス] カラム このカラムは、テーブル・マッピングにエラー・メッセージ、警告メッセージ、または情報メッセージがあるかどうかを示します。このカラムにアイコンが表示されている場合は、テーブル・マッピングを選択し、[詳細] ウィンドウ枠の [ステータス] タブを開くと、メッセージの内容を確認できます。

[リモート・テーブル] カラム リモート・データベースで同期するリモート・テーブルを示します。カッコ内にリモート・テーブルの所有者名が表示されます。

リモート・テーブルに削除対象のマークを付けるには、[テーブル・マッピング] ウィンドウ枠でローを右クリックし、[削除] を選択します。このリモート・テーブルは、モデルを保存するときに削除されます。リモート・テーブルを削除するということは、新しいリモート・データベースに展開するときに作成されないということです。「[削除の処理方法の変更](#)」『[Mobile Link - クイック・スタート](#)』を参照してください。

[リモート・テーブルの新規作成] ダイアログを使用して、リモート・テーブルを追加できます。「[モデルで作成するリモート・データベースの変更](#)」『[Mobile Link - クイック・スタート](#)』を参照してください。

[マッピング方向] カラム 同期の方向を示します。方向は、[同期されない]、[双方向]、[ダウンロードのみ]、[アップロードのみ] のいずれかです。

テーブル・マッピングの方向が [同期されない] である場合、テーブルはリモート・データベース・スキーマの一部のままです。モデルが展開されると、テーブルはリモート・データベースに作成されますが、情報は同期されません。「[テーブル・マッピングとカラム・マッピングの変更](#)」『[Mobile Link - クイック・スタート](#)』を参照してください。

リモート・データベースにテーブルを作成しない場合は、モデルからテーブルを削除してください。「[削除の処理方法の変更](#)」『[Mobile Link - クイック・スタート](#)』を参照してください。

「[アップロード専用の同期とダウンロード専用の同期](#)」『[Mobile Link - サーバ管理](#)』を参照してください。

[統合テーブル] カラム 対応するリモート・テーブルと同期される統合テーブルを示します。これらのテーブルと、[リモート・テーブル] カラムのテーブルが同期されます。カラムをクリックして、統合テーブルのリストから別のテーブルを選択すると、統合テーブルを変更できます。

[詳細] ウィンドウ枠の [カラム・マッピング] タブには、選択したテーブル・マッピングでのリモート・カラムと統合カラムのマッピングが表示されます。

[ダウンロード・タイプ] カラム [詳細] ウィンドウ枠の [ダウンロード・タイプ] タブで実装内容の表示や変更ができます。このカラムには、次のオプションがあります。

- ◆ **[タイムスタンプ]** 最後のダウンロードの後に変更された場合にのみデータをダウンロードします。タイムスタンプベースのダウンロードを使用するときは、ローの変更を追跡するために、統合テーブルごとにタイムスタンプ・カラムが必要です。変更を追跡するには、統合データベースのテーブルにカラムを追加するか、シャドー・テーブルを作成します。シャドー・テーブルは、ベース・テーブルと同じ所有者で作成されます。[タイムスタンプ] を選択すると、必要なオブジェクトが自動的に生成されます。「[タイムスタンプベースのダウンロード](#)」[『Mobile Link - サーバ管理』](#)を参照してください。
- ◆ **[スナップショット]** 統合データベース内のデータがすでにダウンロードされている場合も、同期のたびにすべてダウンロードします。「[スナップショットを使った同期](#)」[『Mobile Link - サーバ管理』](#)を参照してください。
- ◆ **[カスタム]** download_cursor スクリプトと download_delete_cursor スクリプトを自動的に生成しないで独自で作成します。スクリプトは [イベント] タブで作成できます。「[download_cursor スクリプトの作成](#)」[『Mobile Link - サーバ管理』](#)と「[download_delete_cursor スクリプトの作成](#)」[『Mobile Link - サーバ管理』](#)を参照してください。

[削除のダウンロード] カラム このチェックボックスがオンの場合、統合データベースで削除されたデータが、リモート・データベースで削除されます。

タイムスタンプベースの同期を使用するときこのカラムを選択する場合は、統合データベースでの削除を記録する必要があります。記録するには、シャドー・テーブルを使用するか(デフォルト)、論理的削除を使用します。[詳細] ウィンドウ枠の [削除のダウンロード] タブを開くと、実装内容の表示や変更ができます。

スナップショット・ダウンロードを使用するときこのカラムを選択すると、リモート・データベース内に既存のローは、ダウンロードされたローが追加される前にすべて削除されます。

ダウンロード・タイプが [カスタム] の場合は、このオプションを選択できません。この場合は、独自の download_delete_cursor スクリプトを作成する必要があります。スクリプトは [詳細] ウィンドウ枠の [イベント] タブで作成できます。

[サブセットのダウンロード] カラム このカラムには、次のオプションがあります。

- ◆ **[なし]** 各リモート・データベースに同じデータをダウンロードします。
- ◆ **[ユーザ]** 各同期ユーザ (Mobile Link ユーザ) は、同じテーブルまたは直接ジョインしたテーブルのカラムとユーザ名が一致するローだけをダウンロードします。[詳細] ウィンドウ枠の [サブセットのダウンロード] タブで実装内容を表示または変更できます。
- ◆ **[リモート]** リモート ID が、同じテーブルまたは直接ジョインしたテーブルのカラムと一致するローだけが各リモート・データベースにダウンロードされます。[詳細] ウィンドウ枠の [サブセットのダウンロード] タブで実装内容を表示または変更できます。

- ◆ **[カスタム]** ダウンロード・カーソルの WHERE 句内の SQL 式を満たすローだけがダウンロードされます。このオプションは、ダウンロード・カーソルの WHERE 句に複数のジョインや特定のビジネス・ロジックが必要な場合に便利です。この式は、[詳細] ウィンドウ枠の [サブセットのダウンロード] タブで表示または変更できます。

[競合の検出] カラム このカラムには、次のオプションがあります。

- ◆ **[なし]** 競合の有無を確認しないで、アップロードされた更新を常に適用します。このオプションは、パフォーマンスが最高です。
- ◆ **[ローベース]** 最後の同期後に、リモート・データベースと統合データベースの両方でローが更新されていた場合に競合が検出されます。
- ◆ **[カラムベース]** リモート・データベースと統合データベースの両方で、ローの同じカラムが更新されていた場合のみ競合が検出されます。それ以外の場合は、アップロードされたカラムの更新だけが適用されます。テーブルに BLOB のカラムがある場合は、ローベースの競合の検出を使用する必要があります。

「競合の検出」 『[Mobile Link - サーバ管理](#)』を参照してください。

[競合の解決] カラム このカラムには、次のオプションがあります。

- ◆ **[統合]** 先入れ勝ちです。アップロードされた更新が競合する場合は拒否されます。
- ◆ **[リモート]** 後入れ勝ちです。アップロードされた更新が常に適用されます。このオプションは、カラムベースの検出を行う場合にのみ使用します。それ以外の場合は、競合の検出を無効にすると、より高いパフォーマンスで同じ結果が得られます。
- ◆ **[タイムスタンプ]** 維持しているタイムスタンプ・カラムを使用して、新しい変更の勝ちです。タイムスタンプ・カラムに、ローが最後に変更された時刻が記録されます。このカラムは、リモート・テーブルと統合テーブルの両方に存在し、また同期に含まれる必要があります。これを機能させるには、リモート・データベースと統合データベースで同じタイム・ゾーン (UTC を推奨) を使用し、かつクロックが同期されている必要があります。
- ◆ **[カスタム]** resolve_conflict スクリプトを自動的に生成しないで独自に作成します。スクリプトは [イベント] タブで作成できます。

「競合の解決」 『[Mobile Link - サーバ管理](#)』を参照してください。

[マッピング] : [詳細]

[テーブル・マッピング] ウィンドウ枠でテーブル・マッピングのローを選択すると、[詳細] ウィンドウ枠にテーブルに関する情報が表示されます。この [詳細] ウィンドウ枠には、次のタブがあります。

[カラム・マッピング] タブ

[カラム・マッピング] タブには、マッピングされているカラムが表示されます。

カラム・マッピングに削除対象のマークを付けるには、[カラム・マッピング] タブでローを選択し、[編集]-[削除] を選択します。このカラム・マッピングは、モデルを保存するときに削除さ

れます。カラム・マッピングを削除するということは、モデルの展開時にリモート・データベースでカラムが削除されないということです。

[カラム・マッピング] タブには、選択したテーブル・マッピングについて次の情報が表示されます。

- ◆ **[リモート・カラム名]** リモート・データベースのテーブル内のカラム名です。
- ◆ **[リモート番号] (リモート・カラム番号)** このカラムは、SELECT * FROM *tablename* コマンドで返されるカラムの順序を示します。
- ◆ **[リモート・カラムのデータ型]** データ型です。
- ◆ **[マッピング方向]** カラムのマッピング方向です。

カラムのマッピング方向は、そのカラムが属するテーブルのマッピングの方向に依存します。カラムは、テーブルと同じマッピングにすることも、同期なしにすることもできます。たとえば、テーブルが [双方向] テーブル・マッピングである場合、テーブルのカラムは [双方向] か [同期されない] のいずれかになります。

カラム・マッピングの方向が [同期されない] である場合、カラムはリモート・データベース・スキーマの一部です。モデルが展開されると、カラムはリモート・データベースに作成されますが、情報は同期されません。

リモート・データベースにカラムを作成しない場合は、モデルからカラムを削除してください。プライマリ・キーのカラムは削除できません。「[削除の処理方法の変更](#)」『[Mobile Link - クイック・スタート](#)』を参照してください。

- ◆ **[統合カラム名]** 統合データベースのテーブル内のカラム名です。

注意

同期モデルを作成する前からリモート・データベースが存在していた場合、このカラムの情報は推測なので、確認が必要です。

- ◆ **[統合番号] (統合カラム番号)** このカラムは、SELECT * FROM *tablename* コマンドで返されるカラムの順序を示します。
- ◆ **[統合カラムのデータ型]** データ型です。

[ダウンロード・タイプ] タブ

[ダウンロード・タイプ] タブには、選択したテーブルについて次の情報が表示されます。

- ◆ **[タイムスタンプ・カラム名]** タイムスタンプベースのダウンロードで使用するカラムの名前を指定します。
- ◆ **[同期テーブルでタイムスタンプ・カラムを使用する]** このオプションを選択すると、タイムスタンプ・カラムがない各同期テーブルにタイムスタンプ・カラムが追加されます。
- ◆ **[シャドー・テーブルを使用してタイムスタンプ・カラムを保持する]** このオプションを選択すると、統合データベースの同期テーブルごとにシャドー・テーブルが作成されます。シャドー・テーブルは、ベース・テーブルと同じ所有者で作成されます。

「[ダウンロード・タイプの変更](#)」 『[Mobile Link - クイック・スタート](#)』を参照してください。

[削除のダウンロード] タブ

[削除のダウンロード] タブは、ダウンロード・タイプがタイムスタンプである場合に適用されます。つまり、[テーブル・マッピング] ウィンドウ枠で、[ダウンロード・タイプ] が [タイムスタンプ] に設定され、[削除のダウンロード] カラムが選択されている状態です。『[マッピング](#)」: [テーブル・マッピング] 230 ページを参照してください。

このタブでは、タイムスタンプベースの同期に対して統合データベースでの削除が記録される方法を表示および変更できます。[削除のダウンロード] タブには、選択したテーブルについて次の情報が表示されます。

- ◆ **[シャドー・テーブルを使用して削除を記録する]** このオプションを選択すると、シャドー・テーブルを使用して、統合データベース内の削除が追跡されます。

シャドー・テーブルは、モデルの同期されたテーブルごとに作成されます。各シャドー・テーブルには、テーブルのプライマリ・キーを保持するカラムと、タイムスタンプを保持するカラムという2つのカラムがあります。シャドー・テーブルは、ベース・テーブルと同じ所有者で作成されます。
- ◆ **[タイムスタンプ・カラム名]** タイムスタンプ・カラムの名前を指定します。デフォルトのタイムスタンプ・カラム名は `last_modified` です。
- ◆ **[論理削除を使用する]** 統合データベース内の論理削除を、削除のダウンロードに使用する場合は、このオプションを選択します。論理削除では、ローが有効であるかどうかを追跡するステータス・カラムを使用します。次のオプションでは、ステータス・カラムが削除を追跡する方法を指定します。
 - ◆ **[カラム名]** ローが削除されたかどうかを示すカラムの名前を指定します。このカラムがない場合は追加されます。デフォルト名は `deleted` です。
 - ◆ **[ローが削除されたことを示す値]** ローが削除された場合に生成される値を指定します。デフォルト値は `Y` です。
 - ◆ **[ローが削除されていないことを示す値]** ローが削除されていない場合に生成される値を指定します。デフォルトは `N` です。

次の項を参照してください。

- ◆ 「[削除の処理方法の変更](#)」 『[Mobile Link - クイック・スタート](#)』
- ◆ 「[削除の処理](#)」 『[Mobile Link - サーバ管理](#)』
- ◆ 「[download_delete_cursor スクリプトの作成](#)」 『[Mobile Link - サーバ管理](#)』

[サブセットのダウンロード] タブ

[サブセットのダウンロード] タブは、ユーザ、リモート ID、またはカスタム・サブセットごとにデータをサブセットする場合に適用されます。[サブセットのダウンロード] タブには、選択したテーブルについて次の情報が表示されます。

- ◆ **[各ダウンロード・テーブルのカラムを使用する]** 各ダウンロード・テーブルのカラムを使用する場合は、このオプションを選択します。このオプションを使用するには、統合データベー

スに Mobile Link ユーザ名が含まれるテーブルや、Mobile Link ユーザ名を作成するためにジョインできるテーブルが必要です。Mobile Link ユーザ名は展開時に選択するため、統合データベースの既存の値と一致する名前を選択できます。

- ◆ **[カラム名]** Mobile Link ユーザ名またはリモート ID を含むカラムを指定します。
- ◆ **[ジョインされている関係テーブル内のカラムを使用する]** このオプションを選択した場合は、ジョインを使用して Mobile Link ユーザ名またはリモート ID を指定します。次の項目を指定できます。
- ◆ **[ジョインするテーブル]** 統合テーブルのカラムを指定します。
- ◆ **[一致させるカラム]** ジョインするように選択したテーブルのカラムを指定します。
- ◆ **[ジョイン条件]** ジョイン条件を作成するには、[テーブル・マッピング] ウィンドウ枠で選択したテーブルからカラムを選択し、上の [ジョインするテーブル] フィールドで指定したテーブルからカラムを選択します。

「リモート ID」 『Mobile Link - クライアント管理』と「Mobile Link ユーザの概要」 『Mobile Link - クライアント管理』を参照してください。

- ◆ **[カスタム]** カスタム・サブセットを作成する場合は、[サブセットのダウンロード] タブでテーブルと式を指定できます。複数のテーブルはカンマで区切ります。
- ◆ **[ダウンロード・カーソルの FROM 句に追加するテーブル]** テーブル名を入力します。
- ◆ **[ダウンロード・カーソルの WHERE 句で使用する SQL 式]** SQL 式を入力します。

「download_cursor スクリプトの作成」 『Mobile Link - サーバ管理』と「ダウンロード・サブセットの変更」 『Mobile Link - クイック・スタート』を参照してください。

[競合の解決] タブ

[競合の解決] タブは、タイムスタンプに基づいて競合を解決することを選択した場合に適用されます。

- ◆ **[タイムスタンプ] カラム** タイムスタンプ・カラムを入力します。

[ステータス] タブ

[ステータス] タブには、[テーブル・マッピング] ウィンドウ枠で選択されているテーブル・マッピングの情報メッセージ、警告メッセージ、またはエラー・メッセージが表示されます。

[イベント] タブ

[イベント] タブでは、[同期モデル作成] ウィザードとモデル・モードで生成されたスクリプトを表示または変更したりできます。また、新しいスクリプトを作成することもできます。

[イベント] タブには、同期モデルのイベント・スクリプトすべてが表示されます。イベントのリストを操作するには、次のオプションを使用します。

- ◆ **[グループ]** 表示されたイベントに関連付けられているグループの名前が表示されます。ドロップダウン・リストからグループを選択すると、エディタがそのグループのイベントまでスクロールします。ドロップダウン・リストには、すべての接続イベントに対するイベント・グループ1つと、リモート・テーブルのイベントごとにイベント・グループ1つずつが含まれています。
- ◆ **[イベント]** イベントの名前が表示されます。ドロップダウン・リストからイベント名を選択すると、エディタが指定されたイベントまでスクロールします。太字は、そのイベントに関連付けられたスクリプトがあることを示します。太字ではないイベントを選択すると、新しいスクリプトがエディタに追加されます。
- ◆ **[タイプ]** スクリプトが生成されたか、上書きされたか、ユーザ定義であるかが表示されます。
 - ◆ **生成済みスクリプト** 生成済みスクリプトは、[同期モデル作成] ウィザードとモデル・モードでの選択結果に従って、自動的に生成および維持されます。

生成済みスクリプトの内容は編集することも削除することもできます。生成済みスクリプトに変更を加えると、そのタイプが [上書き済み] に変わります。
 - ◆ **上書き済みスクリプト** 上書き済みスクリプトとは、手動で変更されたスクリプトです。

生成済みスクリプトを変更すると、スクリプトは完全にそのユーザの制御下に置かれるため、モデル・モードで変更が加えられても、自動的に変更されません。たとえば、テーブルの `download_delete_cursor` スクリプトを変更した後にモデル・モードで [削除のダウンロード] をクリアしても、カスタマイズした `download_delete_cursor` スクリプトに影響はありません。ただし、タイプは [ユーザ定義] に変わります。

上書き済みスクリプトを生成済みスクリプトの状態にリストアするには、カーソルをスクリプト内に移動し、[ファイル]-[*scriptname* スクリプトのリストア] を選択します。複数の上書き済みスクリプトを1回でリストアするには、エディタでスクリプトを選択し、[ファイル]-[選択したスクリプトのリストア] を選択します。
 - ◆ **ユーザ定義スクリプト** ユーザ定義スクリプトは、生成済みスクリプトのないイベント用に作成するスクリプトです。

ユーザ定義スクリプトは、モデル・モードで変更が加えられても、自動的に変更されません。たとえば、テーブルの `download_delete_cursor` スクリプトを作成した後にモデル・モードで [削除のダウンロード] を選択しても、カスタマイズした `download_delete_cursor` スクリプトに影響はありません。ただし、タイプは [上書き済み] に変わります。

ユーザ定義スクリプトを削除するには、カーソルをスクリプト内に移動し、[ファイル]-[*scriptname* スクリプトの削除] を選択します。複数のユーザ定義スクリプトを1回でリストアするには、エディタでスクリプトを選択し、[ファイル]-[選択したスクリプトのリストア] を選択します。
- ◆ **[言語]** イベント・スクリプトの記述言語が表示されます。サポートされる言語は、SQL、JAVA、.NET です。生成済みスクリプトはすべて SQL スクリプトです。

参照

- ◆ 「モデル内のスクリプトの変更」 『Mobile Link - クイック・スタート』

[認証] タブ

[認証] タブには、同期モデルについて次の情報が表示されます。

- ◆ **[この同期モデルのカスタム認証を有効にする]** このオプションを選択すると、外部サーバ経由の同期認証が有効になります。
- ◆ **[タイプ]** 外部サーバのタイプを選択します。
- ◆ **[ホスト]** ホスト・サーバの名前を入力します。
- ◆ **[ポート]** ポート番号を入力します。
- ◆ **[URL]** サーバの URL を入力します。このオプションが適用されるのは、LDAP サーバだけです。

参照

「モデル・モードでの外部サーバに対する認証」 『Mobile Link - クイック・スタート』
「外部サーバに対する認証」 『Mobile Link - クライアント管理』

[通知] タブ

[通知] タブには、同期モデルについて次の情報が表示されます。

- ◆ **[サーバ起動同期を有効にする]** このオプションを選択すると、テーブルのダウンロード・カーソルに基づいて統合データベースをポーリングして同期を起動します。
- ◆ **[ダウンロード・カーソル]** テーブルを選択します。
- ◆ **[ポーリング間隔]** サーバをポーリングする頻度を指定します。
 - ◆ **[次の間隔でポーリング]** 事前に定義されたポーリング間隔を選択します。デフォルトは 30 秒です。
 - ◆ **[次のポーリング間隔を使用]** ポーリング間隔を指定します。
- ◆ **[独立性レベル]** 次のいずれかの独立性レベルを選択します (デフォルトは [コミットされない読み込み])。
 - ◆ [コミットされない読み込み (レベル 0)]
 - ◆ [コミットされた読み込み (レベル 1)]
 - ◆ [繰り返し可能読み出し (レベル 2)]
 - ◆ [直列可能 (レベル 3)]

参照

- ◆ 「モデル・モードでのサーバ起動同期の設定」 『Mobile Link - クイック・スタート』

第 6 章

QAnywhere プラグインのヘルプ

目次

QAnywhere プラグインのプロパティ・シート	240
QAnywhere のダイアログ・ボックス	252

QAnywhere プラグインのプロパティ・シート

QAnywhere プラグインには、オブジェクトのプロパティを設定するためのプロパティ・シートが各種用意されています。

次の項からは、QAnywhere プラグインのプロパティ・シートについて詳しく説明します。各プロパティ・シートは、オブジェクトを選択すると、[ファイル]メニューのコマンドとして表示されます。オブジェクトを右クリックして、ポップアップ・メニューから表示することもできます。

[クライアント] プロパティ・シート : [プロパティ] タブ

[クライアント] プロパティ・シートの [プロパティ] タブには、次の項目があります。

[プロパティ名] プロパティ名を入力し、[適用] をクリックすると、下のリストに表示されているプロパティがフィルタされます。

[システム・プロパティの表示] システム・プロパティを表示するかどうかを指定します。ボックスにチェック・マークを付けると、システム・プロパティは表示されます。チェックボックスをオフにすると、システム・プロパティは表示されません。

[プロパティ] リスト メッセージ・ストアのプロパティの名前と値がリストされます。

- ◆ **[新規]** [新規] をクリックし、名前と値を入力すると、新しいプロパティを追加できます。
- ◆ **[編集]** リストからプロパティを選択し、[編集] をクリックし、新しい値を入力すると、既存のプロパティの値を編集できます。
- ◆ **[削除]** リストからプロパティを選択し、[削除] をクリックし、削除することを確認すると、プロパティを削除できます。

参照

- ◆ 「QAnywhere アプリケーションの配備」 『Mobile Link - サーバ管理』
- ◆ 「QAnywhere クライアント・アプリケーションの作成」 『QAnywhere』

[クライアント] プロパティ・シート : [転送ルール] タブ

クライアント側の転送ルールは、クライアントからサーバに転送されるメッセージの動作を管理します。

「クライアント側の転送ルール」 『QAnywhere』 を参照してください。

[クライアント] プロパティ・シートの [転送ルール] タブには、次の項目があります。

[デフォルトの転送ルールを使用する] デフォルトの転送ルールを使用するかどうかを示します。

[転送ルールをカスタマイズする] カスタマイズした転送ルールを使用するかどうかを示します。

[転送ルール] リスト カスタマイズした転送ルールのスケジュールと条件がリストされます。

- ◆ **[新規]** [新規] をクリックすると、新しい転送ルールを追加できます。[ルール・エディタ] ダイアログが表示されます。これは [転送ルールをカスタマイズする] を選択した場合にのみ使用できます。
- ◆ **[編集]** リストからルールを選択し、[編集] をクリックすると、既存の転送ルールを編集できます。[ルール・エディタ] ダイアログが表示されます。これは [転送ルールをカスタマイズする] を選択し、1 つ以上の転送ルールを選択している場合にのみ使用できます。
- ◆ **[削除]** リストからルールを選択し、[削除] をクリックし、削除することを確認すると、既存のルールを削除できます。

参照

- ◆ 「メッセージ転送ルール」 『QAnywhere』
- ◆ 「ルールの構文」 『QAnywhere』

[クライアント・メッセージ・ストア] プロパティ・シート : [一般] タブ

[クライアント・メッセージ・ストア] プロパティ・シートの [一般] タブには、次の項目があります。

[タイプ] オブジェクトのタイプが表示されます。

[製品名] このデータベース・アプリケーションの名前が表示されます。

[バージョン] このデータベース・アプリケーションのバージョンが表示されます。

[クライアント ID] クライアント ID が表示されます。

[コンピュータ] コンピュータの名前が表示されます。

[Client Store] プロパティ・シート : [プロパティ] タブ

[Client Store] プロパティ・シートの [プロパティ] タブには、次の項目があります。

[プロパティ名] プロパティ名を入力し、[適用] をクリックすると、下のリストに表示されているクライアント・メッセージ・ストアのプロパティがフィルタされます。また、プロパティ名の最初の数文字を入力し、[適用] をクリックすると、入力した文字から始まるプロパティがすべて表示されます。

[システム・プロパティの表示] システム・プロパティを表示するかどうかを指定します。ボックスにチェック・マークを付けると、システム・プロパティは表示されます。チェックボックスをオフにすると、システム・プロパティは表示されません。

[プロパティ] リスト メッセージ・ストアのプロパティの名前と値がリストされます。

- ◆ **[新規]** [新規] をクリックし、プロパティの名前と値を入力すると、新しいプロパティを追加できます。
- ◆ **[編集]** リストからプロパティを選択し、[編集] をクリックし、新しい値を入力すると、既存のプロパティの値を編集できます。

- ◆ **[削除]** リストからプロパティを選択し、[削除] をクリックし、削除することを確認すると、プロパティを削除できます。

[コネクタ] プロパティ・シート : [一般] タブ

[コネクタ] プロパティ・シートの [一般] タブには、次の項目があります。

[名前] コネクタの名前が表示されます。これは `ianywhere.connector.address` プロパティの値です。「[QAnywhere メッセージ・アドレス](#)」 『[QAnywhere](#)』を参照してください。

[タイプ] コネクタのタイプが表示されます。次の項を参照してください。

- ◆ 「[JMS コネクタの設定](#)」 『[QAnywhere](#)』
- ◆ 「[Web サービス・コネクタの設定](#)」 『[QAnywhere](#)』

[起動タイプ] ドロップダウン・リストから起動タイプを選択します。デフォルトは自動です。

[Dead 出カメッセージの送信先アドレス] 処理できないメッセージの送信先アドレスが表示されます。これは `ianywhere.connector.outgoing.deadMessageAddress` プロパティを設定します。

[ステータス] 現在のステータスがわかっている場合に表示されます。次のいずれかをクリックすると、ステータスを変更できます。

- ◆ [起動]
- ◆ [停止]
- ◆ [一時停止]
- ◆ [再開]

[ロギング・レベル] スライダを上 (高) から下 (低) に移動すると、エラーのロギング・レベルを設定できます。これは `ianywhere.connector.logLevel` プロパティを設定します。

[圧縮レベル] [圧縮を有効にする] をクリックし、スライダを左 (低) から右 (高) に移動すると、圧縮レベルを設定できます。これは `ianywhere.connector.compressionLevel` プロパティを設定します。

参照

- ◆ 「[コネクタを開く](#)」 『[QAnywhere](#)』
- ◆ 「[コネクタを閉じる](#)」 『[QAnywhere](#)』

[コネクタ] プロパティ・シート : [JMS] タブ

[コネクタ] プロパティ・シートの [JMS] タブには、次の項目があります。

[受信側] JMS からの QAnywhere クライアント宛てのメッセージを受信するコネクタが使用するキュー名を入力します。これは `xjms.receiveDestination` プロパティを設定します。

[JNDI ファクトリ] 外部の JMS JNDI ネーム・サービスにアクセスするときに使用するファクトリ名が表示されます。このフィールドで名前を編集できます。これは `xjms.jndi.factory` プロパティを設定します。

[URL] JMS JNDI ネーム・サービスにアクセスするときに使用する URL が表示されます。このフィールドで URL を編集できます。これは `xjms.jndi.url` プロパティを設定します。

[ユーザ名] 外部の JMS JNDI ネーム・サービスに接続するときに使用する認証名が表示されます。このフィールドでユーザ名を編集できます。これは `xjms.jndi.authName` プロパティを設定します。

[パスワード] 外部の JMS JNDI ネーム・サービスに接続するときに使用する認証パスワードが表示されます。このフィールドでパスワードを編集できます。これは `xjms.jndi.password.e` プロパティを設定します。

[キュー・ファクトリ] 外部 JMS プロバイダのキュー・ファクトリ名が表示されます。このフィールドでキュー・ファクトリ名を編集できます。これは `xjms.queueFactory` プロパティを設定します。

[ユーザ名] 外部 JMS キュー接続に接続するときに使用するユーザ ID が表示されます。このフィールドでユーザ名を編集できます。これは `xjms.queueConnectionAuthName` プロパティを設定します。

[パスワード] 外部 JMS キュー接続に接続するときに使用するパスワードが表示されます。このフィールドでパスワードを編集できます。これは `xjms.queueConnectionPassword.e` プロパティを設定します。

[トピック・ファクトリ] 外部 JMS プロバイダのトピック・ファクトリ名が表示されます。このフィールドでトピック・ファクトリ名を編集できます。これは `xjms.topicFactory` プロパティを設定します。

[ユーザ名] 外部 JMS トピック接続に接続するときに使用するユーザ名が表示されます。このフィールドでユーザ名を編集できます。これは `xjms.topicConnectionAuthName` プロパティを設定します。

[パスワード] 外部 JMS トピック接続に接続するときに使用するパスワードが表示されます。このフィールドでパスワードを編集できます。これは `xjms.topicConnectionPassword.e` プロパティを設定します。

[Dead メッセージの送信先] 処理できないメッセージの送信先アドレスが表示されます。Dead メッセージに使用するキュー名を入力します。

参照

- ◆ 「JMS コネクタの概要」 『QAnywhere』
- ◆ 「JMS コネクタ・プロパティ」 『QAnywhere』
- ◆ 「複数のコネクタの設定」 『QAnywhere』

[コネクタ] プロパティ・シート : [Web サービス] タブ

コネクタでは、特定のアドレスに送信された QAnywhere のメッセージを受信し、メッセージを受信すると Web サービスが呼び出されます。Web サービスからの応答は送信元のクライアントに QAnywhere のメッセージとして送り返されます。Web サービスのコネクタに送信されるメッセージは、QAnywhere WSDL コンパイラによって生成されたプロキシ・クラスを使用して作成されている必要があります。

[コネクタ] プロパティ・シートの [Web サービス] タブには、次の項目があります。

[URL] Web サービスの URL が表示されます。たとえば、`http://localhost:8080/qanyserv/F2C` です。

[ソケット・タイムアウト (ミリ秒)] ソケットの接続、読み込み、書き込みのタイムアウトがミリ秒単位で表示されます。0 を指定するか、タイムアウト値を指定しなかった場合は、無期限に待機します。これは `webservice.socket.timeout` プロパティを設定します。

[HTTP ユーザ名] Web サービスに HTTP 認証が必要な場合にユーザ名が表示されます。これは `webservice.http.authName` プロパティを設定します。

[HTTP パスワード] Web サービスに HTTP 認証が必要な場合にパスワードが表示されます。これは `webservice.http.password.e` プロパティを設定します。

[プロキシ・ホスト] HTTP プロキシを経由して Web サービスにアクセスする必要がある場合にホスト名が表示されます。このプロパティを指定する場合は、[プロキシ・ポート?] プロパティも指定する必要があります。これは `webservice.http.proxy.host` プロパティを設定します。

[プロキシ・ポート] プロキシ・サーバで接続するポートが表示されます。このプロパティを指定する場合は、[プロキシ・ホスト?] プロパティも指定する必要があります。これは `webservice.http.proxy.port` プロパティを設定します。

[プロキシ・ユーザ名] プロキシに認証が必要な場合に使用するプロキシ・ユーザ名が表示されます。このプロパティを指定する場合は、[プロキシ・パスワード?] プロパティも指定する必要があります。これは `webservice.http.proxy.authName` プロパティを設定します。

[プロキシ・パスワード?] プロキシに認証が必要な場合に使用するプロキシ・パスワードが表示されます。このプロパティを指定する場合は、[プロキシ・ユーザ名] プロパティも指定する必要があります。

[FIPS を使用] HTTPS 接続に FIPS アルゴリズムを使用する場合は、このオプションを選択します。このオプションを選択する場合は、URL で `https` を指定する必要があります。このオプションはデフォルトで選択されていません。

別途ライセンスが必要な必須コンポーネント

ECC 暗号化と FIPS 承認の暗号化には、別途ライセンスが必要です。強力な暗号化テクノロジーはすべて、輸出規制対象品目です。

「別途ライセンスが必要なコンポーネント」 『SQL Anywhere 10 - 紹介』を参照してください。

[信頼できる証明書] [FIPS を使用] を選択する場合は、安全な同期に使用するルート証明書のリストを含むファイルを指定します。これは `trusted_certificates` オプションを設定します。

「`trusted_certificates`」 『Mobile Link - クライアント管理』を参照してください。

【証明書に記載される会社】 証明書に記載される会社が表示されます。このオプションを指定した場合、証明書に記されている組織フィールドがこの値と一致する場合にだけ、アプリケーションはサーバ証明書を受け入れます。これは `certificate_company` オプションを設定します。

「`certificate_company`」 『Mobile Link - クライアント管理』を参照してください。

【証明書に記載される部署】 証明書に記載されている部署が表示されます。このオプションを指定した場合、証明書に記されている組織単位フィールドがこの値と一致する場合にだけ、アプリケーションはサーバ証明書を受け入れます。これは `certificate_unit` オプションを設定します。

「`certificate_unit`」 『Mobile Link - クライアント管理』を参照してください。

【証明書に記載される名前】 証明書に記載される名前が表示されます。このオプションを指定した場合、証明書に記されている共通名フィールドがこの値と一致する場合にだけ、アプリケーションはサーバ証明書を受け入れます。これは `certificate_name` オプションを設定します。

「`certificate_name`」 『Mobile Link - クライアント管理』を参照してください。

参照

- ◆ 「モバイル Web サービスの設定」 『QAnywhere』
- ◆ 「モバイル Web サービス・アプリケーションのコンパイルと実行」 『QAnywhere』

[コネクタ] プロパティ・シート : [転送ルール] タブ

[コネクタ] プロパティ・シートの [転送ルール] タブには、次の項目があります。

【デフォルトの転送ルールを使用する】 デフォルトの転送ルールを使用するかどうかを示します。

【転送ルールをカスタマイズする】 カスタマイズした転送ルールを使用するかどうかを示します。

【転送ルール】 リスト カスタマイズした転送ルールが表示されます。

- ◆ **【新規】** [新規] をクリックすると、新しい転送ルールを追加できます。[ルール・エディタ] ダイアログが表示されます。これは [転送ルールをカスタマイズする] を選択した場合にのみ使用できます。
- ◆ **【編集】** リストからルールを選択し、[編集] をクリックすると、既存の転送ルールを編集できます。[ルール・エディタ] ダイアログが表示されます。これは [転送ルールをカスタマイズする] を選択し、1 つ以上の転送ルールを選択している場合にのみ使用できます。
- ◆ **【削除】** リストからルールを選択し、[削除] をクリックし、削除することを確認すると、既存のルールを削除できます。

参照

- ◆ 「メッセージ転送ルール」 『QAnywhere』

[コネクタ] プロパティ・シート : [プロパティ] タブ

[コネクタ] プロパティ・シートの [プロパティ] タブには、次の項目があります。

[プロパティ] リスト 以前に定義されたプロパティが表示されます。

- ◆ **[新規]** [新規] をクリックし、名前と値を入力すると、新しいプロパティを追加できます。
- ◆ **[編集]** リストからプロパティを選択し、[編集] をクリックし、新しい値を入力すると、既存のプロパティの値を編集できます。
- ◆ **[削除]** リストからプロパティを選択し、[削除] をクリックし、削除することを確認すると、プロパティを削除できます。

参照

- ◆ 「[QAnywhere から JMS に送信されるメッセージのアドレス指定](#)」 『QAnywhere』
- ◆ 「[JMS コネクタ・プロパティ](#)」 『QAnywhere』

[送信先エイリアス] プロパティ・シート : [メンバ] タブ

[クライアント] プロパティ・シートの [メンバ] タブには、次の項目があります。

[名前] オブジェクトの名前が表示されます。

[<alias> のメンバ] 選択した送信先エイリアスのメンバのリストが表示されます。送信先クライアント、送信先キュー、配信条件の情報が含まれます。

- ◆ **[新規]** [新規] をクリックすると、新しいメンバを追加できます。[新しいメンバ] ダイアログが表示されます。
- ◆ **[編集]** リストからメンバを選択し、[編集] をクリックすると、既存のメンバを編集できます。[メンバの編集] ダイアログが表示されます。
- ◆ **[削除]** リストからメンバを選択し、[削除] をクリックし、削除することを確認すると、メンバを削除できます。

[メッセージ] プロパティ・シート : [一般] タブ

[メッセージ] プロパティ・シートの [一般] タブには、次の項目があります。

[送信元] メッセージ送信元のクライアント名が表示されます。

[送信先] メッセージ送信先のクライアントと名前が表示されます。

[作成日] メッセージが作成された日付が表示されます。

[優先度] メッセージに割り当てられている優先度が表示されます。

[ステータス] メッセージのステータスが表示されます。

[有効期日] メッセージに有効期限がある場合に表示されます。

[ID] メッセージの ID が表示されます。

[シーケンス番号] メッセージのシーケンス番号が表示されます。

[プロパティ] プロパティのリストが表示されます。

[システム・プロパティの表示] システム・プロパティを表示するかどうかを指定します。このオプションを選択すると、システム・プロパティが表示されます。チェックボックスをオフにすると、システム・プロパティは表示されません。

参照

- ◆ 「[QAnywhere のプロパティ](#)」 『QAnywhere』
- ◆ 「[メッセージ・プロパティ](#)」 『QAnywhere』
- ◆ 「[メッセージ・プロパティの管理](#)」 『QAnywhere』

[メッセージ] プロパティ・シート : [コンテンツ] タブ

[メッセージ] プロパティ・シートの [コンテンツ] タブには、次の項目があります。

内容 選択したメッセージの内容が表示されます。

参照

- ◆ 「[メッセージ・プロパティ](#)」 『QAnywhere』

[メッセージ] プロパティ・シート : [履歴] タブ

[メッセージ] プロパティ・シートの [履歴] タブには、次の項目があります。

[履歴] 選択したメッセージの履歴が表示されます。

参照

- ◆ 「[ml_qa_status_history](#)」 『Mobile Link - サーバ管理』

[サーバ・メッセージ・ストア] プロパティ・シート : [一般] タブ

[サーバ・メッセージ・ストア] プロパティ・シートの [一般] タブには、次の項目があります。

[名前] サーバ・ストアの名前が表示されます。

[タイプ] オブジェクトのタイプが表示されます。

[製品名] このデータベース・アプリケーションの名前が表示されます。

[バージョン] このデータベース・アプリケーションのバージョンが表示されます。

[コンピュータ] コンピュータの名前が表示されます。

参照

- ◆ 「[サーバ・メッセージ・ストアの設定](#)」 『QAnywhere』
- ◆ 「[サーバ管理要求の概要](#)」 『QAnywhere』

[サーバ・メッセージ・ストア] プロパティ・シート : [サーバ・プロパティ] タブ

[サーバ・メッセージ・ストア] プロパティ・シートの [サーバ・プロパティ] タブには、次の項目があります。

[ルールの評価時間 (ミリ秒)] メッセージの転送ルールと持続性ルールを含む、ルールの評価時間 (ミリ秒単位) を設定します。一般に、ルールは、サーバ・ストアへのメッセージの転送中に動的に評価されるため、ルール評価時間は、時間の影響を大きく受けるルールのみが対象です。デフォルト値は 60000 (1 分) です。

これは `ianywhere.qa.server.autoRulesEvaluationPeriod` サーバ・プロパティに対応します。

[スケジュールの日付形式] サーバ側の転送ルールで使用する日付フォーマットを設定します。デフォルトの日付フォーマットは `yyyy-MM-dd` です。

[スケジュールの時間形式] サーバ側の転送ルールで使用する時間フォーマットを設定します。デフォルトの時間フォーマットは `HH:mm:ss` です。

これは `ianywhere.qa.server.scheduleTimeFormat` サーバ・プロパティに対応します。

[管理要求アドレス] サーバ管理要求の送信先アドレスのエージェント部分を設定します。このプロパティが設定されていない場合、この値は `ianywhere.server` になります。

[サーバ管理パスワード] クリックして、サーバ管理要求の認証用パスワードを設定します。このプロパティが設定されていない場合、パスワードは `QAnywhere` です。

これは `ianywhere.qa.server.password.e` サーバ・プロパティに対応します。

[ロギング・レベル] メッセージ機能のログ・レベルを設定します。スライダを上 (高) から下 (低) に移動すると、エラーのロギング・レベルを設定できます。

- ◆ **(低)** メッセージ・エラーのみを記録することを指定します。これは `ianywhere.qa.server.logLevel` サーバ・プロパティの値 1 に対応します。
- ◆ - さらに警告も記録することを指定します。これは `ianywhere.qa.server.logLevel` サーバ・プロパティの値 2 に対応します。これはデフォルトです。
- ◆ - さらに情報メッセージも記録することを指定します。これは `ianywhere.qa.server.logLevel` サーバ・プロパティの値 3 に対応します。
- ◆ **(高)** Mobile Link サーバで転送される各 QAnywhere メッセージの詳細を含めて、さらに詳細な情報メッセージも記録することを指定します。これは `ianywhere.qa.server.logLevel` サーバ・プロパティの値 4 に対応します。

[圧縮レベル] QAnywhere コネクタが受信する各メッセージに適用する圧縮量を設定します。[圧縮を有効にする] をクリックし、スライダを左 (低) から右 (高) に移動すると、圧縮レベルを設定できます。圧縮は 0 ～ 9 の範囲の整数で表されます。0 は圧縮がない状態で、9 は最も圧縮された状態です。デフォルトは 0 です。

これは `ianywhere.qa.compressionLevel` サーバ・プロパティに対応します。「サーバ・プロパティ」『QAnywhere』を参照してください。

[デフォルトに戻す] [デフォルトに戻す] をクリックすると、このタブのユーザ設定がデフォルト値に戻ります。

参照

- ◆ 「サーバ・プロパティ」 『QAnywhere』
- ◆ 「Sybase Central でのサーバ・プロパティの設定」 『QAnywhere』

[サーバ・メッセージ・ストア] プロパティ・シート : [クライアント・プロパティ] タブ

[サーバ・メッセージ・ストア] プロパティ・シートの [クライアント・プロパティ] タブには、次の項目があります。

[クライアント] ドロップダウン・リストからクライアントを選択し、[適用] をクリックすると、選択したクライアントのプロパティだけが表示されます。

[プロパティ名] 特定のプロパティの名前を入力し、[適用] をクリックすると、指定したプロパティだけが表示されます。また、プロパティ名の最初の数文字を入力し、[適用] をクリックすると、入力した文字から始まるプロパティがすべて表示されます。

[システム・プロパティの表示] システム・プロパティを表示するかどうかを指定します。ボックスにチェック・マークを付けると、システム・プロパティは表示されます。チェックボックスをオフにすると、システム・プロパティは表示されません。

- ◆ **[適用]** クライアント、プロパティ名、システム・プロパティに選択したオプションが適用され、該当するプロパティが [プロパティ] リストに表示されます。
- ◆ **[リセット]** フィルタの条件をリセットします。

[プロパティ] リスト サーバ・ストアのプロパティのクライアント、名前、値がリストされます。

- ◆ **[新規]** [新規] をクリックし、名前と値を入力すると、新しいプロパティを追加できます。
- ◆ **[編集]** リストからプロパティを選択し、[編集] をクリックし、新しい値を入力すると、既存のプロパティの値を編集できます。
- ◆ **[削除]** リストからプロパティを選択し、[削除] をクリックし、削除することを確認すると、プロパティを削除できます。

[サーバ・メッセージ・ストア] プロパティ・シート : [転送ルール] タブ

サーバ側の転送ルールは、サーバからクライアントに転送されるメッセージの動作を管理します。サーバ側の転送ルールは Mobile Link サーバによって処理されます。これらのルールは、Push 通知を使用している場合も使用していない場合も適用されます。

[サーバ・メッセージ・ストア] プロパティ・シートの [転送ルール] タブには、次の項目があります。

[デフォルトの転送ルールをカスタマイズする] カスタマイズした転送ルールを使用するかどうかを示します。

[転送ルール] リスト サーバ・ストアのカスタマイズした転送ルールがリストされます。新しいルールを追加するか、既存のルールの編集や削除ができます。

- ◆ **[新規]** [新規] をクリックすると、新しい転送ルールを追加できます。[ルール・エディタ] ダイアログが表示されます。これは [デフォルトの転送ルールをカスタマイズする] を選択した場合にのみ使用できます。
- ◆ **[編集]** リストからルールを選択し、[編集] をクリックすると、既存の転送ルールを編集できます。[ルール・エディタ] ダイアログが表示されます。これは [デフォルトの転送ルールをカスタマイズする] を選択し、1 つ以上の転送ルールを選択している場合にのみ使用できます。
- ◆ **[削除]** リストからルールを選択し、[削除] をクリックし、削除することを確認すると、既存のルールを削除できます。

参照

- ◆ 「サーバ側の転送ルール」 『QAnywhere』

[サーバ・メッセージ・ストア] プロパティ・シート : [削除ルール] タブ

デフォルトでは、メッセージのステータスが受信済み、失効、キャンセル済み、配信不可のいずれかで、最終ステータスがメッセージの発信者に返送済みである場合に、クライアント・メッセージ・ストアからメッセージが削除されます。しかし、監査などのためにメッセージを通常よりも長く残したい場合があります。サーバ側の削除ルールは、サーバ・メッセージ・ストアのすべてのメッセージに適用されます。

[サーバ・メッセージ・ストア] プロパティ・シートの [削除ルール] タブには、次の項目があります。

[デフォルトの削除ルールをカスタマイズする] カスタムの削除ルールを有効にするかどうかを指定します。このオプションを選択すると、カスタムの削除ルールが有効になります。チェックボックスをオフにすると、カスタムの削除ルールを使用できません。

[削除ルール] リスト サーバ・ストアのカスタマイズした削除ルールがリストされます。新しいルールを追加するか、既存のルールの編集や削除ができます。

- ◆ **[新規]** [新規] をクリックすると、新しい削除ルールを追加できます。[ルール・エディタ] ダイアログが表示されます。これは [デフォルトの削除ルールをカスタマイズする] を選択した場合にのみ使用できます。
- ◆ **[編集]** リストからルールを選択し、[編集] をクリックすると、既存の削除ルールを編集できます。[ルール・エディタ] ダイアログが表示されます。これは [デフォルトの削除ルールをカスタマイズする] を選択し、1 つ以上の削除ルールを選択している場合にのみ使用できます。
- ◆ **[削除]** リストからルールを選択し、[削除] をクリックし、削除することを確認すると、削除ルールを削除できます。

参照

- ◆ 「サーバ側の削除ルール」 [『QAnywhere』](#)

QAnywhere のダイアログ・ボックス

QAnywhere プラグインで変更可能な設定のほとんどは、ダイアログ・ボックス上に表示されます。それらのダイアログには、[ファイル]メニューまたは[ツール]メニューからアクセスできます。Sybase Central に他のプラグインがインストールされていると、それらのプラグインによる追加のメニュー項目が表示されることがあります。

[ファイル]メニューには、Sybase Central のメイン・ウィンドウ内に表示されるオブジェクトに関するコマンドがあります。表示されるメニュー項目は、選択されているオブジェクトによって変わります。たとえば、[エージェント・ファイル]を選択すると、[ファイル]メニューにはエージェント・ファイルに関するコマンドやオプションのメニュー項目が表示されます。これらのメニュー項目はすべて、オブジェクトを右クリックすると表示されるポップアップ・メニューからもアクセスできます。

QAnywhere では、プロパティ・シートを使用してオブジェクトの設定を変更できます。これらのプロパティ・シートは、設定可能なプロパティがあるオブジェクトを選択すると、[ファイル]メニュー(またはポップアップ・メニュー)に表示されます。

[ツール]メニューには、接続、切断、プラグインの管理、Sybase Central のオプションに関するコマンドがあります。これらのメニュー項目は、メイン・ウィンドウ内で選択されているオブジェクトに関係なく、常に表示されます。

「QAnywhere プラグインのプロパティ・シート」 240 ページを参照してください。

[エージェント設定] ダイアログ : [一般] タブ

[エージェント設定] ダイアログの [一般] タブには、次の項目があります。

[クライアント・メッセージ・ストア ID] クライアント・メッセージ・ストアを識別するユニークな ID を入力します。クライアント・メッセージ・ストア ID は Mobile Link のリモート ID です。

「-id オプション」 『QAnywhere』 を参照してください。

[エージェント・ウィンドウの状態] エージェント・ウィンドウを表示するか、非表示にするか、最小化するかを選択します。デフォルトは [表示] です。

[インクリメンタル・アップロード・サイズ] 各アップロード部分のサイズをキロバイト単位で入力します。このオプションを指定すると、アップロードは 1 つ以上の部分に分けて Mobile Link に送信されます。オプションが設定されていない場合、アップロードは 1 つにまとめて送信されます。このオプションの値は、大まかに各アップロード部分のサイズを指定します。Increment 拡張オプションは、スクリプト化されたアップロードやトランザクション単位のアップロードでは使用できません。

「Increment (inc) 拡張オプション」 『Mobile Link - クライアント管理』 を参照してください。

[増分ダウンロードを次のサイズに制限する] 各ダウンロード部分のサイズをキロバイト単位で指定します。このオプションを指定すると、ダウンロードは 1 つ以上の部分に分けてサーバに送信されます。このオプションが設定されていない場合、ダウンロードは 1 つにまとめて送信されません。このオプションの値は、大まかに各ダウンロード部分のサイズを指定します。

「-idl オプション」 『QAnywhere』を参照してください。

[ポリシー] メッセージを送受信するタイミングを決定するポリシーのタイプを選択します。これは qaagent -policy オプションに対応します。

「-policy オプション」 『QAnywhere』を参照してください。

ポリシーには、次のいずれかの値を指定できます。

- ◆ **[自動]** このオプションを選択すると、Push 通知を受信したときにメッセージを受信します。
- ◆ **[スケジュール設定]** このオプションを選択すると、指定する間隔でメッセージが送受信されます。デフォルトは 10 秒です。
- ◆ **[オン・デマンド]** このオプションを選択すると、QAnywhere のクライアント・アプリケーションで適切なメソッドが呼び出されたときにのみメッセージが送信されます。
- ◆ **[カスタム]** このオプションを選択し、クライアントの転送ルール・ファイルのファイル名とロケーションを指定すると、このファイルに従ってメッセージが送受信されます。
- ◆ **[ルール・ファイル]** 使用するルール・ファイルの名前を指定するか、[参照] をクリックしてファイルを選択します。
- ◆ **[ルールの編集]** ルールのダイアログが表示され、選択したルール・ファイルを編集できます。このボタンは、ルール・ファイルを指定すると使用可能になります。
- ◆ **[新しいルール]** ルールのダイアログが表示され、新しいルール・ファイルを作成できます。

参照

- ◆ 「QAnywhere Agent」 『QAnywhere』

[エージェント設定] ダイアログ : [メッセージ・ストア] タブ

[エージェント設定] ダイアログの [メッセージ・ストア] タブには、次の項目があります。

[ユーザ ID] クライアント・メッセージ・ストアに接続するためのデータベース・ユーザ ID を入力します。デフォルトは ml_qa_user です。

[パスワード] データベース・ユーザ ID のパスワードを入力します。デフォルトは qanywhere です。

[ODBC データ・ソース] ODBC データ・ソースの名前を入力するか、[参照] をクリックして選択します。

[データベース・ファイル] 接続するデータベース・ファイルの名前を入力するか、[参照] をクリックしてデータベース・ファイルを選択します。

[暗号化キー] クライアント・メッセージ・ストアを強力な暗号化を使用して暗号化している場合は、データベースへのアクセスに必要な暗号化キーを指定します。

[データベース名] クライアント・メッセージ・ストアがすでに実行中の場合は、データベース・ファイルではなくデータベース名を指定してクライアント・メッセージ・ストアに接続できます。

[サーバ名] すでに実行中のデータベース・サーバを使用する場合にサーバの名前を入力します。

[その他] 追加接続情報がある場合に入力します。

[テスト接続] [テスト接続] をクリックして、入力した接続情報をテストします。[テスト接続] ダイアログが表示されます。

参照

- ◆ 「**-c オプション**」 『QAnywhere』
- ◆ 「**QAnywhere Agent の実行**」 『QAnywhere』
- ◆ 「**QAnywhere Agent**」 『QAnywhere』

[エージェント設定] ダイアログ : [サーバ] タブ

[エージェント設定] ダイアログの [サーバ] タブには、次の項目があります。

[サーバ]

[サーバ] リスト Agent がメッセージを交換する Mobile Link サーバがリストされます。

- ◆ **[次のサーバを使用する]** 「**-x オプション**」 『QAnywhere』 を参照してください。
- ◆ **[新規]** [新規] をクリックすると、別のサーバを追加できます。[Mobile Link サーバのプロパティ] ダイアログが表示されます。
- ◆ **[編集]** リストからサーバを選択し、[編集] をクリックすると、既存のサーバのプロパティを編集できます。[Mobile Link サーバのプロパティ] ダイアログが表示されます。
- ◆ **[削除]** リストからサーバを選択し、[削除] をクリックすると、サーバを削除できます。
- ◆ **上矢印** 上矢印をクリックすると、選択したサーバがリスト内を上に移動します。Agent では、リスト内の最初のサーバを使用しようとします。このサーバを使用できなかった場合、リスト内の次のサーバを使用しようとします。サーバが使用できるまでリスト内のサーバが順番に試されます。
- ◆ **下矢印** 下矢印をクリックすると、選択したサーバがリスト内を下に移動します。Agent では、リスト内の最初のサーバを使用しようとします。このサーバを使用できなかった場合、リスト内の次のサーバを使用しようとします。サーバが使用できるまでリスト内のサーバが順番に試されます。
- ◆ **[フェールオーバー・リトライ・カウント]** QAnywhere Agent で、代替サーバを試行する前に Mobile Link のプライマリ・サーバへの接続を再試行する回数を入力します。
- ◆ **[フェールオーバー遅延]** プライマリ・サーバを再試行してから、代替サーバを使用しようとするまでの時間を秒単位で入力します。

- ◆ **[サーバはメッセージ・ストアにリストされる]** Mobile Link サーバとの通信に使用するネットワーク・プロトコルとプロトコル・オプションを指定することを選択します。「[-xd オプション](#)」『QAnywhere』を参照してください。

[ID]

[ユーザ名] サーバへのアクセスに使用するユーザ名を入力します。

[パスワード] サーバのパスワードを入力します。

[オプション]

[メッセージの転送に永続的接続を使用する] メッセージの転送に永続的接続を使用するかどうかを指定します。このオプションを選択すると、永続的接続が有効になります。チェックボックスをオフにすると、永続的接続は使用されません。

「[-pc オプション](#)」『QAnywhere』を参照してください。

[サーバからの送信の通知を受信する] このオプションを選択すると、Push 通知が受信されます。このオプションを選択すると、次の追加オプションが使用可能になります。

- ◆ **[次のポートで受信]** Listener が Push 通知を受信するポートを入力します。デフォルトは 5001 です。

「[-lp オプション](#)」『QAnywhere』を参照してください。

- ◆ **[送信の通知に永続的接続を使用する]** Mobile Link サーバが、出力 UDP パケットをブロックするファイアウォールの中にある場合はこのオプションを選択します。これは、[次のポートで受信] を選択した場合にのみ使用できます。

「[-push オプション](#)」『QAnywhere』を参照してください。

参照

- ◆ 「[QAnywhere Agent の実行](#)」『QAnywhere』
- ◆ 「[qaagent 構文](#)」『QAnywhere』

[エージェント設定] ダイアログ : [ロギング] タブ

[エージェント設定] ダイアログの [ロギング] タブには、次の項目があります。

[エージェント・ロギングを有効にする] このオプションを選択すると、Agent ロギングが有効になります。このチェックボックスをオフにすると、Agent ロギングは有効になりません。[ロギング] タブの他のオプションは、[エージェント・ロギングを有効にする] を選択した場合にのみ使用できます。

- ◆ **[ログを取るイベント]** ログを取るイベントを次の中から 1 つまたは複数選択します。チェックボックスをオフにすると、そのイベントはログが取られません。冗長レベルを上げ過ぎるとパフォーマンスに影響する可能性があるため、通常は冗長レベルを上げるのは開発段階だけにしてください。

- ◆ [メッセージの転送]

- ◆ [送信の通知]
- ◆ [ルールの実行]
- ◆ [同期クライアント]
- ◆ [ネットワーク・ステータスの変更]
- ◆ [リスナ・イベント]

「-v オプション」 [『QAnywhere』](#) を参照してください。

[ログの記録先] ログ情報を格納するファイルのパスと名前を入力するか、[参照] をクリックしてファイルを選択し、[開く] をクリックします。ファイルがすでに存在する場合は、ファイルの末尾に新しいログ情報が追加されます。

「-o オプション」 [『QAnywhere』](#) を参照してください。

[起動時にファイルの内容を消去する] このオプションを選択すると、ログ・ファイルの内容が起動時に消去されます。このチェックボックスをオフにすると、ファイルの内容は起動時に消去されません。

「-ot オプション」 [『QAnywhere』](#) を参照してください。

[ログ・ファイルのサイズを無制限にする] ログ・ファイルのサイズを制限しない場合は、このオプションを選択します。

[ログ・ファイルのサイズを制限する] ログ・ファイルのサイズを、事前に定義したサイズに制限する場合は、このオプションを選択します。

◆ **[サイズが制限値に達したら新しいログ・ファイルを開始]** 新しいログ・ファイルを開始する前に、ログ・ファイルが達することができるサイズをキロバイト単位で入力します。デフォルトは 64 KB です。このオプションは、[ログ・ファイルのサイズを制限する] を選択した場合にのみ使用できます。

◆ **[古いログ・ファイルを 1 つ保持]** このオプションを選択すると、古いログ・ファイルが 1 つ保持されます。最新のログ・ファイルが保持されます。

「-on オプション」 [『QAnywhere』](#) を参照してください。

◆ **[古いログ・ファイルをすべて保持]** このオプションを選択すると、古いログ・ファイルがすべて保持されます。

「-os オプション」 [『QAnywhere』](#) を参照してください。

参照

- ◆ 「-o オプション」 [『QAnywhere』](#)
- ◆ 「-ot オプション」 [『QAnywhere』](#)
- ◆ 「-v オプション」 [『QAnywhere』](#)

[メンバ] ダイアログ

[メンバ] ダイアログには、次の項目があります。

[アドレス] [アドレス] ウィンドウ枠内のコンポーネントを使用すると、新しいメンバのアドレス情報を指定できます。

- ◆ **[クライアント名]** クライアント名を入力します。
- ◆ **[メッセージの送信先キューを指定してください]** 次のいずれかのオプションを選択して、メッセージを送信するキューを指定します。
 - ◆ **[元のメッセージで指定したキュー]** このオプションを選択すると、元のメッセージで指定されているキューが使用されます。
 - ◆ **[キューを指定]** このオプションを選択し、使用するキューの名前を入力します。

[条件] メンバに定義されている条件がある場合に表示されます。

- ◆ **[メッセージ変数]** リストからメッセージ変数を選択し、[条件] ウィンドウ枠に追加します。
- ◆ **[ステータス定数]** リストからステータス定数を選択し、[条件] ウィンドウ枠に追加します。

参照

- ◆ 「[QAMessage のメンバ](#)」 『[QAnywhere](#)』

[Mobile Link] ダイアログ

[Mobile Link] ダイアログには、次の項目があります。

[ネットワーク] 次のネットワーク・オプションを使用できます。

- ◆ **[ホスト]** Mobile Link サーバを実行しているホストの名前を入力します。
- ◆ **[ポート]** Mobile Link サーバを実行しているホストのポート番号を入力します。

[プロトコル・パラメータ] 次のプロトコル・パラメータを使用できます。

- ◆ **[プロトコル]** ドロップダウン・リストからネットワーク・プロトコルを選択します。次のいずれかを選択できます。

- ◆ [TCP/IP]
- ◆ [HTTP]
- ◆ [HTTPS]
- ◆ [TLS]

プロトコルに [HTTPS] または [TLS] を選択すると、次の追加オプションが使用可能になります。

- ◆ **[暗号]** [RSA] または [ECC] を選択します。
 - ◆ **[FIPS 準拠のアルゴリズムを使用]** [RSA] を選択すると、[FIPS 準拠のアルゴリズムを使用] オプションが使用可能になります。このオプションを選択すると、FIPS 準拠のアルゴ

リズムが有効になります。このチェックボックスをオフにすると、FIPS 準拠のアルゴリズムは使用されません。

- ◆ **[証明書ファイル]** 使用する証明書ファイルの名前とロケーションを入力するか、[参照] をクリックし、証明書ファイルを選択してから [開く] をクリックします。
- ◆ **[追加プロトコル・パラメータ]** 追加のセキュリティ・パラメータを1つまたは複数入力します。複数のパラメータを入力する場合は、セミコロンで区切ります。

ルールのダイアログ : [削除ルール] タブ

ルールのダイアログの [削除ルール] タブには、次の項目があります。

ルール 既存の削除ルールのスケジュール・タイプと条件が表示されます。

- ◆ **[新規]** [新規] をクリックすると、新しい削除ルールを追加できます。[ルール・エディタ] ダイアログが表示されます。
- ◆ **[編集]** リストからルールを選択し、[編集] をクリックすると、既存の削除ルールを編集できます。[ルール・エディタ] ダイアログが表示されます。
- ◆ **[削除]** リストからルールを選択し、[削除] をクリックし、削除することを確認すると、削除ルールを削除できます。

参照

- ◆ 「メッセージの削除ルール」 『QAnywhere』

ルールのダイアログ : [転送ルール] タブ

ルールのダイアログの [転送ルール] タブには、次の項目があります。

ルール 既存の転送ルールのスケジュール・タイプと条件が表示されます。

- ◆ **[新規]** [新規] をクリックすると、新しい転送ルールを追加できます。[ルール・エディタ] ダイアログが表示されます。
- ◆ **[編集]** リストからルールを選択し、[編集] をクリックすると、既存の転送ルールを編集できます。[ルール・エディタ] ダイアログが表示されます。
- ◆ **[削除]** リストからルールを選択し、[削除] をクリックし、削除することを確認すると、転送ルールを削除できます。

参照

- ◆ 「メッセージ転送ルール」 『QAnywhere』

[ルール・エディタ] ダイアログ

[ルール・エディタ] ダイアログには、次の項目があります。

[条件] リスト内の条件を編集するか、条件リストの下にあるボタンを使用して新しい条件を追加します。スケジュールされた時刻になると、各メッセージに条件が適用されます。メッセージが条件を満たしていれば、送信されます。

- ◆ **[メッセージ変数]** 定義済みメッセージ変数をリストから 1 つ選択します。そのメッセージ変数が条件リストに挿入されます。「[ルール・エンジンで定義される変数](#)」『QAnywhere』を参照してください。
- ◆ **[定数]** 定義済み定数をリストから 1 つ選択します。その定数が条件リストに挿入されます。

[スケジュール・タイプ] 次のいずれかのオプションを選択して、メッセージ転送を行うタイミングを決定するスケジュール・ポリシーを指定します。デフォルトでは、[自動] が選択されています。

- ◆ **[自動]** 自動ポリシーは、クライアント・メッセージ・ストアとサーバ・メッセージ・ストアをできるかぎり最新の状態に維持します。「[自動ポリシー](#)」『QAnywhere』を参照してください。
- ◆ **[カスタム]** カスタム・ポリシーを使用すると、メッセージ転送のタイミングと、そのメッセージ転送で送信するメッセージを定義できます。カスタム・ポリシーの内容は、ルール・セットを使用して定義し、ファイルに保存します。[編集] をクリックし、メッセージ転送のタイミングを指定し、[OK] をクリックします。「[カスタム・ポリシー](#)」『QAnywhere』を参照してください。

参照

- ◆ 「[QAnywhere 転送ルールと削除ルール](#)」 『QAnywhere』
- ◆ 「[-policy オプション](#)」 『QAnywhere』
- ◆ 「[クライアントにメッセージを転送するタイミングの決定](#)」 『QAnywhere』

第 7 章

Ultra Light プラグインのヘルプ

目次

Ultra Light プラグインのプロパティ・シートの概要	262
ダイアログ・ボックスの概要	272

Ultra Light プラグインのプロパティ・シートの概要

Ultra Light プラグインには、オブジェクトのプロパティを設定するためのプロパティ・シートが各種用意されています。

次の項からは、Ultra Light プラグインのプロパティ・シートについて詳しく説明します。各プロパティ・シートは、オブジェクトを選択すると、[ファイル]メニューのコマンドとして表示されます。オブジェクトを右クリックして、ポップアップ・メニューから表示することもできます。

[アークティクル] プロパティ・シート : [一般] タブ

[アークティクル] プロパティ・シートの [一般] タブには、次の項目があります。

[名前] アークティクルに含まれるテーブルの名前が表示されます。

[タイプ] オブジェクトのタイプが表示されます。

[パブリケーション] アークティクルが含まれるパブリケーションが表示されます。

参照

- ◆ 「Ultra Light のパブリケーションの操作」 『Ultra Light - データベース管理とリファレンス』

[アークティクル] プロパティ・シート : [WHERE 句] タブ

Ultra Light アプリケーションでは、WHERE 句を指定することでロー・サブセットを使用できます。ただし、HotSync 同期を管理する Ultra Light パブリケーション内のアークティクルでは、WHERE 句を使用できません。

[アークティクル] プロパティ・シートの [WHERE 句] タブには、次の項目があります。

[このアークティクルには次の WHERE 句があります。] テキスト・ボックスで WHERE 句を編集して、アークティクルに含まれるテーブル・ローを制限できます。WHERE キーワードを含める必要はありません。

たとえば、次のように入力すると、給与が \$50000 を上回るローのみが含まれます。

Salary > 50000

参照

- ◆ 「Ultra Light のパブリケーションの操作」 『Ultra Light - データベース管理とリファレンス』

[カラム] プロパティ・シート : [一般] タブ

この [カラム] プロパティ・シートには、特定のテーブルに属するカラムに関する情報が表示されます。

[カラム] プロパティ・シートの [一般] タブには、次の項目があります。

[名前] カラムの名前が表示されます。テキスト・ボックスでカラム名を変更できます。

[タイプ] オブジェクトのタイプが表示されます。

[テーブル] カラムが属するテーブルの名前が表示されます。

参照

- ◆ 「Ultra Light のテーブルとカラムの操作」 『Ultra Light - データベース管理とリファレンス』
- ◆ 「Ultra Light テーブルへのカラムの追加」 『Ultra Light - データベース管理とリファレンス』

[カラム] プロパティ・シート : [データ型] タブ

[カラム] プロパティ・シートの [データ型] タブには、次の項目があります。

[組み込みタイプ] 常に選択されているこのオプションによって、カラムの定義済みデータ型をドロップダウン・リストから選択できます。定義済みデータ型の例には、整数、文字列、日付などがあります。これらのデータ型の中には、サイズか位取りまたはその両方を指定できるものもあります。

Ultra Light の組み込みのデータ型 VARCHAR は、SQL Anywhere の CHAR と VARCHAR の両方と同じです。

- ◆ **[サイズ]** 文字列カラムの場合は長さ、または数値カラムの場合は 10 進法計算の結果における小数点の左右の合計桁数を指定します。数値カラムのサイズは precision 値とも呼ばれます。

precision 値の詳細については、「Ultra Light precision プロパティ」 『Ultra Light - データベース管理とリファレンス』を参照してください。

- ◆ **[位取り]** 計算結果が最大 precision 値にトランケートされる場合の、小数点以下の最小桁数を指定します。

「Ultra Light のデータ型」 『Ultra Light - データベース管理とリファレンス』を参照してください。

参照

- ◆ 「Ultra Light のテーブルとカラムの操作」 『Ultra Light - データベース管理とリファレンス』
- ◆ 「Ultra Light テーブルへのカラムの追加」 『Ultra Light - データベース管理とリファレンス』

[カラム] プロパティ・シート : [値] タブ

[カラム] プロパティ・シートの [値] タブには、次の項目があります。

[デフォルト値なし] カラムにデフォルト値が必要ない場合は、このオプションを選択します。

[デフォルト値] カラムにデフォルト値が必要である場合は、このオプションを選択します。[デフォルト値] オプションを選択すると、[ユーザ定義] オプションと [システム定義] オプションが有効になります。

- ◆ **[ユーザ定義]** デフォルト値にユーザ定義の値 (文字列、数字、またはその他の式) を入力します。
- ◆ **[リテラル文字列]** カラムのデフォルト値をリテラル文字列として扱うかどうかを指定します。このオプションは、文字カラムと文字ベース・タイプのドメインの場合はデフォルトで選択されています。このオプションを選択すると、デフォルトのテキストを一重引用符で囲んだり、文字列に埋め込んだ引用符や円記号をエスケープする必要はありません。

このオプションをクリアすると、引用符やエスケープの自動処理がオフになり、指定したデフォルト値のテキストがそのまま Ultra Light に渡されます。
- ◆ **[システム定義]** デフォルト値に定義済みの値 (オートインクリメントなど) を選択できます。値はドロップダウン・リストから選択します。カラムがドメインに基づいている場合、ドメインのデフォルト値 (存在する場合) を維持するか、またはカラムの値を優先させることができます。
- ◆ **[分割サイズ]** システム定義値として [グローバル・オートインクリメント] を選択した場合は、分割サイズも指定できます。

グローバル・オートインクリメントでは、新しく作成されたローに、それまでのカラムの最大値に 1 を加えた値を割り当てます。分割サイズを指定すると、グローバル・オートインクリメントで使用できる最大値が制限されます。分割サイズには任意の正の整数を入力できます。一般には、増分が十分に行えるような値を選択してください。

次の項を参照してください。

- ◆ [「Ultra Light での GLOBAL AUTOINCREMENT の使用」](#) 『Mobile Link - クライアント管理』
- ◆ [「Ultra Light CREATE TABLE 文」](#) 『Ultra Light - データベース管理とリファレンス』

参照

- ◆ [「Ultra Light のテーブルとカラムの操作」](#) 『Ultra Light - データベース管理とリファレンス』
- ◆ [「Ultra Light テーブルへのカラムの追加」](#) 『Ultra Light - データベース管理とリファレンス』

[データベース] プロパティ・シート : [一般] タブ

[データベース] プロパティ・シートの [一般] タブには、次の項目があります。

このタブにリストされるデータベースのプロパティは、データベースを再作成しないかぎり変更できません。

データベースの再構築の詳細については、「[Ultra Light データベースの作成](#)」 『Ultra Light - データベース管理とリファレンス』を参照してください。

[名前] このデータベースの名前が表示されます。

[タイプ] オブジェクトのタイプが表示されます。

[データベース・ファイル] データベースのルート・データベース・ファイルが表示されます。

[ページ・サイズ] データベースのページ・サイズがバイト単位で表示されます。

[ユーザ] このデータベースに接続しているユーザのユーザ ID が表示されます。

[接続名] このデータベースに接続しているユーザの接続名が表示されます。

[暗号化タイプ] データベースが暗号化されているかどうかと、暗号化されている場合はそのタイプ ([単純]、[AES]、[AES FIPS] のいずれか) が表示されます。データベースで暗号化が有効になっていない場合は、[なし] が表示されます。

[大文字と小文字を区別] データベースで大文字と小文字が区別されるかどうかを示します。このプロパティは、データベースのデータに適用されます。テーブル名、カラム名、その他の識別子には適用されません。パスワードについては、常に大文字と小文字が区別されます。

[照合] データベースに使用されている照合のタイプが表示されます。

[文字セット] データベースに使用されている文字セットが表示されます。

参照

- ◆ 「Ultra Light データベースの作成」 『Ultra Light - データベース管理とリファレンス』
- ◆ 「Ultra Light データベース設定のリファレンス」 『Ultra Light - データベース管理とリファレンス』

[データベース] プロパティ・シート : [詳細情報] タブ

[データベース] プロパティ・シートの [詳細情報] タブには、次の項目があります。

[データベースのプロパティ] リスト データベースのプロパティの名前と値がリストされます。**[再表示]** をクリックすると値が更新されます。**[F5]** キーを押しても、値を再表示できます。

- ◆ **[再表示]** クリックすると、[データベースのプロパティ] リストの値が更新されます。

[説明] 選択されているプロパティに関する説明です。

参照

- ◆ 「Ultra Light データベースの作成」 『Ultra Light - データベース管理とリファレンス』
- ◆ 「Ultra Light データベース設定のリファレンス」 『Ultra Light - データベース管理とリファレンス』

[外部キー] プロパティ・シート : [一般] タブ

[外部キー] プロパティ・シートの [一般] タブには、次の項目があります。

[名前] 外部キーの名前が表示されます。このフィールドで外部キーの名前を編集できます。

[タイプ] オブジェクトのタイプが表示されます。

[外部テーブル] 外部キーが適用されるテーブルの名前が表示されます。

[プライマリ制約] 外部キーが参照するプライマリ・キーまたは一意性制約の名前が表示され
ます。

[プライマリ制約タイプ] 外部キーが参照する制約のタイプが表示されます。これはプライマリ・
キーまたは一意性制約のいずれかです。

[プライマリ・テーブル] この外部キーに関連付けられたプライマリ・キーまたは一意性制約を含
むテーブルが表示されます。

[NULL 入力可] 外部キー・カラムに NULL 値を入力できるかどうかを決定します。このオプショ
ンを使用するには、すべての外部キー・カラムの [NULL 入力可] を [はい] に設定してください。

[コミット時にチェック] データベースの COMMIT が完了するまで待機してからこの外部キーの
整合性をチェックし、wait_for_commit データベース・オプションの設定を上書きするようにし
ます。

[最大ハッシュ・サイズ] 最大ハッシュ・サイズとして 0 ～ 32 の範囲の整数値が表示されます。
デフォルトの最大ハッシュ・サイズは、データベース作成時のデータベース・プロパティの最大
ハッシュ・サイズの値 (デフォルト値は 4) です。

「Ultra Light max_hash_size プロパティ」 『Ultra Light - データベース管理とリファレンス』を参
照してください。

参照

- ◆ 「Ultra Light のインデックスの操作」 『Ultra Light - データベース管理とリファレンス』
- ◆ 「sysindex システム・テーブル」 『Ultra Light - データベース管理とリファレンス』
- ◆ 「sysixcol システム・テーブル」 『Ultra Light - データベース管理とリファレンス』
- ◆ 「Ultra Light のテーブルとカラムの操作」 『Ultra Light - データベース管理とリファレンス』

[外部キー] プロパティ・シート : [カラム] タブ

[外部キー] プロパティ・シートの [カラム] タブには、次の項目があります。

[カラム] リスト 外部テーブルとプライマリ・テーブルのカラムが表示されます。

- ◆ **[詳細]** [カラムの詳細] ダイアログが表示され、選択されたカラムのプロパティの概要が表示
されます。

参照

- ◆ 「Ultra Light のインデックスの操作」 『Ultra Light - データベース管理とリファレンス』
- ◆ 「Ultra Light のテーブルとカラムの操作」 『Ultra Light - データベース管理とリファレンス』

[インデックス] プロパティ・シート : [一般] タブ

[インデックス] プロパティ・シートの [一般] タブには、次の項目があります。

[名前] インデックスの名前が表示されます。このフィールドでインデックスの名前を編集でき
ます。

[タイプ] オブジェクトのタイプが表示されます。オブジェクトのタイプは、外部キー・インデックス、プライマリ・キー・インデックス、一意性制約インデックス、またはインデックスのいずれかです。

[ユニーク] インデックスの値がユニークである必要があるかどうかを示されます。新しいインデックスを作成すると、ユニークな値が設定されます。

[テーブル] インデックスが関連付けられているテーブルの名前と所有者が表示されます。これはテーブルにインデックスがある場合にのみ表示されます。

[最大ハッシュ・サイズ] 最大ハッシュ・サイズとして 0 ～ 32 の範囲の整数値が表示されます。デフォルトの最大ハッシュ・サイズは、データベース作成時のデータベース・プロパティの最大ハッシュ・サイズの値 (デフォルト値は 4) です。

参照

- ◆ 「Ultra Light のインデックスの操作」 『Ultra Light - データベース管理とリファレンス』
- ◆ 「Ultra Light インデックスの追加」 『Ultra Light - データベース管理とリファレンス』

[インデックス] プロパティ・シート : [カラム] タブ

[インデックス] プロパティ・シートの [カラム] タブには、次の項目があります。

[カラム] リスト インデックスのすべてのカラムの他に、そのデータ型、シーケンス、順序 (昇順または降順) が表示されます。順序は、新しいインデックスを作成するときに設定します。

カラムは、0 から始まるユニークな数値の順にソートされます。数値の順序がインデックス内のカラムの相対的な位置を決定します。

- ◆ **[詳細]** [カラムの詳細] ダイアログが表示され、選択されたカラムのプロパティの概要が表示されます。

参照

- ◆ 「Ultra Light のインデックスの操作」 『Ultra Light - データベース管理とリファレンス』

[プライマリ・キー] プロパティ・シートまたは [一意性制約] プロパティ・シート : [一般] タブ

[プライマリ・キー] プロパティ・シートまたは [一意性制約] プロパティ・シートの [一般] タブには、次の項目があります。

[名前] プライマリ・キーまたは一意性制約の名前が表示されます。このフィールドで、一意性制約の名前を編集できます (プライマリ・キーの名前は編集できません)。

[タイプ] オブジェクトのタイプが表示されます。

[テーブル] プライマリ・キーまたは一意性制約が適用されるテーブルの名前が表示されます。

[最大ハッシュ・サイズ] 最大ハッシュ・サイズとして 0 ～ 32 の範囲の整数値が表示されます。デフォルトの最大ハッシュ・サイズは、データベース作成時のデータベース・プロパティの最大ハッシュ・サイズの値 (デフォルト値は 4) です。

参照

- ◆ 「Ultra Light CREATE TABLE 文」 『Ultra Light - データベース管理とリファレンス』
- ◆ 「Ultra Light のインデックスの操作」 『Ultra Light - データベース管理とリファレンス』

[プライマリ・キー] プロパティ・シートまたは [一意性制約] プロパティ・シート : [カラム] タブ

[プライマリ・キー] プロパティ・シートまたは [一意性制約] プロパティ・シートの [カラム] タブには、次の項目があります。

[カラム] リスト プライマリ・キーまたは一意性制約のすべてのカラムの他に、そのデータ型、シーケンス、順序 (昇順または降順) が表示されます。順序は、新しいインデックスを作成するときに設定します。

カラムは、0 から始まるユニークな数値の順にソートされます。数値の順序がインデックス内のカラムの相対的な位置を決定します。

- ◆ **[詳細]** [カラムの詳細] ダイアログが表示され、選択されたカラムのプロパティの概要が表示されます。

参照

- ◆ 「Ultra Light CREATE TABLE 文」 『Ultra Light - データベース管理とリファレンス』
- ◆ 「Ultra Light のインデックスの操作」 『Ultra Light - データベース管理とリファレンス』

[パブリケーション] プロパティ・シート : [一般] タブ

[パブリケーション] プロパティ・シートの [一般] タブには、次の項目があります。

[名前] パブリケーションの名前が表示されます。このテキスト・ボックスでパブリケーションの名前を変更できます。

[タイプ] オブジェクトのタイプが表示されます。

参照

- ◆ 「Ultra Light のパブリケーションの操作」 『Ultra Light - データベース管理とリファレンス』
- ◆ 「Ultra Light CREATE PUBLICATION 文」 『Ultra Light - データベース管理とリファレンス』
- ◆ 「Ultra Light ALTER PUBLICATION 文」 『Ultra Light - データベース管理とリファレンス』
- ◆ 「Ultra Light DROP PUBLICATION 文」 『Ultra Light - データベース管理とリファレンス』

[パブリケーション] プロパティ・シート : [アーティクル] タブ

[パブリケーション] プロパティ・シートの [アーティクル] タブには、次の項目があります。

- ◆ **[テーブル] タブ** [テーブル] タブを使用すると、同期するテーブルを選択できます。
- ◆ **[WHERE 句] タブ** [WHERE 句] タブを使用すると、WHERE 句を入力することで、選択したテーブルに入れるローを制限できます。

Ultra Light アプリケーションでは、WHERE 句を指定することでロー・サブセットを使用できます。ただし、HotSync 同期を管理する Ultra Light パブリケーション内のアーティクルでは、WHERE 句を使用できません。

各タブについては、以下で詳しく説明します。

[テーブル] タブ

[テーブル] タブを使用すると、テーブルを選択して、クライアント・データベースに入るアーティクルのリストに追加できます。

[使用可能なテーブル] リスト 現在接続しているデータベース内のすべてのユーザ・テーブルがリストされます。

[選択したテーブル] リスト パブリケーションの同期に入れるすべてのテーブルがリストされます。

- ◆ **[追加]** [使用可能なテーブル] リストで選択したテーブルを [選択したテーブル] リストに追加すると、そのテーブルがパブリケーションに入ります。
- ◆ **[削除]** [選択したテーブル] リストから選択したテーブルを削除すると、そのテーブルはパブリケーションから除外されます。

[WHERE 句] タブ

Ultra Light アプリケーションでは、WHERE 句を指定することでロー・サブセットを使用できます。ただし、HotSync 同期を管理する Ultra Light パブリケーション内のアーティクルでは、WHERE 句を使用できません。

[WHERE 句] タブを使用すると、WHERE 句を指定して、クライアント・データベースに入れるローを制限できます。

[アーティクル] リスト パブリケーションに入っているテーブルのリストからテーブルを選択します。

[選択したアーティクルには次の WHERE 句があります] アーティクルに入れるローを制限するために、そのテーブルの WHERE 句をテキスト・ボックスに入力します。

「WHERE 句を使用して一部のローだけをパブリッシュする」 『SQL Remote』を参照してください。

参照

- ◆ 「Ultra Light のパブリケーションの操作」 『Ultra Light - データベース管理とリファレンス』
- ◆ 「Ultra Light CREATE PUBLICATION 文」 『Ultra Light - データベース管理とリファレンス』
- ◆ 「Ultra Light ALTER PUBLICATION 文」 『Ultra Light - データベース管理とリファレンス』
- ◆ 「Ultra Light DROP PUBLICATION 文」 『Ultra Light - データベース管理とリファレンス』

[テーブル] プロパティ・シート : [一般] タブ

[テーブル] プロパティ・シートの [一般] タブには、次の項目があります。

[名前] テーブルの名前が表示されます。このテキスト・ボックスでテーブルの名前を変更できます。

[タイプ] オブジェクトのタイプが表示されます。

[同期タイプ] 次のオプションを使用できます。

- ◆ **[標準]** 標準の同期を使用する場合は、このオプションを選択します。変更されたローだけが同期されます。
- ◆ **[常時]** 同期を継続して実行する場合は、このオプションを選択します。すべてのローが同期されます。[常時]と指定したテーブルは、名前にサフィックス **allsync** が追加されます。「[allsync と nosync の各サフィックスの使用](#)」『Ultra Light - データベース管理とリファレンス』を参照してください。
- ◆ **[同期しない]** 同期を実行しない場合は、このオプションを選択します。[同期しない]と指定したテーブルは、名前にサフィックス **nosync** が追加されます。「[allsync と nosync の各サフィックスの使用](#)」『Ultra Light - データベース管理とリファレンス』を参照してください。

[プライマリ・キー] この [プライマリ・キー] ウィンドウ枠には、次の項目があります。

- ◆ **[名前]** 選択されたテーブルのプライマリ・キーの名前が表示されます。
- ◆ **[すぐにプライマリ・キーを設定]** [プライマリ・キーの設定] ウィザードが開きます。このウィザードでは、選択されたテーブルのプライマリ・キーを指定または変更できます。
- ◆ **[カラム]** このテーブルのプライマリ・キー・カラムが表示されます。

参照

- ◆ 「[Ultra Light のテーブルとカラムの操作](#)」『Ultra Light - データベース管理とリファレンス』
- ◆ 「[Ultra Light のテーブルの作成](#)」『Ultra Light - データベース管理とリファレンス』

[テーブル] プロパティ・シート : [カラム] タブ

[テーブル] プロパティ・シートの [カラム] タブには、次の項目があります。

[カラム] リスト テーブルのすべてのカラムの他に、その型がリストされます。

[詳細] [カラムの詳細] ダイアログが表示され、カラムのプロパティの一覧が表示されます。

参照

- ◆ 「[Ultra Light のテーブルとカラムの操作](#)」『Ultra Light - データベース管理とリファレンス』

[ユーザ] プロパティ・シート : [一般] タブ

[ユーザ] プロパティ・シートの [一般] タブには、次の項目があります。

[名前] ユーザの名前が表示されます。

[タイプ] オブジェクトのタイプが表示されます。

[パスワード] ユーザのパスワードを入力します。パスワードでは大文字と小文字が区別されません。

[パスワードの確認] [パスワード] テキスト・ボックスに入力したパスワードをもう一度入力して確認します。2つのフィールドの内容は、完全に一致している必要があります。パスワードでは大文字と小文字が区別されます。

参照

- ◆ 「Ultra Light のユーザの操作」 『Ultra Light - データベース管理とリファレンス』
- ◆ 「新しい Ultra Light ユーザの追加」 『Ultra Light - データベース管理とリファレンス』
- ◆ 「既存の Ultra Light ユーザの削除」 『Ultra Light - データベース管理とリファレンス』

ダイアログ・ボックスの概要

Ultra Light プラグインで変更可能な設定のほとんどは、ダイアログ・ボックス上に表示されます。それらのダイアログには、[ファイル]メニューまたは[ツール]メニューからアクセスできます。メニュー項目は、Sybase Central のプラグインによって異なる場合があります。

[ファイル]メニューには、Sybase Central のメイン・ウィンドウ内に表示されるオブジェクトに関するコマンドがあります。表示されるメニュー項目は、選択されているオブジェクトによって変わります。たとえば、テーブルを選択すると、[ファイル]メニューにはテーブルに関するコマンドやオプションのメニュー項目が表示されます。同じように、カラムを選択すると、[ファイル]メニューにはカラムに関するオプションのメニュー項目が表示されます。これらのメニュー項目はすべて、オブジェクトを右クリックすると表示されるポップアップ・メニューからもアクセスできます。

[ツール]メニューには、接続、切断、プラグイン、Sybase Central のオプションに関するコマンドがあります。これらのメニュー項目は、メイン・ウィンドウ内で選択されているオブジェクトに関係なく、常に表示されます。

また、プロパティ・シートを使って Ultra Light の設定を変更することもできます。これらのプロパティ・シートは、設定可能なプロパティがあるオブジェクトを選択すると、[ファイル]メニュー (またはポップアップ・メニュー) に表示されます。

これらのプロパティ・シートの詳細については、「[Ultra Light プラグインのプロパティ・シートの概要](#)」 262 ページを参照してください。

[データベースのオプション] ダイアログ

[データベースのオプション] ダイアログには、次の項目があります。

[データベース] 選択されているデータベースの名前が表示されます。

[オプション] リスト データベースのオプション設定とデフォルト値が表示されます。オプションの選択が済んだら、ダイアログの横にあるボタンが使用可能になります。

- ◆ **[すぐに設定]** データベースのオプション設定を変更するには、[オプション] リストからオプションを選択して、必要な設定を [値] フィールドに入力し、[すぐに設定] をクリックします。
- ◆ **[すぐにリセット]** 変更した値をリセットするには、[オプション] リストからオプションを選択し、[すぐにリセット] をクリックします。値はデフォルト値にリセットされます。

[値] [オプション] リストからオプションを選択して、必要な設定を [値] フィールドに入力します。

参照

- ◆ 「[Ultra Light データベースの操作](#)」 『Ultra Light - データベース管理とリファレンス』
- ◆ 「[Ultra Light データベース設定のリファレンス](#)」 『Ultra Light - データベース管理とリファレンス』
- ◆ 「[Ultra Light UID 接続パラメータ](#)」 『Ultra Light - データベース管理とリファレンス』

- ◆ 「Ultra Light PWD 接続パラメータ」 『Ultra Light - データベース管理とリファレンス』

[プラグインの環境設定] ダイアログ : [一般] タブ

[プラグインの環境設定] ダイアログの [一般] タブには、次の項目があります。

[設定] [一般] タブのユーザ設定によって、Sybase Central 内でユーザが特定のタスクを実行したときの Ultra Light の応答方法が決定されます。次の 1 つまたは複数の設定を選択します。

- ◆ **[テーブル・データ編集時に削除を確認する]** この設定を選択すると、Sybase Central の [データ] タブでデータを削除する前に Ultra Light から確認プロンプトが表示されます。
- ◆ **[テーブル・データ編集時に更新を確認する]** この設定を選択すると、Sybase Central の [データ] タブでデータを更新する前に Ultra Light から確認プロンプトが表示されます。
- ◆ **[テーブル・データ編集時に更新を明示的に確認する]** この設定を選択すると、Sybase Central で暗黙的な更新が実行される前に Ultra Light から確認プロンプトが表示されます。暗黙的な更新が実行されるのは、[データ] タブで特定のローを編集しているときに、Sybase Central 内のそのロー以外の場所をクリックした場合です。
- ◆ **[テーブル・データ編集時にキャンセルを確認する]** この設定を選択すると、Sybase Central の [データ] タブでテーブル・データの変更をキャンセルする前に Sybase Central から確認プロンプトが表示されます。

[デフォルトに戻す] [デフォルトに戻す] をクリックすると、このタブのユーザ設定がデフォルト値 (選択または選択解除) に戻ります。デフォルトでは、このタブのすべてのユーザ設定が選択されています。

[プラグインの環境設定] ダイアログ : [ユーティリティ] タブ

[プラグインの環境設定] ダイアログの [ユーティリティ] タブには、次の項目があります。

[設定] [ユーティリティ] タブのユーザ設定によって、ウィザードの概要ページを表示するかどうかと、ウィザード完了後にウィザードのメッセージ・ウィンドウを閉じるかどうかを制御されます。次の 1 つまたは複数の設定を選択します。

- ◆ **[データベース作成ウィザードの概要ページを表示する]** この設定を選択すると、[データベース作成] ウィザードを開いたときにウィザードの概要ページが表示されます。
- ◆ **[データベース消去ウィザードの概要ページを表示する]** この設定を選択すると、[データベースの消去] ウィザードを開いたときにウィザードの概要ページが表示されます。
- ◆ **[データベース抽出ウィザードの概要ページを表示する]** この設定を選択すると、[データベースの抽出] ウィザードを開いたときにウィザードの概要ページが表示されます。
- ◆ **[データベース・ロード・ウィザードの概要ページを表示する]** この設定を選択すると、[データベース・ロード] ウィザードを開いたときにウィザードの概要ページが表示されます。

- ◆ **[C++ API 移行ウィザードの概要ページを表示する]** この設定を選択すると、[C++ API 移行] ウィザードを開いたときにウィザードの概要ページが表示されます。
- ◆ **[データベース同期ウィザードの概要ページを表示する]** この設定を選択すると、[データベース同期] ウィザードを開いたときにウィザードの概要ページが表示されます。
- ◆ **[データベース・アンロード・ウィザードの概要ページを表示する]** この設定を選択すると、[データベースのアンロード] ウィザードを開いたときにウィザードの概要ページが表示されます。
- ◆ **[データベース・アップグレード・ウィザードの概要ページを表示する]** この設定を選択すると、[データベースのアップグレード] ウィザードを開いたときにウィザードの概要ページが表示されます。
- ◆ **[完了後にウィザードのメッセージ・ウィンドウを閉じる]** この設定を選択すると、ウィザードを完了した後にメッセージ・ウィンドウを閉じます。デフォルトでは、この設定は選択されていません。

[デフォルトに戻す] [デフォルトに戻す] をクリックすると、このタブのユーザ設定がデフォルト値 (選択または選択解除) に戻ります。デフォルトでは、[完了後にウィザードのメッセージ・ウィンドウを閉じる] を除いてこのタブのすべてのユーザ設定が選択されています。

[プラグインの環境設定] ダイアログ : [テーブル・データ] タブ

[プラグインの環境設定] ダイアログの [テーブル・データ] タブには、次の項目があります。

[このテーブル・データの表示に使用するフォントを指定してください。] 次のオプションのいずれかを選択することで、Sybase Central でテーブル・データを表示するときに [データ] タブのテーブル・データで使用するフォントを指定します。

- ◆ **[システム]** コンピュータの標準のテキスト・フォントを使用する場合は、このオプションを選択します。これはデフォルト設定です。
- ◆ **[エディタ]** コード・エディタと同じフォントを使用する場合は、このオプションを選択します。
コード・エディタの詳細については、「[\[フォーマット\] タブ](#)」 288 ページを参照してください。
- ◆ **[カスタム]** 使用するフォント、フォント・スタイル、ポイント・サイズを指定する場合は、このオプションを選択します。[参照] をクリックすると、[フォント] ダイアログで目的の設定を選択できます。

第 8 章

Interactive SQL のヘルプ

目次

Interactive SQL の概要	276
Interactive SQL のダイアログの概要	278

Interactive SQL の概要

次の表は、Interactive SQL の実行方法や使用方法に関する情報の参照先をまとめたものです。

目的	参照先
Interactive SQL を起動する方法	「Interactive SQL の起動」 『SQL Anywhere サーバ-データベース管理』
データベースに接続する方法	「チュートリアル：サンプル・データベースの使用」 『SQL Anywhere サーバ-データベース管理』
Interactive SQL ツールバーを使用する方法	「Interactive SQL メイン・ウィンドウの説明」 『SQL Anywhere サーバ-データベース管理』
新しい Interactive SQL ウィンドウを開く方法	「複数のウィンドウを開く」 『SQL Anywhere サーバ-データベース管理』
キーボード・ショートカット情報	「Interactive SQL キーボード・ショートカット」 『SQL Anywhere サーバ-データベース管理』
データを表示する方法	「Interactive SQL からの SQL 文の実行」 『SQL Anywhere サーバ-データベース管理』
Interactive SQL で SQL コマンドを実行する方法	「Interactive SQL からの SQL 文の実行」 『SQL Anywhere サーバ-データベース管理』
データ選択に関する詳細情報	「クエリ：テーブルからのデータの選択」 『SQL Anywhere サーバ-SQL の使用法』
クエリ・エディタを使って SELECT 文を作成する方法に関する情報	「クエリ・エディタの概要」 320 ページ
データのロードとアンロードに関する詳細情報	「データベースとの間でのデータの転送」 『SQL Anywhere サーバ-SQL の使用法』
Interactive SQL オプションを設定する方法	「[オプション] ダイアログ：[一般] タブ」 281 ページ
共通のタスクを自動化する方法	「SQL コマンド・ファイルの使用」 『SQL Anywhere サーバ-SQL の使用法』
JDBC エスケープ構文の使用法	「JDBC エスケープ構文の使用」 『SQL Anywhere サーバ-プログラミング』
Interactive SQL から印刷する方法	「SQL 文の印刷」 『SQL Anywhere サーバ-データベース管理』
Interactive SQL からグラフィカルなプランを印刷する方法	「グラフィカルなプラン」 『SQL Anywhere サーバ-SQL の使用法』

目的	参照先
インデックス・コンサルタントを使用してクエリを分析する方法	「インデックス・コンサルタントの使用」 『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』
SQL データ型、言語要素、関数、および文の構文	「SQL 構文のヘルプ」 348 ページ

Interactive SQL のダイアログの概要

Interactive SQL のすべてのダイアログは、[ツール] メニューと [データ] メニューを使用して表示できます。これらのダイアログを使用して、Interactive SQL の設定、クエリに挿入するテーブル名やプロシージャ名の検索、クエリの編集、結果セットのエクスポートを行うことができます。

[ツール] メニューから表示できるダイアログは次のとおりです。

[テーブル名のルックアップ] [テーブル名のルックアップ] ダイアログでは、テーブル名やカラム名を検索して、それを [SQL 文] ウィンドウ枠に挿入できます。「[\[テーブル名のルックアップ\] ダイアログ](#)」 280 ページを参照してください。

[プロシージャ名のルックアップ] [プロシージャ名のルックアップ] ダイアログでは、プロシージャ名を検索して、それを [SQL 文] ウィンドウ枠に挿入できます。「[\[プロシージャ名のルックアップ\] ダイアログ](#)」を参照してください。

[クエリの編集] クエリ・エディタによって、Interactive SQL で SELECT 文の作成と編集をグラフィック表示で行う方法が提供されます。「[クエリ・エディタの概要](#)」 320 ページを参照してください。

[インデックス・コンサルタント] インデックス・コンサルタントは、ユーザがインデックスを適切に選択できるように支援します。インデックス・コンサルタントを使えば、特定のクエリに対するさまざまなインデックスのメリットを分析できます。「[インデックス・コンサルタントの使用](#)」 『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』を参照してください。

[オプション] [オプション] ダイアログでは、Interactive SQL でコマンド、外観、データのインポートとエクスポート、メッセージなどのオプションを設定できます。「[\[オプション\] ダイアログ : \[一般\] タブ](#)」 281 ページを参照してください。

[データ] メニューから表示できるダイアログは次のとおりです。

[エクスポート] [エクスポート] ダイアログを使用すると、Interactive SQL で結果セットをファイルにエクスポートするときのオプションを設定できます。「[\[エクスポート\] ダイアログ](#)」 278 ページを参照してください。

[インポート] [インポート] ダイアログでは、Interactive SQL にインポートするファイルを選択し、[インポート] ウィザードを使用してインポート設定を指定できます。

[エクスポート] ダイアログ

[ファイル名] 結果セットのエクスポート先ファイルの名前を入力します。[参照] ボタンをクリックしてファイルの場所を探すこともできます。

[フォーマット] 次のいずれかの出力フォーマットを選択します。

- ◆ **[ASCII]** 出力は、ファイルの 1 行に 1 つのローが格納された ASCII フォーマット・ファイルです。すべての値をカンマで区切り、文字列をアポストロフィ (一重引用符) で囲みます。

他の3つの特別なシーケンスも使用できます。2つの文字 ¥n は改行文字を、¥¥ は単一の ¥ を、シーケンス ¥xDD は 16 進コード DD に対応する文字を、それぞれ表します。これがデフォルトの出力フォーマットになります。

- ◆ **[dBase II]** 出力は、ファイルの最上部にカラム定義がある dBASE II フォーマット・ファイルです。最大 32 カラムを出力できることに注意してください。カラム名は 11 文字にトランケートされ、各カラムのデータの各ローは 255 文字にトランケートされます。
- ◆ **[dBase III]** 出力は、ファイルの最上部にカラム定義がある dBASE III フォーマット・ファイルです。最大 128 カラムを出力できることに注意してください。カラム名は 11 文字にトランケートされ、各カラムのデータの各ローは 255 文字にトランケートされます。
- ◆ **[Excel]** この出力は Excel 2.1 のワークシートです。ワークシートの最初のローには、カラム・ラベル(または、ラベルが定義されていない場合はカラム名)があります。2 目以降のワークシート・ローには、実際のテーブル・データがあります。
- ◆ **[Fixed]** 出力は、それぞれのカラムが固定幅を持つ固定フォーマットです。カラムの見出しはこのフォーマット中では出力されません。各カラムの幅はカラムのデータ型から計算され、そのデータ型の値を保持するのに十分な大きさになります。ただし、データ型 LONG VARCHAR と LONG BINARY だけは例外で、32 KB がデフォルトになります。
- ◆ **[FoxPro]** 出力は、ファイルの最上部にカラム定義がある FoxPro フォーマット・ファイルです。最大 128 カラムを出力できることに注意してください。! 削除! カラム名は 11 文字にトランケートされ、各カラムのデータの各ローは 255 文字にトランケートされます。
- ◆ **[HTML]** この出力は HTML (Hyper Text Markup Language) フォーマットです。
- ◆ **[Lotus 1-2-3]** 出力は、Lotus WKS フォーマットのワークシートです。カラム名をワークシートの最初のローとして入れます。(Lotus 1-2-3 のような)他のソフトウェアがロードできる Lotus WKS フォーマット・ワークシートの最大サイズに、一定の制限があることに注意してください。Interactive SQL のファイル・サイズには制限はありません。
- ◆ **[SQL 文]** 出力は、テーブル内の情報を再作成するのに必要な Interactive SQL の INPUT 文です。
- ◆ **[XML]** この出力は、UTF-8 でコード化され、DTD が埋め込まれた XML ファイルです。バイナリ値は、2 桁の 16 進数文字列として表されるバイナリ・データとして CDATA ブロック内にコード化されます。INPUT 文は、XML をファイル・フォーマットとして受け入れません。

[エンコード] ファイルの書き込み時に使用するコード・ページを指定します。このオプションを指定できるのは、ASCII フォーマットを選択した場合だけです。使用するエンコードを指定することも、(デフォルト)を選択することもできます。後者の場合、Interactive SQL が動作しているコンピュータ上のデフォルト・エンコードが使用されます。

[テキスト・データのエスケープ] このオプションを選択すると、エスケープ文字の後に続く文字がデータベース・サーバで認識され、特殊文字として解釈されます。デフォルトのエスケープ文字は円記号(¥)です。改行文字は ¥n との組み合わせとしてインクルードされ、他の文字はタブ文字の ¥x09 のような 16 進の ASCII のコードとしてデータにインクルードされます。2 つの円記号(¥)は 1 つの円記号として解釈されます。円記号(¥)の後に n、x、X、¥以外の文字がある場合、それらは別々の文字と解釈されます。たとえば、¥q であれば、円記号と q が挿入されます。

- ◆ **[エスケープ文字]** 16進コードとして保存されている文字のエスケープ文字を指定できます。デフォルトのエスケープ文字は円記号 (¥) です。

参照

- ◆ 「[OUTPUT 文 \[Interactive SQL\]](#)」 『[SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス](#)』

[プロシージャ名のルックアップ] ダイアログ

[プロシージャ名のルックアップ] ダイアログを使用すると、データベースに格納されているプロシージャの名前を検索できます。検索しているプロシージャが見つかったら、[SQL 文] ウィンドウ枠の現在のカーソル位置に挿入できます。

[プロシージャ名のルックアップ] ダイアログには、次の項目があります。

[検索するプロシージャの最初の何文字かを入力してください。] テキスト・ボックスにプロシージャ名の最初の数文字を入力すると、入力したテキストで始まるプロシージャのみがリストされます。

[必要なプロシージャをクリックしてから、[OK] をクリックしてください。] リストからプロシージャを選択します。[OK] をクリックすると、プロシージャ名が [SQL 文] ウィンドウ枠の現在のカーソル位置に挿入されます。

[所有者名を表示] リストの各プロシージャ名に所有者であるデータベース・ユーザ名をプレフィクスとして付けるには、このオプションを選択します。

[システム・オブジェクトを表示] システムに用意されているストアド・プロシージャをリストに表示する場合は、このオプションを選択します。

ヒント

SQL のワイルドカード文字 % (パーセント記号) と _ (アンダースコア) を使用すると、検索対象を絞り込むことができます。% は、0 文字以上の任意の文字列を表し、_ は、任意の 1 文字を表します。

たとえば、profile という語を含むすべてのプロシージャをリストするには、**%profile%** と入力します。

プロシージャ名に含まれるパーセント記号またはアンダースコアを検索する場合は、パーセント記号またはアンダースコアの前に ~ (チルダ) を付ける必要があります。

[テーブル名のルックアップ] ダイアログ

[テーブル名のルックアップ] ダイアログを使用すると、現在接続しているデータベースに格納されているテーブルやカラムの名前を検索できます。検索しているテーブルやカラムの名前が見つかったら、[SQL 文] ウィンドウ枠の現在のカーソル位置に挿入できます。

[テーブル名のルックアップ] ダイアログには、次の項目があります。

[検索するテーブルの最初の何文字かを入力してください。] テキスト・ボックスにテーブル名の最初の数文字を入力すると、入力したテキストで始まるテーブルだけがリストされます。

[対象テーブルをクリックしてから、[OK] または [カラムを表示] をクリックしてください] リストから必要なテーブルを選択し、[OK] をクリックすると、テーブル名が [SQL 文] ウィンドウ枠に挿入されます。

次のオプションを使用すると、リストに表示されるテーブルを制限できます。検索するテーブルのタイプがわかっている場合は、そのタイプだけを選択することでリストを制限します。以下に列挙されたテーブル・タイプの一部またはすべてを選択できます。また、テーブルの所有者の名前をリスト内に表示することもできます。

- ◆ **[テーブルを表示]** 任意の所有者が所有する、システム・テーブルでないすべての永久テーブル。テンポラリ・テーブルはテーブルのリストに表示されません。
- ◆ **[システム・テーブルを表示]** すべてのシステム・テーブル。
- ◆ **[ビューを表示]** すべてのビュー。
- ◆ **[所有者名を表示]** このオプションを選択すると、テーブルの所有者がリストに入ります。

[カラムを表示] リストからテーブルを選択した後、[カラムを表示] をクリックすると、選択したテーブルのすべてのカラムのリストが表示されます。[カラムの選択] ダイアログで [OK] をクリックすると、選択したカラム名が [SQL 文] ウィンドウ枠の現在のカーソル位置に挿入されます。

ヒント

SQL のワイルドカード文字 % (パーセント記号) と _ (アンダースコア) を使用すると、検索対象を絞り込むことができます。% は、0 文字以上の任意の文字列を表し、_ は、任意の 1 文字を表します。

たとえば、profile という語を含むすべてのプロシージャをリストするには、**%profile%** と入力します。

プロシージャ名に含まれるパーセント記号またはアンダースコアを検索する場合は、パーセント記号またはアンダースコアの前に ~ (チルダ) を付ける必要があります。

[オプション] ダイアログ : [一般] タブ

Interactive SQL の [オプション] ダイアログの [一般] タブには、次の項目があります。

[コミット] 変更内容をデータベースにいつコミットするかを次のオプションから選択できます。また、適切なときに手動で明示的に COMMIT 文を入力してもコミットを実行できます。

- ◆ **[各コマンドの後]** SQL 文を実行するたびに変更内容をデータベースにコミットするには、このオプションを選択します。
- ◆ **[終了時]** Interactive SQL セッションを終了するときに変更内容をデータベースにコミットするには、このオプションを選択します。これはデフォルト設定です。

「[auto_commit オプション \[Interactive SQL\]](#)」 『[SQL Anywhere サーバ - データベース管理](#)』を参照してください。

[コマンド・ファイル] 次のオプションは、コマンド・ファイル実行時の Interactive SQL の動作を制御します。

- ◆ **[エラー発生時]** オプションを1つ選択して、Interactive SQL が文を実行しているときにエラーを検出した場合の対応を制御します。選択したオプションによって、Interactive SQL は実行継続、実行停止、または終了のいずれかを行います。デフォルト設定は[プロンプト]です。

コマンド・ファイルから文を実行中に Interactive SQL がエラーに対処する方法の設定については、「[on_error オプション \[Interactive SQL\]](#)」『[SQL Anywhere サーバ - データベース管理](#)』を参照してください。

- ◆ **[コマンド・ファイルをログに出力]** このオプションを選択すると、Interactive SQL は、実行した SQL 文をログ・ファイルに記録します。

デフォルトではコマンド・ファイルがログにコピーされます。

「[echo オプション \[Interactive SQL\]](#)」『[SQL Anywhere サーバ - データベース管理](#)』を参照してください。

[フォルダ] 次のオプションのいずれかを選択することで、ファイル参照時に Interactive SQL が最初に使用するディレクトリを指定します。

- ◆ **[最後に使用したフォルダ]** このオプションを選択した場合、ファイルブラウザを最後に使用したときのディレクトリが、ブラウザの初期ディレクトリになります。これはデフォルト設定です。
- ◆ **[現在のフォルダ]** このオプションを選択した場合、ブラウザが使用する初期ディレクトリは、オペレーティング・システムによって定義されている現在のフォルダになります。

[高速ランチャ] 高速ランチャは、Interactive SQL の起動時間を短縮するように設計されています。高速ランチャを有効にすると、ユーザのログイン時に高速ランチャ・プロセス (Interactive SQL の *dbisqlg.exe*) が起動します。高速ランチャは Windows のみで使用可能です。

高速ランチャ・プロセスには多大な量のメモリが必要であり、アプリケーションの起動時間に与える影響はシステムの設定に応じて異なることに注意してください。

- ◆ **[高速ランチャを有効にする]** このオプションを選択すると、高速ランチャをオンにできます。高速ランチャは、デフォルトではオンになっています。高速ランチャをオフにする場合は、このチェックボックスをクリアしてください。これらの設定を有効にするには、ログアウトしてから、もう一度ログインする必要があります。

- ◆ **[設定]** [Interactive SQL 高速ランチャの設定] ダイアログが表示されます。このダイアログでは、高速ランチャが使用する TCP/IP ポートを設定したり、休止タイマを設定したりできます。

高速ランチャは、ユーザのコンピュータ上の TCP/IP ポートを使用します。別のプログラムがこのポートを使用している場合は、高速ランチャによって使用されるポート番号をこのダイアログで変更できます。

休止タイマに指定した時間の間に高速ランチャが使用されない場合、高速ランチャは停止します。これにより、他のアプリケーション用のメモリが解放されます。デフォルトでは、休止タイマは停止しないように設定されています。

[ファイルの関連付け] Windows では、Interactive SQL を *.sql* ファイルのデフォルト・エディタにすることができます。

◆ **[Interactive SQL を .SQL ファイルとプラン・ファイルのデフォルト・エディタにする]** Windows 上でこのオプションを選択すると、Interactive SQL が *.sql* ファイルとグラフィカルなプラン・ファイルのデフォルト・エディタになります。SQL Anywhere のグラフィカルなプラン・ファイルの拡張子は *.saplan* です。

このオプションを選択すると、Windows は、ユーザがファイルをダブルクリックしたときに、そのファイルを Interactive SQL を使って自動的に開きます。ただし、Interactive SQL がそのファイルを自動的に実行することはありません。

参照

- ◆ 「SET OPTION 文 [Interactive SQL]」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- ◆ 「高速ランチャの使用」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』

[オプション] ダイアログ : [結果] タブ

Interactive SQL の [オプション] ダイアログの [結果] タブには、次の項目があります。

[NULL 値の表示形式] テーブル・カラムでの NULL の表示形式を指定します。この値には任意の文字列を使用できます。デフォルト値は (NULL) です。このフィールドを空白にしておくと、NULL 値は空文字列として表示されます。

「nulls オプション [Interactive SQL]」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』を参照してください。

[表示できるローの最大数] [結果] ウィンドウ枠に表示されるローの最大数を指定します。デフォルトは 500 です。

「isql_maximum_displayed_rows オプション [Interactive SQL]」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』を参照してください。

[トランケーションの長さ] [結果] ウィンドウ枠の各カラムに表示される文字数を指定します。0 を入力すると、カラムはトランケートされません。デフォルトは 256 です。

「truncation_length オプション [Interactive SQL]」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』を参照してください。

[複数の結果セットを表示] 複数の SELECT 文を返すプロシージャを実行したときに複数の結果セットを [結果] ウィンドウ枠に表示するには、このオプションを選択します。ウィンドウ・モードで実行している場合、各結果セットは [結果] ウィンドウ枠の個別のタブに表示されます。このオプションの設定は、Interactive SQL をコマンド・プロンプト・モードで実行する場合にも適用されます。デフォルトでは、Interactive SQL では複数の結果セットは表示されません。

[ロー数の表示] このオプションを選択すると、[結果] ウィンドウ枠の結果の横にロー数が表示されます。このオプションはデフォルトでオンになっています。

[結果の自動再フェッチ] INSERT 文、UPDATE 文、または DELETE 文を実行した後で Interactive SQL で結果セットを自動的に再生成したい場合は、このオプションを選択します。デフォルトでは、Interactive SQL は結果セットを再フェッチします。

[auto_refetch オプション [Interactive SQL]] 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』を参照してください。

[コンソール・モード] .sql ファイル実行時に出力する結果セットを次のオプションから指定できます。このオプションは、ウィンドウ・モードで実行する場合は機能しません。

- ◆ **[最後]** 最後の文の結果セットを出力します。
- ◆ **[なし]** 結果セットを出力しません。

[isql_print_result_set オプション [Interactive SQL]] 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』を参照してください。

- ◆ **[すべて]** 結果セットを返す各文の結果セットを出力します。このオプションを有効にするには、[複数の結果セットを表示]を選択します。

[フォント] 次のいずれかのオプションを選択することで、Interactive SQL の [結果] ウィンドウ枠でテーブル・データに対して使用するフォントを指定します。

- ◆ **[システム・フォント]** コンピュータの標準のテキスト・フォントを使用する場合は、このオプションを選択します。これはデフォルト設定です。
- ◆ **[エディタ・フォント]** コード・エディタと同じフォントを使用する場合は、このオプションを選択します。

[SQL 文] ウィンドウ枠の詳細については、**[フォーマット] タブ** 288 ページを参照してください。

- ◆ **[カスタム・フォント]** 使用するフォント、フォント・スタイル、ポイント・サイズを指定する場合は、このオプションを選択します。[参照] をクリックすると、[フォント] ダイアログで目的の設定を選択できます。

参照

- ◆ **[SET OPTION 文 [Interactive SQL]]** 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

[オプション] ダイアログ : [インポート/エクスポート] タブ

Interactive SQL の [オプション] ダイアログの [インポート/エクスポート] タブには、次の項目があります。

[デフォルトのエクスポート・フォーマット] ファイルをエクスポートするフォーマットを選択するには、ドロップダウン・リストからファイル・フォーマットを選択します。デフォルトのエクスポート・フォーマットは ASCII です。このフォーマットは、OUTPUT 文で FORMAT 句を指定

しなかった場合にのみ使用されます。「OUTPUT 文 [Interactive SQL]」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』を参照してください。

[デフォルトのインポート・フォーマット] ファイルをインポートするフォーマットを選択するには、ドロップダウン・リストからファイル・フォーマットを選択します。デフォルトのインポート・フォーマットは ASCII です。このフォーマットは、INPUT 文で FORMAT 句を指定しなかった場合にのみ使用されます。「INPUT 文 [Interactive SQL]」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』を参照してください。

[ASCII オプション] ASCII フォーマットのデータをインポートまたはエクスポートするとき、フィールドのセパレータ、引用符文字列、エスケープ文字として使用するデフォルトのシンボルを指定します。

- ◆ **[デフォルトのフィールド・セパレータ]** ASCII ファイルで値を区切るために使用されるシンボル。デフォルト値はカンマ (,) です。
- ◆ **[デフォルトの引用符]** ASCII ファイルで文字列を囲むために使用されるシンボル。デフォルト値は一重引用符 (') です。
- ◆ **[デフォルトのエスケープ文字]** ASCII ファイルで印刷不能な文字の代わりに使用されるシンボル。エスケープ文字には 1 バイト文字を 1 つ指定してください。デフォルト値は円記号 (¥) です。
- ◆ **[デフォルト・エンコード]** ファイルのインポート時、エクスポート時に使用されるエンコード。この値を変更した場合、その変更が適用されるのは、現在の Interactive SQL セッションに対してだけです。新しい Interactive SQL セッションを開始すると、デフォルト値に戻ります。デフォルト値は、(デフォルト) です。(デフォルト) を選択した場合、次の順番でエンコードが決定されます。
 - ◆ INPUT 文、OUTPUT 文、または READ 文の ENCODING 句に指定されたコード・ページ
 - ◆ Interactive SQL の起動時に -codepage コマンド・ライン・オプションを使って指定されたコード・ページ
 - ◆ Interactive SQL が動作しているコンピュータのデフォルトのコード・ページ

参照

- ◆ 「データのインポートとエクスポート」 『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』
- ◆ 「SET OPTION 文 [Interactive SQL]」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

[オプション] ダイアログ : [メッセージ] タブ

Interactive SQL の [オプション] ダイアログの [メッセージ] タブには、次の項目があります。

[SQL 文の実行時間を計測] Interactive SQL が文の実行に要した時間を計測する機能を有効にする場合は、このオプションを選択します。時間は [メッセージ] タブに表示されます。デフォルトでは、このオプションが選択されています。

[個別のメッセージ・ウィンドウ枠を表示] 実行時間などのデータベース・サーバの情報を、[結果] ウィンドウ枠の [メッセージ] タブではなく、[SQL 文] ウィンドウ枠と [結果] ウィンドウ枠の

間の [メッセージ] ウィンドウ枠に表示する場合は、このオプションを選択します。デフォルトでは、データベース・サーバの情報は [結果] ウィンドウ枠の [メッセージ] タブに表示されます。

[メッセージ・ウィンドウ枠のデフォルトの行数] [メッセージ] ウィンドウ枠に返される行数を入力します。デフォルト値は7です。この値は、[個別のメッセージ・ウィンドウ枠を表示] を選択した場合にのみ使用されます。[個別のメッセージ・ウィンドウ枠を表示] を選択した場合、この数値は [メッセージ] ウィンドウ枠の高さ (単位: 行) としても使用されます。

参照

- ◆ 「SET OPTION 文 [Interactive SQL]」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

[オプション] ダイアログ: [プラン] タブ

Interactive SQL の [オプション] ダイアログの [プラン] タブには、次の項目があります。

[プラン] 以下のオプションを使用すると、クエリの最適化方法について Interactive SQL で表示する詳細レベルを選択できます。プランの情報は、[結果] ウィンドウ枠の [プラン] タブに表示されます。

- ◆ **[グラフィカルなプラン]** 実行プランが [プラン] タブにツリー状の図として表示されます。このプラン図内の1つのノードをクリックすると、クエリのその部分の詳細を表示できます。このプランがデフォルトです。
- ◆ **[グラフィカルなプラン (ルート統計あり)]** 実行プランは [プラン] タブにツリー状の図として表示されます。1つのノードをクリックすると、クエリのその部分の詳細を表示できます。クエリ全体の実行中に使用されたリソースを示す統計もルート・ノードに表示されます。
- ◆ **[グラフィカルなプラン (全統計あり)]** 実行プランは [プラン] タブにツリー状の図として表示されます。1つのノードをクリックすると、クエリのその部分の詳細を表示できます。実行中にクエリの選択した部分で使用されたリソースを示す統計も表示されます。
- ◆ **[短いプラン]** 実行プランについての基本的な情報が [結果] ウィンドウ枠の [プラン] タブに1行で表示されます。この行には、アクセスしたテーブルと、ローを順次読み出すか、インデックスを使用してアクセスするかがリストされます。
- ◆ **[長いプラン]** 実行プランについての詳細な情報が [プラン] タブに複数行で表示されます。

各種実行プランの詳細については、「[Interactive SQL を使用した実行プランへのアクセス](#)」
『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』を参照してください。

[読み込み専用のカーソルを想定] このオプションを選択すると、クエリはクエリ・オプティマイザにより、読み込み専用カーソルに対して実行されたクエリとして扱われます。デフォルトでは、このオプションは選択されていません。これは、オプティマイザが読み込み/書き込みカーソルのプランを取得することを示します。

「[PLAN 関数 \[その他\]](#)」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』を参照してください。

[次のカーソルを想定] 指定するカーソルのタイプに基づいてプランを取得できます。クエリ・オブティマイザは、カーソルを Asensitive、Insensitive、Sensitive、またはキーセット駆動型のいずれかとして想定できます。デフォルトは Asensitive です。

次の項を参照してください。

- ◆ 「PLAN 関数 [その他]」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- ◆ 「asensitive カーソル」 『SQL Anywhere サーバ - プログラミング』
- ◆ 「insensitive カーソル」 『SQL Anywhere サーバ - プログラミング』
- ◆ 「sensitive カーソル」 『SQL Anywhere サーバ - プログラミング』
- ◆ 「value-sensitive カーソル」 『SQL Anywhere サーバ - プログラミング』

参照

- ◆ 「Interactive SQL を使用した実行プランへのアクセス」 『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』
- ◆ 「実行プランの解釈」 『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』

[オプション] ダイアログ : [ソース制御] タブ

Interactive SQL の [オプション] ダイアログの [ソース制御] タブには、次の項目があります。

[ソース制御の統合を有効にする] このオプションを選択すると、ファイルを操作するときに Interactive SQL とソース制御システムが統合されます。

- ◆ **[現在のソース制御システム]** このオプションを選択すると、現在のソース制御システムが使用されます。このオプションは、Windows プラットフォームで、SCC に準拠するソース制御システムをインストールしている場合にのみ使用できます。
- ◆ **[カスタム・ソース制御システム]** このオプションを選択すると、コマンド・ラインのプログラムをソース制御に使用できます。[設定] をクリックすると、コマンド・ラインのアクションを表示、編集できます。
- ◆ **[設定]** [カスタム・ソース制御オプション] ダイアログが表示され、コマンド・ラインのアクションを表示、編集できます。
- ◆ **[エディタの内容が変更されたら自動的にファイルをチェック・アウト]** このオプションを選択すると、エディタの内容が変更されたときにソース・ファイルをソース制御プログラムから自動的にチェック・アウトできます。

[オプション] ダイアログ : [エディタ] タブ

このタブでは、[SQL 文] ウィンドウ枠に入力されたテキストの外観を設定できます。このタブで指定した設定は、Sybase Central で使用する [SQL 文] ウィンドウ枠にも適用されることに注意してください。

[エディタ] タブ

[エディタ] タブには、次の項目があります。

[垂直スクロール・バー] ウィンドウが小さすぎてテキストを全部表示できない場合に、垂直スクロール・バーの表示／非表示を切り替えます。

[水平スクロール・バー] ウィンドウが小さすぎてテキストを全部表示できない場合に、水平スクロール・バーの表示／非表示を切り替えます。

[タブ] タブ

[タブ] タブには、次の項目があります。

[タブ・サイズ] スペースの数によって、タブのサイズを設定します。

[インデント・サイズ] スペースの数によって、インデントのサイズを設定します。

[スペースの挿入] 1つのタブ文字を挿入する代わりに、[タブ] を押すと n 個のスペースが挿入されます。 n の値は、1 - インデント・サイズのスペースの数です。この値は、カーソルを次のタブ停止位置まで移動するのに必要なスペースの数によって決まります。

[タブの保持] [タブ] を押したときに、タブ文字をドキュメントに挿入し、カーソルを次のタブ停止位置まで移動します。

[自動インデント] 自動インデント機能を設定します。次のオプションがあります。

- ◆ **[なし]** この機能を無効にします。
- ◆ **[デフォルト]** 設定されているタブ・サイズとインデント・サイズを使用します。
- ◆ **[スマート]** コードの前の行を基準として、前後のカッコにインデントを挿入します。
 - ◆ **[左中カッコをインデント]** このオプションを選択すると、左中カッコがインデントされません。このオプションは、[スマート] オプションを選択すると有効になります。
 - ◆ **[右中カッコをインデント]** このオプションを選択すると、右中カッコがインデントされません。このオプションは、[スマート] オプションを選択すると有効になります。

[サンプル] [サンプル] フィールドには、左カッコと右カッコのインデント用に選択されたオプションに基づくコードのフォーマット例が表示されます。

[フォーマット] タブ

[フォーマット] タブには、次の項目があります。

[テキストの強調表示] メイン編集ウィンドウにあるさまざまな種類のテキストの色とスタイルを指定します。特定のテキスト・タイプを選択し、そのテキスト・タイプのフォアグラウンド、バックグラウンド、スタイルを設定します。

- ◆ **[フォアグラウンド]** フォアグラウンドとはテキストの色を指します。

- ◆ **[バックグラウンド]** バックグラウンドとはテキストの背景画面の色を指します。
 - ◆ **[スタイル]** 特定のテキスト・タイプのフォーマット・タイプを指定します。次のいずれかを選択できます。
 - ◆ [標準]
 - ◆ [斜体]
 - ◆ [太字]
 - ◆ [斜体+太字]
- [フォント]** [SQL 文] ウィンドウ枠に表示されるフォントを指定できます。
- [フォント・サイズ]** [SQL 文] ウィンドウ枠内に表示されるテキストのフォント・サイズ(ポイント)を指定します。
- [脱字記号の色]** 画面上で点滅するカーソル・インジケータの色を指定します。
- [サンプル]** 上の設定に基づき、テキストのサンプルを更新して表示します。
- [すべてリセット]** すべての設定をデフォルト値に戻します。

[印刷] タブ

[印刷] タブには、次の項目があります。

- [ヘッダ]** [SQL 文] ウィンドウ枠の内容を印刷するときヘッダに出力する情報とフォーマットを指定します。デフォルトでは、ヘッダのテキストは左揃えです。使用可能なオプションのリストを表示するには、[>] ボタンをクリックします。
- [フッタ]** [SQL 文] ウィンドウ枠の内容を印刷するときフッタに出力する情報とフォーマットを指定します。デフォルトでは、フッタのテキストは左揃えです。使用可能なオプションのリストを表示するには、[>] ボタンをクリックします。
- ◆ **[>] ボタン** [>] ボタンをクリックして、ヘッダまたはフッタのオプションを次の中から選択できます。
 - ◆ [ファイル名]
 - ◆ [ファイルの時刻]
 - ◆ [ファイルの日付]
 - ◆ [ページ番号]
 - ◆ [ページ数]
 - ◆ [現在の時刻]
 - ◆ [現在の日付]
 - ◆ [左揃え]

- ◆ [中央揃え]
- ◆ [右揃え]

選択したすべての項目に同じ揃え方を指定する必要はありません。たとえば、ヘッダでファイル名を左揃えにし、日付を右揃えにできます。デフォルトでは、ヘッダとフッタのテキストはすべて左揃えです。揃え方を指定してから、テキストの種類を選択してください。たとえば、ファイル名をヘッダの中央に出力する場合は、[ヘッダ]フィールドに **&C&F** と入力するか、[>] ボタンをクリックして [中央揃え] オプションを選択してから再び [>] ボタンをクリックして、[ファイル名] オプションを選択します。

これらのオプションの指定に加えて、[ヘッダ] と [フッタ] の各フィールドに、出力するテキストを入力できます。たとえば、[フッタ] フィールドに **Page &P of &p** と入力すると、印刷されたマニュアルのフッタに「**Page 1 of 1**」と表示されます。

[フォント・サイズ] 印刷テキストのフォント・ポイント・サイズを選択します。

[テキスト補完] タブ

[テキスト補完] タブには、次の項目があります。

[リストに含めるオブジェクトを指定してください。] テキスト補完ウィンドウに表示するオブジェクトを選択します。デフォルトでは、すべてのデータベース・オブジェクトの名前がテキスト補完リストに表示されます。

- ◆ **[テーブルとビュー]** このオプションを選択すると、テキスト補完リストにテーブルとビューが表示されます。
- ◆ **[カラム]** このオプションを選択すると、テキスト補完リストにカラムが表示されます。
- ◆ **[ストアド・プロシージャ]** このオプションを選択すると、テキスト補完リストにストアド・プロシージャが表示されます。
- ◆ **[SQL 関数]** このオプションを選択すると、テキスト補完リストに組み込みの SQL 関数が表示されます。

[システム・オブジェクトを表示] このオプションを選択すると、テキスト補完リストにシステム・オブジェクトが表示されます。

[所有者名を表示] このオプションは、オブジェクトの所有者をオブジェクトのリストに表示するかどうかを制御します。所有者名を補完後のテキストに表示するかどうかは制御しません。

[ツール・チップを表示] このオプションを選択すると、テキスト補完ウィンドウにツール・チップが表示されます。

[引用符付きの識別子] このオプションを選択すると、識別子が二重引用符で囲まれます。次のいずれかの条件と一致した場合に、識別子を二重引用符で囲みます。

- ◆ 識別子にスペースが含まれる
- ◆ 識別子の先頭文字がアルファベット文字ではない

- ◆ 識別子に予約語が含まれる
- ◆ 識別子にアルファベット文字や数字以外の文字が含まれる

「識別子」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』を参照してください。

[テキストを自動補完する] このオプションを選択すると、一致が1つだけの場合に識別子の名前が自動的に補完されます。入力したテキストが複数の識別子と一致する場合は、リストが表示され、識別子を選択できます。

参照

- ◆ 「テキスト補完の使用」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』
- ◆ 「テキスト補完キーボード・ショートカット」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』

[オプション] ダイアログ : [クエリ・エディタ] タブ

このタブでは、クエリ・エディタを設定できます。

Interactive SQL の [オプション] ダイアログの [クエリ・エディタ] タブには、次の項目があります。

[完全修飾テーブル名と完全修飾カラム名] このオプションを選択すると、クエリ・エディタでクエリを作成するときに、テーブル名とカラム名が所有者名で完全修飾されます。

テーブル名とカラム名を指定する方法については、「SQL クエリ」 『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』を参照してください。

[引用符名] このオプションを選択すると、クエリ・エディタでクエリを作成するときに、識別子の名前が二重引用符で囲まれます。

識別子を引用符で囲む方法については、「識別子」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』を参照してください。

[起動時にテーブルのリストを取得] クエリ・エディタを開くと同時にそのテーブルのリストを移植する場合は、このオプションを選択します。このオプションはデフォルトで選択されています。テーブルが多数あるデータベースに接続している場合や、通信リンクが低速の場合は、このオプションをオフにすると、クエリ・エディタが速く開きます。

[オプション] ダイアログ : [更新のチェック] タブ

SQL Anywhere がソフトウェアの更新をチェックするかどうか、およびチェックする場合はその頻度を設定できます。更新のチェックは、Interactive SQL、Sybase Central、または SQL Anywhere コンソール・ユーティリティを開いたときに行われます。

任意のタイミングで更新をチェックできます。それには、[スタート] メニューで [プログラム] - [SQL Anywhere 10] - [更新のチェック] を選択するか、Sybase Central、Interactive SQL、SQL Anywhere コンソール・ユーティリティの [ヘルプ] メニューを使用します。

[オプション] ダイアログの [更新のチェック] タブには、次の項目があります。

[更新をチェックする頻度を指定してください。] 次のいずれかのオプションを選択して、SQL Anywhere によって更新をチェックする頻度を指定します。デフォルトでは、[チェックしない] が選択されています。

- ◆ **[アプリケーションの起動時]** このオプションを選択すると、Interactive SQL、Sybase Central、コンソール・ユーティリティを起動するたびに、SQL Anywhere によって更新がチェックされます。
- ◆ **[毎日]** このオプションを選択すると、毎日 Interactive SQL、Sybase Central、コンソール・ユーティリティが初めて起動されたときに、SQL Anywhere によって更新がチェックされます。
- ◆ **[週 1 回]** このオプションを選択すると、毎週 Interactive SQL、Sybase Central、SQL Anywhere コンソール・ユーティリティが初めて起動されたときに、SQL Anywhere によって更新がチェックされます。
- ◆ **[月 1 回]** このオプションを選択すると、毎月 Interactive SQL、Sybase Central、SQL Anywhere コンソール・ユーティリティが初めて起動されたときに、SQL Anywhere によって更新がチェックされます。
- ◆ **[チェックしない]** このオプションを選択すると、SQL Anywhere によって更新はチェックされません。これはデフォルト設定です。

[チェックする項目を指定してください。] 次のオプションを自由に組み合わせて、SQL Anywhere でチェックする更新の種類を指定します。デフォルトでは、次のオプションはすべて選択されています。

- ◆ **[Express Bug Fix]** このオプションを選択すると、SQL Anywhere によって Express Bug Fix がチェックされます。

Express Bug Fix は、1 つ以上のバグ・フィックスが含まれる、ソフトウェアのサブセットです。これらのバグ・フィックスは、更新のリリース・ノートにリストされます。バグ・フィックス更新を適用できるのは、同じバージョン番号を持つインストール済みのソフトウェアに対してだけです。このソフトウェアについては、ある程度のテストが行われているとはいえ、完全なテストが行われたわけではありません。自分自身でソフトウェアの妥当性を確かめるまでは、アプリケーションとともにこれらのファイルを配布しないでください。

- ◆ **[メンテナンス・リリース]** このオプションを選択すると、SQL Anywhere によってソフトウェアのメンテナンス・リリースがチェックされます。

メンテナンス・リリースは、同じメジャー・バージョン番号を持つ旧バージョンのインストール済みソフトウェアをアップグレードするための完全なソフトウェア・セットです (バージョン番号のフォーマットは、**メジャー・マイナー・パッチ・ビルド**です)。バグ・フィックスとその他の変更については、アップグレードのリリース・ノートにリストされます。

- ◆ **[その他の情報]** このオプションを選択すると、その他の情報 (新製品のリリースや予定されているイベントなど) がチェックされます。

Mobile Link モニタのヘルプ

目次

[Mobile Link サーバへの接続] ダイアログ	294
[ウォッチの編集] ダイアログ	297
[移動] ダイアログ	298
[新しいウォッチ] ダイアログ	299
[データベースへのエクスポート] ダイアログ	300
[オプション] ダイアログ : [一般] タブ	301
[オプション] ダイアログ : [テーブル] タブ	303
[オプション] ダイアログ : [グラフ] タブ	304
[オプション] ダイアログ : [チャート・レイアウト] タブ	306
[オプション] ダイアログ : [チャートの色] タブ	307
[オプション] ダイアログ : [概要] タブ	308
[サンプル] プロパティ・シート : [サンプル] タブ	309
[サンプル] プロパティ・シート : [範囲] タブ	310
[セッション] プロパティ・シート : [一般] タブ	311
[セッション] プロパティ・シート : [統計情報] タブ	312
[同期] プロパティ・シート : [一般] タブ	313
[同期] プロパティ・シート : [アップロード] タブ	314
[同期] プロパティ・シート : [ダウンロード] タブ	315
[同期] プロパティ・シート : [同期] タブ	316
[ウォッチ・マネージャ] ダイアログ	317

[Mobile Link サーバへの接続] ダイアログ

このダイアログでは、稼働中の Mobile Link サーバに接続できます。ほとんどのパラメータが同じであるという点で、モニタ接続は Mobile Link サーバへの同期接続と同様です。Mobile Link サーバの設定に合うパラメータを使用してください。すべての Mobile Link モニタ・セッションに対して、スクリプト・バージョンが **for_MLMonitor_only** に設定されます。

[Mobile Link サーバへの接続] ダイアログには、次の項目があります。

[ユーザ] 接続の Mobile Link ユーザの名前を入力します。-zu+ を指定して Mobile Link サーバを起動した場合は、指定するユーザ ID が何であっても構いません。

[パスワード] 接続時のパスワードを入力します。指定した Mobile Link ユーザに対する正しいパスワードを入力してください。Mobile Link ユーザにパスワードがない場合は、このフィールドを空白のままにします。

[ホスト] Mobile Link サーバを実行するコンピュータのネットワーク名または IP アドレス。デフォルトでは、モニタが稼働しているコンピュータです。Mobile Link サーバがモニタと同じコンピュータで稼働している場合は、**localhost** を使用できます。

[プロトコル] 接続に使用する通信ストリームのプロトコルを選択します。このプロトコルとポートは、Mobile Link サーバで同期要求に使用しているのと同じプロトコルとポートに設定してください。

- ◆ **[HTTP]** このオプションを選択すると、HTTP 経由で接続します。デフォルトでは、HTTP バージョン **1.1** が使用されます。
- ◆ **[ポート]** Mobile Link サーバは特定のポートを介して通信します。デフォルトの HTTP ポート番号は、**80** です。デフォルト以外の値を選択する場合、指定したポートで受信を行うように Mobile Link サーバを設定してください。
- ◆ **[HTTPS]** このオプションを選択すると、HTTPS 経由で接続します。HTTPS 通信ストリームは RSA セキュリティを使用します。
- ◆ **[ポート]** Mobile Link サーバは特定のポートを介して通信します。デフォルトの HTTPS ポート番号は、**443** です。デフォルト以外の値を選択する場合、指定したポートで受信を行うように Mobile Link サーバを設定してください。
- ◆ **[暗号化]** Mobile Link サーバと同じ種類の暗号化を選択します。HTTPS の場合、通常は RSA 暗号化です。

暗号化には次のオプションを使用できます。

- ◆ **[ECC]** 楕円曲線暗号化 (ECC) には別のライセンスが必要です。
- ◆ **[RSA]** RSA 暗号化は SQL Anywhere に無料で付属します。
- ◆ **[RSA (FIPS 140-2 準拠)]** 連邦情報処理規格 (FIPS) 140-2 では、セキュリティ・アルゴリズムの要件を指定しています。FIPS 140-2 は、米国商務省標準技術局 (NIST : National Institute of Standards and Technology) およびカナダ通信安全保障局 (CSE : Canadian

Communication Security Establishment) を通じて、米国政府とカナダ政府から付与されます。FIPS テクノロジには別のライセンスが必要です。

HTTPS を使用するには、Mobile Link モニタが稼働しているコンピュータに Mobile Link クライアント側データ・ストリーム暗号化をインストールする必要があります。Mobile Link モニタはすべての証明書を信用するため、HTTPS を使用する場合は、[追加のプロトコルオプション] フィールドに証明書関連パラメータを指定しないでください。

別途ライセンスが必要な必須コンポーネント

ECC 暗号化と FIPS 承認の暗号化には、別途ライセンスが必要です。強力な暗号化テクノロジーはすべて、輸出規制対象品目です。

「別途ライセンスが必要なコンポーネント」 『SQL Anywhere 10 - 紹介』を参照してください。

セキュリティの詳細については、「Mobile Link クライアント/サーバ通信の暗号化」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』を参照してください。

- ◆ **[TCP/IP]** このオプションを選択すると、TCP/IP 経由で接続します。
- ◆ **[ポート]** Mobile Link サーバは特定のポートを介して通信します。デフォルトの TCP/IP ポート番号は、2439 です。デフォルト以外の値を選択する場合、指定したポートで受信を行うように Mobile Link サーバを設定してください。
- ◆ **[TLS (TCP/IP とトランスポート・レイヤ・セキュリティ)]** このオプションを選択すると、トランスポート・レイヤ・セキュリティを使用して TCP/IP 経由で接続します。
- ◆ **[ポート]** Mobile Link サーバは特定のポートを介して通信します。デフォルトの TLS (TCP/IP とトランスポート・レイヤ・セキュリティ) ポート番号は、2439 です。デフォルト以外の値を選択する場合、指定したポートで受信を行うように Mobile Link サーバを設定してください。
- ◆ **[暗号化]** Mobile Link サーバと同じ種類の暗号化を選択します。HTTPS の場合、通常は RSA 暗号化です。

暗号化には次のオプションを使用できます。

- ◆ **[ECC]** 楕円曲線暗号化 (ECC) には別のライセンスが必要です。
- ◆ **[RSA]** RSA 暗号化は SQL Anywhere に無料で付属します。
- ◆ **[RSA (FIPS 140-2 準拠)]** 連邦情報処理規格 (FIPS) 140-2 では、セキュリティ・アルゴリズムの要件を指定しています。FIPS 140-2 は、米国商務省標準技術局 (NIST : National Institute of Standards and Technology) およびカナダ通信安全保障局 (CSE : Canadian Communication Security Establishment) を通じて、米国政府とカナダ政府から付与されます。FIPS テクノロジには別のライセンスが必要です。

[追加のプロトコルオプション] このフィールドにはオプションのネットワーク・パラメータを指定します。指定できる値は、接続ストリームのタイプによって異なります。

次の表は、指定できるパラメータのリストです。特に明記されていないかぎり、これらのパラメータはすべての接続ストリーム (TCP/IP、HTTP、HTTPS) でサポートされます。

パラメータ	説明
<code>buffer_size=number</code>	HTTP と HTTPS のみ。内容が固定長であるメッセージの本文の最大サイズ (バイト)。オプションを変更すると、送信内容に割り付けられるメモリ容量が増減します。デフォルトは 65535 です。
<code>client_port=nnnnn</code> <code>client_port=nnnnn-mmmmm</code>	通信に使用するクライアント・ポートの範囲。値を 1 つだけ指定すると、範囲の上限値は初期値より 100 大きくなり、ポート数の合計は 101 になります。 このオプションは、ファイアウォール内のクライアントがファイアウォール外の Mobile Link サーバと通信する場合に役立ちます。
<code>persistent={ 0 1 }</code>	HTTP と HTTPS のみ。1 (TRUE) に指定すると、クライアントは同期ですべての HTTP 要求に同じ TCP/IP 接続を使用しようとします。0 (FALSE) に設定すると、中間エージェントとの互換性が高くなります。デフォルトは 0 です。 注意：persistent は、Mobile Link サーバに直接接続する場合にのみ 1 に設定してください。プロキシまたはリダイレクタなどの中間エージェントを通じて接続する場合は、持続的な接続を使用すると問題が生じることがあります。
<code>proxy_host=proxy_hostname</code>	HTTP と HTTPS のみ。プロキシ・サーバのホスト名。
<code>proxy_port= proxy_portnumber</code>	HTTP と HTTPS のみ。プロキシ・サーバのポート番号。デフォルト値は 80 です。
<code>url_suffix=suffix</code>	HTTP と HTTPS のみ。各 HTTP 要求の 1 行目の URL に追加するサフィックス。プロキシ・サーバまたは Mobile Link リダイレクタを介して同期を行う場合、Mobile Link サーバを見つけるためにサフィックスが必要な場合があります。デフォルト値は、 MobiLink です。
<code>version= versionnumber</code>	HTTP と HTTPS のみ。使用する HTTP のバージョンを指定する文字列。1.0 または 1.1 を選択できます。デフォルト値は 1.1 です。

ネットワーク・パラメータの詳細については、「[Mobile Link クライアントのネットワーク・プロトコル・オプション](#)」『[Mobile Link - クライアント管理](#)』を参照してください。

参照

- ◆ 「[Mobile Link モニタの起動](#)」 『[Mobile Link - サーバ管理](#)』

[ウォッチの編集] ダイアログ

このダイアログには、次の項目があります。

[名前] ウォッチの名前。事前に定義されたウォッチの名前 ([アクティブ]、[完了]、[失敗]) は変更できません。

[条件] リスト モニタが追跡する同期を識別するためのプロパティ、比較演算子、値を指定します。条件はいくつでも指定できます。プロパティ、演算子、値を選択した後で、[追加] をクリックしてウォッチに条件を追加します。

[条件] リストに表示される値は編集できません。ウォッチ条件を変更するには、[条件] リストから条件を選択し、[削除] をクリックします。次に、必要な設定を指定した新しい条件を追加します。

◆ **[プロパティ]** モニタで追跡するプロパティをドロップダウン・リストから選択します。

Mobile Link モニタで使えるプロパティの完全なリストについては、「[Mobile Link の統計のプロパティ](#)」『[Mobile Link - サーバ管理](#)』を参照してください。

◆ **[演算子]** 比較演算子を選択します。使用可能な演算子のリストは、選択するプロパティによって異なります。

◆ **[値]** プロパティと比較される値を入力します。

◆ **[追加]** クリックすると、[プロパティ]、[演算子]、[値] の各フィールドで設定した条件がウォッチに追加されます。システム・ウォッチの場合は無効です。

◆ **[削除]** クリックすると、選択した条件がウォッチから削除されます。システム・ウォッチの場合は無効です。

[同期の表示] これらのオプションでは、[チャート] ウィンドウ枠と [概要] ウィンドウ枠でウォッチを識別するためのパターンと色を指定します。

◆ **[チャート・パターン]** [チャート] ウィンドウ枠のウォッチのパターンを選択します。

◆ **[概要の色]** [概要] ウィンドウ枠のウォッチの色を選択します。

参照

◆ 「[統計のカスタマイズ](#)」 『[Mobile Link - サーバ管理](#)』

[移動] ダイアログ

このダイアログには、次の項目があります。

[開始日時] [移動] ダイアログでは、指定した日付と時刻をモニタの [チャート] ウィンドウ枠に表示するようにできます。表示する開始日と時刻を入力します。この設定を変更する場合は、年、月、日付を指定します。

[チャートの範囲] [チャート] ウィンドウ枠に表示する期間を指定します。ドロップダウン・リストからいずれかのオプションを選択して、チャート範囲をミリ秒、秒、分、時間、または日の単位で指定できます。チャート範囲によって、データの細分性が決定されます。時間の長さが短いほど、より詳細に表示されます。

参照

- ◆ 「[チャート] ウィンドウ枠」 『Mobile Link - サーバ管理』

[新しいウォッチ] ダイアログ

このダイアログには、次の項目があります。

[名前] ウォッチの名前を入力します。

[条件] モニタが追跡する同期を識別するためのプロパティ、比較演算子、値を指定します。条件はいくつでも指定できます。プロパティ、演算子、値を選択した後で、[追加]をクリックして新規ウォッチに条件を追加します。

[条件] リストに表示される値は編集できません。ウォッチ条件を変更するには、[条件] リストから条件を選択し、[削除]をクリックします。次に、必要な設定を指定した新しい条件を追加します。

◆ **[プロパティ]** モニタで追跡するプロパティを選択します。

使用できるプロパティの完全なリストについては、「[Mobile Link の統計のプロパティ](#)」
『[Mobile Link - サーバ管理](#)』を参照してください。

◆ **[演算子]** 比較演算子を選択します。使用可能な演算子のリストは、選択するプロパティによって異なります。

◆ **[値]** 指定のプロパティの値を入力します。

◆ **[追加]** クリックすると、[プロパティ]、[演算子]、[値]の各フィールドで設定した条件がウォッチに追加されます。システム・ウォッチの場合は無効です。

◆ **[削除]** クリックすると、選択した条件がウォッチから削除されます。システム・ウォッチの場合は無効です。

[同期の表示] これらのオプションで、[チャート] ウィンドウ枠と [概要] ウィンドウ枠でウォッチを識別するためのパターンと色を選択します。

◆ **[チャート・パターン]** [チャート] ウィンドウ枠のウォッチのパターンを選択します。

◆ **[概要の色]** [概要] ウィンドウ枠のウォッチの色を選択します。

参照

◆ 「[統計のカスタマイズ](#)」 『[Mobile Link - サーバ管理](#)』

[データベースへのエクスポート] ダイアログ

[データベースへのエクスポート] ダイアログでは、Mobile Link がサポートする任意の統合データベース、Excel スプレッドシートのいずれかに、Mobile Link モニタのデータを保存できます。モニタのデータをエクスポートするときは、Mobile Link サーバへの接続を切断する必要があります。

注意

カラムのいくつかは予約語のため、データ・ソースは引用符付き識別子が有効になっている必要があります。Mobile Link モニタは、SQL Anywhere、Adaptive Server Enterprise、Microsoft SQL Server の各データベースに対する引用符付き識別子を、自動的に有効にします。引用符付き識別子が有効になっていないと、エクスポートは失敗します。引用符付きの識別子の詳細については、次の項を参照してください。

- ◆ 「文字列と引用符」 『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』
- ◆ 「quoted_identifier オプション [互換性]」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』

[データベースへのエクスポート] ダイアログには、次の項目があります。

[マスタ・テーブル] モニタ・データの格納用として作成されるマスタ・テーブルの名前を入力します。テーブル名は 128 文字以下でなければなりません。テーブルが存在しない場合は、モニタによって作成されます。Excel に出力する場合、テーブル名は作成されるワークシートの名前を表します。

このテーブルには、ローが同期別に格納されます。各ローには、モニタの [詳細テーブル] ウィンドウ枠に表示可能なすべての情報と、エクスポートの実行時刻が格納された `export_time` カラムが含まれます。そのプライマリ・キーは、`export_time` カラムと `sync` カラムで構成されます。このテーブルのデフォルト名は `mlm_by_sync` です。

[詳細テーブル] モニタ・データの格納用として作成される詳細テーブルの名前を入力します。テーブル名は 128 文字以下でなければなりません。このテーブルのデフォルト名は `mlm_by_table` です。テーブルが存在しない場合は、モニタによって作成されます。Excel に出力する場合、テーブル名は作成されるワークシートの名前を表します。

このテーブルには、ローが同期別テーブル別に格納されます。各ローには、モニタの [同期] プロパティ・シートに表示されるアップロード統計、ダウンロード統計、同期統計に対するカラムのほか、エクスポートの実行時刻が格納された `export_time` カラムが含まれます。詳細テーブルには、マスタ・テーブルの `export_time` カラムと `sync` カラムに対する外部キーが含まれます。詳細テーブルのプライマリ・キーは、カラム `export_time`、`sync`、`table_name` で構成されます。

[既存データの上書き] 既存テーブルのデータを上書きする場合に、このオプションを選択します。データを上書きしない場合は、新しいデータが既存のデータに追加されます。

参照

- ◆ 「モニタのデータの保存」 『Mobile Link - サーバ管理』
- ◆ 「[同期] プロパティ・シート : [一般] タブ」 313 ページ

[オプション] ダイアログ : [一般] タブ

[オプション] ダイアログの [一般] タブには、次の項目があります。

[開始時に接続するためのプロンプトを表示] このオプションでは、Mobile Link モニタの起動時に [Mobile Link サーバへの接続] ダイアログを表示するかどうかを指定します。このオプションはデフォルトで選択されています。このため、コマンド・ライン・オプションを指定せずにモニタを起動すると、[Mobile Link サーバへの接続] ダイアログが表示されます。コマンド・ライン・オプションを指定せずにモニタを起動したときに [Mobile Link サーバへの接続] ダイアログが表示されないようにするには、このオプションの横にあるチェックボックスをオフにします。

[最大同期数] 現在のセッションで保持される同期の最大数です。デフォルトの最大同期数は 100000 です。[古い同期を新しい同期で置換] オプションを選択すると、制限に達した場合に最も古い同期を新しい同期に置き換えることができます。

[古い同期を新しい同期で置換] このオプションは、モニタが現在のセッションの最大同期カウントに達した場合にセッションの最も古い同期と最も新しい同期のどちらを新しい同期で置換するかを制御します。このオプションはデフォルトで選択され、セッションの最も古い同期が新しい同期で置換されます。

[最大サンプル時間] 値を入力し、ドロップダウン・リストから次のいずれかの時間単位を選択することで、最大サンプル時間を指定します。

- ◆ s (秒)
- ◆ m (分)
- ◆ h (時間)
- ◆ d (日)

[Mobile Link サーバに接続したときに自動的に保存する] モニタが Mobile Link サーバに接続するときにモニタのセッションを自動的に保存するには、このオプションを選択します。このオプションの設定が有効になるのは、次回、Mobile Link モニタが同期サーバに接続したときです。現在の接続に対する設定は変更されません。モニタ・セッションのデータはデフォルトで、バイナリ・ファイル (.mlm) として保存されます。このオプションを選択すると、[出力ファイル] フィールドと [次の間隔で保存] フィールドが有効になります。このオプションが特定の接続に対して選択されている場合、モニタは、Mobile Link サーバへの接続時にセッション情報の保存を開始し、切断時に情報の保存を停止します。モニタが Mobile Link サーバに接続するたびに、出力ファイルに含まれるデータが新しいデータで上書きされます。

- ◆ **[出力ファイル]** バイナリ・ファイル (拡張子 .mlm) の名前を入力します。このファイルには、現在のセッションが自動的に保存されます。[参照] ボタンをクリックしてファイルの場所を探すこともできます。

Microsoft Excel などの別のツールでデータを表示する場合は、[ファイル]-[名前を付けて保存] を選択して、カンマ区切りファイル (.csv) にデータを保存します。

ファイル名に拡張子を付ける場合は、.mlm または .csv としてください。Mobile Link がサポートしているファイル形式は、この 2 種類だけです。

- ◆ **[次の間隔で保存]** 上記で指定したファイルにデータを保存する頻度を指定します。デフォルトでは 120 秒ごとに出力ファイルが保存されます。

注意

モニタのデフォルト設定をリストアするには、ファイル *.mlMonitorSettings* を削除します。このファイルはユーザ・プロファイル・ディレクトリにあります。

[オプション] ダイアログ : [テーブル] タブ

このタブでは、[詳細テーブル] ウィンドウ枠に表示されるカラムを設定できます。このタブの設定は、Mobile Link モニタの複数のセッションにまたがって保持されます。

[オプション] ダイアログの [テーブル] タブには、次の項目があります。

[非表示のカラム] リスト [詳細テーブル] ウィンドウ枠に表示可能なカラムのうち、現在表示されていないものがすべてリストされます。[詳細テーブル] ウィンドウ枠に特定のカラム (複数可) を表示するには、[非表示のカラム] リストから目的のカラムを選択し、右矢印をクリックします。選択したカラムが [可視カラム] リストに表示されます。

[可視カラム] リスト [詳細テーブル] ウィンドウ枠に現在表示されているすべてのカラムがリストされます。特定のカラムが [詳細テーブル] ウィンドウ枠に表示されないようにするには、[可視カラム] リストでそのカラムを選択し、左矢印をクリックします。[可視カラム] リストに追加されるカラムは、リストの末尾に追加されます。

[可視カラム] リスト内でのカラムの順番によって、[詳細テーブル] ウィンドウ枠内でのカラムの表示順が決まります。特定のカラムをリスト内の上方へ移動するには、そのカラムを選択してから上矢印をクリックします。特定のカラムをリスト内の下方へ移動するには、そのカラムを選択してから下矢印をクリックします。

ヒント

[詳細テーブル] ウィンドウ枠で特定のカラム見出しをドラッグすることでも、カラムの順番を変更できます。

[リセット] [リセット] をクリックすると、[詳細テーブル] ウィンドウ枠に表示されるカラムのリストが、デフォルトの設定に戻ります。

参照

- ◆ 「[詳細テーブル] ウィンドウ枠」 『Mobile Link - サーバ管理』

[オプション] ダイアログ : [グラフ] タブ

使用率グラフは、Mobile Link モニタのデータをグラフィックで表示します。

[オプション] ダイアログの [グラフ] タブには、次の項目があります。

[使用率統計] リスト 表示されているプロパティを選択またはクリアして、使用率グラフに表示するプロパティを指定します。

- ◆ **[表示]** このオプションを選択すると、プロパティが使用率グラフに表示されます。チェックボックスがオフになっているプロパティは表示されません。
- ◆ **[プロパティ]** 使用率グラフに表示するように選択できるプロパティが表示されます。チェックボックスがオンになっているプロパティだけがグラフに表示されます。

プロパティのリストは Mobile Link サーバまたは `.mlm` ファイルから取得され、`.mlmonitorsettings` に保存されます。`.mlmonitorsettings` を削除した場合は、プロパティにブレースホルダの値が表示されます (19 ~ 24)。

プロパティは次のいずれかです。

- ◆ **[TCP/IP ワーク・キュー]** Mobile Link サーバの低レベル・ネットワーク・レイヤで実行される処理を表します。このレイヤでは、ネットワークに対するパケットの読み込みと書き込みを行います。このキューには、読み込み/書き込み要求が大量に追加されます。このキューは、ネットワークから読み込む必要がある受信データについて通知があったときや、ストリーム・ワークからネットワークへの書き込み要求があったときに大きくなります。

このキューが滞るのは、通常は読み込みまたは書き込みの未処理が原因です。読み込みと書き込みの両方の場合もありますが、通常はいずれか一方です。読み込みが滞るのは、Mobile Link サーバで大量の RAM が使用されていて、メモリ・ページのスワップ・インとスワップ・アウトが頻繁に行われている場合です。この場合は、RAM を増やすことを検討してください。書き込みが滞るのは、クライアントとサーバ間のネットワーク接続の速度が遅い場合です。このキューだけが滞る場合は、CPU の使用率を確認してください。CPU の使用率が高い場合は、読み込みまたはメモリに問題がある可能性があります。CPU の使用率が低い場合は、書き込み速度が遅い可能性があります。より高速のネットワークを使用することを検討してください。

- ◆ **[ストリーム・ワーク・キュー]** Mobile Link サーバの高レベル・ネットワーク・レイヤで実行される処理を表します。このレイヤでは、HTTP、暗号化、圧縮など、高レベル・ネットワーク・プロトコル処理を行います。TCP/IP からの読み込みが多かったり、コマンド・プロセッサ・レイヤからの書き込み要求が多かったりすると、このキューが大きくなります。このキューだけが滞る場合は、HTTP や圧縮など、一部のネットワーク・プロトコルを削除することを検討してください。削除できない場合は、`-sm` オプションを使用して、許可する同時同期数を減らすことを検討してください。[「-sm オプション」](#) 『[Mobile Link - サーバ管理](#)』を参照してください。

- ◆ **[ハートビート・ワーク・キュー]** このキューは、Mobile Link サーバで、サーバ内でパルス・イベントを送信するレイヤを表します。このレイヤでは、たとえば、接続している Mobile Link モニタへの 1 秒に 1 回のサンプル・パルスをトリガします。

このキューは、滞る可能性がほとんどないので、デフォルトで非表示になっています。

- ◆ **[コマンド・プロセッサ・ワーク・キュー]** Mobile Link サーバによって、内部 Mobile Link プロトコル・コマンドを解釈するためと、これらのコマンドを統合データベースに適用するために行われた処理を表します。このキューは、多数の要求を受け取ったときに大きくなります。要求のタイプには、同期要求、リスナ要求、mfiletransfer 要求などがあります。このキューは、統合データベースで同期の処理が行われているときに、さらに同期の要求を受け取ったときにも大きくなります。

このキューだけが滞る場合は、CPU の使用率を確認してください。CPU の使用率が高い場合は、要求数が多すぎる可能性があります。-sm オプションを使用して、許可する同時同期数を減らすことを検討してください。CPU の使用率が低い場合は、統合データベースのパフォーマンスを向上する方法を検討してください。「-sm オプション」『Mobile Link - サーバ管理』を参照してください。

- ◆ **[色]** プロパティごとに [色] をクリックし、使用率グラフでそのプロパティを表す色をドロップダウン・リストから選択します。
- ◆ **[位取り]** [位取り] フィールドをダブルクリックし、グラフに使用する位取りを変更します。

使用率グラフの縦軸の位取りは常に 0 ~ 100 です。これは全体の 0 ~ 100 パーセントを表します。位取りは値ごとに設定します。デフォルトでは、すべての位取りは 5 です。これは、値が 0 ~ 20 の範囲にあり、拡大 (5 倍) すると 0 ~ 100 の範囲になることを示しています。値が 20 を超えると、最大値が 100 の位置になるように位取りが自動的に調整されます。

表示の最大値は、この位取りで 100 を割ることで確認できます。たとえば、TCP/IP ワークキューの位取りが 2.381 の場合、最大値は $(100 / 2.381) = 42$ になります。最大値がいくつであるかは通常は重要ではありません。重要なのは、現在のモニタリング・セッションで見られるように、グラフの上部に向かっているその値がそのプロパティの現在の最大値、つまりそのプロパティの最大負荷に近づいているということです。

グラフが定常的に上部に表示されており、同期スループットが低下している場合、調査が必要な問題がパフォーマンスに関して発生している可能性があります。同様に、1 つ以上の値がグラフ上部に長期間にわたって停滞している場合も、パフォーマンスに問題がある可能性があります。一方、Mobile Link サーバのパフォーマンスが良好なときも、グラフは頻繁に表示上部へ向かいます。これは、Mobile Link サーバがビジー状態であり、ジョブの処理が正常に行われていることを示します。

[選択枠] 使用率グラフの枠線の色をドロップダウン・リストから選択します。デフォルトでは、枠線は [黒] です。

[グリッド線] グリッド線の色をドロップダウン・リストから選択します。デフォルトでは、グリッド線は [明るいグレー] です。

[グラフのバックグラウンド] グラフの背景の色をドロップダウン・リストから選択します。デフォルトでは、グラフの背景は [白] です。

[アンチエイリアス処理でグラフを滑らかにする] アンチエイリアス処理は、グラフィックを滑らかにする方法です。このオプションを選択すると、グラフの見栄えがよくなりますが、描画に時間がかかる可能性があります。

参照

- ◆ 「[使用率グラフ] ウィンドウ枠」『Mobile Link - サーバ管理』

[オプション] ダイアログ : [チャート・レイアウト] タブ

このタブでは、[チャート] ウィンドウ枠の外観と動作を設定します。

[オプション] ダイアログの [チャート・レイアウト] タブには、次の項目があります。

[同期バーの最小の高さ] 同期バーの表示高さの最小値を指定します。[同期バー間の高さのギャップ] オプションとともに、このオプションは [チャート] ウィンドウ枠の垂直スクロール・バーのしきい値を設定します。

[チャート] ウィンドウ枠の同期バーの高さのデフォルトの最小値は、5 ピクセルです。

[同期バー間の高さのギャップ] [チャート] ウィンドウ枠の同期バー間に表示される相対的な縦の間隔を指定します。

[チャート] ウィンドウ枠の同期バー間の間隔のデフォルトのサイズは 150% です。

[横方向のチャート目盛りの表示] 同期時間を示すチャート・ルーラを表示する場合は、このオプションを選択します。このオプションはデフォルトで選択されています。

[縦方向のチャート目盛りの表示] データを同期ユーザでグループ化して示すチャート・ルーラを表示する場合は、このオプションを選択します。このオプションはデフォルトで選択されています。

[接続時は、自動的にチャートをスクロール] Mobile Link サーバへの接続時にチャートを自動的にスクロールする場合は、このオプションを選択します。このオプションはデフォルトで選択されています。

[チャート] ウィンドウ枠に完全な日付と時刻を表示するには、カーソルをルーラの上に置きます。

注意

モニタのデフォルト設定をリストアするには、ファイル `.mlMonitorSettings` を削除します。このファイルはユーザ・プロファイル・ディレクトリにあります。

[オプション] ダイアログ : [チャートの色] タブ

このタブでは、[チャート] ウィンドウ枠で使用する色を指定します。

[チャート] ウィンドウ枠のデフォルトの色スキームでは、アップロードに緑、ダウンロードに赤、開始フェーズと終了フェーズに青を使用します。暗い影は、フェーズ内の以前の部分を示します。

[オプション] ダイアログの [チャートの色] タブには、次の項目があります。

[同期要求] デフォルトでは、同期要求フェーズは [金] です。

[ユーザを認証] デフォルトでは、ユーザ認証フェーズは [濃い緑] です。

[同期の開始] デフォルトでは、同期開始フェーズは [オーシャン・ブルー] です。

[アップロード] デフォルトでは、アップロード・フェーズは [ライム・グリーン] です。

[ダウンロードの準備] デフォルトでは、ダウンロードの準備フェーズは [濃い赤] です。

[ダウンロード] デフォルトでは、ダウンロード・フェーズは [コーラル] です。

[同期の終了] デフォルトでは、同期終了フェーズは [明るい紫青] です。

[選択された同期アウトライン] デフォルトでは、選択した同期のアウトラインは [黒] です。

[同期アウトライン] デフォルトでは、同期のアウトラインは [グレー] です。

[チャートのバックグラウンド] デフォルトでは、[チャート] ウィンドウ枠の背景は [白] です。

注意

モニタのデフォルト設定をリストアするには、ファイル *.mlMonitorSettings* を削除します。このファイルはユーザ・プロファイル・ディレクトリにあります。

[オプション] ダイアログ : [概要] タブ

[オプション] ダイアログの [概要] タブには、次の項目があります。

[概要のウィンドウをメイン・ウィンドウにアタッチしたままにする] [概要] ウィンドウ枠を [チャート] ウィンドウ枠から切り離す場合は、このオプションをクリアにします。

[同期バー間の高さのギャップ] [概要] ウィンドウ枠の同期バー間に表示される縦の間隔の相対サイズを指定します。デフォルトのサイズは 25% です。

[組み込みウォッチの色] ドロップダウン・リストを使用して、事前に定義されたウォッチのコンポーネントの識別に使用する色を選択します。

- ◆ **[アクティブな同期]** アクティブな同期を識別するための色を選択します。デフォルトでは、アクティブな同期は [明るいグレー] です。アクティブな同期の色は、[ウォッチの編集] ダイアログでも設定できます。
- ◆ **[完了した同期]** 完了した同期を識別するための色を選択します。デフォルトでは、完了した同期は [明るいグレー] です。完了した同期の色は、[ウォッチの編集] ダイアログでも設定できます。
- ◆ **[失敗した同期]** 失敗した同期を識別するための色を選択します。デフォルトでは、失敗した同期は [赤] です。失敗した同期の色は、[ウォッチの編集] ダイアログでも設定できます。

[マーキー] マーキー・ツールの枠線の色を選択します。デフォルトでは、枠線は [黒] です。マーキー・ツールとは、[概要] ウィンドウ枠に表示される小さなボックスです。マーキー・ツールを使用することで、[チャート] および [使用率グラフ] ウィンドウ枠に表示されるデータを選択できます。「[マーキー・ツール](#)」『[Mobile Link - サーバ管理](#)』を参照してください。

[概要のバックグラウンド] [概要] ウィンドウ枠の背景色を選択します。デフォルトでは、背景は [白] です。

注意

モニタのデフォルト設定をリストアするには、ファイル `.mlMonitorSettings` を削除します。このファイルはユーザ・プロファイル・ディレクトリにあります。

[サンプル] プロパティ・シート : [サンプル] タブ

[サンプル] プロパティ・シートには、時間間隔に関する詳細情報が表示されます。各時間間隔は約 1 秒間です。

[サンプル] プロパティ・シートの [サンプル] タブには、次の項目があります。

[間隔] 1 秒間の間隔の情報が表示されます。

- ◆ **[サンプル]** サンプルの番号が表示されます。サンプルには、モニタによって、受け取った順序で番号が付けられます。
- ◆ **[起動時刻]** 約 1 秒間のサンプル時間の開始時刻が表示されます。
- ◆ **[終了時刻]** 約 1 秒間のサンプル時間の終了時刻が表示されます。

[統計情報] 次のカラムが表示されます。

- ◆ **[色]** プロパティを表すために使用されている色が表示されます。
- ◆ **[プロパティ]** プロパティのタイプが表示されます。「[Mobile Link の統計のプロパティ](#)」
『[Mobile Link - サーバ管理](#)』を参照してください。
- ◆ **[値]** プロパティの値が表示されます。
- ◆ **[制限]** プロパティに許可されている最大値が表示されます。

注意

プロパティのリストは、Mobile Link サーバまたは開いた .mlm ファイルから取得され、Mobile Link サーバの言語が使用されています。モニタで別の言語を使用している場合は、一部の文字が正常に表示されない可能性があります。

[サンプル] プロパティ・シート : [範囲] タブ

[範囲] タブには、プロパティ・シートを開いたときに表示されていたサンプルの範囲全体の平均または合計が表示されます。範囲の統計情報は、[範囲] タブの [計算] ボタンをクリックしたときに計算されます。

[サンプル] プロパティ・シートの [範囲] タブには、次の項目があります。

[間隔] 1 秒間の間隔の情報が表示されます。

- ◆ **[サンプル]** 複数あるサンプルの番号の範囲が表示されます。サンプルには、モニタによって、受け取った順序で番号が付けられます。
- ◆ **[起動時刻]** サンプル範囲のサンプル時間の開始時刻が表示されます。
- ◆ **[終了時刻]** サンプル範囲のサンプル時間の終了時刻が表示されます。

[統計情報] 次のカラムが表示されます。

- ◆ **[色]** プロパティを表すために使用されている色が表示されます。
- ◆ **[プロパティ]** プロパティのタイプが表示されます。
- ◆ **[値]** 選択した範囲でのプロパティの平均値が表示されます。
- ◆ **[制限]** プロパティに許可されている最大値が表示されます。

注意

プロパティのリストは、Mobile Link サーバまたは開いた *.mlm* ファイルから取得され、Mobile Link サーバの言語が使用されています。モニタで別の言語を使用している場合は、一部の文字が正常に表示されない可能性があります。

[セッション] プロパティ・シート : [一般] タブ

[セッション] プロパティ・シートの [一般] タブには、次の項目があります。

[名前] セッションの保存先ファイルの名前。セッションをファイルに保存するときに名前を付けます (この操作は、[オプション] ダイアログの [一般] タブで行います)。セッションがファイルに保存されていない場合は、セッションの名前が表示されません。

[サーバ] 現在のセッションにおけるサーバの名前。

[サーバの言語] サーバの言語。

[同期の数] セッションの同期の合計数。

[置換された同期] 最大同期数が原因で置き換えられた同期の数。最大同期数は、[オプション] ダイアログの [一般] タブで変更できます。

[モニタ・セッションの開始時刻] セッションが開始した日付と時刻。.csv ファイルを開いた場合、これは最初の同期の開始時刻です。

[モニタ・セッションの終了時刻] セッションが終了した日付と時刻。.csv ファイルを開いた場合、これは最後の同期の終了時刻です。

[モニタ・セッションの期間] セッションの合計長。.csv ファイルを開いた場合、これは最初の同期の開始から最後の同期の終了までの時間です。

[セッション] プロパティ・シート : [統計情報] タブ

[セッション] プロパティ・シートの [統計情報] タブには、次の項目があります。

[色] プロパティを表すために使用されている色が表示されます。

[プロパティ] プロパティのタイプが表示されます。

[値] プロパティの値が表示されます。

[制限] プロパティに許可されている最大値が表示されます。

注意

プロパティのリストは、Mobile Link サーバまたは開いた *.mlm* ファイルから取得され、Mobile Link サーバの言語が使用されています。モニタで別の言語を使用している場合は、一部の文字が正常に表示されない可能性があります。

[同期] プロパティ・シート : [一般] タブ

[同期] プロパティ・シートの [一般] タブには、次の項目があります。

[全体的な同期統計情報] これらの統計は、選択した同期に関する一般情報を提供します。

- ◆ **[同期]** Mobile Link モニタがセッション内の各同期に対して割り当てるユニークな数値。
- ◆ **[ユーザ]** Mobile Link クライアントの名前。
- ◆ **[バージョン]** 同期バージョンの名前。
- ◆ **[起動時刻]** 同期開始の日付/時刻 (ISO-8601 拡張フォーマット)。フォーマットは、YYYY-MM-DD hh:mm:ss.sss、または YYYY-MM-DD hh:mm:ss,sss のいずれかです。どちらになるかは、ロケール設定によって決まります。

この時刻は、クライアントが同期を要求した時刻よりも後になる可能性があります。

- ◆ **[終了時刻]** 同期終了の日付/時刻 (ISO-8601 拡張フォーマット)。フォーマットは、YYYY-MM-DD hh:mm:ss.sss、または YYYY-MM-DD hh:mm:ss,sss のいずれかです。どちらになるかは、ロケール設定によって決まります。
- ◆ **[アクティブ]** 同期が進行中の場合ははい、進行中でない場合はいいえです。
- ◆ **[完了]** 同期が正常に完了した場合ははい、正常に完了しなかった場合はいいえです。

[同期フェーズ統計情報] これらの統計は、同期の各フェーズに関する情報を提供します。

- ◆ **[同期要求]** 同期要求を受け取ってから、ユーザの認証を開始するまでの時間。
- ◆ **[ユーザを認証]** 同期要求のフォーマットが正しいことを確認し、ユーザを認証するために必要な時間。
- ◆ **[同期の開始]** begin_synchronization イベントに必要な時間。
- ◆ **[アップロード]** アップロードしたデータを統合データベースに適用するために必要な時間。
- ◆ **[ダウンロードの準備]** prepare_for_download イベントに必要な時間。
- ◆ **[ダウンロード]** 統合データベースからデータをフェッチし、リモート・データベースにダウンロードするために必要な時間。
- ◆ **[同期の終了]** end_synchronization イベントに必要な時間。

参照

- ◆ 『Mobile Link の統計のプロパティ』 『Mobile Link - サーバ管理』

[同期] プロパティ・シート : [アップロード] タブ

[同期] プロパティ・シートの [アップロード] タブには、次の項目があります。

[統計情報の対象] 同期されたすべてのテーブルまたは個々のテーブルに関するアップロード統計の表示を選択できます。.csv ファイルを開いている場合は、個々のテーブルの統計を表示できません。

[警告の数] アップロードに対して発生した警告の総数。

[エラーの数] アップロードに対して発生したエラーの総数。

[挿入されたロー] 同期クライアントからアップロードされたロー挿入の数。

[削除されたロー] 同期クライアントからアップロードされたロー削除の数。

[更新されたロー] 同期クライアントからアップロードされたロー更新の数。

[競合した挿入] 競合が検出されたアップロード済み挿入の数。

[競合した削除] 競合が検出されたアップロード済み削除の数。

[競合した更新] 競合が検出されたアップロード済み更新の数。

[無視された挿入] 無視されたアップロード済み挿入の数。

[無視された削除] 無視されたアップロード済み削除の数。

[無視された更新] 無視されたアップロード済み更新の数。

[合計バイト数] 同期クライアントからアップロードされた総バイト数。

[デッドロック] アップロード中に検出された統合データベース内のデッドロック数。

[合計ロー数] 同期クライアントからアップロードされたローの総数。

参照

- ◆ 「[Mobile Link の統計のプロパティ](#)」 『[Mobile Link - サーバ管理](#)』

[同期] プロパティ・シート : [ダウンロード] タブ

[同期] プロパティ・シートの [ダウンロード] タブには、次の項目があります。

[統計情報の対象] 同期されたすべてのテーブルまたは個々のテーブルに関するダウンロード統計の表示を選択できます。.csv ファイルを開いている場合は、個々のテーブルの統計を表示できません。

[警告の数] ダウンロード中に発生した警告の数。

[エラーの数] ダウンロード中に発生したエラーの数。

[フェッチされたロー] Mobile Link サーバによって (download_cursor スクリプトを使用して) 統合データベースからフェッチされたローの数。

[削除対象のロー] Mobile Link サーバによって (download_delete_cursor スクリプトを使用して) 統合データベースからフェッチされたロー削除の数。

[フィルタされたロー] クライアントがアップロードしたローと一致するため、Mobile Link クライアントにダウンロードされなかったフェッチ済みローの数。

[合計バイト数] 同期クライアントにダウンロードされたバイト数。

[合計ロー数] 同期クライアントにダウンロードされたローの総数。

参照

- ◆ 「[Mobile Link の統計のプロパティ](#)」 『[Mobile Link - サーバ管理](#)』

[同期] プロパティ・シート : [同期] タブ

[同期] プロパティ・シートの [同期] タブには、次の項目があります。

[統計情報の対象] 同期されたすべてのテーブルまたは個々のテーブルに関する同期統計の表示を選択できます。.csv ファイルを開いている場合は、個々のテーブルの統計を表示できません。

[警告の数] 同期に対して発生した警告の総数。

[エラーの数] 同期に対して発生したエラーの総数。

[デッドロック] 同期に対して発生したデッドロックの総数。

[テーブルの数] 同期に関係したクライアント・テーブルの数。

[接続リトライ] Mobile Link サーバが統合データベースへの接続をリトライした回数。

参照

- ◆ [「Mobile Link の統計のプロパティ」](#) 『Mobile Link - サーバ管理』

[ウォッチ・マネージャ] ダイアログ

ウォッチ・マネージャでは、警告を受信した同期や長時間を要する同期など、指定した基準を満たす同期を視覚的に区別できます。

このダイアログには、次の項目があります。

[使用可能なウォッチ] リスト このウィンドウ枠には、使用可能なすべてのウォッチがリストされます。[アクティブ]、[完了]、[失敗]の3つの事前に定義されたウォッチがあります。新規ウォッチを作成すると、このウォッチ・リストに追加されます。

- ◆ **[新規]** [新しいウォッチ] ダイアログを開き、新規ウォッチを作成できます。
- ◆ **[編集]** [ウォッチの編集] ダイアログを開き、ウォッチ条件の追加または削除、選択したウォッチの同期画面の設定ができます。[使用可能なウォッチ] リストにある任意のウォッチを編集できます。事前に定義されたウォッチ ([アクティブ]、[完了]、[失敗]) の場合は、チャート・パターンと全体色だけを変更できます。
- ◆ **[削除]** 選択したウォッチを [使用可能なウォッチ] ウィンドウ枠から削除します。

[現在のウォッチ] リスト アクティブなウォッチを優先順位に基づいてリストします。これらのウォッチを編集して、表示方法を変更できます。また、[現在のウォッチ] ウィンドウ枠から削除すると、これらのウォッチを非アクティブにできます。

[現在のウォッチ] ウィンドウ枠でのウォッチの順序は重要です。リストの上にあるウォッチから先に処理されます。[上へ移動] ボタンと [下へ移動] ボタンを使用して、[現在のウォッチ] ウィンドウ枠でのウォッチの順序を編成できます。

- ◆ **[上へ移動]** [現在のウォッチ] ウィンドウ枠のリストで、選択したウォッチを1つ上の位置に移動します。
- ◆ **[下へ移動]** [現在のウォッチ] ウィンドウ枠のリストで、選択したウォッチを1つ下の位置に移動します。

[追加] [使用可能なウォッチ] ウィンドウ枠で選択したウォッチを [現在のウォッチ] のリストに追加します。

[削除] 選択したウォッチを [現在のウォッチ] のリストから削除します。

[すべて追加] 使用可能なすべてのウォッチを [現在のウォッチ] ウィンドウ枠に追加します。

[すべて削除] [現在のウォッチ] ウィンドウ枠からすべてのウォッチを削除します。

参照

- ◆ 「統計のカスタマイズ」 『[Mobile Link - サーバ管理](#)』

クエリ・エディタのヘルプ

目次

クエリ・エディタの概要	320
[テーブル] タブ	323
[ジョイン] タブ	325
[カラム] タブ	327
[INTO] タブ	328
[WHERE] タブ	329
[GROUP BY] タブ	330
[HAVING] タブ	332
[ORDER BY] タブ	333
式エディタ	334
[クエリ結果] ウィンドウ枠	336
[結果 SQL] ウィンドウ枠	337

クエリ・エディタの概要

クエリ・エディタは、SELECT 文の構築を支援するツールです。クエリ・エディタで SQL クエリを作成したり、それらの SQL クエリをインポートして編集したりできます。クエリが完成したら、[OK] をクリックし、クエリを Sybase Central または Interactive SQL にエクスポートして処理します。

クエリ・エディタには SQL クエリのコンポーネントを設定するための一連のタブがありますが、そのほとんどはオプションです。タブは SQL クエリが通常構築される順序で表示されています。

タブ	説明
[テーブル] タブ 323 ページ	クエリでテーブルを指定するには、このタブを使用します。
[ジョイン] タブ 325 ページ	テーブルのデータを結合するためのジョイン方式を指定するには、このタブを使用します。クエリに複数のテーブルを含める場合は、それらのテーブルのデータを結合するためのジョイン方式を指定してください。[テーブル] タブに追加したテーブルにジョイン方式を指定しない場合、クエリ・エディタから 1 つの方式が提案されます。テーブルの間に外部キー関係がある場合は、その関係に基づくジョイン条件が生成されます。それ以外の場合は直積が提案されます。クエリをインポートするとき、クエリ・エディタはユーザが指定したジョイン方式をそのまま受け入れます (SQL Anywhere の場合とは異なり、指定のない JOIN が、デフォルトで KEY JOIN になることはありません)。
[カラム] タブ 327 ページ	結果セットのカラムを指定するには、このタブを使用します。カラムを指定しないと、すべてのカラムが表示されます。
[INTO] タブ 328 ページ	結果を変数に割り当てるには、このタブを使用します。
[WHERE] タブ 329 ページ	結果セットのローを制限する条件を指定するには、このタブを使用します。
[GROUP BY] タブ 330 ページ	結果セットのローをグループ化する場合は、このタブを使用します。
[HAVING] タブ 332 ページ	グループの値に基づいて結果セットのローを制限するには、このタブを使用します。
[ORDER BY] タブ 333 ページ	ローをソートするには、このタブを使用します。

クエリ・エディタには、次のツールもあります。

ダイアログ	説明
[式エディタ] 334 ページ	検索条件の構築や、計算カラムの定義には、式エディタを使用します。

ダイアログ	説明
[抽出テーブルまたはサブクエリ] ダイアログ	メインのクエリ・エディタとほとんど同じこのダイアログを使用して、抽出テーブルまたはサブクエリを作成します。

クエリ・エディタの各コンポーネントには、コンテキスト別のオンライン・ヘルプがあります。これには、タブの使用方法的説明や、関連する概念や使用方法を示す SQL Anywhere マニュアルへのリンクが含まれています。

クエリ・エディタの使用

クエリ・エディタを開くには、Interactive SQL を開いて、データベースに接続し、[ツール]-[クエリの編集] を選択します。SQL コードを Interactive SQL で選択していた場合は、選択したコードがクエリ・エディタに自動的にインポートされます。

クエリ・エディタでクエリの作成が終わったら、[OK] をクリックして、クエリを Interactive SQL の [SQL 文] ウィンドウ枠に書き込みます。

クエリ・エディタでクエリを作成するときは SQL コードを使用する必要はありません。ただし、次の方法ではクエリ・エディタで SQL を使用できます。

- ◆ Interactive SQL の [SQL 文] ウィンドウ枠でクエリを作成して、コードを強調表示してからクエリ・エディタを開くと、クエリ・エディタにクエリをインポートできます。
- ◆ クエリ・エディタを使用しているときはいつでも、ダイアログの下部の [SQL] をクリックすると、構築しているクエリの SQL コードを確認できます。ここでコードを直接編集でき、クエリ・エディタのユーザ・インタフェースのフィールドが自動的に更新されます。

Interactive SQL または Sybase Central でクエリ・エディタを設定して、SQL が完全なフォーマットで作成されるように指定できます。つまり、すべてのテーブルとカラムの名前が完全に修飾され、名前が引用符で囲まれます。このような特別なフォーマットは通常は必要ありませんが、これによってあらゆる状況において SQL の動作が保証されます。起動時にテーブルのリストを取得することもできます。

クエリ・エディタの制限事項

クエリ・エディタは、SQL Anywhere の SELECT 文を構築します。ビューを作成するには設計されていませんが、Interactive SQL でビューを作成してからクエリ・エディタで参照することはできます。また、SELECT 文以外の、UPDATE 文などの SQL 文の作成にも対応していません。作成されるのは単独の SELECT 文であり、複数の SELECT 文の UNION 演算や INTERSECT 演算は構築されません。さらに、クエリ・エディタでは Transact-SQL 構文はサポートされません。

その他の情報

- ◆ データ選択の概要については、「クエリ：テーブルからのデータの選択」『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』を参照してください。
- ◆ 参照マニュアルについては、「SELECT 文」『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』を参照してください。

- ◆ データ選択の詳細については、「[クエリ：テーブルからのデータの選択](#)」『[SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法](#)』を参照してください。

[テーブル] タブ

[テーブル] タブを使用して、クエリに含めるテーブル、抽出テーブル、ビューを選択します。抽出テーブルは [抽出テーブルの作成] ボタンを使用して作成できます。クエリ・エディタではビューは作成できませんが、Interactive SQL で作成したビューをクエリ・エディタで参照することはできます。

データが必要なテーブルおよびジョインに使用するテーブルを指定します。クエリに複数のテーブルまたはビューを含める場合は、[ジョイン] タブを使用してテーブルをジョインする方法を指定してください。

警告

クエリに複数のテーブルを含めるときに、大規模なテーブルの場合は、テーブルを追加するたびに [ジョイン] タブでジョイン方式を定義してください。クエリ・エディタはデフォルトで直積を使用することがあり、ユーザの操作に対応してクエリを処理するため、ジョイン方式を変更しないと、処理速度が非常に遅くなる可能性があります。

ダイアログの項目

[テーブル・パターン] [一致するテーブル] ボックスでテーブルを制限するには、テーブルの名前または名前の一部を入力します。パターンにはワイルドカード文字を使用できます。たとえば、SYS という文字で始まるテーブルのみを取得するには、SYS% と入力します。

テーブル・パターンでのワイルドカード文字の使用方法の詳細については、「[LIKE 探索条件](#)」『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』を参照してください。

[所有者のパターン] [一致するテーブル] ボックスでテーブルを制限するには、所有者の名前または名前の一部を入力します。パターンにはワイルドカード文字を使用できます。たとえば、SYS という文字で始まるテーブルのみを取得するには、「SYS%」と入力します。

所有者パターンでのワイルドカード文字の使用方法の詳細については、「[LIKE 探索条件](#)」『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』を参照してください。

[テーブルのタイプ] [一致するテーブル] ボックスでテーブルを制限するには、ドロップダウン・リストでテーブルのタイプを選択します。たとえば、システム・テーブルのみを表示するように選択できます。

[一致するテーブル] 上の条件と一致するデータベース内のすべてのテーブルがリストされます。デフォルトはすべてのテーブルです。

[選択したテーブル] テーブルをクエリに追加するには、[一致するテーブル] ボックスでテーブルを選択して右矢印をクリックします。選択したテーブルが [選択したテーブル] ボックスに表示されます。クエリに対して抽出テーブルを作成するには、中央のアイコン (2つの矢印の間) をクリックします。複数のテーブルを追加する場合は、[ジョイン] タブを使用してジョイン方式を指定してください。[選択したテーブル] ボックスでテーブルを選択してクエリに追加するとき、デフォルトではテーブルは直積でジョインされます。

[クエリ結果] ダイアログの下部の [結果] をクリックすると、クエリの結果が表示されます。クエリにエラーがあった場合には、エラー・メッセージが表示されます。

【結果 SQL】 ダイアログの下部の [SQL] をクリックすると、クエリの完全にフォーマットされた SQL コードが表示されます。この SQL は、ユーザが通常作成する SQL とは少し異なります。

ビューと抽出テーブルについて

テーブルと同じくビューや抽出テーブルをクエリに追加できます。

ビューは、データベースにオブジェクトとして格納されている SELECT 文です。ビューはクエリ・エディタでは作成できませんが、Interactive SQL で作成して、テーブルとしてクエリ・エディタに入力することはできます。

抽出テーブルはクエリ・エディタで作成できます。抽出テーブルを使用すると、FROM 句にクエリをネストできます。抽出テーブルを使用すると、ビューを作成せずに、グループのグループ化を実行したり、グループとのジョインを組み立てたりできます。

その他の情報

- ◆ クエリ・エディタの詳細については、「[クエリ・エディタの概要](#)」 320 ページを参照してください。
- ◆ テーブル指定の概要については、「[FROM 句：テーブルの指定](#)」 『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』を参照してください。
- ◆ テーブル指定の参照情報については、「[FROM 句](#)」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』を参照してください。
- ◆ 抽出テーブルの参照情報については、「[FROM 句](#)」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』を参照してください。
- ◆ サブクエリの概要については、「[サブクエリの使用](#)」 『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』を参照してください。
- ◆ サブクエリの詳細については、「[探索条件内のサブクエリ](#)」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』を参照してください。

[ジョイン] タブ

クエリに複数のテーブルがある場合は、このタブを使用します。

クエリに複数のテーブルを含める場合は、何らかの方法でテーブルをジョインしてください。このタブを使用するとジョインを定義できます。

デフォルトのジョイン

[テーブル] タブでテーブルを指定すると、クエリ・エディタは、デフォルトのジョイン条件を生成しようとしています。これには2つの理由があります。1つめの理由は、ユーザがクエリを作成したとおりにクエリ・エディタがクエリを処理するためです。デフォルトのジョインがなければ、テーブルから直積が作成され、処理速度が遅くなることがあります。2つめの理由は、クエリ・エディタからユーザの操作に応じたジョイン方式が提案されるためです。

クエリ・エディタの [テーブル] タブでテーブルを追加すると、クエリ・エディタは、テーブル間に外部キー関係が作成されたかどうかを調べます。外部キーが1つある場合は、これを使用して ON 条件が生成されます。複数の外部キー関係がある場合は、最初に検出されたものが使用されます。外部キーがない場合は、ON 句は生成されずに、テーブルが直積になります。

[クエリ・エディタ] ダイアログの下部にある [SQL] タブをクリックすると、いつでもクエリを確認できます。[SQL] タブでジョイン方式を直接編集したり、[ジョイン] タブのユーザ・インタフェースを使用してジョイン方式を変更したりできます。

キー・ジョイン、ON 条件、直積の詳細については、「[ジョイン：複数テーブルからのデータ検索](#)」『[SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法](#)』を参照してください。

ヒント：[ジョイン] タブのすべてのフィールドはサイズを変更できます。クエリ・エディタも周囲をドラッグしてサイズを拡大できます。場合によっては、テーブル名を読み取るためにフィールドやダイアログのサイズを変更する必要があります。

ダイアログの項目

[左側テーブル式] ドロップダウン・リストからテーブルを選択します。使用できるのは、[テーブル] タブで入力したテーブルだけです。外部ジョインでは、テーブルを左右のどちらに配置するかが重要です。

[ジョイン・タイプ] ドロップダウン・リストからジョイン・タイプを選択します。

「[ジョインしたテーブル](#)」『[SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法](#)』を参照してください。

[右側テーブル式] ドロップダウン・リストからテーブルを選択します。使用できるのは、[テーブル] タブで入力したテーブルだけです。外部ジョインでは、テーブルを左右のどちらに配置するかが重要です。

[条件] 必要であればダブルクリックして ON 条件を作成します。クエリ・エディタによってキーワード ON が挿入されます。キー・ジョインとナチュラル・ジョインでは、ON 条件が SQL Anywhere によって生成されます。

ON 条件の詳細については、「[明示的なジョイン条件 \(ON 句\)](#)」『[SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法](#)』を参照してください。

[追加]／[削除] 行の追加または削除に使用します。行を選択するには、その行の左側にあるグレーの円をクリックします。

空白の行は削除してください。この処理はクエリのテーブルには影響ありません。テーブルの追加または削除には、[テーブル] タブを使用してください。

[クエリ結果] このウィンドウ枠には、クエリの結果、またはクエリにエラーがあった場合にはエラー・メッセージが表示されます。

[結果 SQL] ダイアログの下部の [SQL] をクリックすると、クエリの SQL コードが表示されます。

[ジョイン] タブの使用

複数のテーブルをクエリに追加するとき、クエリ・エディタはデフォルトのジョイン方式を作成しようとします。テーブル間に外部キー関係がない場合は、デフォルトは直積になります。ほとんどの場合、直積は望ましいとはいえません。

ジョイン方式を追加または編集するには、テーブル、ジョイン・タイプ、もう1つのテーブルをすべてドロップダウン・リストから選択します。または、[SQL] タブをクリックしてコードを直接編集します。

トラブルシューティング

ジョインが正しくないことを示すエラー・メッセージを受け取ったら、ウィンドウの下部の [SQL] タブをクリックして SQL コードを調べます。特に、[ジョイン] タブで行の追加や削除を行った場合は、空の引用符や余分なカンマがコードに残っていることがあります。たとえば、次のクエリではエラー・メッセージが生成されます。この場合には、*SalesOrders* の後ろにある中身が空の引用符を削除する必要があります。

```
FROM ("Customers"  
JOIN "SalesOrders")"  
JOIN "SalesOrderItems"
```

その他の情報

- ◆ クエリ・エディタの詳細については、「[クエリ・エディタの概要](#)」 320 ページを参照してください。
- ◆ ジョインの詳細については、「[ジョイン：複数テーブルからのデータ検索](#)」 『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』を参照してください。

[カラム] タブ

このタブを使用して、結果セットに表示されるカラムを制限します。カラム、カラム・エイリアス、計算カラム、またはサブクエリを指定できます。サブクエリは式エディタを使用して指定します。

ダイアログの項目

[使用可能なカラム] このボックスには、クエリに対して選択したすべてのテーブルと各テーブルのすべてのカラムがリストされます。

[選択したカラム] デフォルトではすべてのカラムがクエリに対して選択されます。カラムを削除するには、[選択したカラム] ボックスでそのカラムを選択して左矢印をクリックします。カラムを結果セットに表示するには、カラムまたは一連のカラムを [使用可能なカラム] ボックスで選択して右矢印をクリックします。[選択したカラム] ボックス内のカラムを並べ替えるには、上矢印と下矢印を使用します。

同じカラムを 2 回以上選択すると、エイリアスが適用されます。エイリアス名は編集できます。

[DISTINCT] 結果セットのローが重複しないようにする場合は、[DISTINCT] を選択します。

注意 : 多くの場合、DISTINCT ([個別]) を指定すると、文の実行に時間が非常に長くかかります。したがって、DISTINCT ([個別]) を使用するのには、必要な場合だけにしてください。また、DISTINCT では NULL が重複として処理されるため、DISTINCT を選択すると、結果に返される NULL は 1 つのみになります。

[取得するローを制限] 結果セットの最初のローのみ、または指定した数のローのみを取り出すときに選択します。選択内容に関係なく、クエリ・エディタに表示されるローの最大数は 25 です。

[クエリ結果] ダイアログの下部の [結果] をクリックすると、クエリの結果が表示されます。クエリにエラーがあった場合には、エラー・メッセージが表示されます。

[結果 SQL] ダイアログの下部の [SQL] をクリックすると、クエリの SQL コードが表示されます。

サブクエリの追加

クエリ・エディタでサブクエリを追加するには、カラムのリストの間にある [計算カラムの追加] ボタンをクリックします。式エディタが表示されます。式エディタで、[NOT] ボタンの横にある [サブクエリ] ボタンをクリックします。

その他の情報

- ◆ クエリ・エディタの詳細については、「[クエリ・エディタの概要](#)」 320 ページを参照してください。
- ◆ カラム選択の詳細については、「[SELECT リスト : カラムの指定](#)」 『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』を参照してください。
- ◆ サブクエリ作成の詳細については、「[式エディタ](#)」 334 ページを参照してください。

[INTO] タブ

結果を変数に割り当てるには、このタブを使用します。

ダイアログの項目

[INTO 変数のインクルード] [INTO 変数] 列で変数名を編集する場合は、このオプションを選択します。

[選択したカラム] このボックスには、クエリに対して選択したすべてのカラムがリストされます。

[INTO 変数] 各 select リスト項目の値を受け取るための変数のリストです。このフィールドに変数名を直接入力できます。

[クエリ結果] ダイアログの下部の [結果] をクリックすると、クエリの結果が表示されます。クエリにエラーがあった場合には、エラー・メッセージが表示されます。

[結果 SQL] ダイアログの下部の [SQL] をクリックすると、クエリの SQL コードが表示されます。

INTO について

INTO が使用されるのはプロシージャとトリガのみです。これは結果セットの宛先を指定します。カラムごとに1つの変数を指定してください。

その他の情報

- ◆ クエリ・エディタの詳細については、「[クエリ・エディタの概要](#)」 320 ページを参照してください。

[WHERE] タブ

このタブを使用して、結果セットのローを制限します。

ダイアログの項目

[基準] [基準] ウィンドウ枠を使用して WHERE 条件を入力します。このウィンドウ枠に直接入力するか、式エディタを使用します。既存の式を編集する場合は、その式を強調表示してから式エディタを開いてください。強調表示をしないと、式エディタで作成する式は既存の式の後に追加されます。

式エディタ [基準] ウィンドウ枠の右下にある [計算式] アイコンをクリックし、式エディタを開いて WHERE 条件を構築します。

[クエリ結果] ダイアログの下部の [結果] をクリックすると、クエリの結果が表示されます。クエリにエラーがあった場合には、エラー・メッセージが表示されます。

[結果 SQL] ダイアログの下部の [SQL] をクリックすると、クエリの SQL コードが表示されます。

その他の情報

- ◆ クエリ・エディタの詳細については、「[クエリ・エディタの概要](#)」 320 ページを参照してください。
- ◆ 検索条件の概要については、「[WHERE 句：ローの指定](#)」 『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』を参照してください。
- ◆ 検索条件の詳細については、「[探索条件](#)」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』を参照してください。

[GROUP BY] タブ

結果セットのローをグループ化する場合は、このタブを使用します。

ダイアログの項目

[使用可能なカラム] このボックスには、クエリに対して選択したすべてのテーブルと各テーブルのすべてのカラムがリストされます。

[GROUP BY カラム] カラムをグループ化するには、[使用可能なカラム] ボックスで1つのカラムまたは一連のカラムを選択して、右矢印をクリックします。カラムを削除するには、[GROUP BY カラム] ボックスでそのカラムを選択して左矢印をクリックします。[GROUP BY カラム] ボックスでカラムをスクロール表示するには、上矢印と下矢印を使用します。

[式エディタ] 右矢印と左矢印の間の[計算式] アイコンをクリックし、式エディタを開いて GROUP BY 条件を構築します。

[CUBE] ボタン CUBE 演算クエリを作成するには、このボタンをクリックします。CUBE を使用すると、GROUP BY 句を含むクエリの結果セットに小計ローが追加され、指定された変数の可能なすべての組み合わせがクエリに提供されます。

[ROLLUP] ボタン ROLLUP 演算クエリを作成するには、このボタンをクリックします。ROLLUP は、GROUP BY 句を持つクエリの結果セットに小計ローを追加します。

[セット] ボタン 連結された GROUPING SETS 演算クエリを作成するには、このボタンをクリックします。ROLLUP、CUBE と同じく、この演算を使用すると、GROUP BY 句を含むクエリの結果セットに、小計ローが追加されます。

[GROUPING SETS] このオプションを選択すると、クエリに GROUPING SETS が追加されます。

[クエリ結果] ダイアログの下部の[結果] タブをクリックすると、クエリの結果が表示されます。クエリにエラーがあった場合には、エラー・メッセージが表示されます。

[結果 SQL] ダイアログの下部の[SQL] タブをクリックすると、クエリの SQL コードが表示されます。

GROUP BY 条件について

カラム、エイリアス名、または関数によってグループ分けできます。クエリの結果には、指定したカラム、エイリアス、または関数の中の個別の値の各セットに対し1つのローが入ります。NULL を含むローはすべて1つのセットとして処理されます。テーブル・リストのローの各グループに対する結果にはローが1つずつ含まれるため、結果ローはグループとして頻繁に参照されます。集合関数をこれらのグループに適用して、意味のある結果を取得することができます。

GROUP BY を使用するときは、[カラム] タブ、[HAVING] タブ、[ORDER BY] タブでは、[GROUP BY] タブで指定されていない識別子を参照しないでください。[カラム] タブと [HAVING] タブに集合関数が含まれる場合は例外です。

その他の情報

- ◆ クエリ・エディタの詳細については、「[クエリ・エディタの概要](#)」 320 ページを参照してください。

- ◆ GROUP BY の概要については、「[グループ分けされたデータに対する集合関数の適用](#)」『[SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法](#)』を参照してください。
- ◆ GROUP BY の詳細については、「[GROUP BY 句：クエリ結果のグループへの編成](#)」『[SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法](#)』を参照してください。
- ◆ ROLLUP の詳細については、「[ROLLUP の使用](#)」『[SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法](#)』を参照してください。
- ◆ CUBE の詳細については、「[CUBE の使用](#)」『[SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法](#)』を参照してください。
- ◆ GROUPING SETS の詳細については、「[GROUP BY GROUPING SETS](#)」『[SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法](#)』を参照してください。

[HAVING] タブ

グループの値に基づいて結果セットのローを制限するには、このタブを使用します。

ダイアログの項目

[基準] [基準] ウィンドウ枠を使用して HAVING 条件を入力します。このウィンドウ枠に直接入力するか、式エディタを使用します。既存の式を編集する場合は、その式を強調表示してから式エディタを開いてください。強調表示しないと、式エディタで作成する式が既存の式の後に追加されます。

[式エディタ] [基準] ウィンドウ枠の右下にある [計算式] アイコンをクリックし、式エディタを開いて HAVING 条件を構築します。

[クエリ結果] ダイアログの下部の [結果] をクリックすると、クエリの結果が表示されます。クエリにエラーがあった場合には、エラー・メッセージが表示されます。

[結果 SQL] ダイアログの下部の [SQL] をクリックすると、クエリの SQL コードが表示されます。

HAVING 条件について

HAVING 条件を使用できるのは、文に GROUP BY 句があるか、[カラム] タブで選択されたカラムが集合関数のみである場合です。HAVING 句の中で参照されるカラム名は、GROUP BY 句の中に入れるか、または HAVING 句の中の集合関数に対するパラメータとして使用する必要があります。

その他の情報

- ◆ クエリ・エディタの詳細については、「[クエリ・エディタの概要](#)」 320 ページを参照してください。
- ◆ HAVING の概要については、「[グループ分けされたデータに対する集合関数の適用](#)」 『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』を参照してください。
- ◆ HAVING の詳細については、「[HAVING 句：データ・グループの選択](#)」 『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』を参照してください。

[ORDER BY] タブ

このタブを使用して、結果セットのローをソートします。

ダイアログの項目

[使用可能なカラム] このボックスには、クエリに対して選択したすべてのテーブルと各テーブルのすべてのカラムがリストされます。[カラム] タブで定義した計算カラムもすべてリストされます。

[ORDER BY カラム] このボックスには、ソート基準として選択したカラムが保存されます。あるカラムをソートするには、[使用可能なカラム] ボックスで1つのカラムまたは一連のカラムを選択して、右矢印をクリックします。カラムを削除するには、[ORDER BY カラム] ボックスでそのカラムを選択して左矢印をクリックします。カラムの評価順序を指定するには上矢印と下矢印を使用します。カラムのエイリアスによってもソートできます。

[式エディタ] 右矢印と左矢印の間の [計算式] アイコンをクリックし、式エディタを開いて ORDER BY 条件を構築します。

[クエリ結果] ダイアログの下部の [結果] をクリックすると、クエリの結果が表示されます。クエリにエラーがあった場合には、エラー・メッセージが表示されます。

[結果 SQL] ダイアログの下部の [SQL] をクリックすると、クエリの SQL コードが表示されます。

ORDER BY 条件について

ORDER BY リストの各項目には、昇順の場合 (デフォルト) は上矢印、降順の場合は下矢印のラベルを付けることができます。昇順から降順に並べ替えるには、矢印をクリックします。

特定の順序でローが返されるようにする唯一の方法は ORDER BY を使用することです。ORDER BY 句がない場合は、SQL Anywhere が最も効率のよい順序でローを返します。つまり、ローに最後にアクセスした日付やその他の要因によって、結果セットでの表示順序が異なることがあります。

その他の情報

- ◆ クエリ・エディタの詳細については、「[クエリ・エディタの概要](#)」 320 ページを参照してください。
- ◆ ORDER BY の概要については、「[ORDER BY 句：結果の順序付け](#)」 『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』を参照してください。
- ◆ ORDER BY の詳細については、「[ORDER BY 句：クエリ結果のソート](#)」 『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』と「[クエリ結果の効果的なソート](#)」 『SQL Anywhere サーバ - SQL の使用法』を参照してください。

式エディタ

式エディタによって、検索条件、計算カラム、サブクエリを作成できます。既存の式を編集する場合は、その式を強調表示してから式エディタを開いてください。強調表示をしないと、[OK]をクリックしたときに式エディタで作成した式は既存の式の後ろに追加されます。

ダイアログの項目

[式] ここで式を構築します。

[カラム] このボックスには、クエリのカラムがリストされます。式にカラムを挿入するには、ここでダブルクリックするか、[式] ボックスにカラムを直接入力します。

[関数] 関数は、データベースの情報を返すために使用される定義済みの式です。関数を式に挿入するには、ドロップダウン・リストから式を選択します。

「SQL 関数」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』を参照してください。

[ストアド・プロシージャ] このボックスには、使用できるストアド・プロシージャがリストされます。

[数字キーパッド] 数字キーパッドは、ダイアログの左下の部分にあります。クリックした数字が式に挿入されます。キーボードから数字を入力することもできます。

[比較演算子] =などの算術記号は、ダイアログの下部中央に表示されます。記号をクリックすると式に挿入されます。ここに表示されるのは一部の一般的な演算子ですが、その他の演算子はキーボードから入力できます。

「比較演算子」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』を参照してください。

[論理演算子] ANDなどの論理演算子は、ダイアログの右下の部分に表示されます。演算子をクリックすると式に挿入されます。これらは一般的に使用される論理演算子のサブセットです。キーボードから入力すればあらゆる論理演算子を使用できます。

「論理演算子」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』を参照してください。

[サブクエリの作成] ボタン サブクエリのボタンは、論理演算子と同じ場所にあります。このボタンをクリックすると、サブクエリを作成できるダイアログが表示されます。

サブクエリの追加

サブクエリを作成するには、式エディタを開き、[サブクエリ] ボタン ([NOT] ボタンの横) をクリックします。これで [サブクエリ] ダイアログが開きます。このダイアログは、タイトル・バーの [サブクエリ] の表示をのぞいて、メインのクエリ・エディタと同じです。サブクエリの作成はメイン・クエリの作成と同じです。

サブクエリの編集

クエリ・エディタでサブクエリを編集するには、[基準] ボックスのサブクエリを強調表示して、[式エディタ] ボタンをクリックします。式エディタでコードを強調表示して、[サブクエリ] ボタンをクリックします。

その他の情報

- ◆ クエリ・エディタの詳細については、「[クエリ・エディタの概要](#)」 320 ページを参照してください。
- ◆ 検索条件の詳細については、「[探索条件](#)」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』を参照してください。
- ◆ サブクエリの詳細については、「[探索条件内のサブクエリ](#)」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』を参照してください。

[クエリ結果] ウィンドウ枠

このウィンドウ枠には、結果セットまたはエラー・メッセージが表示されます。デフォルトでは、結果セットの最初の 25 のローだけが表示されます。結果セット全体を表示するには、[OK] をクリックしてクエリを Interactive SQL にエクスポートします。

その他の情報

- ◆ クエリ・エディタの詳細については、「[クエリ・エディタの概要](#)」 320 ページを参照してください。
- ◆ エラー・メッセージの完全なリストについては、[SQL Anywhere 10 - エラー・メッセージ](#) 『SQL Anywhere 10 - エラー・メッセージ』を参照してください。

[結果 SQL] ウィンドウ枠

このウィンドウ枠には、開発中の SQL コードが表示されます。ここでコードを直接編集でき、クエリ・エディタのユーザ・インタフェースのフィールドが自動的に更新されます。

この SQL は、ユーザが通常作成する SQL とは少し異なります。この SQL は、すべてのテーブルには所有者名のプレフィクスが付き、すべての文字列は引用符で囲まれるなど、完全なフォーマットで指定されています。このような特別なフォーマットは通常は必要ありませんが、これによってあらゆる状況において SQL の動作が保証されます。

その他の情報

- ◆ 「クエリ・エディタの概要」 [320 ページ](#)を参照してください。

第 11 章

SQL Anywhere コンソール・ユーティリティのヘルプ

目次

SQL Anywhere コンソール・ユーティリティの使用	340
[コンソール] のオプション	341
[接続ビューワ]	342
[メッセージ・ビューワ]	343
[プロパティ・ビューワ]	344
[更新のチェック]	345

SQL Anywhere コンソール・ユーティリティの使用

SQL Anywhere コンソール・ユーティリティは、データベース・サーバ接続の管理機能とモニタリング機能を提供します。

SQL Anywhere コンソールは、数多くのプラットフォームで使用できます。「[プラットフォーム別 SQL Anywhere 10.0.1 コンポーネント](#)」の管理ツールの表を参照してください。

SQL Anywhere コンソールがサポートされていないプラットフォームでは、接続レベル、サーバレベル、データベースレベルのプロパティを使用して情報を取得したり、SQL Anywhere コンソールをサポートするオペレーティング・システム (Windows、Mac OS X、Linux など) を実行するコンピュータからサーバをモニタしたりすることができます。

『[SQL Anywhere コンソール・ユーティリティ \(dbconsole\)](#)』 『[SQL Anywhere サーバ - データベース管理](#)』を参照してください。

[コンソール] のオプション

SQL Anywhere コンソール・ユーティリティでは、次のオプションを設定できます。

[新しい接続を禁止] このオプションを選択すると、他のユーザがデータベースに接続できなくなります。このオプションは、保守作業を行う場合に便利です。

[要求のログギングを可能にする] このオプションを選択すると、サーバが処理する要求がログ・ファイルに記録されます。このオプションは、主としてトラブルシューティングに使用されま

す。
「[-zr サーバ・オプション](#)」 『[SQL Anywhere サーバ - データベース管理](#)』を参照してください。

[最後の文を記憶] データベース・サーバに、サーバ上の各データベース接続に関して最後に作成された SQL 文を取得するように指示します。ストアド・プロシージャ・コールの場合、プロシージャ内の文ではなく、最も外側のプロシージャ・コールのみが表示されます。

「[-zl サーバ・オプション](#)」 『[SQL Anywhere サーバ - データベース管理](#)』を参照してください。

[アイドル・クライアントのシャットダウン時間] このオプションを選択すると、隣接するフィールドに指定された時間内に要求を送信しなかった接続が切断されます。この値のデフォルト値は 120 秒です。

[終了時間] データベース・サーバを停止する時刻を入力できます。データベースの `date_format` オプションと同じフォーマットを使用します。date_format オプションの現在の設定は、次のクエリを使用して表示できます。

```
SELECT CONNECTION_PROPERTY ( 'date_format' )
```

[現在の時刻] 現在の時刻が表示されます。

[メッセージをファイルへログ] このオプションを選択すると、以下のフィールドで指定したファイルにサーバ・メッセージが記録されます。[参照] をクリックすると、サーバのメッセージを記録するファイルを検索できます。

参照

- ◆ 「[sa_server_option システム・プロシージャ](#)」 『[SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス](#)』
- ◆ 「[サーバ・レベルのプロパティ](#)」 『[SQL Anywhere サーバ - データベース管理](#)』

[接続ビューワ]

接続ビューワについて、以下のオプションを設定できます。

[表示する接続プロパティの選択] すべての接続プロパティの名前と説明が表示されます。プロパティ名の横にあるチェックボックスをオンにして、表示する接続プロパティを選択します。

[接続レベルのプロパティ] 『[SQL Anywhere サーバ - データベース管理](#)』を参照してください。

[レートの再表示] 選択したプロパティの値を再表示する頻度 (秒) を入力します。デフォルトでは、4 秒ごとに値が再表示されます。

[メッセージ・ビューワ]

以下のオプションを使用すると、SQL Anywhere コンソール・ユーティリティの [メッセージ] ウィンドウ枠や Sybase Central の [サーバ・メッセージと実行された SQL] ウィンドウ枠など、表示できるすべての場所でメッセージ・ビューワが設定されます。

メッセージ・ビューワについて、以下のオプションを設定できます。

[メッセージのみ] メッセージ・ビューワ内にメッセージだけを表示させたい場合に選択します。

[時間およびメッセージ] メッセージ・ビューワ内に各メッセージの日付と時刻を表示させたい場合に、このオプションを選択します。

[レートの再表示] 選択したプロパティの値を再表示する頻度 (秒) を入力します。デフォルトでは、4 秒ごとに値が再表示されます。

[プロパティ・ビューワ]

プロパティ・ビューワについて、以下のオプションを設定できます。

データベース・プロパティ

データベース・プロパティについて、以下のオプションを設定できます。

[表示するデータベース・プロパティの選択] すべてのデータベース・プロパティの名前と説明が表示されます。プロパティ名の横にあるチェックボックスをオンにして、表示するデータベース・プロパティを選択します。

「データベース・レベルのプロパティ」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』を参照してください。

[レートの再表示] 選択したプロパティの値を再表示する頻度 (秒) を入力します。デフォルトでは、4 秒ごとに値が再表示されます。

サーバのプロパティ

サーバのプロパティについて、以下のオプションを設定できます。

[表示するサーバ・プロパティの選択] すべてのデータベース・サーバ・プロパティの名前と説明が表示されます。プロパティ名の横にあるチェックボックスをオンにして、表示するデータベース・サーバ・プロパティを選択します。

「サーバ・レベルのプロパティ」 『SQL Anywhere サーバ - データベース管理』を参照してください。

[レートの再表示] 選択したプロパティの値を再表示する頻度 (秒) を入力します。デフォルトでは、4 秒ごとに値が再表示されます。

[更新のチェック]

SQL Anywhere がソフトウェアの更新をチェックするかどうか、およびチェックする場合はその頻度を設定できます。更新のチェックは、Interactive SQL、Sybase Central、または SQL Anywhere コンソール・ユーティリティを開いたときに行われます。

任意のタイミングで更新をチェックできます。それには、[スタート]メニューで[プログラム] - [SQL Anywhere 10] - [更新のチェック]を選択するか、Sybase Central、Interactive SQL、SQL Anywhere コンソール・ユーティリティの[ヘルプ]メニューを使用します。

SQL Anywhere コンソール・ユーティリティの[オプション]ダイアログの[更新のチェック]タブには、次の項目があります。

[更新をチェックする頻度を指定してください。] 次のいずれかのオプションを選択して、SQL Anywhere によって更新をチェックする頻度を指定します。デフォルトでは、[チェックしない]が選択されています。

- ◆ **[アプリケーションの起動時]** このオプションを選択すると、Interactive SQL、Sybase Central、コンソール・ユーティリティを起動するたびに、SQL Anywhere によって更新がチェックされます。
- ◆ **[毎日]** このオプションを選択すると、毎日 Interactive SQL、Sybase Central、コンソール・ユーティリティが初めて起動されたときに、SQL Anywhere によって更新がチェックされます。
- ◆ **[週 1 回]** このオプションを選択すると、毎週 Interactive SQL、Sybase Central、SQL Anywhere コンソール・ユーティリティが初めて起動されたときに、SQL Anywhere によって更新がチェックされます。
- ◆ **[月 1 回]** このオプションを選択すると、毎月 Interactive SQL、Sybase Central、SQL Anywhere コンソール・ユーティリティが初めて起動されたときに、SQL Anywhere によって更新がチェックされます。
- ◆ **[チェックしない]** このオプションを選択すると、SQL Anywhere によって更新はチェックされません。これはデフォルト設定です。

[チェックする項目を指定してください。] 次のオプションを自由に組み合わせて、SQL Anywhere でチェックする更新の種類を指定します。デフォルトでは、次のオプションはすべて選択されています。

- ◆ **[Express Bug Fix]** このオプションを選択すると、SQL Anywhere によって Express Bug Fix がチェックされます。

Express Bug Fix は、1つ以上のバグ・フィックスが含まれる、ソフトウェアのサブセットです。これらのバグ・フィックスは、更新のリリース・ノートにリストされます。バグ・フィックス更新を適用できるのは、同じバージョン番号を持つインストール済みのソフトウェアに対してだけです。このソフトウェアについては、ある程度のテストが行われているとはいえ、完全なテストが行われたわけではありません。自分自身でソフトウェアの妥当性を確かめるまでは、アプリケーションとともにこれらのファイルを配布しないでください。

- ◆ **[メンテナンス・リリース]** このオプションを選択すると、SQL Anywhere によってソフトウェアのメンテナンス・リリースがチェックされます。

メンテナンス・リリースは、同じメジャー・バージョン番号を持つ旧バージョンのインストール済みソフトウェアをアップグレードするための完全なソフトウェア・セットです (バージョン番号のフォーマットは、**メジャー.マイナー.パッチ.ビルド**です)。バグ・フィックスとその他の変更については、アップグレードのリリース・ノートにリストされます。

- ◆ **[その他の情報]** このオプションを選択すると、その他の情報 (新製品のリリースや予定されているイベントなど) がチェックされます。

第 12 章

SQL 言語のリンク

目次

SQL 構文のヘルプ	348
------------------	-----

SQL 構文のヘルプ

次のリストは、SQL Anywhere ユーザが使用できる SQL 言語要素、SQL 文、データ型、関数について説明している SQL Anywhere マニュアルへのリンクです。

SQL データ型

- 「文字データ型」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- 「数値データ型」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- 「通貨データ型」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- 「ビット配列データ型」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- 「日付と時刻データ型」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- 「バイナリ・データ型」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- 「ドメイン」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- 「データ型変換」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- 「Java と SQL のデータ型変換」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

SQL 関数

- 「SQL 関数の概要」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- 「関数のタイプ」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- 「アルファベット順の関数リスト」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

SQL 言語の要素

- 「キーワード」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- 「識別子」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- 「文字列」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- 「定数」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- 「演算子」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- 「式」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- 「探索条件」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- 「特別値」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- 「変数」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- 「コメント」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- 「NULL 値」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

SQL 文

- 「SQL 文リファレンスの使い方」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- 「ALLOCATE DESCRIPTOR 文 [ESQL]」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- 「ALTER DATABASE 文」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- 「ALTER DBSPACE 文」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- 「ALTER DOMAIN 文」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- 「ALTER EVENT 文」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- 「ALTER FUNCTION 文」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- 「ALTER INDEX 文」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- 「ALTER MATERIALIZED VIEW 文」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- 「ALTER PROCEDURE 文」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- 「ALTER PUBLICATION 文 [Mobile Link] [SQL Remote]」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- 「ALTER REMOTE MESSAGE TYPE 文 [SQL Remote]」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- 「ALTER SERVER 文」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- 「ALTER SERVICE 文」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- 「ALTER STATISTICS 文」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- 「ALTER SYNCHRONIZATION SUBSCRIPTION 文 [Mobile Link]」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- 「ALTER SYNCHRONIZATION USER 文 [Mobile Link]」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- 「ALTER TABLE 文」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- 「ALTER TRIGGER 文」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- 「ALTER VIEW 文」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- 「ATTACH TRACING 文」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- 「BACKUP 文」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- 「BEGIN 文」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- 「BEGIN TRANSACTION 文 [T-SQL]」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- 「BREAK 文 [T-SQL]」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- 「CALL 文」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

- 「CASE 文」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- 「CHECKPOINT 文」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- 「CLEAR 文 [Interactive SQL]」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- 「CLOSE 文 [ESQL] [SP]」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- 「COMMENT 文」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- 「COMMIT 文」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- 「CONFIGURE 文 [Interactive SQL]」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- 「CONNECT 文 [ESQL] [Interactive SQL]」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- 「CONTINUE 文 [T-SQL]」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- 「CREATE DATABASE 文」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- 「CREATE DBSPACE 文」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- 「CREATE DECRYPTED FILE 文」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- 「CREATE DOMAIN 文」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- 「CREATE ENCRYPTED FILE 文」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- 「CREATE EVENT 文」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- 「CREATE EXISTING TABLE 文」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- 「CREATE EXTERNLOGIN 文」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- 「CREATE FUNCTION 文」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- 「CREATE INDEX 文」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- 「CREATE LOCAL TEMPORARY TABLE 文」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- 「CREATE MATERIALIZED VIEW 文」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- 「CREATE MESSAGE 文 [T-SQL]」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- 「CREATE PROCEDURE 文」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- 「CREATE PROCEDURE 文 [T-SQL]」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- 「CREATE PUBLICATION 文 [Mobile Link] [SQL Remote]」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- 「CREATE REMOTE MESSAGE TYPE 文 [SQL Remote]」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- 「CREATE SCHEMA 文」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- 「CREATE SERVER 文」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

「CREATE SERVICE 文」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

「CREATE STATISTICS 文」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

「CREATE SUBSCRIPTION 文 [SQL Remote]」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

「CREATE SYNCHRONIZATION SUBSCRIPTION 文 [Mobile Link]」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

「CREATE SYNCHRONIZATION USER 文 [Mobile Link]」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

「CREATE TABLE 文」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

「CREATE TRIGGER 文」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

「CREATE TRIGGER 文 [T-SQL]」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

「CREATE VARIABLE 文」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

「CREATE VIEW 文」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

「DEALLOCATE 文」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

「DEALLOCATE DESCRIPTOR 文 [ESQL]」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

「宣言セクション [ESQL]」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

「DECLARE 文」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

「DECLARE CURSOR 文 [ESQL] [SP]」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

「DECLARE CURSOR 文 [T-SQL]」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

「DECLARE LOCAL TEMPORARY TABLE 文」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

「DELETE 文」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

「DELETE (位置付け) 文 [ESQL] [SP]」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

「DESCRIBE 文 [ESQL]」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

「DESCRIBE 文 [Interactive SQL]」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

「DETACH TRACING 文」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

「DISCONNECT 文 [ESQL] [Interactive SQL]」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

「DROP 文」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

「DROP CONNECTION 文」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

「DROP DATABASE 文」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

「DROP EXTERNLOGIN 文」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

「DROP PUBLICATION 文 [Mobile Link] [SQL Remote]」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

- 「DROP REMOTE MESSAGE TYPE 文 [SQL Remote]」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- 「DROP SERVER 文」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- 「DROP SERVICE 文」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- 「DROP STATEMENT 文 [ESQL]」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- 「DROP STATISTICS 文」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- 「DROP SUBSCRIPTION 文 [SQL Remote]」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- 「DROP SYNCHRONIZATION SUBSCRIPTION 文 [Mobile Link]」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- 「DROP SYNCHRONIZATION USER 文 [Mobile Link]」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- 「DROP VARIABLE 文」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- 「EXCEPT 文」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- 「EXECUTE 文 [ESQL]」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- 「EXECUTE 文 [T-SQL]」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- 「EXECUTE IMMEDIATE 文 [SP]」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- 「EXIT 文 [Interactive SQL]」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- 「EXPLAIN 文 [ESQL]」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- 「FETCH 文 [ESQL] [SP]」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- 「FOR 文」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- 「FORWARD TO 文」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- 「FROM 句」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- 「GET DATA 文 [ESQL]」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- 「GET DESCRIPTOR 文 [ESQL]」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- 「GET OPTION 文 [ESQL]」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- 「GOTO 文 [T-SQL]」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- 「GRANT 文」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- 「GRANT CONSOLIDATE 文 [SQL Remote]」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- 「GRANT PUBLISH 文 [SQL Remote]」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』
- 「GRANT REMOTE 文 [SQL Remote]」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

「GRANT REMOTE DBA 文 [Mobile Link] [SQL Remote]」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

「GROUP BY 句」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

「HELP 文 [Interactive SQL]」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

「IF 文」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

「IF 文 [T-SQL]」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

「INCLUDE 文 [ESQL]」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

「INPUT 文 [Interactive SQL]」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

「INSERT 文」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

「INSTALL JAVA 文」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

「INTERSECT 文」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

「LEAVE 文」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

「LOAD STATISTICS 文」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

「LOAD TABLE 文」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

「LOCK TABLE 文」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

「LOOP 文」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

「MESSAGE 文」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

「OPEN 文 [ESQL] [SP]」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

「OUTPUT 文 [Interactive SQL]」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

「PARAMETERS 文 [Interactive SQL]」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

「PASSTHROUGH 文 [SQL Remote]」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

「PREPARE 文 [ESQL]」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

「PREPARE TO COMMIT 文」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

「PRINT 文 [T-SQL]」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

「PUT 文 [ESQL]」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

「RAISERROR 文 [T-SQL]」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

「READ 文 [Interactive SQL]」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

「READTEXT 文 [T-SQL]」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

「REFRESH MATERIALIZED VIEW 文」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

「REFRESH TRACING LEVEL 文」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

「RELEASE SAVEPOINT 文」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

「REMOTE RESET 文 [SQL Remote]」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

「REMOVE JAVA 文」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

「REORGANIZE TABLE 文」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

「RESIGNAL 文」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

「RESTORE DATABASE 文」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

「RESUME 文」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

「RETURN 文」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

「REVOKE 文」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

「REVOKE CONSOLIDATE 文 [SQL Remote]」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

「REVOKE PUBLISH 文 [SQL Remote]」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

「REVOKE REMOTE 文 [SQL Remote]」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

「REVOKE REMOTE DBA 文 [SQL Remote]」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

「ROLLBACK 文」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

「ROLLBACK TO SAVEPOINT 文」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

「ROLLBACK TRANSACTION 文 [T-SQL]」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

「ROLLBACK TRIGGER 文」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

「SAVE TRANSACTION 文 [T-SQL]」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

「SAVEPOINT 文」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

「SELECT 文」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

「SET 文」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

「SET 文 [T-SQL]」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

「SET CONNECTION statement [Interactive SQL] [ESQL]」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

「SET DESCRIPTOR 文 [ESQL]」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

「SET OPTION 文」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

「SET OPTION 文 [Interactive SQL]」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

「SET REMOTE OPTION 文 [SQL Remote]」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

「SET SQLCA 文 [ESQL]」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

「SETUSER 文」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

「[SIGNAL 文](#)」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

「[START DATABASE 文](#)」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

「[START ENGINE 文 \[Interactive SQL\]](#)」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

「[START JAVA 文](#)」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

「[START LOGGING 文 \[Interactive SQL\]](#)」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

「[START SUBSCRIPTION 文 \[SQL Remote\]](#)」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

「[START SYNCHRONIZATION DELETE 文 \[Mobile Link\]](#)」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

「[STOP DATABASE 文](#)」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

「[STOP ENGINE 文](#)」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

「[STOP JAVA 文](#)」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

「[STOP LOGGING 文 \[Interactive SQL\]](#)」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

「[STOP SUBSCRIPTION 文 \[SQL Remote\]](#)」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

「[STOP SYNCHRONIZATION DELETE 文 \[Mobile Link\]](#)」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

「[SYNCHRONIZE SUBSCRIPTION 文 \[SQL Remote\]](#)」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

「[SYSTEM 文 \[Interactive SQL\]](#)」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

「[TRIGGER EVENT 文](#)」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

「[TRUNCATE TABLE 文](#)」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

「[UNION 文](#)」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

「[UNLOAD 文](#)」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

「[UNLOAD TABLE 文](#)」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

「[UPDATE 文](#)」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

「[UPDATE \(位置付け\) 文 \[ESQL\] \[SP\]](#)」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

「[UPDATE 文 \[SQL Remote\]](#)」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

「[VALIDATE 文](#)」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

「[WAITFOR 文](#)」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

「[WHENEVER 文 \[ESQL\]](#)」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

「[WHILE 文 \[T-SQL\]](#)」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

「[WINDOW 句](#)」 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

[「WRITETEXT 文 \[T-SQL\]」](#) 『SQL Anywhere サーバ - SQL リファレンス』

索引

C

- [Carrier] プロパティ・シート
説明, 165
- CREATE EVENT 文
[スケジュール] プロパティ・シート, 88
- CREATE TRIGGER 文
[トリガ条件の作成] ダイアログ, 124

D

- dbconsole ユーティリティ
[オプション] ダイアログ, 341
[接続] ダイアログの説明, 2
- DB 領域
プロパティ・シート, 45
- [DB 領域の事前割り付け] ダイアログ
説明, 135
- [DB 領域] プロパティ・シート
説明, 45

I

- iAnywhere デベロッパー・コミュニティ
ニュースグループ, xv
- install-dir
マニュアルの使用方法, xii
- Interactive SQL
[エクスポート] ダイアログ, 278
[オプション] ダイアログ, 281
[接続] ダイアログの説明, 2
設定, 281
設定オプション, 281
ダイアログ, 278
[ツール] メニュー, 278
ユーザ設定, 281
- Interactive SQL のヘルプ
説明, 276

J

- JAR ファイル
プロパティ・シート, 56
- [JAR ファイルの更新] ダイアログ
説明, 144
- [JAR ファイル] プロパティ・シート
説明, 56

- Java クラス
プロパティ・シート, 56
- [Java クラスの更新] ダイアログ
説明, 144
- [Java クラス] プロパティ・シート
説明, 56
- [Java ソース・コード・パス] ダイアログ
説明, 150

K

- Kerberos ログイン
プロパティ・シート, 57
- [Kerberos ログイン] プロパティ・シート
説明, 57

M

- Mobile Link 10 プラグインの環境設定
プロパティ・シート, 173
- [Mobile Link 10 プラグインの環境設定] プロパティ・シート
説明, 173
- [Mobile Link サーバへの接続] ダイアログ
説明, 294
- [Mobile Link] ダイアログ
Mobile Link 説明, 257
- Mobile Link のウィザード
Mobile Link モデル・モード, 184
- Mobile Link の管理のヘルプ
説明, 164
- Mobile Link のプロパティ・シート
概要, 165
- Mobile Link プラグイン
[接続] ダイアログの説明, 2
- Mobile Link モデルのヘルプ
説明, 184
- Mobile Link モニタ
Mobile Link サーバへの接続, 294
- Mobile Link モニタのダイアログ・ボックス
説明, 293
- Mobile Link モニタのプロパティ・シート
説明, 293
- Mobile Link ユーザ
プロパティ・シート, 58
- [Mobile Link ユーザ] プロパティ・シート
Mobile Link 説明, 58

N

[Notifier] プロパティ・シート
説明, 171

O

[ODBC 設定] ダイアログ
 [DBMLSync] タブ, 24
 [ODBC] タブ, 16
 [詳細] タブ, 23
 説明, 16
 [データベース] タブ, 19
 [ネットワーク] タブ, 21
 [ログイン] タブ, 18
ODBC データ・ソース
 [ODBC 設定] ダイアログ, 16
[Oracle 用 iAnywhere ドライバの設定] ダイアログ
説明, 27

P

PDF
マニュアル, viii

Q

QAnywhere のダイアログ・ボックス
説明, 252
QAnywhere のヘルプ
概要, 240

S

samples-dir
 マニュアルの使用方法, xii
SQL Anywhere
 マニュアル, viii
SQL Anywhere Ultra Light のヘルプ
 概要, 262
SQL Anywhere コンソール・ユーティリティ
[dbconsole]
 [オプション] ダイアログ, 341
 オプションの設定, 341
 [接続] ダイアログの説明, 2
 設定, 341
 ダイアログの説明, 340
SQL Anywhere のダイアログ・ボックス
説明, 118
SQL Anywhere プラグイン
 [接続] ダイアログの説明, 2

SQL Remote サブスクリプション
 プロパティ・シート, 95
[SQL Remote サブスクリプション] プロパティ・
シート
 説明, 95
[SQL Viewer オプション] ダイアログ
 説明, 141
SQL 言語のリンク
 説明, 348
[SQL 文] ウィンドウ枠
 外観の設定, 287
[SQL 文の詳細] ダイアログ
 説明, 140
Sybase Central
 QAnywhere のダイアログ説明, 252
 QAnywhere のプロパティ・シート説明, 240
 Ultra Light のダイアログの説明, 272
 Ultra Light のプロパティ・シートの説明, 262
 [接続] ダイアログの説明, 2
 ダイアログの説明, 118
 プロパティ・シートの説明, 30

T

[TLS 暗号化オプション] ダイアログ
説明, 24
Transact-SQL
 クエリ・エディタでサポートなし, 321

U

Ultra Light ダイアログ・ボックス
説明, 272
Ultra Light プラグイン
 [接続] ダイアログの説明, 2
Ultra Light プロジェクト
 プロパティ・シート, 108
[Ultra Light プロジェクト] プロパティ・シート
説明, 108
[Ultra Light 文] プロパティ・シート
説明, 109

W

Web サービス
 プロパティ・シート, 115
[Web サービス] プロパティ・シート
説明, 115

[Windows CE の SQL Remote 用メッセージ・タイプ] ダイアログ
説明, 145

あ

アイコン
マニュアルで使用, xiii
[新しいウォッチ] ダイアログ
Mobile Link モニタ説明, 299
[新しいメンバシップ] ダイアログ
説明, 129
[新しいメンバ] ダイアログ
説明, 128
アーティクル
Ultra Light のプロパティ・シート, 262
プロパティ・シート, 30
[アーティクル] プロパティ・シート
Ultra Light, 262
説明, 30

い

一意性制約
Ultra Light のプロパティ・シート, 267
プロパティ・シート, 109
[一意性制約] プロパティ・シート
Ultra Light, 267
説明, 109
[一般] タブ
Interactive SQL [オプション] ダイアログ, 281
[移動] ダイアログ
Mobile Link モニタ説明, 298
イベント
プロパティ・シート, 47
[イベントのトリガ] ダイアログ
説明, 142
[イベント] プロパティ・シート
説明, 47
インデックス
Ultra Light のプロパティ・シート, 266
プロパティ・シート, 54
インデックス・コンサルタント
説明, 152
[インデックス] プロパティ・シート
Ultra Light, 266
説明, 54
[インポート/エクスポート] タブ
Interactive SQL [オプション] ダイアログ, 284

う

ウィザード
Mobile Link モデル・モード, 184
[ウォッチの追加] ダイアログ
説明, 149
[ウォッチの編集] ダイアログ
Mobile Link モニタ説明, 297
[ウォッチ・マネージャ] ダイアログ
Mobile Link モニタ説明, 317

え

[エクスポート] ダイアログ
説明, 278
[エディタ] タブ
Interactive SQL [オプション] ダイアログ, 287
[エージェント設定] ダイアログ
QAnywhere 説明, 252

お

オプション
SQL Anywhere コンソール [dbconsole] ユーティリティ, 341
[オプション] ダイアログ
Interactive SQL の設定, 281
Mobile Link モニタの設定, 301
SQL Anywhere コンソール [dbconsole] ユーティリティの設定, 341
SQL Anywhere プラグインの設定, 129
オプションの設定
SQL Anywhere コンソール [dbconsole] ユーティリティ, 341
オンライン・マニュアル
PDF, viii

か

外部キー
Ultra Light のプロパティ・シート, 265
プロパティ・シート, 49
[外部キー] プロパティ・シート
Ultra Light, 265
説明, 49
外部ログイン
プロパティ・シート, 48
[外部ログイン] プロパティ・シート
説明, 48
カラム

Mobile Link のプロパティ・シート, 166
Ultra Light のプロパティ・シート, 262
プロパティ・シート, 33
[カラムのパーミッション] ダイアログ
説明, 123
カラム (ビュー)
プロパティ・シート, 36
[カラム] プロパティ・シート
Mobile Link, 166
Ultra Light, 262
説明, 33
[カラム] プロパティ・シート (ビュー)
説明, 36

き

規則

表記, x

マニユアルでのファイル名, xii

共用体

クエリ・エディタでサポートなし, 321

く

クエリ・エディタ

[GROUP BY] タブ, 330

[HAVING] タブ, 332

[INTO] タブ, 328

[ORDER BY] タブ, 333

Transact-SQL のサポートなし, 321

[WHERE] タブ, 329

概要, 320

[カラム] タブ, 327

共用体のサポートなし, 321

[クエリ結果] ウィンドウ枠, 336

[結果 SQL] ウィンドウ枠, 337

式エディタ, 334

[ジョイン] タブ, 325

ジョインのトラブルシューティング, 326

制限事項, 321

[テーブル] タブ, 323

ヘルプ, 320

[クエリ・エディタ] タブ

Interactive SQL [オプション] ダイアログ, 291

[クエリ書き換え最適化履歴] ダイアログ

説明, 136

クライアント

QAnywhere のプロパティ・シート, 240

[クライアント] プロパティ・シート

QAnywhere 説明, 240

クライアント・メッセージ・ストア

QAnywhere のプロパティ・シート, 241

[クライアント・メッセージ・ストア] プロパティ・シート

QAnywhere 説明, 241

[クラスタード・インデックスの設定] ダイアログ
説明, 138

[グラフィカルなプラン] ダイアログ

説明, 127

グループ

プロパティ・シート, 52

[グループのオプション] ダイアログ

説明, 127

[グループ] プロパティ・シート

説明, 52

[グローバル通知] プロパティ・シート

説明, 171

け

結果

Interactive SQL からのエクスポート, 278

[結果] タブ

Interactive SQL [オプション] ダイアログ, 283

検査制約

プロパティ・シート, 32

[検査制約] プロパティ・シート

説明, 32

ゲートウェイ

プロパティ・シート, 167

[ゲートウェイ] プロパティ・シート

説明, 167

こ

[更新のチェック] タブ

Interactive SQL [オプション] ダイアログ, 291

コンソール [dbconsole] ユーティリティ [オプション] ダイアログ, 345

高速ランチャ

ポート番号の設定, 282

コネクタ

QAnywhere のプロパティ・シート, 242

[コネクタ] プロパティ・シート

QAnywhere の説明, 242

コンソール・ユーティリティ [dbconsole]

[オプション] ダイアログ, 341

オプションの設定, 341

[接続] ダイアログの説明, 2
設定, 341
コード・エディタ
外観の設定, 287

さ

サブスクリプション
Mobile Link のプロパティ・シート, 175
[サブスクリプション] プロパティ・シート
説明, 175
サポート
ニュースグループ, xv
[サンプル] プロパティ・シート
Mobile Link モニタ説明, 309
[サンプル・プロパティ] ダイアログ
Mobile Link モニタの [範囲] タブ, 310
サーバ
プロパティ・シート, 89
[サーバ] プロパティ・シート
説明, 89
サーバ・メッセージ・ストア
QAnywhere のプロパティ・シート, 247
[サーバ・メッセージ・ストア] プロパティ・シート
QAnywhere の説明, 247
サービス
プロパティ・シート (SQL Anywhere), 92
[サービス・グループの依存の追加] ダイアログ
説明, 118
[サービス・グループの設定] ダイアログ
説明, 139
[サービスの依存の追加] ダイアログ
説明, 118
[サービス] プロパティ・シート (SQL Anywhere)
説明, 92

し

式エディタ
クエリ・エディタ, 334
システム・トリガ
プロパティ・シート, 104
詳細情報の検索／フィールドバックの提供
テクニカル・サポート, xv
[所有者別にオブジェクトをフィルタ] ダイアログ
説明, 126

す

[推奨] ダイアログ
説明, 136
スケジュール
プロパティ・シート, 88
[スケジュール] プロパティ・シート
説明, 88

せ

[セッション] プロパティ・シート
Mobile Link モニタ説明, 311
接続されたユーザ
プロパティ・シート, 36
[接続されたユーザ] プロパティ・シート
説明, 36
接続スクリプト
Mobile Link のプロパティ・シート, 166
[接続スクリプト] プロパティ・シート
説明, 166
[接続] ダイアログ
[ID] タブ (Mobile Link と QAnywhere), 6
[ID] タブ (SQL Anywhere), 3
[ID] タブ (Ultra Light), 8
[詳細] タブ (Mobile Link と QAnywhere), 13
[詳細] タブ (SQL Anywhere), 12
[詳細] タブ (Ultra Light), 14
説明, 2
[データベース] タブ (SQL Anywhere), 9
[接続の詳細] ダイアログ
説明, 123
接続ビューワ
設定, 342
設定
Interactive SQL, 281
SQL Anywhere コンソール [dbconsole] ユーティ
リティ, 341
設定オプション
Interactive SQL, 281
[設定の変更] ダイアログ
説明, 119

そ

ソフトウェア
更新のチェック, 291

た

ダイアログ・ボックス

- DB 領域の事前割り付け, 135
- Interactive SQL, 278
- Interactive SQL [オプション], 281
- JAR ファイルの更新, 144
- Java クラスの更新, 144
- Java ソース, 150
- [Mobile Link] ダイアログ, 257
- Mobile Link モニタ, 293, 301
- Mobile Link モニタの Mobile Link サーバへの接続, 294
- Mobile Link モニタの新しいウォッチ, 299
- Mobile Link モニタの移動, 298
- Mobile Link モニタのウォッチの編集, 297
- Mobile Link モニタのウォッチ・マネージャ, 317
- Mobile Link モニタのサンプル・プロパティ, 310
- Mobile Link モニタのデータベースへのエクスポート, 300
- Oracle 用 iAnywhere ドライバの設定, 27
- QAnywhere 説明, 252
- QAnywhere のエージェント設定, 252
- QAnywhere のメンバ, 256
- SQL Anywhere, 118
- SQL Anywhere コンソール [dbconsole] ユーティリティのオプション, 341
- SQL Anywhere プラグインのオプション, 129
- SQL Viewer オプション, 141
- SQL 文の詳細, 140
- TLS 暗号化オプション, 24
- Ultra Light, 272
- Ultra Light 説明, 272
- Ultra Light のプラグインの環境設定, 273
- Ultra Light のユーザのオプション, 272
- Windows CE の SQL Remote 用メッセージ・タイプ, 145
- 新しいメンバ, 128
- 新しいメンバシップ, 129
- イベントのトリガ, 142
- ウォッチの追加, 149
- エクスポート, 278
- カラムのパーミッション, 123
- クエリ書き換え最適化履歴, 136
- クラスタード・インデックスの設定, 138

- グラフィカルなプラン, 127
- グループのオプション, 127
- サービス・グループの依存の追加, 118
- サービス・グループの設定, 139
- サービスの依存の追加, 118
- 所有者別にオブジェクトをフィルタ, 126
- 推奨, 136
- [接続] ダイアログ, 2
- 接続の詳細, 123
- 設定の変更, 119
- 説明, 118
- デバッグ, 149
- データのアンロード, 143
- データベースのオプション, 125
- データベースの開始, 141
- テーブル名のルックアップ, 280
- 統合ユーザのオプション, 123
- 統合ユーザの設定, 138
- トリガ条件の作成, 124
- トリガ条件の編集, 126
- トレーシング・レベルの追加, 119
- トレーシング・レベルの変更, 121
- バブリッシャのオプション, 135
- バブリッシャの設定, 139
- パーミッション付与, 127
- プラグインの環境設定, 131
- ブレイクポイント, 149
- ブレイクポイントの編集または追加, 150
- プロシージャ名のルックアップ, 280
- 分析を開くかトレーシング・データベースに接続, 129
- ユーザのオプション, 144
- ユーザを統合ユーザに変更, 121
- [リモート・ユーザに変更] ダイアログ, 122
- リモート・ユーザのオプション, 137
- ルール・エディタ, 258

つ

- [ツール] メニュー
- Interactive SQL, 278

て

- ディレクトリ・アクセス・サーバ
- プロパティ・シート, 46
- [ディレクトリ・アクセス・サーバ] プロパティ・シート
- 説明, 46

テクニカル・サポート
 ニュースグループ, xv
デバッグのヘルプ
 説明, 149
デベロッパー・コミュニティ
 ニュースグループ, xv
[データのアンロード] ダイアログ
 説明, 143
データベース
 Ultra Light のプロパティ・シート, 264
 プロパティ・シート, 40
[データベースのオプション] ダイアログ
 説明, 125
[データベースの開始] ダイアログ
 説明, 141
[データベース] プロパティ・シート
 Mobile Link 説明 (ML プラグイン), 167
 Ultra Light, 264
 説明, 40
[データベースへのエクスポート] ダイアログ
 Mobile Link モニタ説明, 300
テーブル
 Mobile Link のプロパティ・シート, 175
 Ultra Light のプロパティ・シート, 270
 プロパティ・シート, 105
テーブル・スクリプト
 Mobile Link のプロパティ・シート, 176
[テーブル・スクリプト] プロパティ・シート
 説明, 176
[テーブル] プロパティ・シート
 Mobile Link 説明, 175
 Ultra Light, 270
 説明, 105
[テーブル・マッピング追加] ウィザード
 (参照 [テーブル・マッピング新規作成] ウィザード)
[テーブル名のロックアップ] ダイアログ
 説明, 280

と

同期サブスクリプション
 プロパティ・シート, 96
[同期サブスクリプション] プロパティ・シート
 説明, 96
同期テーブル
 プロパティ・シート, 175
[同期テーブル] プロパティ・シート
 説明, 175
[同期] プロパティ・シート
 Mobile Link モニタ説明, 313
同期モデル
 プロパティ・シート, 174
[同期モデル] プロパティ・シート
 説明, 174
統計情報
 プロパティ・シート, 96
[統計情報] プロパティ・シート
 説明, 96
統合化ログイン
 プロパティ・シート, 57
[統合化ログイン] プロパティ・シート
 説明, 57
統合ユーザ
 プロパティ・シート, 37
[統合ユーザのオプション] ダイアログ
 説明, 123
[統合ユーザの設定] ダイアログ
 説明, 138
[統合ユーザ] プロパティ・シート
 説明, 37
ドメイン
 プロパティ・シート, 46
[ドメイン] プロパティ・シート
 説明, 46
トラブルシューティング
 クエリ・エディタの実行速度の遅れ, 323
 ニュースグループ, xv
トリガ
 [トリガ条件の作成] ダイアログ, 124
 プロパティ・シート, 108
トリガ条件
 [トリガ条件の作成] ダイアログ, 124
 [トリガ条件の作成] ダイアログ
 説明, 124
 [トリガ条件の編集] ダイアログ
 説明, 126
 [トリガ] プロパティ・シート
 説明, 108
[トレーシング・レベルの追加] ダイアログ
 説明, 119
[トレーシング・レベルの変更] ダイアログ
 説明, 121

に

入力補完

[オプション] ダイアログの設定, 290

ニュースグループ

テクニカル・サポート, xv

は

バグ

フィードバックの提供, xv

パブリケーション

Ultra Light のプロパティ・シート, 268

プロパティ・シート, 71

[パブリケーション] プロパティ・シート

Ultra Light, 268

説明, 71

パブリッシャ

プロパティ・シート, 82

[パブリッシャのオプション] ダイアログ

説明, 135

[パブリッシャの設定] ダイアログ

説明, 139

[パブリッシャ] プロパティ・シート

説明, 82

パラメータ

プロパティ・シート, 66

[パラメータ] プロパティ・シート

説明, 66

バージョン

Mobile Link のプロパティ・シート, 177

[バージョン] プロパティ・シート

Mobile Link 説明, 177

[パーミッション付与] ダイアログ

説明, 127

ひ

ビュー

プロパティ・シート, 112

[ビュー] プロパティ・シート

説明, 112

表記

規則, x

ふ

ファンクション

プロパティ・シート, 51

[ファンクション] プロパティ・シート

説明, 51

フィードバック

提供, xv

マニュアル, xv

プライマリ・キー

Ultra Light のプロパティ・シート, 267

プロパティ・シート, 67

[プライマリ・キー] プロパティ・シート

Ultra Light, 267

説明, 67

[プラグインの環境設定] ダイアログ

Ultra Light, 273

説明, 131

[プラン] タブ

Interactive SQL [オプション] ダイアログ, 286

[ブレイクポイント] ダイアログ

説明, 149

[ブレイクポイントの編集]/[新しいブレイクポイント] ダイアログ

説明, 150

プロキシ・テーブル

プロパティ・シート, 69

[プロキシ・テーブル] プロパティ・シート

説明, 69

プロジェクト

プロパティ・シート, 108

プロシージャ

プロパティ・シート, 68

[プロシージャ] プロパティ・シート

説明, 68

[プロシージャ名のルックアップ] ダイアログ

説明, 280

プロパティ・シート

DB 領域, 45

JAR ファイル, 56

Java クラス, 56

Kerberos ログイン, 57

Mobile Link 10 プラグインの環境設定, 173

Mobile Link 概要, 165

Mobile Link の Carrier, 165

Mobile Link の Notifier, 171

Mobile Link のカラム, 166

Mobile Link のグローバル通知, 171

Mobile Link のゲートウェイ, 167

Mobile Link のサブスクリプション, 175

Mobile Link の接続スクリプト, 166

Mobile Link のデータベース, 167

Mobile Link のテーブル, 175
Mobile Link のテーブル・スクリプト, 176
Mobile Link の同期テーブル, 175
Mobile Link の同期モデル, 174
Mobile Link のバージョン, 177
Mobile Link のユーザ, 176
Mobile Link のリモート・データベース, 174
Mobile Link モニタ, 293
Mobile Link モニタのサンプル, 309
Mobile Link モニタのセッション, 311
Mobile Link モニタの同期, 313
Mobile Link ユーザ, 58
QAnywhere, 240
QAnywhere 概要, 240
QAnywhere のクライアント, 240
QAnywhere のクライアント・メッセージ・ストア, 241
QAnywhere のコネクタ, 242
QAnywhere のサーバ・メッセージ・ストア, 247
QAnywhere のメッセージ, 246
SQL Anywhere, 30
SQL Anywhere サービス, 92
SQL Anywhere ユーザ, 110
SQL Remote サブスクリプション, 95
Ultra Light, 262
Ultra Light 概要, 262
Ultra Light のアーティクル, 262
Ultra Light の一意性制約, 267
Ultra Light のインデックス, 266
Ultra Light の外部キー, 265
Ultra Light のカラム, 262
Ultra Light のデータベース, 264
Ultra Light のテーブル, 270
Ultra Light のパブリケーション, 268
Ultra Light のプライマリ・キー, 267
Ultra Light のユーザ, 271
Ultra Light プロジェクト, 108
Ultra Light 文, 109
Web サービス, 115
アーティクル, 30
一意性制約, 109
イベント, 47
インデックス, 54
外部キー, 49
外部ログイン, 48
概要, 30
カラム, 33
カラム (ビュー), 36
グループ, 52
検査制約, 32
サーバ, 89
システム・トリガ, 104
スケジュール, 88
接続されたユーザ, 36
ディレクトリ・アクセス・サーバ, 46
データベース, 40
テーブル, 105
同期サブスクリプション, 96
統計情報, 96
統合化ログイン, 57
統合ユーザ, 37
ドメイン, 46
トリガ, 108
パブリケーション, 71
パブリッシャ, 82
パラメータのプロパティ, 66
ビュー, 112
ファンクション, 51
プライマリ・キー, 67
プロキシ・テーブル, 69
プロシージャ, 68
メッセージ・タイプ, 58
メンテナンス・プラン・レポート, 57
リモート・サーバ, 85
リモート・プロシージャ, 84
リモート・ユーザ, 86
ログイン・マッピング, 57
プロパティ・ビューワ
設定, 344
[分析を開くかトレーシング・データベースに接続] ダイアログ
説明, 129

へ

ヘルプ
テクニカル・サポート, xv
ヘルプへのアクセス
テクニカル・サポート, xv

ほ

ポート番号
高速ランチャ, 282

ま

マニユアル

SQL Anywhere, viii

め

メッセージ

QAnywhere のプロパティ・シート, 246

メッセージ・タイプ

プロパティ・シート, 58

[メッセージ・タイプ] プロパティ・シート
説明, 58

[メッセージ] タブ

Interactive SQL [オプション] ダイアログ, 285

メッセージ・ビューワ

設定, 343

[メッセージ] プロパティ・シート

QAnywhere の説明, 246

メンテナンス・プラン・レポート

プロパティ・シート, 57

[メンテナンス・プラン・レポート] プロパティ・
シート

説明, 57

[メンバ] ダイアログ

QAnywhere 説明, 256

ゆ

ユーザ

Mobile Link のプロパティ・シート, 176

SQL Anywhere プロパティ・シート, 110

Ultra Light のプロパティ・シート, 271

ユーザ・インタフェース

QAnywhere のダイアログ・ボックス, 252

QAnywhere のプロパティ・シート, 240

Ultra Light のダイアログ・ボックス, 272

Ultra Light のプロパティ・シート, 262

ダイアログ・ボックス, 118

プロパティ・シート, 30

ユーザ設定

Interactive SQL, 281

SQL Anywhere コンソール [dbconsole] ユーティ
リティ, 341

[ユーザのオプション] ダイアログ

Ultra Light, 272

説明, 144

ユーザ・プロパティ・シート

Mobile Link 説明, 176

Mobile Link ユーザ, 58

SQL Anywhere 説明, 110

Ultra Light 説明, 271

リモート・ユーザ, 86

[ユーザを統合ユーザに変更] ダイアログ
説明, 121**り**

リモート・サーバ

プロパティ・シート, 85

[リモート・サーバ] プロパティ・シート
説明, 85

リモート・データベース

Mobile Link のプロパティ・シート, 174

[リモート・データベース] プロパティ・シート
説明, 174

リモート・プロシージャ

プロパティ・シート, 84

[リモート・プロシージャ] プロパティ・シート
説明, 84

リモート・ユーザ

プロパティ・シート, 86

[リモート・ユーザに変更] ダイアログ
説明, 122[リモート・ユーザのオプション] ダイアログ
説明, 137[リモート・ユーザ] プロパティ・シート
説明, 86**る**[ルール・エディタ] ダイアログ
説明, 258**ろ**[ログイン・マッピング] プロパティ・シート
説明, 57